

荒砥天之宮遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本 文 編》

1 9 8 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

01-353

335

(5)

荒城天之宮遺跡 《写真図版編》正誤表

	誤	正
PL9	A11-3	A22-6
11	A13-9	A9-9
	A19-7	遺構外-127
41	C5-7	C7-8
	C26-2	C5成-1
66	1, D区7号住居	1, D区7・8・9号住居
	3, D区37号住居	3, D区36・37号住居
	4, 竈	4, D区36号住居竈
84	D51-2	遺構外-126
	D52-6	D54-4
105	E区1・2号住居出土遺物	E区1・2・5住居、5号土坑出土遺物
	E2-1	E5-12
	E2-2	E5城-3
	E2-3	E5城-7
	E2-4	E5城-5
	E2-5	E5城-6
	E2-9	E5城-7
	E2-12	E5城-8
115	F7-5	遺構外-134
117	F区12~15号住居出土遺物	F区12~15号住居、A区15号住居出土遺物
	F15-8	A15-1
	F28-1	遺構外-128
127	3, F区34~36号住居出土遺物	3, F区34・35・43号住居出土遺物
	F34-3	F34-2
	F36-1	F43-2
	F36-2	F43-3
	F36-3	F43-4
141	1, A区1号土坑	1, A区12号土坑
143	7, A区16号土坑出土遺物	7, A区3号溜井出土遺物
	A16城-1	3溜-8
	A16城-2	3溜-9
149	3, D区54・57・68・70・78・79・84・98・99・116号土坑出土遺物	3, D区54・57・68・70・78・79・116土坑 D区57・80号住居出土遺物
	D98城-1	D80-9
	D88城-2	D80-10
	D98城-3	D80-8
	D99城-1	D80-1
	D99成-2	D80-12
	D84-1	D57-5
	D84-2	D57-6
150	1, E区3号土坑	1, 区1号土坑

群埋文

資料

 群馬県埋蔵文化財
 調査事業団保管

No. 1-303

平成1年9月14日

01-353

335-1

(5)

あら と てん の みや
荒砥天之宮遺跡

昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本 文 編》

1 9 8 8

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

農業の近代化にむけて県内各地で圃場整備事業が行われ着々とその成果が上がりつつあります。雄大な赤城山を背景とする前橋市東部の荒砥地区においても南部と北部と地区をわけて圃場整備事業が実施されました。

本地区は古代群馬の支配者と想定されます上毛野氏の根拠地と考えられている地域であり、遺跡の宝庫で有ります。また国の史跡であります荒砥三古墳を初めとする古墳がたいそう多い場所であります。事業に先行する埋蔵文化財の発掘調査で、私達の先人の生活の痕跡が数多く確かめられ、新発見もありました。これらは記録として保存し将来の活用を期しております。

荒砥天之宮遺跡の調査では集落の調査と共に水田の灌漑施設であります“溜井”がみつかりました。既に古墳時代には湧水を効率的に利用するために井戸を掘り下のたんばに通水し、安定した農業をする方策をこうじていたことがわかり先人の苦勞をうかがうことができました。

発掘調査ならびに整理事業実施にあたり種々便宜をはかり困難な事業完成のためご尽力戴きました群馬県農政部、荒砥南部土地改良区をはじめとする関係者の皆様に感謝申し上げます。また、調査に当たられた担当、作業員の皆様の芳をねぎらうと共に本報告書が群馬の古代社会究明の資料として広く県民の皆様を活用されることを期待して序とします。

昭和63年2月29日

群馬県教育委員会

教育長 千吉良 覚

例 言

- 1、本書は1980(昭和55)年度の県営園場整備事業荒砥南部地区に伴う荒砥天之宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、遺跡は群馬県前橋市二之宮町1650番地他に所在する。
- 3、発掘調査は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県農政部および群馬県教育委員会と委託契約を締結し実施した。
- 4、発掘調査は1980(昭和55)年12月1日に開始し、翌年3月31日で終了した。
- 5、調査時の事業団組織は次の通りである。



管理・指導	小林起久治、沢井良之助、井上唯雄、近藤平志、細野雅男
事務担当	国定 均、山本朋子、柳岡良宏、吉田笑子、吉田恵子、野島のお江、並木綾子
調査担当	石坂 茂(調査研究員)
	柏崎教子(#)
	徳江秀夫(#)
- 6、本書作成のための整理作業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託され、1986(昭和61)年4月1日から88(昭和63)年3月31日まで実施した。
- 7、本書作成時の事業団組織および担当者は以下の通りである。

管理・指導	白石保三郎、井上唯雄、大沢秋良、田口記雄、上原啓巳、定方隆史、神保侑史、徳江 紀
事務担当	調査時の職員他に、笠原秀樹、吉田有光、今井もと子、松井美智子、大島敬子が関係した。
編 集	本文編 徳江秀夫が担当し、鹿沼敏子(囑託員)がこれを補助した。 写真図版編 石坂 茂
文章執筆	本文編 第2章第9節の縄文時代の土器の項を石坂 茂、縄文時代の石器の項を岩崎泰一、第3章第2節を小島教子が分担し、他は徳江による。
図版作成	鹿沼敏子、皆川正枝、高橋順子、高橋フジ子、山崎由紀枝、渡部あい子、原田篤子、新平美津子、湯本美知枝、久保田菊江(群馬県埋蔵文化財調査事業団)、小林和子、本間敏子、柿田順子、田中美由貴、株式会社 測研
遺構写真	石坂 茂、柏崎教子、徳江秀夫
遺物写真	佐藤元彦(群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)
遺物の科学的処理	関 邦一(# #) 北爪健二(# 囑託員) 小村浩一(#)
- 8、遺物の石材同定は飯島静雄氏(群馬地質研究会)の手をわずらわせた。
- 9、出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 10、本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順)
内田憲治、鹿田雄三、田辺昭三、能登 健、林部 均、梁木 誠

- 11、なお調査にあたって、地元の方々には作業に従事していただくとともに多くの便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

凡 例

- 1、調査においては、圃場整備事業の工事中基準杭を使用して調査範囲内に6×6mのグリッドを設定した。南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で呼称した。各グリッドの名称はその南西隅をあてた。また、付図のなかに国家座標上の位置を記載した。
- 2、挿図中で使用した方位は磁北で真北より西偏6°50'である。
- 3、本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用したため欠番が生じている。
- 4、遺構及び遺物図面の縮尺は各図中に表示した。他と縮尺の異なるものについては、随時その縮尺を付しておいた。
- 5、遺構の方位は、電を検出した住居は電の付設された壁に直交する軸線の、その他の住居、遺構については長軸線の方位を表示した。
- 6、挿図中のスクリーンは、次のことを表す。

	灰釉陶器の施釉部分		黒色処理の部分
-----------------------------------------------------------------------------------	-----------	-----------------------------------------------------------------------------------	---------

その他のスクリーンは、随時その使用箇所の説明したとおりである。
- 7、第1図は、建設省国土地理院発行の20万分の1地形図(長野・宇都宮)、第4図は、同発行の2万5千分の1の地形図(大湖)を使用した。第2図は、前橋市発行の2千5百分の1現形図(No66・67)を使用した。
- 8、本書は、編集の都合上、本文編・写真図版編・遺物観察表の3部からなる。本文編の巻末に索引を付したので利用上の不便さを補っていただきたい。

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 遺跡の立地と地形	3
第4節 周辺の遺跡	4
第5節 遺跡の基本土層	9

第2章 調査された遺構と遺物

第1節 住 居	9
第2節 浅間B埋没水田	193
第3節 溜 井	193
第4節 畚	203
第5節 竪穴状遺構	204
第6節 井 戸	205
第7節 土 城	207
第8節 溝	237
第9節 遺構外出土の遺物	239

第3章 成果と問題点

第1節 出土土器の検討	253
第2節 荒砥天之宮遺跡の耕地と集落	267
第3節 その他の遺物について	270
引用及び参考文献	273
索 引	274

挿 図 目 次

1 図 荒砥天の宮遺跡の位置	1
2 図 発掘調査の範囲	2
3 図 遺跡周辺の地形区分	3
4 図 周辺の遺跡分布	8
5 図 遺跡の基本土層	9
6 図 A区1号住居	10
7 図 A区2号住居	10
8 図 A区1・2号住居出土遺物	10
9 図 A区3号住居	11
10 図 A区4号住居	11
11 図 A区6号住居	12
12 図 A区3・4・6号住居出土遺物	12
13 図 A区5号住居	13
14 図 A区5号住居と周辺の出土遺物	13
15 図 A区5号住居出土遺物	14
16 図 A区5号住居出土遺物	15
17 図 A区7号住居	15
18 図 A区7号住居出土遺物	16
19 図 A区9号住居	16
20 図 A区9号住居出土遺物	16
21 図 A区9号住居出土遺物	17
22 図 A区10号住居とその出土遺物	17
23 図 A区8号住居	18
24 図 A区8号住居と周辺の出土遺物	18
25 図 A区8号住居出土遺物	19
26 図 A区8号住居出土遺物	20
27 図 A区11号住居とその出土遺物	21
28 図 A区12号住居とその出土遺物	22
29 図 A区12号住居出土遺物	23
30 図 A区13号住居	23
31 図 A区13号住居出土遺物	24
32 図 A区26号住居	25
33 図 A区27号住居	25
34 図 A区26・27号住居出土遺物	26
35 図 A区28号住居	26
36 図 A区28号住居出土遺物	27
37 図 A区14号住居	28
38 図 A区14号住居出土遺物	29
39 図 A区15号住居とその出土遺物	30
40 図 A区16・18号住居	30
41 図 A区17号住居	31
42 図 A区17号住居出土遺物	32
43 図 A区19号住居とその出土遺物	33
44 図 A区19号住居出土遺物	34
45 図 A区20号住居とその出土遺物	35
46 図 A区21号住居	36
47 図 A区22号住居	36
48 図 A区21・22号住居出土遺物	37
49 図 A区23号住居とその出土遺物	38
50 図 A区23号住居出土遺物	39
51 図 A区24号住居	39
52 図 A区24号住居出土遺物	40
53 図 A区25号住居	40
54 図 A区25号住居出土遺物	40
55 図 A区29号住居	41
56 図 A区30号住居	41
57 図 A区29・30号住居出土遺物	42
58 図 A区31号住居とその出土遺物	43
59 図 A区37号住居とその出土遺物	43
60 図 A区32号住居とその出土遺物	44
61 図 A区33号住居とその出土遺物	45
62 図 A区39号住居	45
63 図 A区39号住居出土遺物	46
64 図 A区35号住居とその出土遺物	46
65 図 A区34号住居とその出土遺物	47
66 図 A区36号住居	48
67 図 A区40号住居とその出土遺物	48
68 図 A区36号住居出土遺物	49
69 図 A区38号住居	49
70 図 A区38号住居出土遺物	50
71 図 B区1号住居	51
72 図 B区1号住居遺	51
73 図 B区3号住居	51
74 図 B区1・3号住居出土遺物	52
75 図 B区2号住居とその出土遺物	53
76 図 B区4号住居	54
77 図 B区4号住居出土遺物	55
78 図 B区5号住居	55
79 図 B区5号住居出土遺物	56
80 図 B区5号住居出土遺物	57
81 図 B区9号住居とその出土遺物	57
82 図 B区6号住居	58
83 図 B区6号住居出土遺物	59
84 図 B区7号住居とその出土遺物	59
85 図 B区8号住居とその出土遺物	60
86 図 C区6号住居とその出土遺物	61
87 図 C区1号住居	62
88 図 C区2号住居	62
89 図 C区1・2号住居出土遺物	63
90 図 C区5号住居出土遺物	64
91 図 C区4号住居とその出土遺物	65
92 図 C区5号住居	65
93 図 C区7号住居	66
94 図 C区7号住居出土遺物	67
95 図 C区8号住居	67
96 図 C区8号住居出土遺物	68
97 図 C区9号住居	68
98 図 C区9号住居出土遺物	69
99 図 C区10号住居	70
100 図 C区18号住居	70
101 図 C区10・18号住居出土遺物	71
102 図 C区11・12号住居	73

103回	C区11号住居電と周辺の出土遺物	74
104回	C区12号住居電と周辺の出土遺物	74
105回	C区11号住居出土遺物	75
106回	C区11・12号住居出土遺物	76
107回	C区13号住居とその出土遺物	77
108回	C区14号住居とその出土遺物	78
109回	C区15号住居とその出土遺物	79
110回	C区16号住居とその出土遺物	80
111回	C区17号住居とその出土遺物	81
112回	C区19号住居	82
113回	C区22号住居	82
114回	C区19・22号住居出土遺物	83
115回	C区20号住居とその出土遺物	84
116回	C区20号住居出土遺物	85
117回	C区23号住居とその出土遺物	86
118回	C区30号住居	86
119回	C区26号住居	87
120回	C区26・30号住居出土遺物	87
121回	C区24号住居	88
122回	C区25号住居	88
123回	C区24・25号住居出土遺物	89
124回	C区21号住居とその出土遺物	90
125回	C区27号住居	91
126回	C区28号住居	91
127回	C区29号住居	91
128回	C区27・28号住居出土遺物	91
129回	D区1号住居とその出土遺物	92
130回	D区2号住居とその出土遺物	93
131回	D区3・4号住居	94
132回	D区4号住居出土遺物	95
133回	D区4号住居出土遺物	96
134回	D区4号住居出土遺物	97
135回	D区3号住居出土遺物	97
136回	D区10・11号住居	97
137回	D区5号住居電と周辺の出土遺物	98
138回	D区5号住居とその出土遺物	99
139回	D区5号住居出土遺物	100
140回	D区14・15号住居とその出土遺物	101
141回	D区7・8・9号住居	102
142回	D区7・8号住居出土遺物	103
143回	D区12・13号住居	104
144回	D区12号住居出土遺物	105
145回	D区6号住居	105
146回	D区18・19号住居	106
147回	D区18・19号住居出土遺物	107
148回	D区16号住居	108
149回	D区17・21号住居	108
150回	D区16・21号住居出土遺物	109
151回	D区30号住居とその出土遺物	109
152回	D区22・23号住居	110
153回	D区22・23号住居出土遺物	111
154回	D区44号住居とその出土遺物	111
155回	D区24・25・27号住居と25号住居出土遺物	112
156回	D区26号住居とその出土遺物	113
157回	D区20号住居	114
158回	D区31・32号住居	114

159回	D区20・31・32号住居出土遺物	115
160回	D区28号住居とその出土遺物	116
161回	D区36・37号住居とその出土遺物	117
162回	D区33・34・35号住居	118
163回	D区33・34号住居出土遺物	119
164回	D区33号住居出土遺物	120
165回	D区40号住居とその出土遺物	121
166回	D区38号住居とその出土遺物	122
167回	D区38号住居出土の土層	123
168回	D区38号住居出土遺物	123
169回	D区38号住居出土遺物	124
170回	D区38号住居出土遺物	125
171回	D区29・46・51号住居	126
172回	D区29・46・51号住居出土遺物	127
173回	D区56号住居とその出土遺物	127
174回	D区41・42・43号住居	128
175回	D区57号住居	128
176回	D区41・42・57号住居出土遺物	129
177回	D区45号住居	130
178回	D区48・49・50号住居	130
179回	D区45・48・49号住居出土遺物	131
180回	D区47号住居	132
181回	D区47号住居出土遺物	133
182回	D区61号住居とその出土遺物	133
183回	D区52・53・54号住居	134
184回	D区52・53・54号住居出土遺物	135
185回	D区58・82号住居	136
186回	D区59号住居	136
187回	D区58・59号住居出土遺物	137
188回	D区60号住居とその出土遺物	138
189回	D区67号住居とその出土遺物	139
190回	D区68号住居とその出土遺物	139
191回	D区63号住居電	140
192回	D区62・63・64号住居	140
193回	D区62・64号住居出土遺物	141
194回	D区63号住居出土遺物	142
195回	D区70号住居電	143
196回	D区70号住居とその出土遺物	143
197回	D区65・66号住居	144
198回	D区66号住居電	145
199回	D区65・66号住居出土遺物	145
200回	D区69号住居とその出土遺物	146
201回	D区71号住居とその出土遺物	146
202回	D区72号住居とその出土遺物	147
203回	D区75号住居とその出土遺物	147
204回	D区74号住居とその出土遺物	147
205回	D区73号住居	148
206回	D区73号住居出土遺物	149
207回	D区76・77号住居	150
208回	D区76号住居出土遺物	150
209回	D区76・77号住居出土遺物	151
210回	D区77号住居出土遺物	152
211回	D区83号住居とその出土遺物	152
212回	D区78号住居とその出土遺物	153
213回	D区79号住居とその出土遺物	154
214回	D区84号住居	154

215回	D区80号住居とその出土遺物	155	271回	F区38号住居	191
216回	D区81号住居とその出土遺物	155	272回	F区43・44号住居	191
217回	E区2号住居とその出土遺物	156	273回	F区38・43号住居出土遺物	192
218回	E区1号住居とその出土遺物	157	274回	A区1号竈井	194
219回	E区6号住居とその出土遺物	158	275回	A区3号竈井	194
220回	E区3号住居とその出土遺物	159	276回	A区1・3号竈井出土遺物	195
221回	E区5号住居	160	277回	A区2号竈井	196
222回	E区5号住居竈と周辺の出土遺物	160	278回	A区4号竈井	197
223回	E区5号住居出土遺物	161	279回	A区2号竈井出土遺物	198
224回	E区4号住居とその出土遺物	162	280回	A区4号竈井出土遺物(1)	199
225回	F区1号住居とその出土遺物	163	281回	A区4号竈井出土遺物(2)	200
226回	F区2号住居	164	282回	A区浅間B埋没水田と出土遺物	201
227回	F区3号住居	164	283回	A区4号竈井出土遺物(3)	203
228回	F区2・3号住居出土遺物	165	284回	G区畚	203
229回	F区6・7号住居	165	285回	A区1号竈穴とその出土遺物	204
230回	F区7号住居出土遺物	166	286回	A区2号井戸	205
231回	F区5号住居とその出土遺物	166	287回	A区1号井戸とその出土遺物	205
232回	F区9号住居とその出土遺物	167	288回	A区3号井戸とその出土遺物	205
233回	F区11号住居	167	289回	D区1号井戸とその出土遺物	206
234回	F区4号住居とその出土遺物	168	290回	A区1・25・41・42号、D区7・8号土壇と その出土遺物	208
235回	F区8号住居とその出土遺物	169	291回	D区11・43号土壇とその出土遺物	210
236回	F区10号住居	170	292回	D区22号土壇とその出土遺物	211
237回	F区12号住居とその出土遺物	170	293回	D区51・63号、F区49号土壇と その出土遺物	212
238回	F区10号住居出土遺物	171	294回	A区土壇	221
239回	F区13・18号住居と13号住居出土遺物	172	295回	A区土壇	222
240回	F区18号住居竈と周辺の出土遺物	173	296回	A・C区土壇	223
241回	F区18号住居出土遺物	173	297回	C・D区土壇	224
242回	F区14号住居とその出土遺物	174	298回	D区土壇	225
243回	F区15号住居とその出土遺物	175	299回	D区土壇	226
244回	F区16号住居	176	300回	D区土壇	227
245回	F区17号住居	176	301回	D区土壇	228
246回	F区19号住居	177	302回	D区土壇	229
247回	F区16・17・19号住居出土遺物	177	303回	D～F区土壇	230
248回	F区20号住居	178	304回	F区土壇	231
249回	F区21号住居	178	305回	F区土壇	232
250回	F区20・21・26号住居出土遺物	179	306回	F区土壇	233
251回	F区26号住居	179	307回	A～D区土壇出土遺物	234
252回	F区23号住居	180	308回	D・E区土壇出土遺物	235
253回	F区22号住居	180	309回	E・F区土壇出土遺物	236
254回	F区22・23号住居出土遺物	180	310回	A区1・2号溝	237
255回	F区24号住居	181	311回	D区1・2号溝	238
256回	F区24号住居出土遺物	181	312回	F区1号溝とその出土遺物	238
257回	F区31号住居	182	313回	遺構外出土の遺物(1)	241
258回	F区29号住居	183	314回	遺構外出土の遺物(2)	242
259回	F区29・31号住居出土遺物	183	315回	遺構外出土の遺物(3)	243
260回	F区32・33号住居出土遺物	184	316回	遺構外出土の遺物(4)	244
261回	F区32号住居	185	317回	遺構外出土の遺物(5)	245
262回	F区33号住居	185	318回	遺構外出土の遺物(6)	246
263回	F区34・35号住居	186	319回	遺構外出土の遺物(7)	247
264回	F区30号住居	186	320回	遺構外出土の遺物(8)	248
265回	F区34・35号住居出土遺物	187	321回	遺構外出土の遺物(9)	249
266回	F区42号住居	188	322回	遺構外出土の遺物(10)	250
267回	F区39・40・42号住居出土遺物	188	323回	遺構外出土の遺物(11)	251
268回	F区39・41号住居	189	324回	遺構外出土の遺物(12)	252
269回	F区40号住居	189			
270回	F区37号住居とその出土遺物	190			

325回	第I段階	253
326回	第II段階	254
327回	第III段階	255
328回	第IV段階	256
329回	第V段階	257
330回	第VI段階	257
331回	第VII段階	258
332回	第VIII段階	258
333回	第IX・X段階	259
334回	第XI段階	259

335回	第XII段階	261
336回	第XIII段階	261
337回	第XIV段階	261
338回	第XV段階	261
339回	第XIX・XX段階	262
340回	第XXI・XXII段階	263
341回	第XXIII・XXIV段階	263
342回	第XXV・XXVI段階	264
343回	宮川下流域の遺跡群	269

表 目 次

1表	周辺遺跡の概要	6
2表	検出された遺構	9
3表	土器一覧	212

4表	宮川下流域遺跡群の集落と耕地の変遷	268
5表	土鐘の統計	270
6表	墨書土器一覧	271

第1章 発掘調査と遺跡の概要

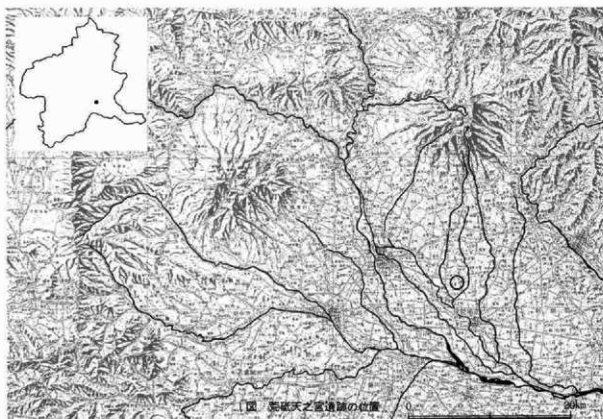
第1節 調査に至る経過

ここに報告する荒砥天之宮遺跡は群馬県前橋市の東南部、旧城南村地域で行われた県営圃場整備事業に伴って1980（昭和55）年に発掘調査が実施された遺跡である。

荒砥南部地域における圃場整備事業は1975（昭和50）年度に発表された群馬県新総合計画に基づいた農用地総合整備事業の一環として行われたもので1974（昭和49）から1981（昭和56）年まで実施された。対象面積の約749ヘクタールは現在進行中の荒砥北部地域における圃場整備事業と共に県下でも有数の規模であった。当該地域は、従来、米、麦作、養蚕を主体とした農村地帯であったが、圃場整備事業の施行は機械化農業による生産性の向上だけでなく上武道路の通過予定や工業団地の建設誘致計画に備

えたものであり、現在この地域は前橋市、伊勢崎市の市街地から膨張した住宅・工業用地として様相を一変しようとしている。

圃場整備事業対象地域内には荒砥三、二子古墳や今井神社古墳、新屋遺跡、女堀の遺構など周知の遺跡が多く存在し、考古学的に重要な地域として知られていた。1974（昭和49）年度以降その年度の圃場整備事業実施に先立ち県農政部と県教育委員会との間で文化財保護を前提とした協議が行われ、事業実施にあたり工法上埋蔵文化財を破壊しなければならぬ部分については事前に記録保存の為の発掘調査が実施されてきた。発掘調査は原則として新設の道・水路と低・台地の切土部分を対象とした。圃場整備事業開始後、荒砥前原遺跡や荒砥二之塚遺跡、女堀遺跡など調査された遺跡は17遺跡にのぼり先土器時代から中・近世に至るまでの重要な発見が相次



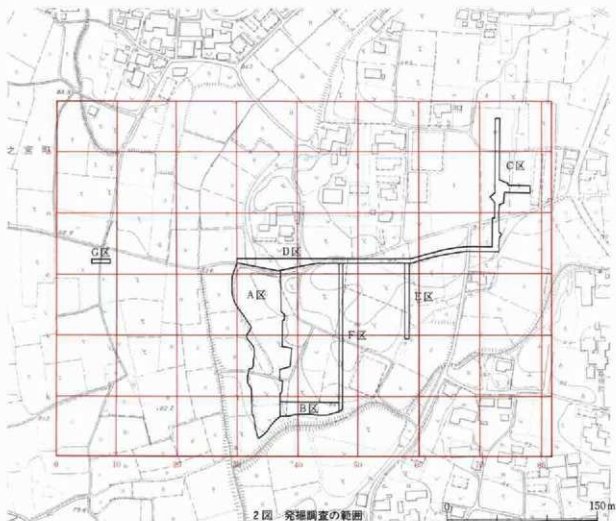
いでいる。

1980（昭和55）年度の圃場整備事業は、計画の第4工区、飯土井町、二之宮町、上増田町、下増田町、今井町におよぶ約92ヘクタールを対象とするものであった。調査された遺跡は本遺跡のほかに荒砥島原遺跡・荒砥宮西遺跡・荒砥洗橋遺跡と宮川河川改修に関連した宮川遺跡・宮原遺跡の5遺跡である。

なお、本遺跡の命名について記す。例言にも記したよう本遺跡は前橋市二之宮町字中島・五分一・宮下と複数の小字にわたっている。調査時の聞き込みによればこの一帯は、地元民により通称「天之宮」とよばれているとのことで複数の字名の使用をさげこの通称を採用し「荒砥天之宮遺跡」とした。

第2節 調査の方法と経過

本遺跡は、1980（昭和55）年11月から開始された荒砥島原遺跡の調査が進行するなかで、事業者側の工事変更等により新たな調査対象地域として上げられてきたものである。対象地は台地・微高地上の道・水路新設部分、切土部分とその西側の沖積地の切土部分であった。分布調査の結果、台地上には濃密な土器の分布が認められ居住域としての住居や土壇などの存在が、また、沖積地では浅間Bの堆積が認められ水田の存在が想定され本格的な調査が必要と思われた。そして、圃場整備の工程上、荒砥島原遺跡と併行して調査が実施されることになった。



調査の実施にあたっては6×6mの方眼を調査対象地域全域にわたって設定するとともに方眼を国家座標上にプロットした。グリッドは南北軸にアルファベットを付し南からA、B、C…Z、a、b、c…z、A'、B'、C'…とし、東西軸にはアラビア数字を西から1、2、3…と付した。各区画の呼称は6m方眼の南西隅をもってそのグリッドの名称とした。また、対象地域が広範囲に及ぶとともに、多地点で同時に調査を進行させる必要が生じたため遺跡全体をA～Gまでの7つの調査区に別けて呼称し、それぞれの区ごとに遺構の命名・呼称をおこなった。各調査区の位置は、2図のとおりである。A区は支線417号排水路以西の台地縁辺と沖積地に一部で切土部分、B区は台地の南端、A区とF区に挟まれた無名河川に面した切土部分である。C区は、支線447号道路と488号道路、D区は東西に延びる支線476号道路部分で途中、E・F区と接している。E区は支線455号道路、F区は耕440号道路部分である。G区はD区の西方、沖積地を挟んだ微高地上である。A区、B区は、水田化に伴う台地掘削部分で全体の過半を占める大きな発掘対象区域となった。

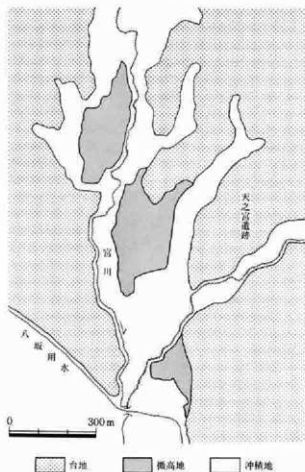
調査対象区域内にトレンチを適時配置し試掘調査をおこなったところほぼ全域に遺構が確認された。そのため遺構確認面までの堆積土を掘削重機により排除し遺構確認のための精査を実施した。調査は1980(昭和55)年12月からA区で開始し、以後、荒砥島原遺跡、宮川河川改修関連の宮原遺跡の調査と併行してB区、C区と進め1981(昭和56)年2月末日、D区の終了を以て総ての調査を終了した。調査面積は、10,200㎡に及んだ。

第3節 遺跡の立地と地形

荒砥天之宮遺跡は、前橋市の南東部、二之宮町に位置しJR両毛線の駒形駅から東に約2kmの距離にある。また、本遺跡は、群馬県の県央東部に位置する赤城山南麓端部に立地している。赤城山(最高峰、黒檜山、標高1,828m)は、第三紀世の複合成層火山でその山体は広大な裾野地形を形成している。南麓で

は標高500m前後に山地帯から丘陵性の台地への地形変換点がみられる。200m以下の地域は比高差の少ない低台地となっている。また、その末端は旧利根川の崖線で区切られその氾濫原であった沖積地に接している。荒砥南部地域は、赤城山南麓の端部にあたり山麓を流下する荒砥川、神沢川、桂川などの河川や台地端部からの湧水により樹枝状の開析がすすみ沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。

本遺跡周辺の基盤層は赤城山起源の泥炭層である。地表面はローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地のほかに沖積地に分類される。ローム台地は下部ローム以上をのせる古いもので板鼻黄色軽石層(YP)、板鼻褐色軽石層(BP)、八崎軽石層(HP)などのテフラが堆積している。ローム台地に付随するよう存在する微高地は、赤城山の山体が降雨災害などによって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が



3図 遺跡周辺の地形区分

衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。荒砥天宮遺跡に近接する荒砥高原遺跡では微高地上に弥生時代中期の住居や古墳時代前期の方形周溝墓が、宮川遺跡では古墳時代前期の住居をはじめとした遺構が検出されていた。飯土井町の飯土井二本松遺跡では微高地を形成する砂壤土層下に上部ロームの堆積と縄文時代早期の遺物包含層が確認されており、この砂壤土性の微高地が完新世になってから形成されたことが明らかになっている。

沖積地では浅間B軽石、榛名山二つ岳噴出火山灰(FA)、浅間C軽石などのテフラの堆積が確認されている。

本遺跡は赤城山を流下する河川の一つ、宮川の左岸に位置する。宮川は本遺跡の南1.5kmで荒砥川に合流する小河川で利根川の第3次河川として流域長約5kmを測る。流域の沖積地や隣接する台地・微高地には荒砥大日塚遺跡や柳久保遺跡群をはじめとした多くの遺跡が存在する。本遺跡をのせる舌状台地は標高81~86mを測り南側に向かって緩やかに低くなる。台地の西側には小規模の開析谷が入り込み幅100m程の沖積地をつくっている。北0.5kmに谷頭がある。東側も無名の河川を伴う沖積地があり遺跡の南側を回り台地西側の沖積地に接する。台地の南端では河床との比高2mの崖線を形成している。この沖積地は赤城神社の東側を北上し途中に小規模な開析谷を集め、本遺跡の北2kmに谷頭を持つ。

遺構は多少の粗密をもちながらも台地のほぼ全域から検出された。住居は、古墳時代中期から平安時代にかけてのものである。台地の縁辺には4基の溜井が掘削され、そこから取水された用水は西側の沖積地、浅間B軽石下から検出された水田に供給されていたと考えられる。

第4節 周辺の遺跡

本遺跡の立地する前橋市の東南部、荒砥地域には荒砥三、二子古墳をはじめとした周知の遺跡が存在し考古学上重要な地域とされていた。近年の圃場整備事業、上武道路などの各種開発事業に伴って多くの遺跡が調査され各時代を通じて重要な遺構・遺物が検出されるとともに遺跡間相互の関係などの研究も進められつつある。ここでは本遺跡の遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境をまとめておきたい。**先土器時代** 開発の進行とともに赤城山麓における遺跡数は徐々に増加する傾向にある。本遺跡の周辺では、荒口町荒砥北三木堂遺跡、今井町今道土・道下遺跡がある。北三木堂遺跡では暗色帯とその上層からポイント・剥片類が出土している。

縄文時代 縄文時代の遺跡は数多く確認されているがその立地はいずれの時期も沖積地や湧水池を臨む台地や微高地上に位置している。前期と中期後半の遺跡が多いが長期にわたって継続する遺跡は少ない。草創期の遺跡としては赤堀町下触牛伏遺跡で爪形文土器が、本遺跡でも検出された撚糸文土器が荒砥北三木堂遺跡、荒口町荒砥北原遺跡、下鶴ヶ谷遺跡で検出されている。飯土井町飯土井二本松遺跡からは田戸下層式期の沈線文や押型文土器が出土している。前期、諸磯期の遺跡の検出例は多く荒砥二之塚遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、荒砥上諏訪遺跡などのほか赤堀町の桂川流域に接する台地上に多くの遺跡が確認されている。いずれも住居数軒の小規模な集落であったと思われる。中期後半の遺跡も多く確認されている。しかし、荒砥前原遺跡、荒砥北原遺跡、荒砥二之塚遺跡などいずれも5~10の住居数で中・小規模の集落ととどまっており赤城村三原田遺跡や赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代 本遺跡に南接する島原遺跡や荒砥前原遺跡、荒口前原遺跡で沖積地を臨む台地縁辺や微高地上から中期後半の住居が検出されており、この時期には沖積地の一部を生産域とした小規模な集落が出

現していたと考えられる。後期の遺跡も沖積地を臨む台地や微高地上に立地していたと思われるが現段階ではその内容は不明確である。

古墳時代 前期の遺跡は弥生時代後期の遺跡立地を引き継いでいると思われ、流域ごとにほぼ一定の間隔をおいて集落が形成されることが指摘されている。そしてこれらの集落には近接して周溝墓が築造される場合が多く普遍的といえる状況である。堤東遺跡では前方後方形周溝墓が検出されている。しかし、この時期の遺跡は住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器・樽式土器はこの時期まで残存し土師器と共存する。鶴ヶ谷遺跡群や富田遺跡群の宮下遺跡、西大室遺跡群の北山・七ツ石・久保皆戸・梅の木・上縄引・下縄引などの各遺跡の住居や周溝墓で上記のような例が認められさらに類例は増えつつある。土師器のみでも煮沸具がS字状口縁台付甕が主体となるものと単純口縁のそれが主体のものがある。

上記のように荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は他地域に比して遜色がないが現在のところ前期古墳は知られていない。前橋市天神山古墳や伊勢崎市華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にあるといえる。

前期の集落は台地縁辺に立地し、中小河川に依拠した生産域を維持していたと思われる。二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡では浅間Cに埋没した水田が検出された。また、本遺跡のG区、微高地上では浅間C下から畠が確認されている。これらの集落のうちの多くは中・後期に継続する「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を台地内部に広げる。それとともに新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。本遺跡や荒砥宮西遺跡、下触牛伏遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には河川灌漑の整備とともに本遺跡で検出された溜井の掘削にみられる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

先にも記したよう本地域における前方後円墳の出現は5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。しかし、富田町のおとうか山古墳や東原5号墳のように周堀にFAの堆積が確認された例もあり小地域を統括する支配者層の存在が窺える。後期の古墳についてみると前二子古墳に代表される前方後円墳が数基ずつ築造されるときも小地域ごとに円墳の築造が認められる。6世紀の後半から7世紀の小古墳は群集化が進むとともに荒砥北三木堂遺跡や荒砥北原遺跡、荒砥下押切II遺跡のように1～数基の散在した状態も認められるようになる。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡の方形区画遺構は5世紀後半から6世紀にかけての首長層の居宅と考えられているがこのような遺構の存在は古墳にみられる被葬者の多重性が居住施設にも認められるものと思われる。

奈良・平安時代 古墳時代に出現した「第一次新開集落」は「伝統集落」化した居住域は台地全体に広がる。水田開発は更に進行したと思われる。1108(天仁元)年に降下した浅間Bで埋没した水田の検出状況からは荒砥地域の沖積地の大部分が平安時代の末期には開発されていたことが看取できる。荒砥諏訪西遺跡では微高地上まで水田化している。荒砥地域の標高96m付近には女堀の遺構が残存する。女堀は12世紀の中葉、湖名荘の再開発を目的として開削されたとされる大農業用水である。

中世以降 中世の城郭としては大室城、元大室城、今井城、赤石城、新土塚城などがあげられる。また、荒砥北三木堂遺跡や北山遺跡、宮下遺跡で多数の墓塚が調査されている。また、近世の遺構としては二之宮宮東遺跡で屋敷や池が検出されたのをはじめとして多くの遺跡で井戸や溝などが確認されている。

註 用語の使用については能登健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会1984の中でおこなわれている定義に従っている。

第1章 発掘調査と遺跡の概要

住は住跡、墓は墓域、生は生産域を表わす。

●は遺物存在を表わす。

古墳の墳、墓の□は方形周溝墓、円は円形周溝墓、○は古墳を表わす。

古墳の墳、生、○は浅間C下の水田の存在を表わす。

1表 周辺遺跡の概要

No	遺跡名	ブ	縄文		弥生	古			墳			奈	平安	水田	近	その他の遺構
			草	中		後	前	中	後	住	住					
1	荒砥天之宮遺跡		●●●●		●			○				○	○	□		溜井・溝
2	二之宮宮下西遺跡											○	○			縄文土壇・中近世墓域・土壇・溝
3	荒砥宮西遺跡											○	○			
4	二之宮千足遺跡		●			●	□			□		○	○	□	□	中世墓域
5	荒砥洗機遺跡											○	○			
6	二之宮洗機遺跡											○	○			
7	荒砥島原遺跡					○	□	○				○	○	□		
8	宮川遺跡					○	□					○	○	□		
9	宮原遺跡							○				○				
10	荒砥青柳遺跡											○	○			
11	荒砥前原遺跡		●●●		○			○				○	○			祭祀
12	荒砥二之原遺跡		○○○				□					○	○			縄文陪穴・中近世溝・土壇
13	飯土井二本松遺跡		●●●●					○				○	○			縄文陪穴・道路状遺構
14	飯土井中央遺跡	●						○				○	○			古墳時代溝
15	飯土井上組遺跡							○				○	○			縄文土壇・大地・小鍛冶・B下高
16	二之宮宮東遺跡		●									○	□		○	
17	二之宮宮下東遺跡											○	○			
18	今井道上道下遺跡	●	●●●●			○						○	○		○	小鍛冶・道路状遺跡・近世・中世
19	谷地遺跡															
20	荒砥北三木堂遺跡	●	●○○			○	□					○	○			中世墓域
21	荒砥北原遺跡	○	○○●				□	○				○	○			縄文土壇・B上高
22	荒砥大日原遺跡					○		○				○	○	□		
23	鶴ヶ谷遺跡群					○		○				○	○			
24	荒砥上ノ坊遺跡		○				□	○				○	○			C下高・B上高
25	荒砥下切1・II遺跡							○				○	○			
26	荒砥中屋敷1・II遺跡					○						○	□			小鍛冶・BC下溝
27	荒口前原遺跡		○									○	○			厩宅
28	荒砥荒子遺跡							○				○	○	□		B上の畝・Bより下水田
29	荒砥前田遺跡											○	□			土壇・溝・墓域
30	荒砥宮田遺跡		○				□	○				○	□			土壇・溝・C下高
31	荒砥諏訪西遺跡					○		○				○	□			B下溝
32	荒砥諏訪遺跡						□									
33	柳久保遺跡															
34	柳久保遺跡群															
35	柳久保水田遺跡												□			
36	大久保遺跡											○	○			
37	頭無遺跡					○						○	○			
38	東家遺跡						□					○	○			小鍛冶
39	川鶴皆戸遺跡						□					○	○			
40	上西原遺跡											○	○			基礎建物
41	向原遺跡											○	○			
42	丸山遺跡						○	○				○	○			居宅
43	北原遺跡						○	○				○	○			
44	八坂遺跡						○	○				○	○			
45	宮下遺跡		○			○		○				○	○			中世墓域・寺院
46	今井神社古墳群							○				○	○			
47	伊勢山古墳群											○	○			
48	阿久山古墳群											○	○			
49	丸山古墳群											○	○			
50	天神山古墳群											○	○			
51	東山道															
52	女堀															
53	二之宮神社															
54	赤石城													○		
55	新土厚城													○		
56	今井城													○		

遺跡の概要

本報告の遺跡。

本遺跡の北側に位置する。同一台地上にあり一遺跡として掌握できる可能性が高い。

本遺跡の一つ西側の台地上に位置する。二之宮千足遺跡と同一の遺跡か。

二之宮宮下西遺跡に重複する沖積地では浅間C層石埋改水田以降浅間B層石堆積以後までの7期の水田が検出された。

宮川の右岸。微高地上に位置する。竪穴住居とともに孤立柱建物遺構が検出されている。

寛延浅焼遺跡の南側に位置する。旧河川の埋没土中から木製品が出土している。

宮川に接する微高地にある。弥生から古墳時代前期に集落の形成はじまる。古墳後期に南側は古墳群になり、集落は北側に移る。

本遺跡の南側に位置する。古墳時代前期以降平安時代まで居住域として継続する。

宮川右岸。台地上に展開する。古墳時代前期の居住域は後期になり基域に変化する。

台地内部まで居住域が拡大している。

寛延川と神沢川の合流点の台地上にある。弥生時代の住居からは東関東や東海東部の土器の影響がみられる。

神沢川右岸に位置する。古墳後期に小規模な居住域は群集墳が形成され短期間で基域化している。

古墳時代前期の住居は1軒で、奈良・平安時代に居住域として展開する。

飯土井上遺跡と接する地点からは旧河川の流路が検出された。台地上は浅間B層降下時には水田化されていた。

本遺跡の東側の沖積地の北延上に位置する。F A降下以降7期の水田が検出された。

古墳時代中期が不明確であるが前期から平安時代まで継続して居住域であったと思われる。

古墳時代以降の居住域である。道路遺構は平安、鎌倉、江戸の各時代のものが検出された。

寛延川左岸の台地上に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓が4基検出された。

宮川の沖積地を隔む台地上にある。3地点で調査が実施された。弥生時代後期以降居住域が継続した。

宮川の沖積地を隔む舌状台地上にある。弥生時代以降の居住域である。

古墳時代前期以降の居住域が展開する。奈良・平安時代には台地内部にも住居の占拠は拡大する。

古墳時代の居宅と考えられる方形区画遺構の規模は東西59m以上、南北43m以上を測る。標列の高低区画内には2軒の竪穴住居がある。

寛延川左岸の沖積地で検出された水田遺構で北側の荒延田遺跡に続いている。

寛延川左岸の台地とそれに接する沖積地に展開する。居住域としては古墳時代前期以降平安時代に至るまで継続している。

微高地に位置する。古墳時代前期以来の居住域の一部は後期になり基域化する。微高地上でありながら水田化された。

台地上の2地点から方形周溝墓群を検出した。

宮川の沖積地を隔む舌状台地上に展開する。

宮川の沖積地にあたる。

古墳後期以降居住域となるか。

古墳時代前期に築造された3基の方形周溝墓のうち1基は全長25mの前方後方を呈する。

平安時代の住居を検出している。北側の上原遺跡と同一台地上にあり遺構の内容から同一遺跡の可能性が高い。

奈良時代の方形区画遺構とそのなかに基壇を有する建物遺構を検出した。布目瓦、瓦塔片、塑像などの遺物も出土した。

宮川の沖積地を隔む台地上に位置する。

寛延川左岸に位置する。居宅と考えられる方形区画遺構は36×29mの規模で内部に古墳時代中期の竪穴住居6軒が築造されていた。

丸山遺跡に南接する。検出された住居は古墳時代の各期のものが主体である。

縄文時代の配石遺構か。

寛延川右岸の台地上に展開する。弥生時代後期以降の居住域である。一部は古墳後期に基域になっている。

今井神社古墳の周辺には円墳が群集し、「上毛古墳群」には27基が登録されている。

伊勢山古墳は横式石室を主体でもつ前方円墳である。

阿久山古墳は全長28mの横式石室をもつ前方後円墳である。周辺には円墳が群集し、「上毛古墳群」には6基が登録されている。

群馬と佐位の駅を結ぶ間に寛延地域を通過していると思われる。金坂清剛氏の所見を地図上に復元した。

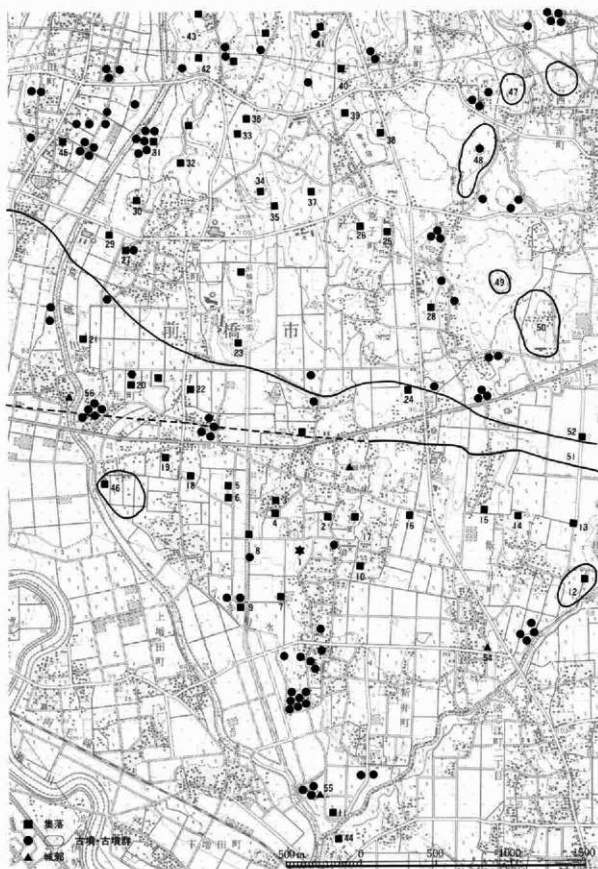
前橋市上泉町付近の田利柳川を取水点として終点の東村固定まで幅15～20m、深さ3～7mで開削されたが未完成に終わっている。

創建は平安時代にさかのぼると考えられている。社域をめぐる堀が残り、境内には塔の芯礎とそれを取り巻く載石の敷石がある。

高さ4mの土塁をめぐる本丸とその西側に腰曲輪をもっていた。

東西150m、南北200mの規模をもち本丸、二の丸、三の丸が存在した。

寛延川右岸に位置し、その支流との間に構築されている。



4 図 周辺の遺跡分布

第5節 遺跡の基本土層

A区からG区までの調査区のうちA区の水田検出部分は沖積地である。また、古墳時代の畠を検出したG区は微高地にあたる。その他は台地と区分される。

台地 地目は桑園あるいは菜園であった。

I層：現在の耕作土で暗褐色を帯びる。浅間A・Bを含む。

II層：黒褐色土層。浅間Cを含む。

III層：黄褐色のローム層。上面が遺構確認面である。

微高地 地目は水田であった。

I層：現水田耕作土層。

II層：現水田床土。

III層：黒色土層。浅間Cを多量に含む。鏽跡はこの土が埋没していた。

IV層：黄灰色土の砂壌土層。

沖積地 現在の地目は水田であった。

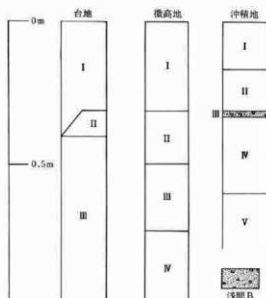
I層：現水田耕作土。

II層：現水田床土。

III層：浅間B純層。

IV層：埋没水田耕作土。黒褐色の粘質土。

V層：黒灰色粘質土。



5図 遺跡の基本土層

第2章 調査された遺構と遺物

第1章第2節の項で記したとおり、本遺跡は10,200㎡の範囲に7つの調査区を設定して調査を実施した。発掘調査によって検出した遺構は住居、土坑、溝、竪穴遺構、溜井、水田、畠で、各調査区ごとの数量は下表の通りである。

なお本遺跡の調査で得られた出土遺物の総量は、60×37×15cmの遺物収納箱72箱分であり、本報告の

2表 検出された遺構

	A区	B区	C区	D区	E区	F区	G区	合計
住居	40	9	29	82	6	40	—	206
土坑	44	—	15	87	5	51	—	202
井戸	3	—	—	1	—	—	—	4
溝	2	—	—	2	—	1	—	5
その他	竪穴1番井4 水田417㎡						畠 85㎡	

なかで資料化した本文中に掲載したものは約2,039個体である。

第1節 住 居

検出した住居は合計206軒でG区を除く各区にわたっている。

これらの住居の時期の内訳は、古墳時代73軒、奈良時代16軒、平安時代84軒、時期不明のもの33軒である。

出土遺物は土器がその主体であるがその他に磁石、紡錘車、石製模造品などの石製品、刀子、鏃などの鉄製品、羽口、鉄滓、土鍾などの生産・生活用品などが認められる。このほかに埋没土中から埴輪や瓦の破片が出土している。また、少量ずつであるが縄文時代、弥生時代、古墳時代前期の土器や石器、中・近世の陶磁器が混入している。

A区1号住居

位置 Y-31 写真 PL2

形状 削平が著しく、東壁及び北壁の東半で浅い掘り込みが確認されただけで全体形状は不明確である。規模は床面の範囲から南北3.57m、東西4.24mと思われる。壁面は最も良好な北東隅で18cmを測った。

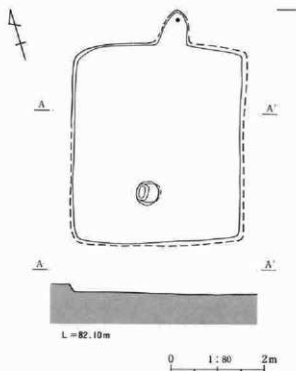
方位 S85°E

床面 ほほ平坦、特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側に25cmの部分に位置する。壁際に構築され燃焼部の一部分は壁外に延び煙道へ接続していたと思われるが削平が著しく火床面のみを検出である。焼土が散見された。

遺物 埋没土中から高台付碗(1)、円筒埴輪の破片が出土した。(観P1 写PL3)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。床面西壁近くの中央にピットがある。径48cm、深さ34cm。底面の北側には更に18cmの小ピットが穿ってある。



6図 A区1号住居

A区2号住居

位置 Y-33 写真 PL2

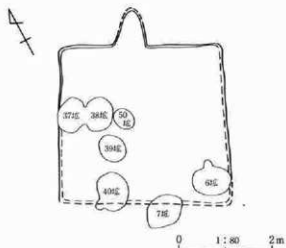
形状 削平が著しいが正方形に近い矩形が想定できる。東西3.48mを測る。北東隅は整然とした形状である。

方位 N31°30'E

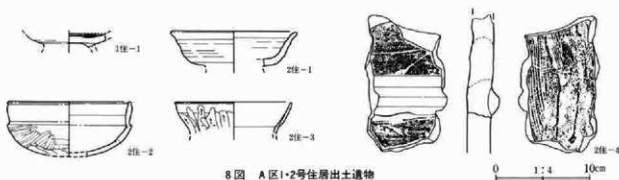
竈 北壁中央から西側へ22cmに位置する。燃焼部は壁外に構築され火床には焼土が散見された。袖部の存在は確認できなかった。

遺物 埋没土中から出土した。(観P1 写PL3)

備考 小規模な土埴群が重複し、床面の攪乱が著しく進行していた。



7図 A区2号住居



8図 A区1・2号住居出土遺物

A区3号住居

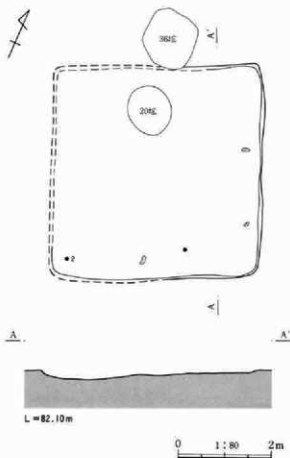
位置 X-34 写真 PL2

形状 南北4.5m以上を測る。東西4.35m以上を測る。正方形に近い形状を呈すると思われるが北西隅を中心に西辺の大部分、北壁の半分が削平される。残存壁高は3~14cmである。

床面 あまり踏み固められていない。多少の起伏をもち、北東に高く南に向かって下がる。

遺物 南西隅、床面からやや浮いて土師器杯(2)が出土している。埋没土中出土の杯(1)底面に墨書が認められる。壁際から3個の葦編み石状の円礫が出土している。(観P1写PL3)

備考 竈・柱穴・貯蔵穴・周溝などは検出されなかった。



9図 A区3号住居

A区4号住居

位置 V-34 写真 PL3

形状 南北に長軸を有する隅丸の横長矩形である。東壁に対し西壁は35cm短く、南東隅は鋭角を成す。残存壁高は12~26cmである。

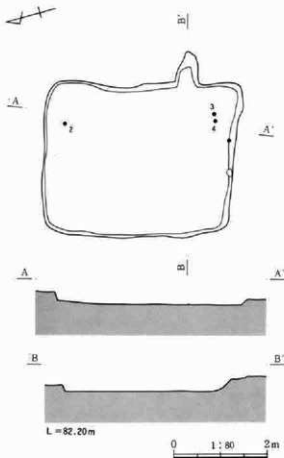
面積 13.1m² 方位 S78°E

床面 特に踏み固められていない。

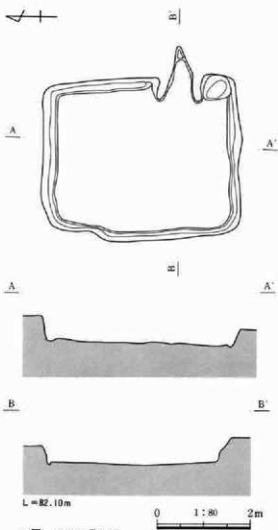
竈 東壁の中央から90cm南側に位置する。燃焼部は壁外にあり、奥壁は斜めに立ち上がる。煙道の一部が残存する。壁体はあまり焼土化していない。袖部の確認はできなかった。

遺物 北東隅から高台付椀(2)、南東隅から高台付椀(3)、灰釉陶器高台付椀(4)を出土するがいずれも2~5cm床面から離れる。(観P1・2写PL3)

備考 柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認されなかった。



10図 A区4号住居



11図 A区6号住居

A区6号住居

位置 U-34 写真 PL4

形状 南北に長軸を有する矩形を呈する。各隅はやや丸味を帯びる。規模は4.15×3.42mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認面は両側に向かって傾斜しており、残存壁高は東壁50～52cmである。

面積 13.8m² 方位 S88°30'E

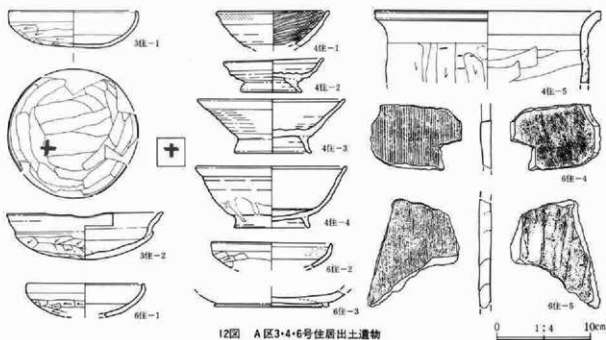
床面 多少の起伏をもって北東隅から南西隅に向けて低くなる。良く踏み固められている。

竈 東壁、中央から南へ73cmに位置する。燃焼部は一部住居外に突出している。焚口部は幅70cm住居内にあり燃焼部底面は床面とほぼ同じレベルで奥にゆきやや高くなる程度である。底面には、灰、炭化物が薄く堆積していた。煙道はほとんど削平されているが燃焼部底面と22cmの差をもって基部が残存する。袖部は粘土を構築材としているが崩壊が著しい。

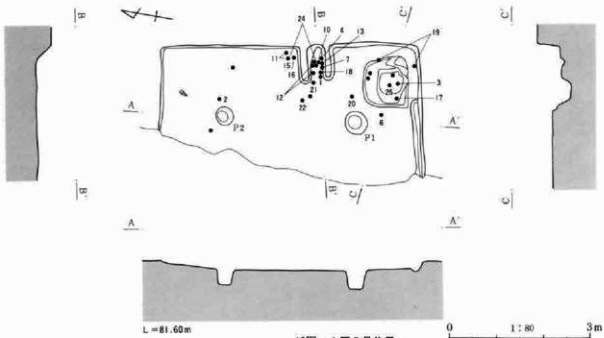
貯蔵穴 電右側、南東隅にあり、浅い掘り込みである。57×50cm、深さ20cmの不整形円形を呈する。

壁溝 貯蔵穴の部分を除き全周する。幅6～10cm、西壁、北側寄りがやや狭くなる。深さ4～5cmを測る。

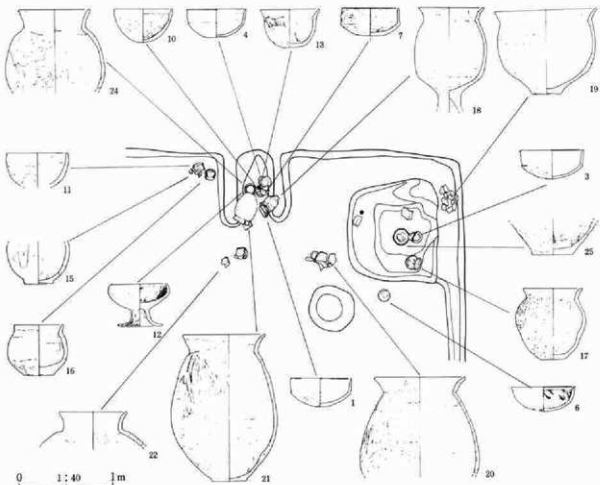
遺物 床面直上からの出土は無い。竈燃焼部から円筒埴輪の破片を検出している。(観P2 写PL5)



12図 A区3・4・6号住居出土遺物



13図 A区5号住居



14図 A区5号住居窟と周辺の出土遺物

A区5号住居

位置 Z-29 写真 PL4

形状 南北5.5mを測り、隅の整然とした矩形を呈したと思われるが西半分は削平され残存しない。残存壁高は良好な南東隅で33cmを測る。壁面は垂直に近く立ち上がる。方位 N79°E

床面 全体によく踏みしめられていた。

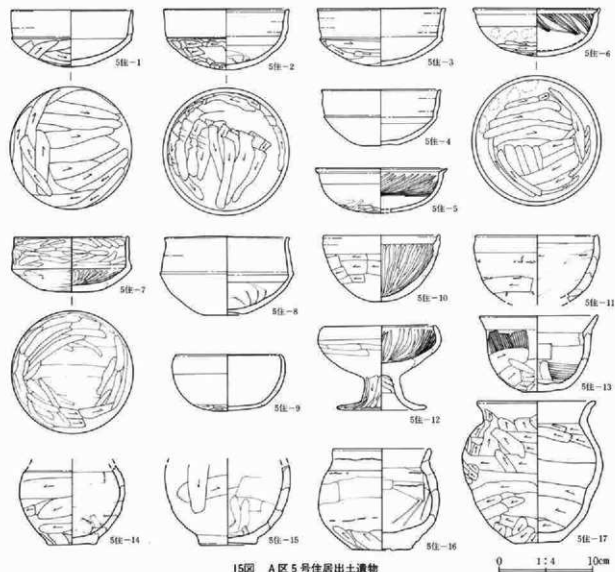
柱穴 4本の主柱穴と思われるP₁は径48×48cm、深さ43cm。P₂は径38×36cm、深さ27.5cm。

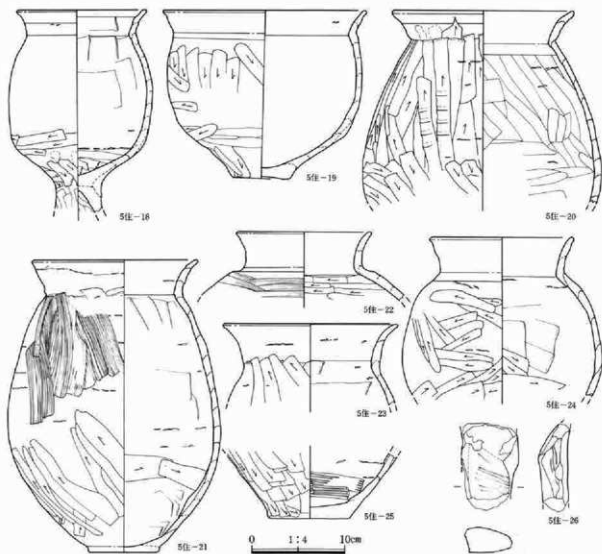
竈 東壁中央から南に58cmの位置にある。煙道部分は削平されている。燃焼部は壁内にあり、天井部は崩落していたが、粘土貼り付けによる袖部が両側に

残っていた。焚口部は幅30cm、燃焼部長75cmを測った。貯蔵穴 上端は110×98cmを測る矩形を呈しているが中段で円形状を成し、下端は48cmの隅丸方形となる。深さ21cm。

壁溝 南壁際にみられ、幅11cm、深さ5cmを測る。貯蔵穴と結合している。

遺物 電燃焼部内から壺(21・24)、台付壺(18)、杯(1・4・7)、椀(10・13)、高杯(12)が出土した。(1)は(18)に蓋をしたような状態で(12)に重なっていた。貯蔵穴内の上位から中位にかけて杯(3)、壺(17)、瓶の破片を出土している。また、北壁の北東隅から炭化材の細片を検出した。埋没土から砥石を一点出土している。(観P2～5 写PL5)





16図 A区5号住居出土遺物

A区7号住居

位置 W-32

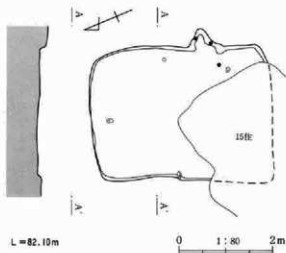
形状 15・25号住居との重複関係にあり残存状態は不良である。南北3.45m、東西2.75mを測る横長で隅丸矩形を呈していたと考えられる。壁高は南東隅で21cm、他は7～8cmである。

方位 S78°30'E

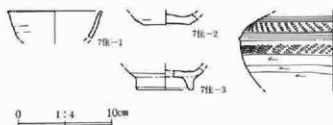
竈 東壁中央から南側へ52cmに位置する。壁外に構築された燃焼部分の一部が残存していた。

遺物 竈周辺から小破片、埋没土中から形象埴輪の基底部破片(5)が出土した。(観P5 写PL5)

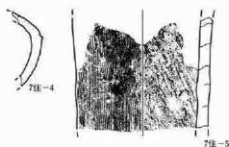
備考 本住居の構築時期は25号住居に先立ち、15号住居より後出と思われる。



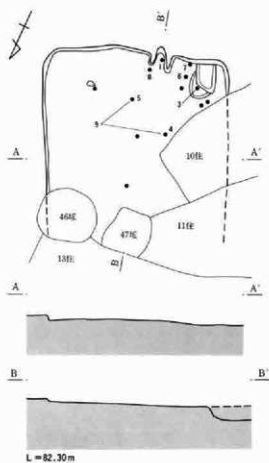
17図 A区7号住居



18図 A区7号住居出土遺物



A区9号住居



19図 A区9号住居

0 1:80 2m

位置 U-36 写真 PL 8

形状 10号・11号・13号住居との重複により全体の形状については不明な点が多いが南北3.95m、東西4.18m以上の隅にやや丸味を帯びる矩形が想定できる。

方位 N75°30'E

床面 西側に向けて緩やかに下がる。踏み固めは認められない。

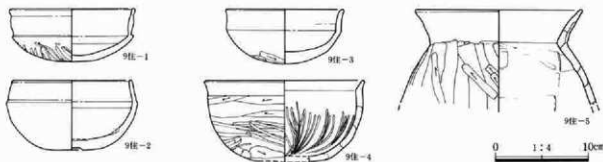
竈 東壁、中央から南側へ42cmに位置する。残存状況は極めて悪く煙道は削平されている。燃焼部は壁内にあり粘土を構築材とした左右の袖部が残存する。焚口部の幅は26cmを測り、火床は床面よりやや下がる。

貯蔵穴 竈の右側に位置し、東壁に接する。径は60×30cm、深さ70cmの矩形を呈するが、両側の肩は崩落したのか狭小なテラス部分を形成する。上位から杯(3)が出土している。

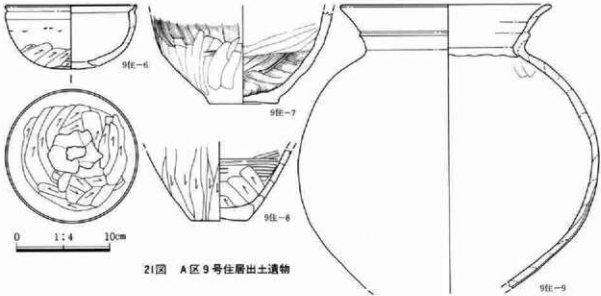
遺物 貯蔵穴の周縁、中央やや竈寄りからまとまって出土しているが床面に密着状態の個体は少ない。

(概P8 写PL8-11)

備考 柱穴、壁溝は検出されなかった。また、重複するいずれの住居よりも古い築造と思われる。



20図 A区9号住居出土遺物



21図 A区9号住居出土遺物

A区10号住居

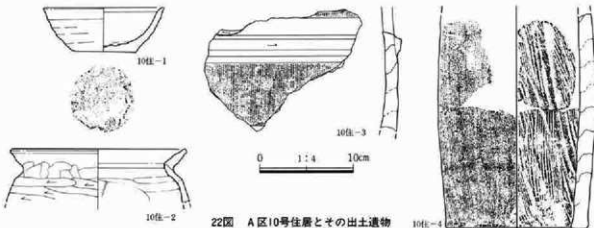
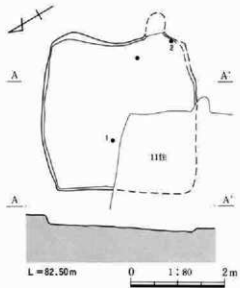
位置 U-36 写真 PL9

形状 11号住居、21号住居と重複する為全体の形状は把握できない。東西2.75m、南北3.52mを測るが各壁面とも出入りが激しい。削平が著しく壁高は6~14cmを測るのみである。

竈 検出されなかったが南西隅の床面に焼土が散見できた。

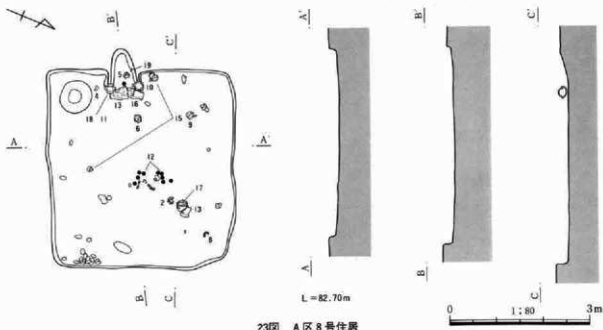
遺物 床面中央の西壁に寄った地点から杯(1)が出土した。床面から4cm離れている。(観P5 写PL9)

備考 11号住居よりも先出と思われる。21号住居との関係は不明、21号住居が後出か。

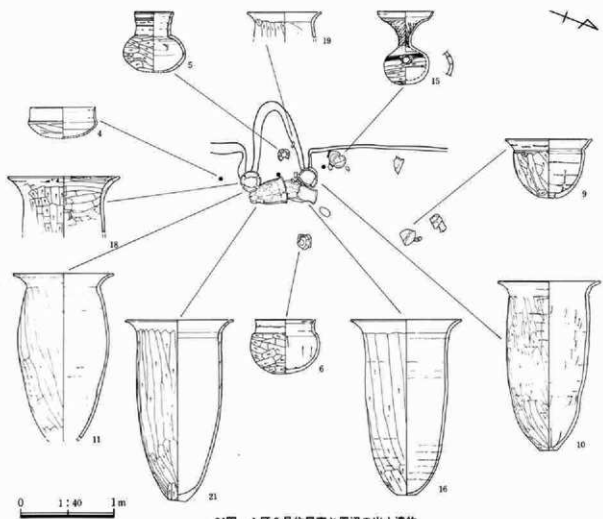


22図 A区10号住居とその出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



23図 A区8号住居



24図 A区8号住居と周辺の出土遺物

A区8号住居

位置 V-36 写真 PL 6・7

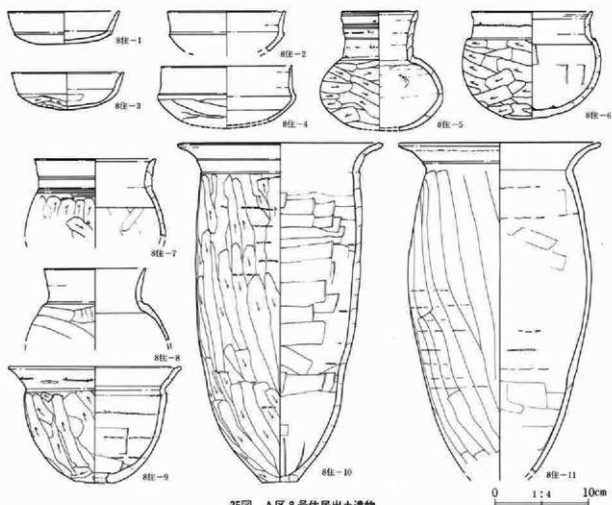
形状 東西4.15m、南北4mを測る。東辺が短いため北壁が入り込みやや歪むが正方形に近い矩形である。南側の二隅は直角に近いが北東隅は丸味がある。壁面は削平が著しく良好な南東隅で23cm、南西隅では6cmを測るのみであった。

面積 16.3㎡ 方位 S 64°30'W

床面 四隅に向って緩やかに高まる。

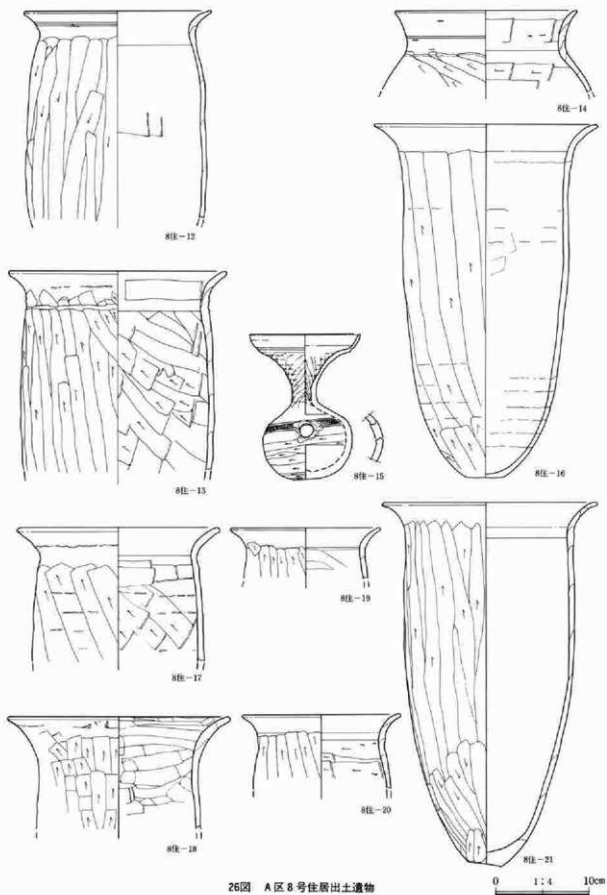
竈 西壁の中央から33cm南側に位置する。焚口部は幅45cm、壁内にある。燃焼部の長さは約70cm、一部は壁外に掘り込まれている。使用最終時の火床は住居の床面とほぼ同一レベルで炭化物を混在する灰層が認められた。崩壊は進行していたが粘土を構築材

とする両袖が残存しており、左の先端には竈(11)を右の先端には(10)を埋置し補強材としていた。焚口部から横倒した状態で出土した竈(16・21)は両袖の先端に渡され鳥居状をなしていたと思われる。
貯蔵穴 竈左側、住居の南西隅に位置する。円形を呈し、上端の径は70×65cm、深さ32cmを測る。貯蔵穴の周縁はドーナツ状にやや盛り上がっている。
遺物 床面直上出土のものも多く認められる。竈右側の壁際から杯の口縁部が、北西からは瓶(9)が、中央南壁よりから甕(15)の胴部が出土している。中央からは馬歯がまとまって出土している。また、蜜罍み石状の小円礫が南東壁際から16個出土したのをはじめ合計20個出土している。(観P6・7 写PL7)
備考 南壁部分が24号住居と重複するが本住居が古い築造と思われる。



25図 A区8号住居出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



26図 A区8号住居出土遺物

A区11号住居

位置 U-36 写真 PL 9

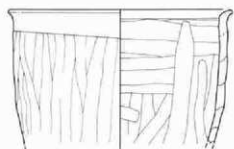
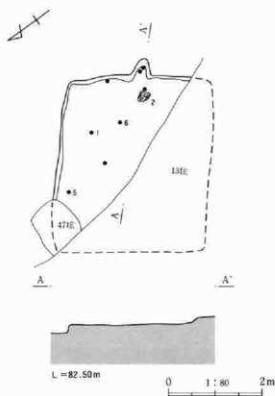
形状 13号住居と重複し、北東隅のみの検出で全体形状は把握できなかった。規模は東西3.15m以上、南北2.5m以上である。 方位 S45°30'E

床面 両側に向かって緩やかに傾斜する。

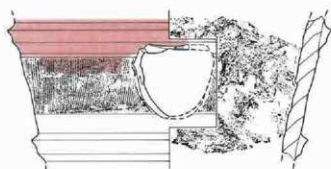
竈 東壁(南東壁)に位置する。燃焼部の一部が壁外に突出する。左袖部は短く壁外に延びるようでその痕跡が認められた。

遺物 燃焼部から小破片が、南東隅の床面から土釜(1)が出土した。また、鎌(5)、刀子(6)も床面直上から出土している。円筒埴輪(2~4)、瓦の小破片も検出された。(観P11 写PL9)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。本住居は9・10・13号住居のいずれよりも後出と考えられる。



11住-1



11住-2



11住-5(5/6)



11住-3



11住-6(5/6)



11住-4

27図 A区11号住居とその出土遺物

0 1:4 10cm

A区12号住居

位置 U-35

写真 PL10

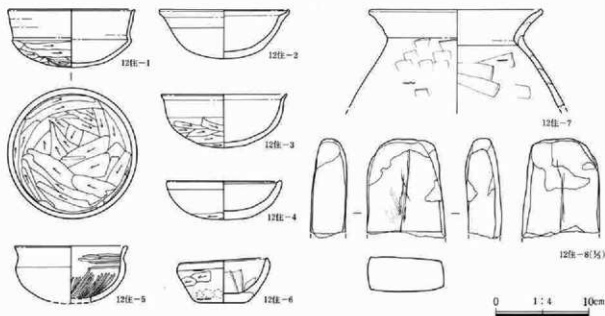
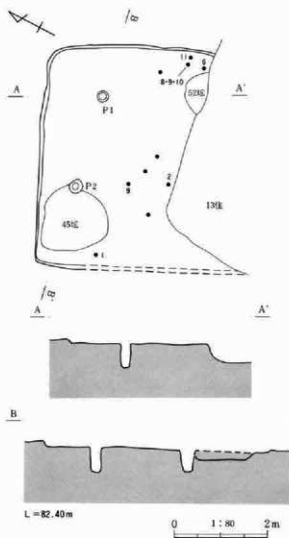
形状 南側が13号住居と重複して切られている。規模は東西5.15m、南北3.48m以上である。北東隅はやや丸味を帯びる。壁面は削平が著しく4~8cmである。

床面 東から西に向って傾斜する。比高差は10~20cmである。

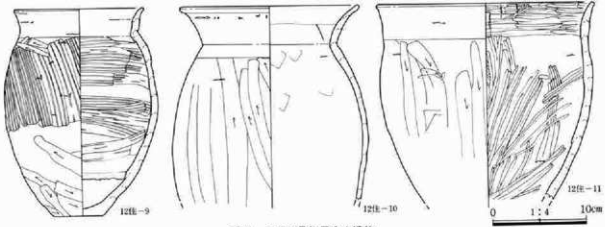
柱穴 2本検出されたが、P₁はやや不自然な位置にある。規模はP₁は径24×21cm、深さ51cm。P₂は径30×26cm、深さ45cmである。

遺物 床面直上出土の土器は多く杯(1・6)、甕(9)が南東の壁際を中心に散在している。床面直上から砥石(8)が出土している。(観P9 写PL11)

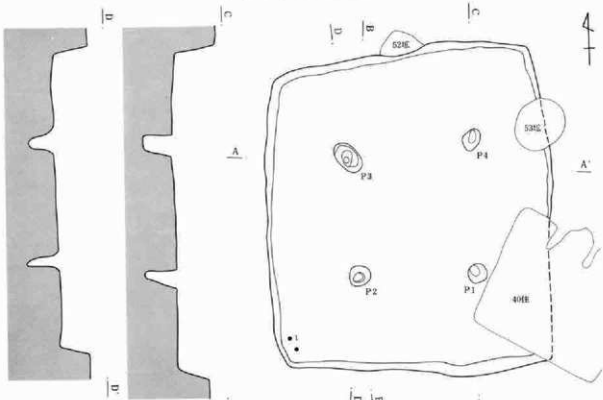
備考 壁内に土壇が2基重複している。壁溝は検出されていない。竈は検出されていないが構築の有無についても検討の余地がある。



28図 A区12号住居とその出土遺物



29図 A区12号住居出土遺物



埋 設 土 層

- 1 黒褐色土 白色軽石、炭化物粒を含む。
- 1' 黒褐色土 1と1'の間層。
- 1'' 黒褐色土 粘質の黄色土ブロックが多い。
- 2 暗褐色土 1と3の間層。黄色味を帯びる。
- 2' 暗褐色土 2よりも黒色味が強い。
- 3 暗褐色土 暗褐色土と黄色土ブロック。
- 4 暗褐色土 黄色土ブロック。
- 5 暗褐色土 黄色土ブロックを少量混入。
- 6 黒褐色土
- 6' 黒褐色土 6よりもやや黄色味を帯びる。
- 7 黒褐色土 8 黒褐色土 やや締まる。
- 9 黒褐色土 10 黒灰色土 砂質。
- 11 灰褐色土 粘質、白色軽石、炭化物が多い。
- 12 黒褐色土 12-13は土坑状の遺構の埋設土か。
- 13 黒褐色土 黄色土土を混入する。
- 14 黒灰色土 砂質。A区11号住居の埋設土か。

30図 A区13号住居

A区13号住居

位置 U-35 写真 PL10

形状 東壁に比して西壁が短いため南北の高壁が中に入り台形状の矩形を呈する。壁面の残存状態は良好な北西隅で75cmを測る。

埋没土 黒褐色土がレンズ状の堆積をしている。最上位は砂質であるが、中位以下は粘質土の小ブロックが数多く認められ混土状を呈する。

床面 多少の起伏をもつがほぼ平坦である。全体に踏みめられている。

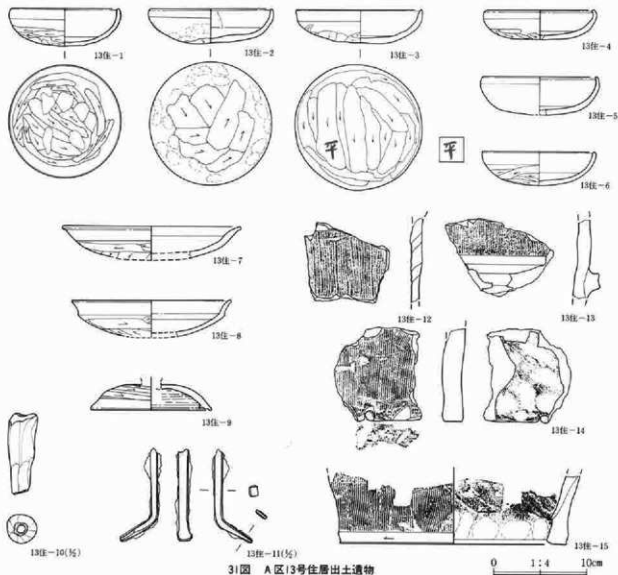
柱穴 支柱穴4本を検出した。各柱穴間の心々距離も多少の相違があり、住居の平面形と合わせても整然としない。規模は次のとおりである。P₁は径40×

38cm、深さ66cm。P₂は径47×42cm、深さ68cm。P₃は径70×45cm、深さ52cm。P₄は径48×40cm、深さ61cmである。P₂とP₄は掘り方が楕円形を呈する。P₁は斜めに穿ってある。

遺物 床面直上の遺物としては南西隅から少破片が1点出土しただけである。南西隅からは床面から4cm離れて完形の杯(1)が出土している。また、埋没土中から墨書のある杯(3)、土鍾(10)、鉄製品(11)、円筒埴輪(12~15)が出土している。

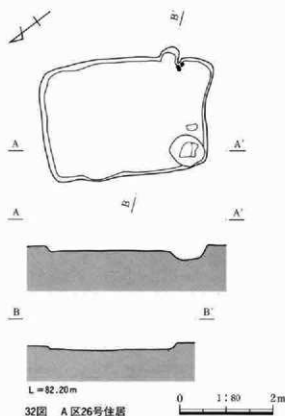
(観P10 写PL11)

備考 竈、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。特に竈は40号住居の構築に際し、削平されたと思われる。他住居との重複関係は12号住居よりも後出で、11・40号住居に先立つと考えられる。



31図 A区13号住居出土遺物

A区26号住居



32図 A区26号住居

位置 K-35

形状 南北に長軸を有する横長矩形を呈する。南壁の東側半分が外側へ張り出す為南東隅は鋭角を成す。他の隅は丸味を帯びている。南北3.53m、東西2.5mである。壁面の立ち上がりは傾斜をもっている。削平が著しく残存壁高は8~17cmにすぎない。

面積 8.5㎡ 方位 S45°E

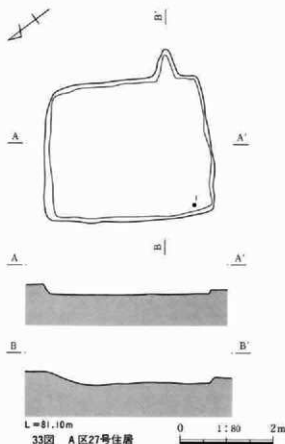
埋設土 黒色味の強い暗褐色で上層にはローム小粒軽石を、下層にはロームブロックを混入する。

竈 東壁の中央から南側へ78cmに位置する。燃焼部は壁際であり、大半は削平を受けている。実際の奥行きは更にあったと思われる。右側の袖部は基部のみを残し崩壊している。ロームを構築材としている。

貯蔵穴 南西隅に接して位置する。径70×65cm、深さ20cmを測り円形に近似する。

遺物 右袖に接して小破片を出土した。床面から出土遺物は無い。埋設土中から杯(1)、円筒埴輪の破片(3)を出土した。(観P17 写PL17)

A区27号住居



33図 A区27号住居

位置 J-34 写真 PL17

形状 南北に長軸を有する横長矩形であるが西壁に比して東壁は39cm短く、全体形状は西壁を底辺とする台形状を成す。残存壁高は9~20cmである。

面積 10.0㎡ 方位 S53°30'E

埋設土 黒色味のある暗褐色土である。灰褐色土の小粒を混入する。下層は黒色味が薄れる。

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側へ75cm、南東隅に近接して構築されている。燃焼部は壁外にあるが幅45cmと狭い。袖部の有無は確認できなかった。火床面及び焚口前の広範囲に炭化物、灰が広がっており、焚口前のレベルは他の床面より高くなっていた。

遺物 南西隅の床面の方向から3cm離れて杯(1)が出土した。(観P20 写PL17)

第2章 調査された遺構と遺物



34図 A区26・27号住居出土遺物

A区28号住居

位置 I-34

写真 PL18

形状 東西に長軸を有する縦長矩形を呈する。残存する北西、南東の各隅は整然とした形状である。壁面は東半の残存が良好であるが15~24cmを測るのみである。

面積 11.5㎡(推定)

方位 S73°30'E

床面 特に踏み固められていなかった。

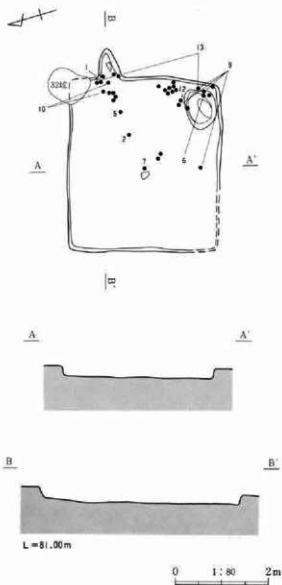
竈 東壁中央から北側82cm、北東隅に近接する。燃焼部は壁外に構築され、安山岩の円礫が支脚として設置されている。南側の壁体は崩壊が著しい。また、袖部の有無も不明確である。

貯蔵穴 南東隅に位置する。径80×65cmの不整形円で、中位に狭い段をもつ。深さ33cmを測る。

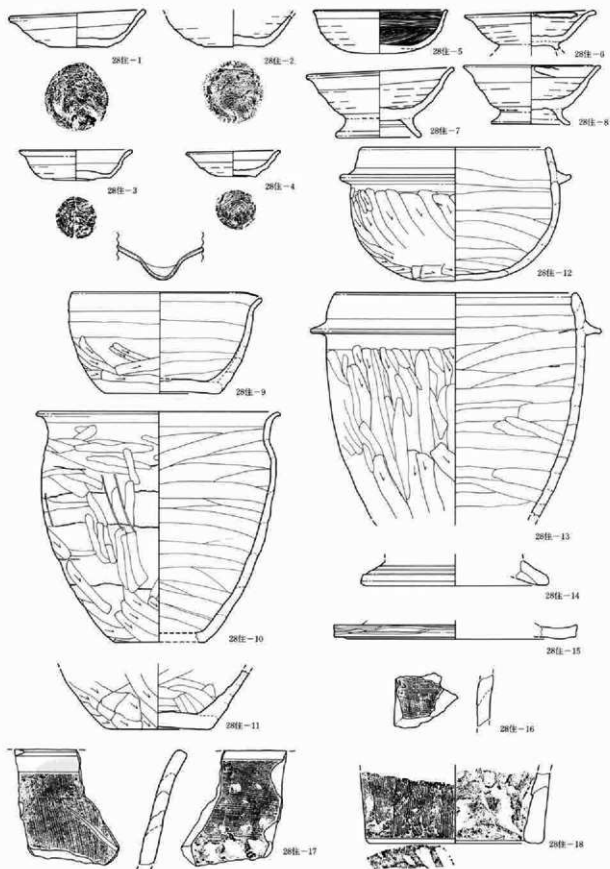
遺物 竈燃焼部からは羽釜(13)、土釜(10)、杯(1)、椀(8)が細片で出土、広範囲での接合関係が認められる。貯蔵穴から丸底の羽釜(12)、高台付椀(6)を出土。南壁中央際からは片口状の鉢(9)が出土し、貯蔵穴出土の細片と接合した。中央床面直上から高台付椀(7)が出土している。埋設土中から円筒植輪の破片(16~18)を出土している。

(観P20・21 写PL18・19)

備考 柱穴、壁溝は検出されなかった。北東隅は32号土塚により攪乱を受ける。29・30号住居との重複関係は本住居が後出である。



35図 A区28号住居



36图 A区28号住居出土遗物

0 1:4 10cm

A区14号住居

位置 V-33 写真 PL12

形状 東西方向に長軸をもつ縦長矩形で四隅は丸味を帯びる。東壁は竈の左右で著しく食い違う。規模は南北2.65m、東西は北壁で2.8m、南壁で3.4mを測る。確認面が西に向って下がる傾斜地で残存壁高は南東隅で44cm、南西隅で15cmを測った。

面積 9.0㎡ 方位 N75°E

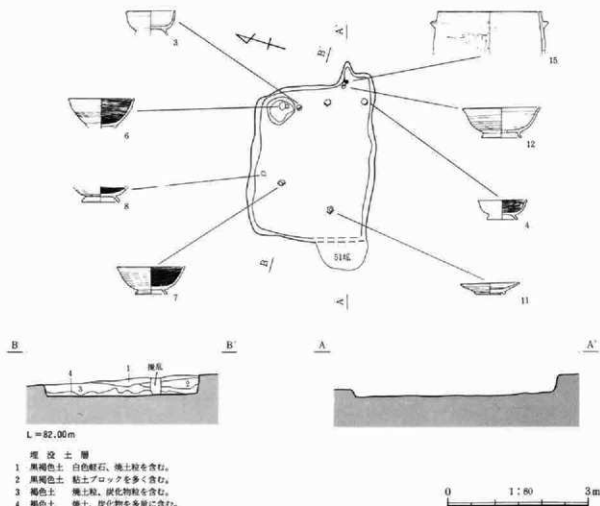
床面 特に踏み固められていない。ほぼ平坦である。

竈 東壁の南東隅によって設置されている。燃焼部は壁内にあり、一部壁面を掘削して構築されている。幅は25cmと狭い。袖部の有無は確認できなかった。火床面には炭化物、灰を散見した。

貯蔵穴 北東隅の壁際に位置する。不整形形で60×55cm、深さ21cmを測る。

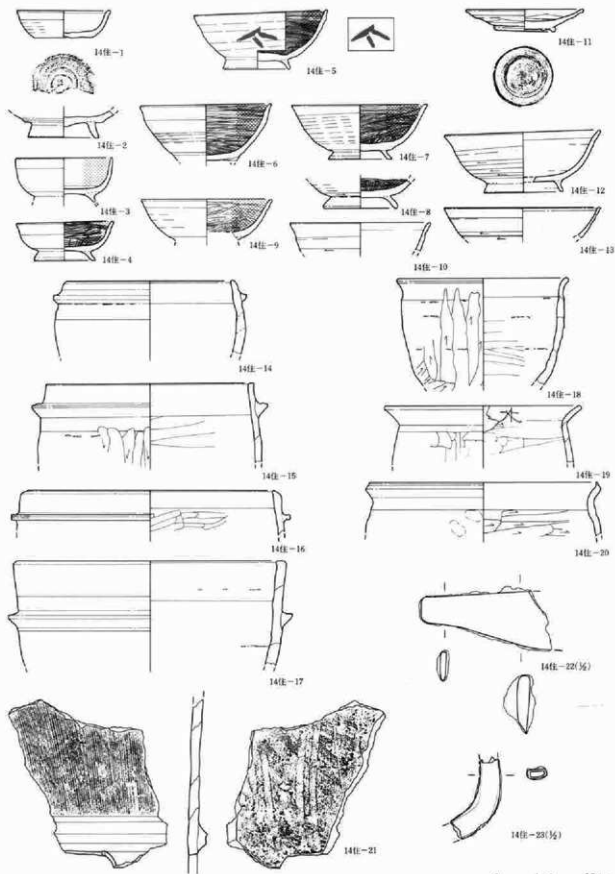
遺物 竈燃焼部内から灰袖陶器高台付椀(12)、羽釜(15)片を出土。焚口部右前、壁際の高台付椀(4)、貯蔵穴南の高台付椀(3)が床面からの出土である。貯蔵穴内から高台付椀(6)が出土している。西側出土の高台付椀(7・8)灰袖陶器高台付皿(11)は床面から3~13cm離れて出土した。埋没土中からは墨書の記された高台付椀(5)、刻書の認められる土釜(19)、大刀子か(22)、曲金具(23)、円筒埴輪(21)の破片が出土した。(観P11~13 写PL13)

備考 竈を中心とする南東隅は12号土壇の埋没土を掘削して形成されている。柱穴・壁溝は検出されなかった。



37図 A区14号住居

第1節 住 居



38图 A区14号住居出土遗物

A区15号住居

位置 W-32

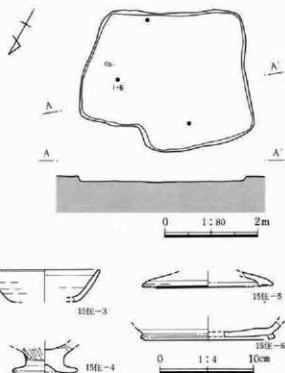
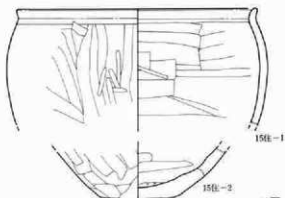
形状 北壁は中位で食い違い、張り出し状を成す。

最大長は東西3.6m、南北2.9mを測る。

遺物 床面から小破片を出土したのみである。

(観 P13 写 PL117)

備考 住居でない可能性もある。



39図 A区15号住居とその出土遺物

A区16号住居

位置 S-35

形状 西側の二隅が丸味をもつ横長矩形を呈する。

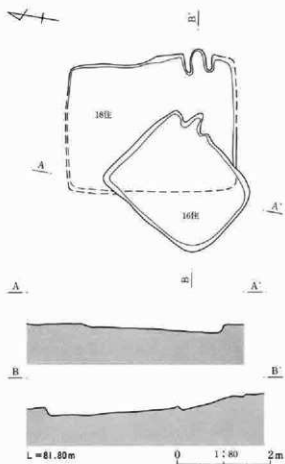
規模は東西2.15m、南北2.65mを測る。残存壁高は8~17cmである。

面積 5.6m² 方位 S59'E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から北側へ65cm、東北隅に位置する。削平が著しく、崩壊も進行していた。燃焼部は壁外に構築され、袖部は両側とも基部が若干残存しているのみであった。燃焼部の埋没土中には焼土が散見された。

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。出土遺物も皆無である。重複関係にある17・18号住居よりも後出である。



40図 A区16・18号住居

A区18号住居

位置 S-35

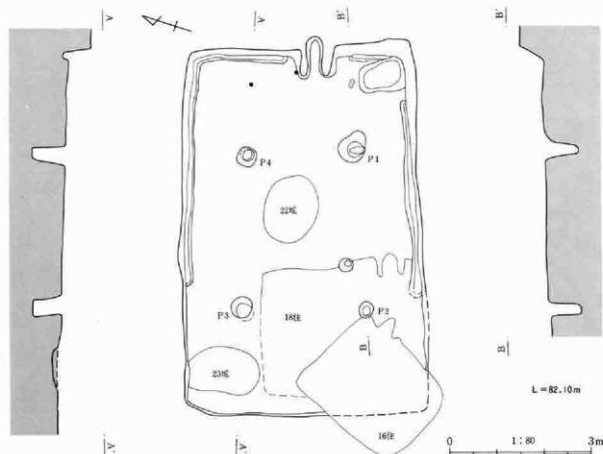
形状 16・17号住居との重複により全体像は不明確である。東西3.05m、南北5.20mの規模をもつ横長矩形と思われる。

面積 11.1m²(推定) 方位 N82°E

床面 西側に向かって緩やかに下がる。

竈 東壁、南東隅近くに位置する。壁際に構築され燃焼部は壁内にあり、煙道は削平されている。袖部は粘土貼り付けによるもので基部のみであるが両側とも残存していた。焚口部の幅は30cmである。

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。床面直上の出土遺物は無い。17号住居と16号住居の間の構築と考えられる。



41図 A区17号住居

A区17号住居

位置 S-36 写真 PL12

形状 東西7.7m、南北5.12mを測る。16号住居との重複の為南西隅を欠くが各隅の整然とした長方形である。壁面も上半はやや外反するものの垂直に近い立ち上がりを成す。残存壁高は遺構確認面が東から

西に傾斜する為東北隅で53cm、西壁で14cmを測った。

面積 34.8m²(推定) 方位 N87°E

床面 全体に良く踏み固められている。西壁に向かって傾斜、比高差は約20cmである。18号住居の床面とのレベル差はほとんど無い。

柱穴 主柱穴と思われるP₁~P₄の4本とP₅に近接して小ビットP₅が検出された。主柱穴は住居の形

第2章 調査された遺構と遺物

状に合わせた配置である。P₁とP₂の心々間距離は1.72mであるのに対しP₁とP₃のそれは1.2mを測るにすぎない。各柱穴の規模は以下のとおりである。P₁は径66×55cm、深さ62cm。P₂は径35×30cm、深さ36.5cm。P₃は径45cm、深さ62cm。P₄は径42×40cm、深さ70cm。P₅は径30×25cm、深さ23cm。

竈 東壁の中央から南側、20cmに位置する。燃焼部は壁内にあり、両袖部が残存するものの崩壊が著しい。構築は粘土の貼りつけによる。焚口部幅40cm煙道は壁面を一部掘り込んで立ち上がる。火床からは焼土、炭化物が散見された。

貯蔵穴 竈の右側、南東隅に接して位置する。100×

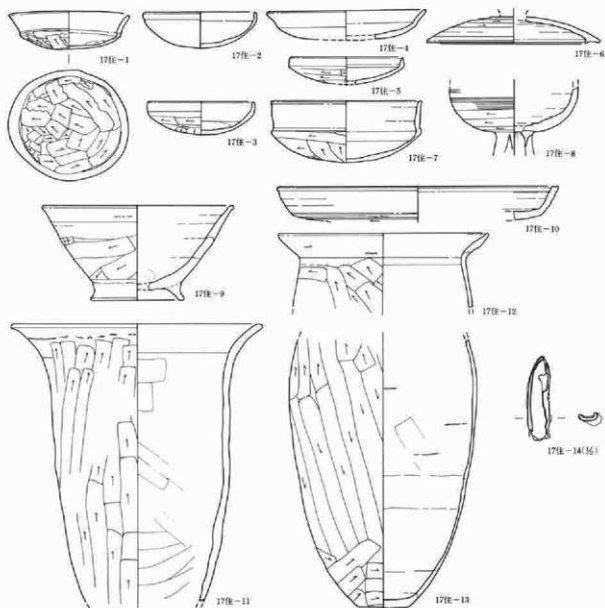
74cmの隅丸矩形を呈す。深さ14cm、北東隅は更にビット状に掘り込まれ上端から30cmを測る。埋没土の上層には竈から灰が流入しており、ビット内にも灰、ロームブロックの混入が認められた。

壁溝 南、北壁の両側、西壁を除いて周る。幅6～12cm、深さ5～11cmを測る。

遺物 床面からは小破片が出土したのみである。埋没土中から板状鉄製品(14)が出土している。

(観P14・15 写PL13)

備考 16・17号住居と重複するがいずれよりも先出である。



42図 A区17号住居出土遺物

A 区 19号 住居

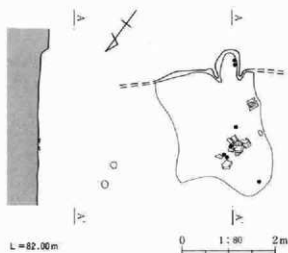
位置 S-37 写真 PL14

形状 確認面は黒色味を帯びた暗褐色土で埋没土との識別に困難をきわめ住居全体の形状を把握するに至らなかった。

竈 壁際に構築され、燃焼部の多くは壁外に延びている。焚口部の両脇には袖部が一部残存していた。

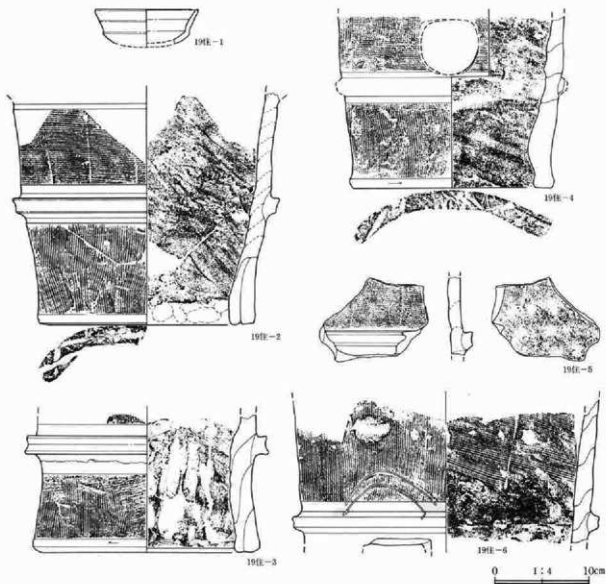
遺物 竈手前の床面から多数の円筒埴輪片(2~13)と杯が出土している。(観P15 写PL14)

備考 17・23号住居と重複関係にあったと思われる。



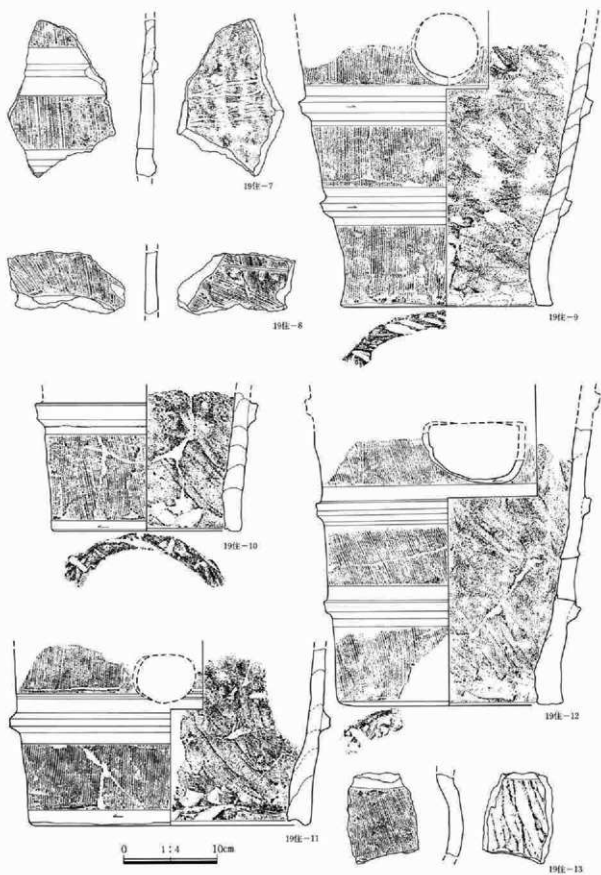
L=82.00m

0 1:80 2m



43図 A区19号住居とその出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



44図 A区19号住居出土遺物

A区20号住居

位置 R-36

形状 東西4.0m、南北3.75mを測る縦長の矩形である。北東隅は下端が鋭角を成す。他の三隅はやや丸味を帯びている。壁面は南北壁は垂直に近いが西壁は傾斜を有する。

面積 14.4m²

方位 N69°E

床面 西壁に向かって緩やかに下がる。

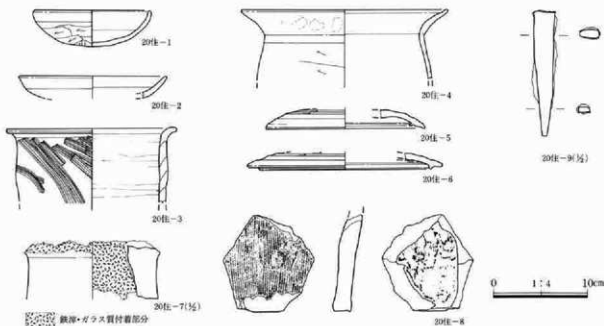
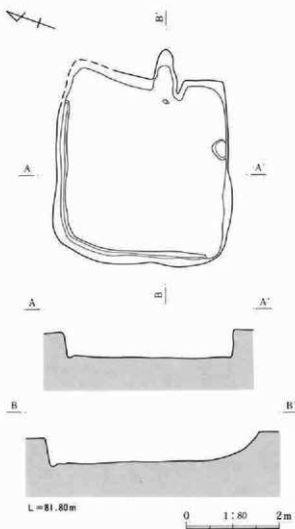
竈 東壁中央から南側へ48cmに位置する。燃燒部は壁際にある。長さ55cm、焚口部幅40cmを測る。袖部は崩壊が著しく右袖部のみ残存していた。

壁溝 北壁・西壁下に確認できた。幅5～8cm、深さ5～10cmを測った。

遺物 床面からの出土は無い。埋没土出土の土器も小破片である。羽口(7)破片、何らかの金具とおもわれる板状鉄(9)、円筒埴輪片(8)が出土している。

(観P16 写PL15)

備考 柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。南壁際中央から30cm東寄りに径50cm、深さ20cmの小ピットを検出した。



45図 A区20号住居とその出土遺物

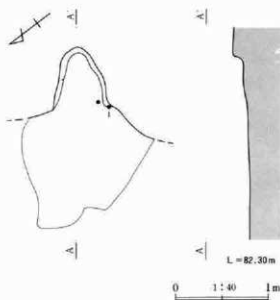
A区21号住居

位置 T-36

形状 竈とその周辺を検出したのみである。竈は壁際に構築され燃焼部は壁外に延びている。主軸の方向はS54°30'Eである。

遺物 焚口部右脇から円筒埴輪(1)の破片を出土している。(観P16)

備考 10・11・40号住居と重複関係の位置にあるが詳細については不明である。



46図 A区21号住居

A区22号住居

位置 V-32 写真 PL15

形状 南北に長軸を有する横長矩形である。北西隅を除く各隅は丸味を帯びている。東壁は竈の左右で5cm程食い違う。規模は南北2.77m、東西2.50mである。壁面はやや傾斜して立ち上がり、残存壁高は12~16cmを測る。

面積 6.7㎡ 方位 N64°E

床面 ほほ平坦な面を成し、特に踏み固められた部分は無い。但し、南壁際中央には上端径35×27cm、下端径60×55cm、床面との比高差8cmの粘土塊があり、ステップ状を呈す。

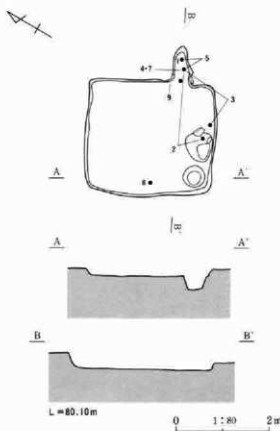
竈 東壁中央から南側に56cmに位置する。燃焼部は壁外に構築され、長さ64cm、幅40cmを測る。奥壁は斜めに立ち上がり、煙道は一部分が残存していた。焚口部左脇は契斗瓦(9)を、右脇は自然円礫を漶え、補強材としている。両者とも火熱を受けて変色、変質している。火床面及び焚口部前に薄い灰層が認められた。

貯蔵穴 南西隅にある。径45cm、深さ31cmの皿状を呈している。

遺物 竈燃焼部内から高台付椀(5)、杯(1)、壺(7)が出土している。また、高台付椀(3)は燃焼部出土の土器と床面出土の破片が接合した。中央西壁際の床面から砥石(8)が出土している。

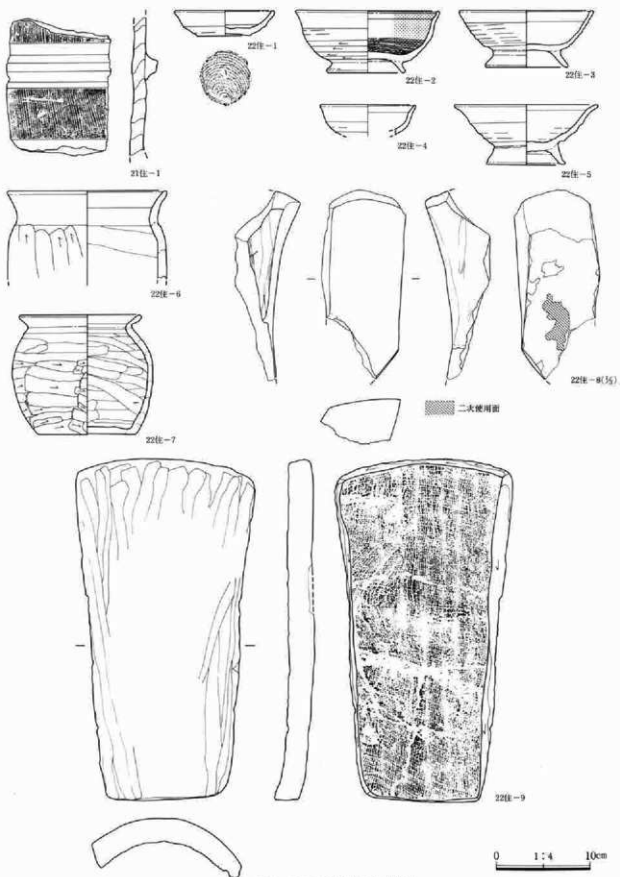
(観P16・17 写PL9・15)

備考 柱穴、壁溝は検出されていない。



47図 A区22号住居

第1節 住居



48図 A区21・22号住居出土遺物

A区23号住居

位置 T-36 写真 PL16

形状 北壁あるいは東壁の一部が張り出している。各壁の長さは南壁3.85m、北壁2.86m、西壁3.30m、東壁2.48mである。壁面の残存状況は不良で、5~15cmを測るのみである。

面積 11.5㎡ 方位 S13°30'E

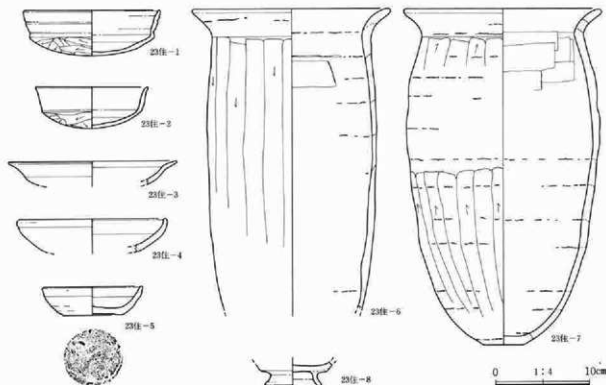
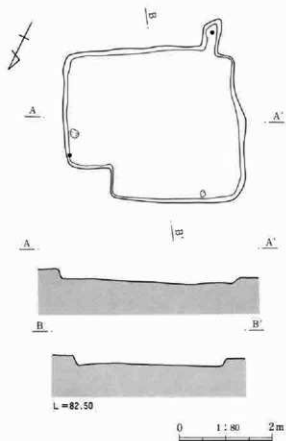
床面 竈前と東壁際が高くなっている。

竈 南壁、南西隅に近接する。燃焼部の一部は壁内にも延びるが幅が25cmと狭い。袖部は残存していない。火床には炭化物が薄くひろがっていた。

遺物 竈燃焼部内から羽釜(9)が出土している。また、埋没土中から土鍾(14)を出土した。

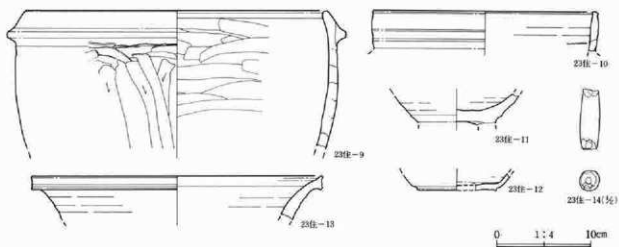
(観P18 写PL16)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。また床面のレベルを検討すると北壁、あるいは東壁の張り出し部はもう一軒の住居が重複した結果とも思われる。

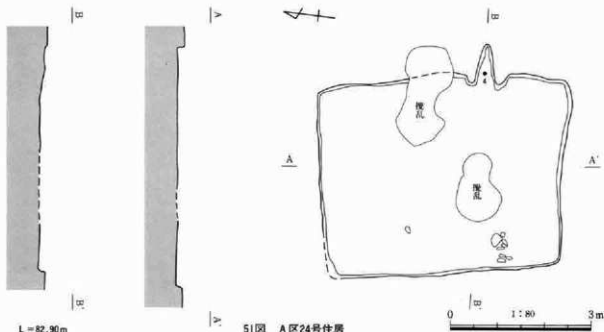


49図 A区23号住居とその出土遺物

第1節 住居



50図 A区23号住居出土遺物



51図 A区24号住居

A区24号住居

位置 V-37 写真 PL16

形状 南北5.15m、東西4.35mを測る矩形を呈する。南壁はやや内側に入り込み形状に乱れが生じている。削平が著しく残存壁高は4.5~16.5cmであった。

面積 21.5㎡ 方位 N88°E

床面 電前が高く西壁に向かって緩やかに下がる。あまり踏み固められていない。

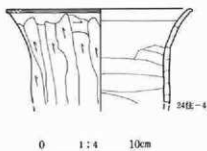
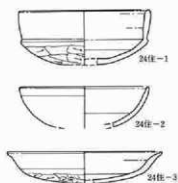
竈 東壁の中央から南寄り80cmに位置する。燃焼部

は壁際に構築されている。幅は狭く、そのまま煙道へと続く。袖部はほとんど崩壊し基部のみが残存していた。焼土や炭化物の出土量も少ない。

遺物 床面直上出土の土器は無い。電燃焼部に竈(4)の上半部が倒置されていた。西壁、南西隅よりには床面に円礫が集中する。その中の一石が長軸25cmの他は10~15cmの小円礫である。(観P19 写PL16)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。北壁の一部に8号住居と重複するが本住居が後出である。

第2章 調査された遺構と遺物



52図 A区24号住居出土遺物

A区25号住居

位置 W-32

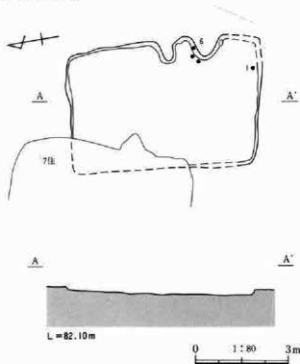
形状 南北に長軸を有する矩形である。北東・南西の隅は整然としている。南東隅は形状が乱れて正確に把握できなかった。規模は南北4.15m、東西2.3mを測った。残存壁高は7~14cmである。

竈 東壁中央から南側へ53cmのところに位置する。燃焼部は壁内に位置する。袖部は崩壊が著しいが左右とも54cm程壁内に延びていた。

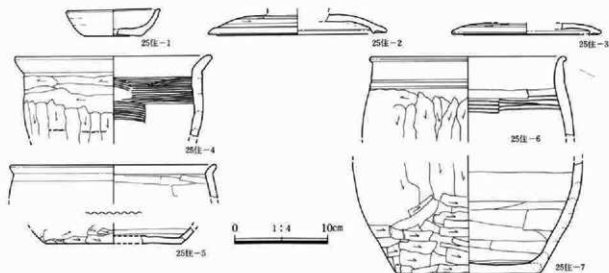
遺物 竈燃焼部、床面から小破片が出土した。埋没土中からは杯(1)、土釜(4)などが出土している。

(観P19 写PL17)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。7号住居に先立って構築されたと考えられる。床面及び東壁の一部は土坑状の攪乱を受けている。



53図 A区25号住居



54図 A区25号住居出土遺物

A区29号住居

位置 I-34 写真 PL19

形状 南北2.94m、東西2.45mを測る。壁面は多少出入りをしているが下端の形状からは四隅がやや丸味を帯びる矩形が認められる。壁面は約80°の傾斜をもって立上がる。壁高は36～45cmを測る。

面積 6.9㎡

方位 S83°30'E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側に28cmのところに位置している。燃焼部は壁際に構築され、袖部が壁内に延びる。煙道は削平されている。粘土を使用した袖部は先端の内側に安山岩の円礫を立置し補強を図っている。焚口部前には炭化物、灰が薄く広がっていた。

遺物 床面出土の土器は無い。西壁の中央からやや南側よりから菰縄み石状の小円礫が出土している。

(観P22 写PL19)

備考 28号住居と重複するが本住居が先出である。柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

A区30号住居

位置 I-35 写真 PL20

形状 28号住居、土壇との重複により全体形状は把握しがたいが南北2.85m、東西1.72mを測る隅丸の矩形を呈すると考えられる。削平は著しく残存壁高は2.5～20cmである。

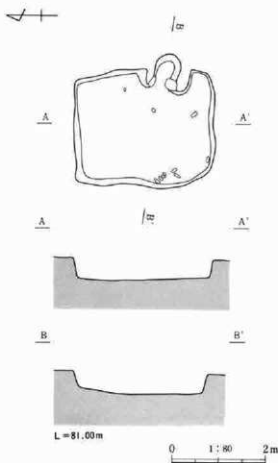
床面 特に踏み固められていない。

竈 検出されない。但し、南東隅の床面に炭化物、灰が広がっており、29号土壇の掘削により本住居の竈が削平された可能性がある。

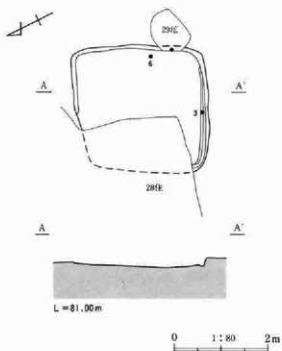
壁溝 南壁際に1.95m掘削される。幅5cm、深さ5cmを測る。

遺物 南壁中央の壁際から高台付碗(3)が出土。床面から8cm離れている。埋没土中からは鉄滓3個が出土。総重量13.3gである。(観P22 写PL21)

備考 柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。本住居は29号住居より後出である。

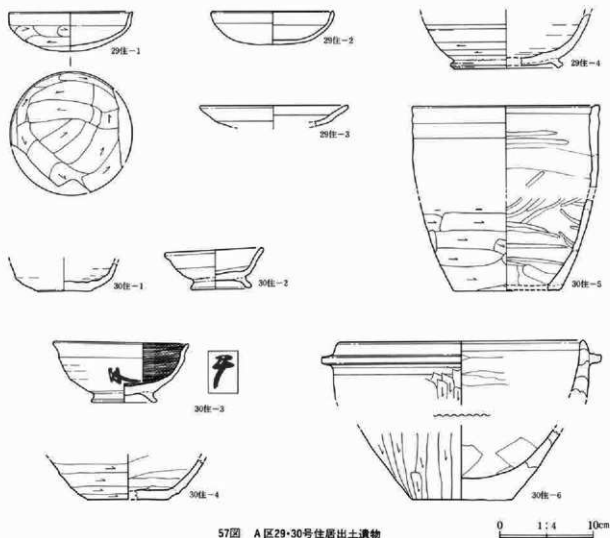


55図 A区29号住居



56図 A区30号住居

第2章 調査された遺構と遺物



57図 A区29・30号住居出土遺物

A区31号住居

位置 I-35

写真 PL20

形状 南北に長軸を有する隅丸の矩形を呈する。規模は南北3.2m、東西2.5mを測る。削平が著しく、残存高は良好な北東隅で19cm、他は6～10cm程度である。
埋没土 黒色味の強い暗褐色土でローム小粒や径3mm前後の灰褐色土粒を混入する。

面積 8.0㎡(推定)

方位 S76°E

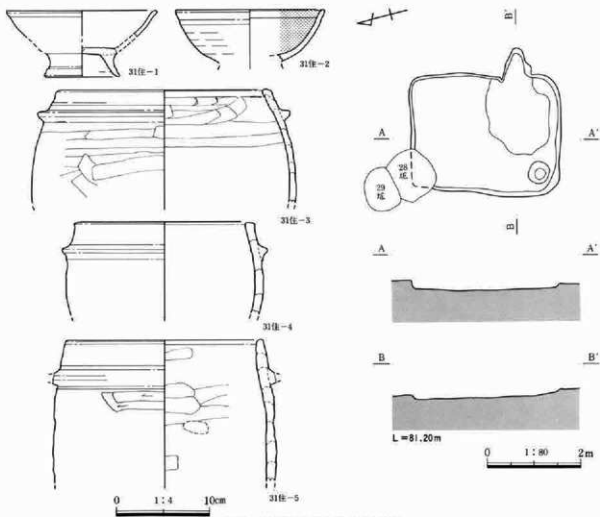
床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側へ65cm、南東隅近くに構築されている。燃焼部は壁外にあり、焚口部の両側には袖部がわずかに残存する。幅55cmを測る。床面の東南約4/5には焚口部から炭化物が薄く広がっている。
貯蔵穴 南西隅にある。径46cmの円形を呈し、深さ37cmを測る。

遺物 床面出土の遺物は認められなかった。

(観P23 写PL21)

備考 柱穴、壁溝は検出されなかった。北西隅は28号土坎により擾乱を受ける。



58図 A区31号住居とその出土遺物

A区37号住居

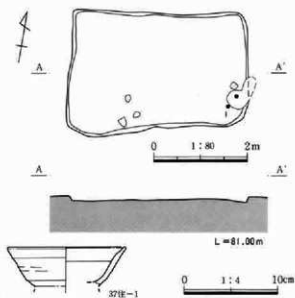
位置 C-34

写真 PL24

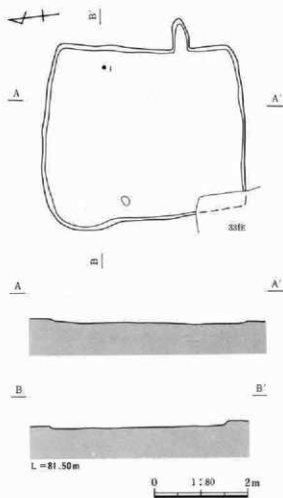
形状 東西に長軸を有する矩形を呈する。南西隅は外側にやや張り出し丸味を帯びる。規模は東西3.8m、南北2.55mを測る。残存壁高は3.5～8cmを測る。

遺物 南東隅の床面から高台付椀(1)の破片を出土している。(観P27)

備考 竈、柱穴、貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。南東隅には壁外におよぶ42cm程の土壇状の落ち込みがある。この部分に竈が構築されていた可能性が強い。



59図 A区37号住居とその出土遺物



A区32号住居

位置 I-36 写真 PL21

形状 南北に長軸を有する矩形で北西隅は丸味を帯びている。南北4.27m、東西3.62mを測るが北壁が南壁をやや上回る。削平が著しく残存壁高は5~12cmを測る。

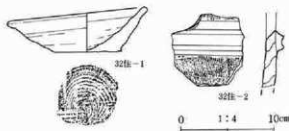
面積 15.1㎡(推定) 方位 N89°E

床面 特に踏み固められていない。西側に向かって緩やかに下がる。

竈 東壁中央から南側1mに位置する。燃焼部は壁外に構築される。幅は狭く30cm、長さ55cmが残存していた。袖部の有無は確認できなかった。

遺物 東壁、北東隅近くの床面から杯(1)が出土している。(観P21 写PL21)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。本住居の構築は重複関係にある32号住居より後出である。



60図 A区32号住居とその出土遺物

A区33号住居

位置 I-36

写真 PL22

形状 南北4.0mを測る。竈の右側、南東隅は東側に55cm張り出している。北壁は3.04m、南壁は3.54mを測る。下端の形状からは各隅はやや丸味を帯びている。

面積 12.6㎡

方位 N88°E

床面 竈、焚口部前はやや踏みしめられている。

竈 燃焼部は壁際に構築され、一部壁外に延びなが

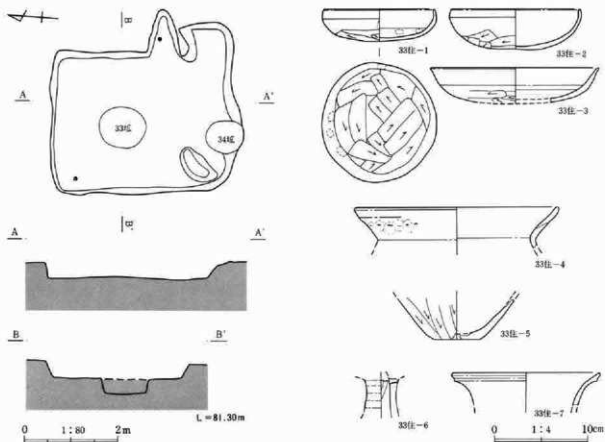
ら燃道に継続する。右袖部は粘土貼り付けにより、長さ68cmが残存する。火床部から焚口部前にかけて灰層が薄く広がる。

貯蔵穴 南西隅にある不整形の掘り込みにもその可能性がある。規模は径90×48cm、深さ13cmを測る。

遺物 北西隅際の床面から杯(1)が出土している。

(観P23 写PL22)

備考 北東隅で32号住居と重複するが本住居が後出と思われる。また、床面及び南壁は後出の33・34号土坑により攪乱を受けている。柱穴、壁溝は確認されなかった。



61図 A区33号住居とその出土遺物

A区39号住居

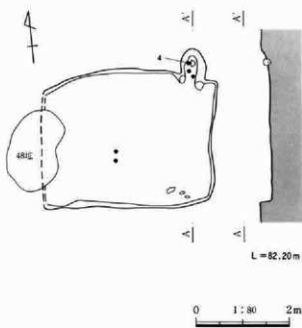
位置 b-31 写真 PL27

形状 東西に長軸を有する矩形を呈するが西壁は土壇との重複により不明瞭であった。北壁は西半分が強く内増している。残存壁高は9~23cm、南東隅が良好であった。

竈 北東隅に近接して構築されている。燃焼部は壁外に掘り込まれている。焚口部の両脇と火床部の奥に自然円礫が据えられている。焚口部には短い袖部の存在が確認された。

遺物 燃焼部内から土釜(4)をはじめとした小破片、床面中央やや南壁よりからは須恵器大甕の破片を出土した。南東隅床面からは菰編み石状の円礫を出土した。(観P25 写PL27)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

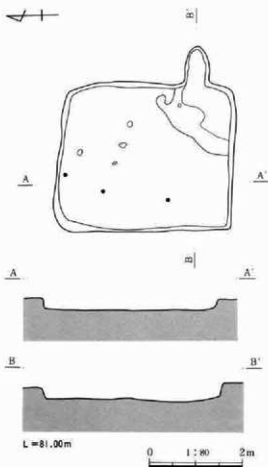


62図 A区39号住居

第2章 調査された遺構と遺物



63図 A区39号住居出土遺物



A区35号住居

位置 H-34 写真 PL24

形状 南北に長軸を有する矩形を呈する。北西隅は外側に張り出し丸味を有する鋭角を成す。規模は東西3.2m、南北は東壁で3.4m、西壁で3.8mを測った。壁面はやや外傾するが垂直に近い立ち上がりである。残存高は22~32cmである。

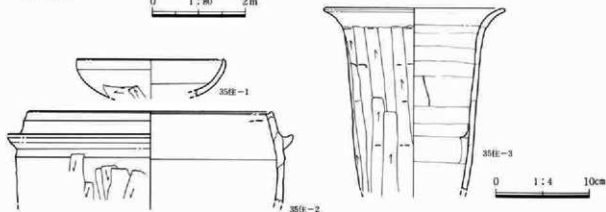
床面 多少の起伏はあるがほぼ平坦である。但し、南東隅、電手前は壁面に向って緩やかに傾斜、7cm程の比高差が認められた。掘り方の可能性もある。

竈 東壁中央から南側に95cm、南東隅に接して位置する。燃焼部は壁外に構築されている。焚口部の幅は40cmである。袖部の有無は確認できなかった。

遺物 北壁に寄った床面から杯が出土している。

(観P24 写PL25)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。



64図 A区35号住居とその出土遺物

A区34号住居

位置 G-35 写真 PL22・23

形状 東南3.9m、南北2.75mを測る。四隅がやや丸い縦長矩形であるが北壁は南壁に比して20cm程長く、北壁を底辺とする台形状を呈している。残存壁高は45~58cmと良好である。

面積 10.2㎡ 方位 N83°30' E

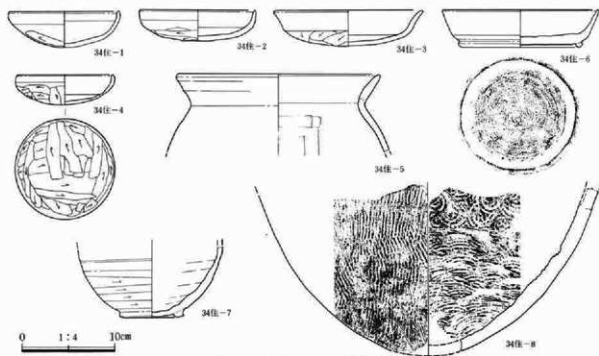
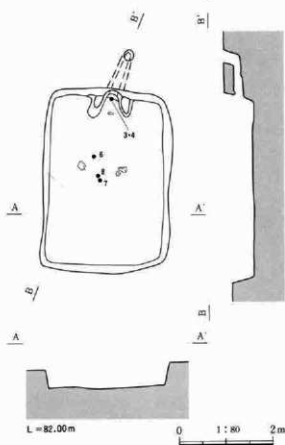
床面 起伏はあるがほぼ平坦である。

竈 東壁の中央、やや南側よりに位置する。燃焼部は壁内に袖部を構築してある。袖部は基部のみ残存でハの字状に開き狭口部の幅50cmを測る。

燃焼部の奥壁は住居の壁際で立ち上がり、火床から20cmの比高をもって煙道が壁外に延びている。傾斜度6°、85cmの長さをもって煙出孔へ続く。煙道の軸線はN99°30' Eで、住居の軸線の方向と16°の相違がある。

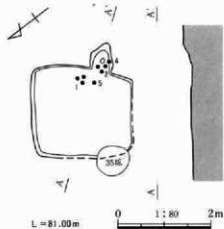
遺物 竈燃焼部内、火床から10cm離れて杯(3・4)が出土している。また、中央部床面からは須恵器高台付壺(7)、大甕(8)が重なり出土している。

(観P24 写PL23)

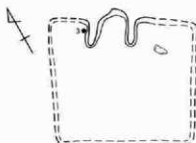


65図 A区34号住居とその出土遺物

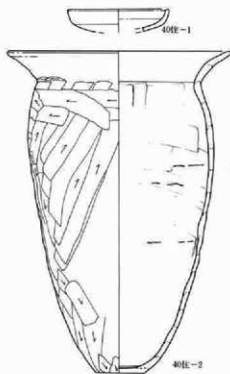
第2章 調査された遺構と遺物



66図 A区36号住居



0 1:80 2m



67図 A区40号住居とその出土遺物

A区36号住居

位置 F-35 写真 PL25

形状 南北に長軸を有し、整然とした四隅の横長矩形である。南・西壁は削平され、床面の範囲を確認しただけである。規模は南北2.13m、東西1.9mを測る。壁面は削平が著しく最も良好な北東隅で11cmを測った。

面積 4.0㎡ **方位** S68°30'E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側50cmに位置する。燃焼部は壁外に構築され、自然円礫が支脚として利用されている。煙道は一部が残存した。最終火床面には炭化物、灰層が認められ、これらは床面の南側半分の広範囲にあった。

遺物 竈燃焼部内から高台付椀(2)、土釜(4)が出土。焚口部前出土の羽釜(5)片は燃焼部出土破片と結合した。焚口左前からは椀(3)が出土している。(観P25 写PL25)

備考 南西隅は土壇により攪乱を受ける。

A区40号住居

位置 T-36

写真 PL28

形状 東西に長軸を有する矩形を呈すると考えられるが全体像は不明確である。

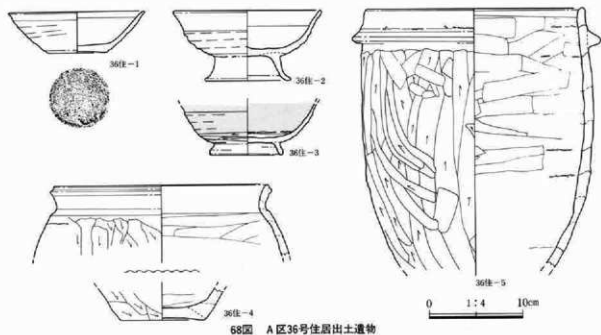
方位 N33°30'E

竈 壁際に構築され、燃焼部の奥壁は壁面を一部掘り込んでいる。煙道は削平されて残存しない。袖部も崩壊が進み基底部を残すのみである。火床面には炭化物、灰が多く認められた。

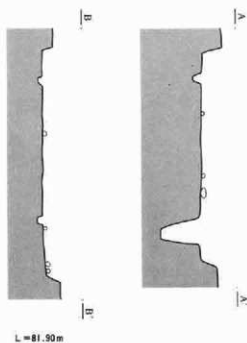
遺物 竈左袖部外面に接して壺(3)が出土している。

(観P27 写PL28)

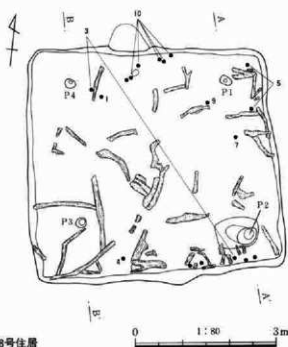
備考 重複する11・13号住居よりも後出で10・21号住居に先出すると思われる。



68図 A区36号住居出土遺物



69図 A区38号住居



A区38号住居

位置 a-30 写真 PL26

形状 東西に長軸をもつ正方形に近い矩形を呈する。西壁に比して東壁がやや短い。規模は東西5.3m、南北5.0mを測る。各隅は整然とするがやや丸味を持

つ。壁面は上方にやや開き、傾斜度75°を測る。

残存壁高は良好な南東隅で38cmあった。

面積 26.1m² **方位** N78°E(東西軸)

床面 北壁に向かって徐々に下がっている。P₁の西側に二箇所段差が認められたが、これは地層等により、ローム層中に断裂が生じた為と思われる。床面

第2章 調査された遺構と遺物

は踏み固められた部分は特になかった。

柱穴 3本を検出したがいずれも掘削深度が浅く、主柱穴とは考え難い。規模はP₁は径25×18cm、深さ17cm。P₂は、径20cm深さ12cm。P₃は径20cm、深さ8cmである。

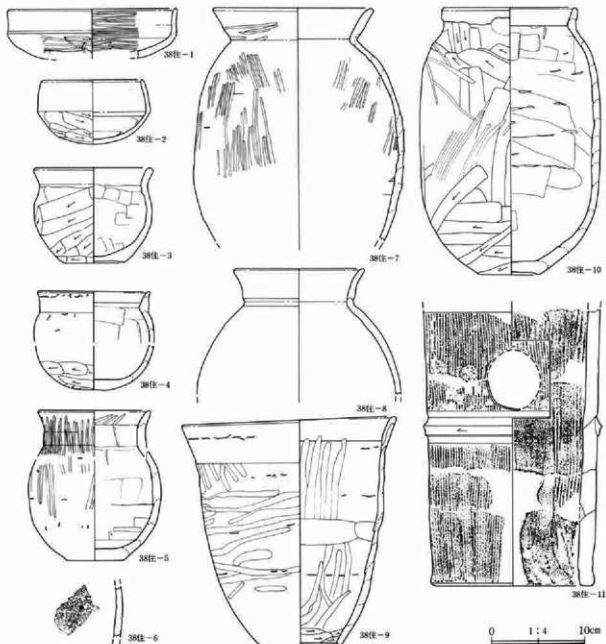
貯蔵穴 南東隅に位置する。四隅がやや丸味を帯びる矩形で径88×65cm、深さ56cmの規模である。東端は底面がピット状に更に24cm下がる。

遺物 甕(10)、甗(9)など完形に近い土器も出土し

たがいずれも床面から6cm程離れて出土している。また、床面から5cm程離れて炭化材が多く検出された。残存状態で径は5~10cm、長さは155cmを測るものもあった。このような状況から本住居は焼失住居と考えられ、これらの炭化材は建築部材と思われるが具体的な家屋構造を把握するまでには至らなかった。

(観P26 写PL27)

備考 壁溝、甗は検出されなかった。また、炉等の存在についても不明確である。



70図 A区38号住居出土遺物

B区1号住居

位置 F-37 写真 PL29

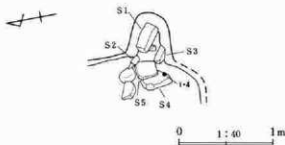
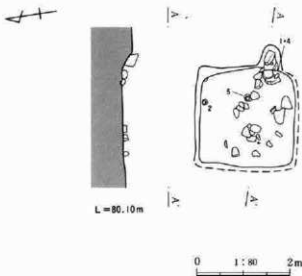
形状 北壁を除いて2号住居の埋没土を確認面とした為、壁面の検出に困難をきわめた。形状は床面の範囲から、約2.1mの方形に近い矩形とおもわれる。壁面は32~35cm残存していた。方位 S84°E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁の中央から南側へ35cmの所に位置する。燃烧部は壁外に構築されていたが、崩壊が著しかった。壁体は偏平な角礫(S1・3)を埋置し補強を図っており、焚口部両脇の(S1・2)は袖部の補強に、(S4)は(S2・3)にわたされていたと思われる。火床には炭化物が若干認められた。

遺物 北壁際の床面から高台付椀(2)が中央やや東壁よりの床面からやや離れて高台付椀(5)が出土した。(観P28 写PL29)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。また、床面から長軸15~30cmの円礫が多数出土している。埋没過程で混入したものか。



B区3号住居

位置 F-41 写真 PL30

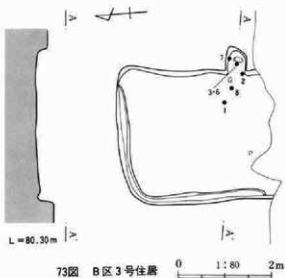
形状 南北に長軸を有する矩形を呈していたと思われるが南側の二隅は削平されている。北東隅は東側へ突出し、形状を乱している。東西2.85m、南北は3.23m以上を測る。方位 S82°E

床面 竈焚口部前はやや踏み固められていた。

竈 東壁中央からやや南に偏して付設されていたと思われる。燃烧部は壁外にあり、残存長50cm、幅35cmを測った。袖部の存在は確認できなかった。内部にある円礫は支脚の可能性はある。焚口部前には炭化物、灰の混在した薄い層が広がっていた。

壁溝 北壁から西壁中央にかけて検出されたが他は判然としなかった。幅は6~11cm、深さは最深でも3.5cmと浅い。

遺物 竈燃烧部から杯(2・3)、高台付椀(6・7)が、焚口前床面から羽釜(8)、杯(1)が出土している。

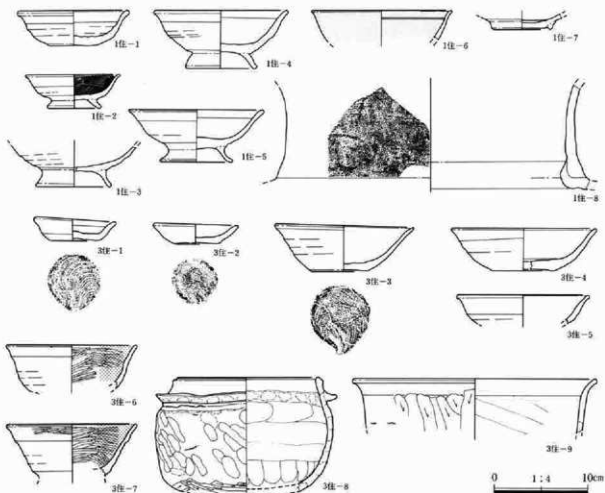


73図 B区3号住居

(観P30・31 写PL31)

備考 柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

第2章 調査された遺構と遺物



74図 B区1・3号住居出土遺物

B区2号住居

位置 F-37

写真 PL30

形状 東西に長軸を有する矩形を呈する。南東隅を欠くが各隅はやや丸味を帯びている。壁面は98°～106°の斜度でやや外傾する。残存高は良好な北東隅で79cm、他も50cm以上を測った。

面積 42.2㎡(推定) 方位 S73°50'E

床面 ほぼ平坦であり踏み固められていなかった。

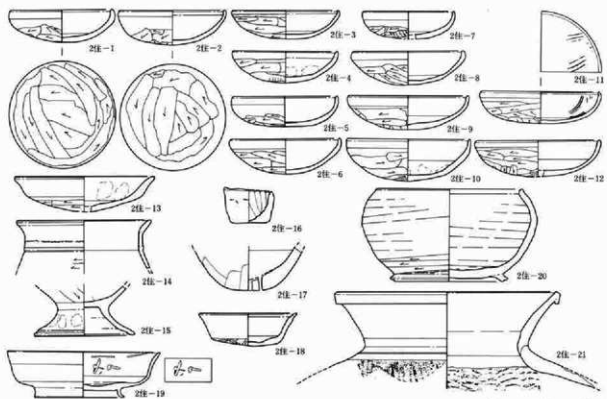
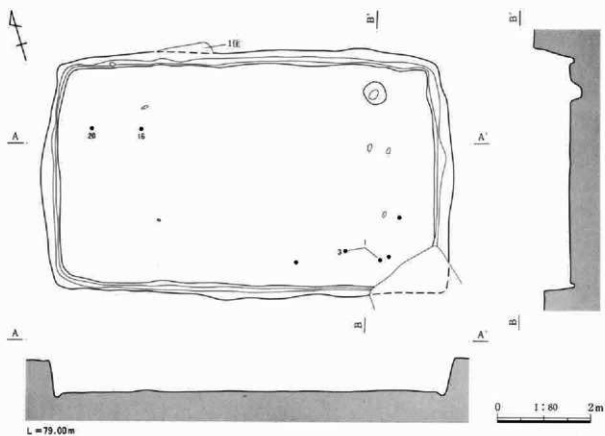
壁溝 全周していた。幅3～15cm、深さ5～9cmを測った。

遺物 床面からの出土遺物は少ない。南東隅から杯

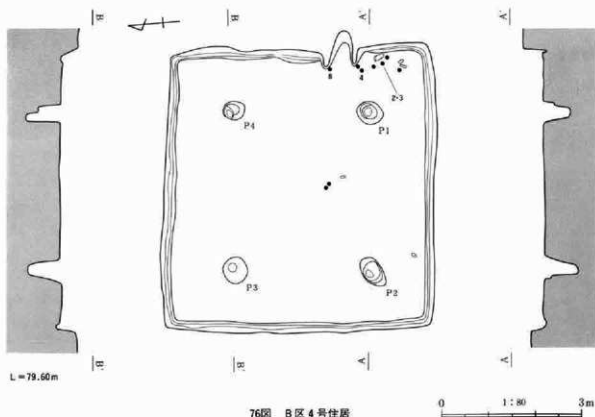
(1・3)が、北東隅から手捏ね土器(16)が出土している。埋没土からは杯が多く出土したが、そのうちの1つ(11)と須恵器高台付椀(19)は器面に調整具の痕跡があり意図的に施された可能性もある。また、床面には長軸15～20cm前後の自然円礫が散見された。

(観P29・30 写PL31)

備考 出土土器を検討すると竈が設置されるべき時期であるが検出されなかった。貯蔵穴、柱穴も不明である。北東隅には径48cm、深さ25cmの小ピットが存在する。



75図 B区2号住居とその出土遺物



76図 B区4号住居

B区4号住居

位置 G-41 写真 PL32

形状 東西にわずかに長い正方形に近い矩形を呈する。壁面の各辺とも整然とし、四隅は直角に近い。東西5.94m、南北5.72mを測る。壁面は一部崩落した部分を除いて斜度93~107°で残存高は23~37cmを測った。

面積 34.3㎡ **方位** S86°30'E

床面 多少の起伏があるがほぼ平坦である。

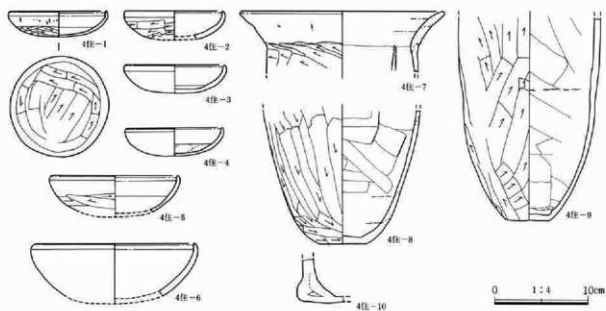
竈 東壁中央から南側へ94cmに位置する。壁際に設置され燃焼部の一部は壁外に延びる。奥壁は斜めに立ち上がって煙道に接続する。壁体は火熱を受け焼土化していた。住居内にロームと粘質土を材料として構築された袖部は崩壊が著しく基部が残存したのみである。焚口部から右袖部外側にかけて炭化物の層が広がっていた。

柱穴 主柱穴と考えられる4本を検出した。P₁を除いた3本は住居の対角線上をはずれ、P₂はやや北側、P₃、P₄はやや南側に位置する。掘り方は円筒形を呈しているがP₁、P₂は中位に狭いテラスをもつ。P₁は建て替えが考えられる。各柱穴の規模はP₁が径58×46cm、深さ54cm、P₂は径70×42cm、深さ49cm、P₃が径57×53cm、深さ68cm、P₄が径45×38cm、深さ49cmである。

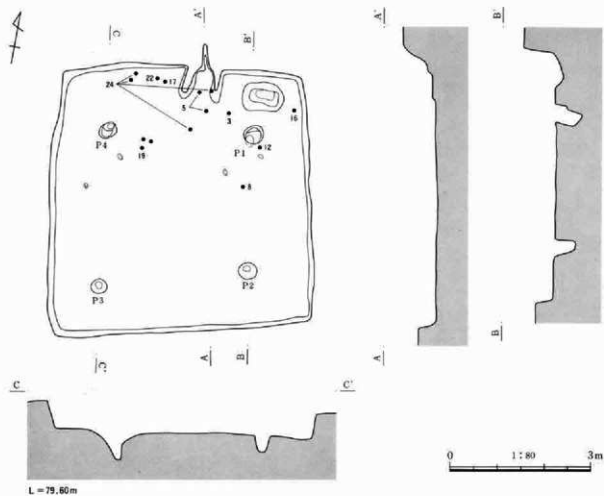
壁溝 竈部分を除いて全周する。幅4~8cm、深さ2~8cmを測る。整然としている。

遺物 竈右側の床面に集中していた。杯(2・3・4)と壺の破片である。円障3個も出土している。左袖部前からは壺(8)が出土しているが袖部の補強材の可能性もある。(観P33 写PL33)

備考 貯蔵穴は検出されなかった。



77图 B区4号住居出土遗物



78图 B区5号住居

B区5号住居

位置 G-43 写真 PL34

形状 東西5.50m、南北5.60mを測り、南北にやや長い矩形であるが、企画性に乏しく、各壁面の長さが異なり南西隅は鋭角を成す。壁面は垂直に近い立ち上がりで残存は平均30cm、良好な北東隅で37cmを測った。

面積 30.5㎡ 方位 N22°W

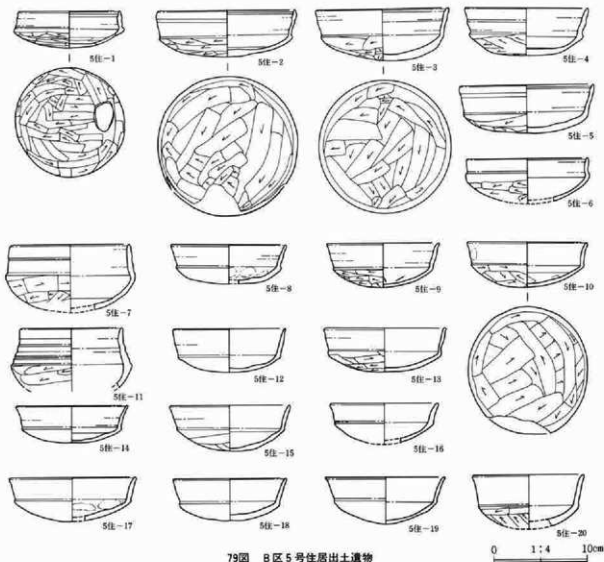
竈 北壁中央から東側にやや偏して設置されている。燃焼部は壁内に構築され、崩壊の進行した左右の袖部は基底部が残っていた。煙道は壁面を筒状に掘り込み強い傾斜で立ち上がっている。

貯蔵穴 竈右側、住居の北東隅に位置する。径88×60cmの隅丸矩形で深さ65cmを測った。

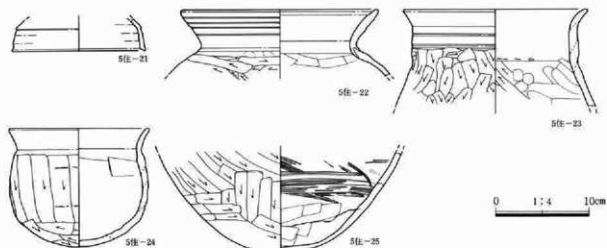
柱穴 主柱穴と思われる4本を検出した。住居の外形同様配置の企画性は乏しく、各柱穴間の心々距離は隔差が大きい。P₁は北側に傾いて掘削され、下半がオーバーハングしている。規模はP₁が径38×35cm、深さ42cm。P₂が径33cm、深さ35cm。P₃が径35cm、深さ40cm。P₄が径39cm、深さ57cmである。

遺物 竈周辺からの出土が目立つ。杯(3・17)、甕(22・24)がそれで、電燃焼部からは杯(5)の一部が出土し焚口部前出土の破片と接合した。また、埋没土中から多量の杯が出土している。

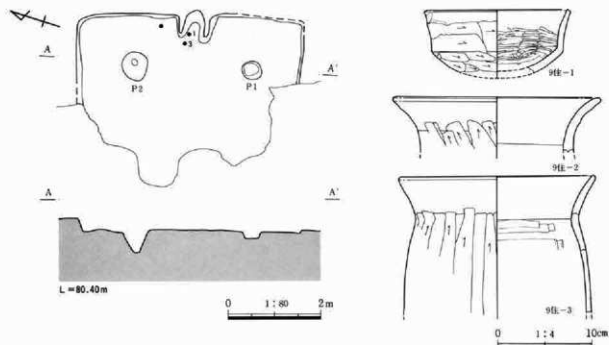
(観P34・35 写PL35)



79図 B区5号住居出土遺物



80図 B区5号住居出土遺物



81図 B区9号住居とその出土遺物

B区9号住居

位置 G-47 写真 PL33

形状 南北に長軸を有する矩形と思われるが東壁とその周辺を検出したに止まった。規模は南北4.35m、東西2m以上を測った。壁高は北東隅で23cmである。

方位 N76°E

竈 東壁のほぼ中央に位置し、壁際に構築されてい

た。左右の袖部が壁内に延びていたが削平が著しかった。

柱穴 東側の2本が検出された。P₁は径40×35cm、深さ11.5cmと浅かった。P₂は径55cm、深さ46cmを測り、円錐形の断面形状をなす。

遺物 電燃焼部内から杯(1)が出土した。

(観P36・37 写PL33)

備考 貯蔵穴、壁高は検出されなかった。

B区6号住居

位置 G-44 写真 PL36・37

形状 南北に長軸を有する矩形である。各壁面とも整然とした構築であるが、各辺の規模は少数ずつ差異が認められる。壁高は良好な北東隅で88cm、確認面が傾斜した南西隅で33cmであった。

面積 43.7㎡ 方位 第一次 S80°E
第二次 N10°E

床面 二基の竈前はやや踏み固められていた。

竈 当初、東壁に設置された(第一次)が、それを廃棄し、北壁に新設(第二次)している。第一次は東壁中央から南側50cmに位置する。燃焼部は壁内に構築され奥壁が住居壁面を掘削している。煙道は筒状で垂直に近い角度で立ち上がっている。火床面の掘り方は住居床面より6cm程低い。第二次は北壁の中央から東側へ85cmに位置する。第一次同様壁際に構築され煙道は壁面を69°の傾斜で掘削して設置されて

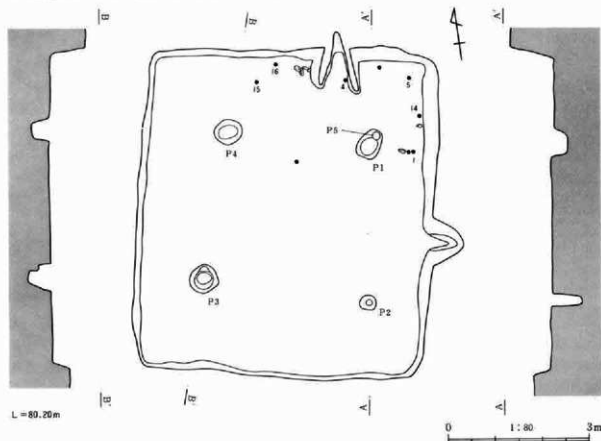
いる。燃焼部は壁内にあり、ローム土を構築材とした両側の袖が伸びていた。焚口部の幅は55cmを測った。

柱穴 主柱穴4本を検出した。設置位置は住居の外形とは合致しない。P₁は平面形に建てかえ、あるいは補助材痕跡(P₅)が認められる。規模はP₁が径50cm、深さ30cm。P₂が径35×30cm、深さ63cm。P₃が径60cm、深さ45cm。P₄が径60×50cm、深さ36cm。P₅が径3cm、深さ13cmである。

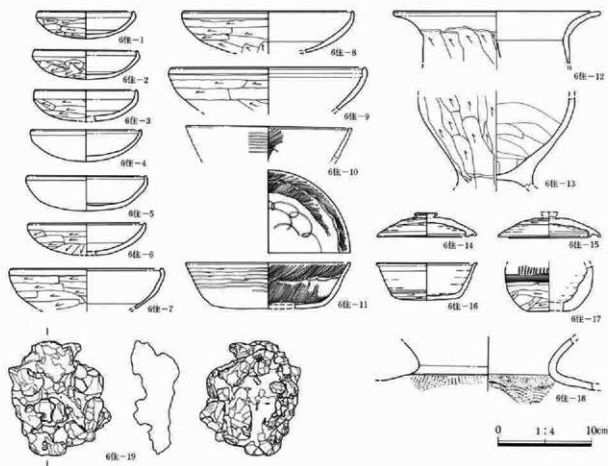
遺物 竈燃焼部内から杯(4)が出土した。床面直上からの遺物としては、北東隅の東壁際から杯(1・5)、須恵器蓋(14)が、竈左側壁際から須恵器杯(16)が出土している。須恵器蓋(15)は床面から3cm離れ逆転した状態で出土した。埋没土から杯(11)、鉄滓(重量434.5g)が出土している。

(観P31・32 写PL37)

備考 貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。



82図 B区6号住居



83図 B区6号住居出土遺物

B区7号住居

位置 F-45

形状 竈設置以南の壁面は削平されており住居全体の形状が把握できない。北壁も下端のみの確認であった。東西3.83m、南北3.0m以上の矩形を呈していたと考えられる。

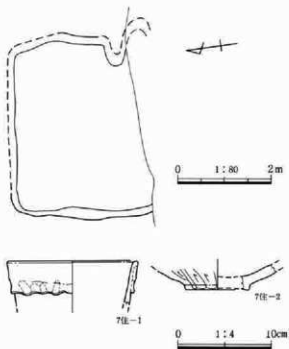
方位 N85°W

床面 西側に緩やかに下がる。

竈 東壁に付設されていたと思われるが詳細は不明である。炭化物、焼土を散見した。

遺物 床面からの出土遺物は認められなかった。埋没土からの出土量も少ない。(観P28)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。遺物から構築時期を決定することは困難である。



84図 B区7号住居とその出土遺物

B区8号住居

位置 G-46 写真 PL33

形状 南北3.28m、東西3.19mを測る矩形である。北壁と比較して南壁が長く南西隅は鋭角を成す。また、東壁は竈の左右でわずかに食い違っている。壁面は33~46cmの残存高を測り垂直に近い立ち上がり呈する。

面積 10.3m² 方位 N81°E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁中央から南側へ16cmに位置する。壁際に設

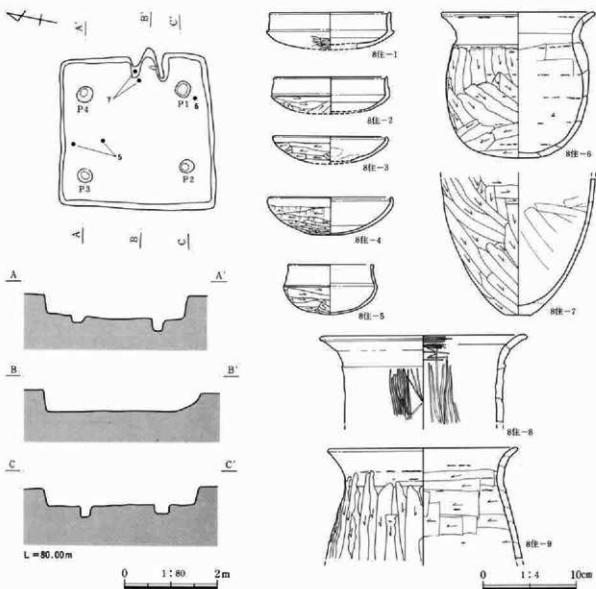
置され、燃焼部奥壁は住居の壁面を一部掘り込んで斜めに立ち上がる。袖部はロームと粘質土を構築材としているが左袖部は崩壊が著しかった。

柱穴 4本検出したがいずれも掘削深度が浅い。規模はP₁が径32×30cm、深さ17cm、P₂が径30×25cm、深さ13.5cm、P₃が径31×28cm、深さ25cm、P₄が径30cm、深さ21cmであった。

遺物 竈焚口部、左袖部前から竈の下半部(7)が、南壁、南東隅近くから壺(6)が出土している。

(観P36 写PL33)

備考 貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。



85図 B区8号住居とその出土遺物

C区6号住居

位置 t-73 写真 PL40

形状 北側は5号住居との重複、南西部分は土壇状の擾乱の為、全体の形状は不明確である。規模は南北5.22m、東西4.95m以上を測る。南東隅は鈍角であるが整然としている。壁面は21~27cmの残存であった。 方位 N69°30'E

埋没土 軽石、炭化物粒、焼土粒を含む黑色土である。

床面 竈手前はわずかに踏み固められていた。

竈 東壁中央から南側へ80cmの所に位置する。燃焼部は住居の壁際に構築され、火床は徐々に上がり斜

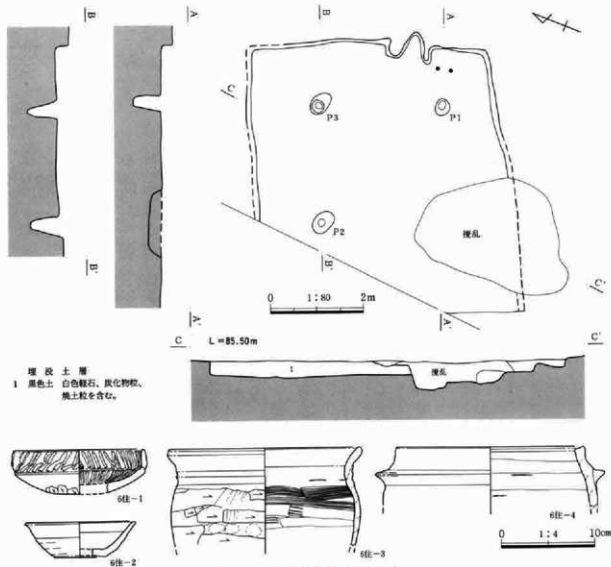
めの奥壁から煙道へと続いてゆく。炭化物の薄い層が認められた。袖部は両側とも40cm程残存していたが崩壊が著しく、特に右袖部は覆せている。

柱穴 南西隅を除く3本を検出、主柱穴と思われる。P₁は径35×32cm、深さ57cmの円筒形を呈する。P₂は径55×35cm、深さ59cm、P₃は径50×35cm、深さ63cmを測った。

遺物 床面からの出土遺物は少ない。竈右前から小破片を出土したのみである。埋没土中からは杯(1)の他に平安時代の土器片が多かった。

(観P40 写PL41)

備考 貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。5号住居と重複関係にある。



86図 C区6号住居とその出土遺物

C区1号住居

位置 B'-73 写真 PL38

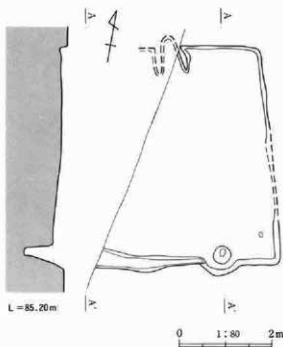
形状 南東・北東の二隅を含む東側片程を検出した。南北4.58m、東西3.9m以上を測る矩形を呈していた。壁面は垂直に近い立ち上がりで、残存の良好な南東隅で23cmを測った。 **方位** N11°E

埋没土 黒褐色土のほぼ一層から成る。炭化物粒・焼土粒の他に浅間Cを含む。

竈 北壁に設置されていた。燃焼部は壁内にあり、右側袖部が残存していた。

遺物 床面からの出土は無い。埋没土中から杯(2)や壺の出土をみている。(観P38 写PL39)

備考 東壁の中央部は1・2号土塚により攪乱を受けている。また、南側で2号住居と重複関係にあるが本住居が先出と考えられる。



87図 C区1号住居

C区2号住居

位置 B'-73 写真 PL38

形状 東西に長軸を有する矩形を呈していたと思われる。残存長は東西5.70m、南北5.30mである。

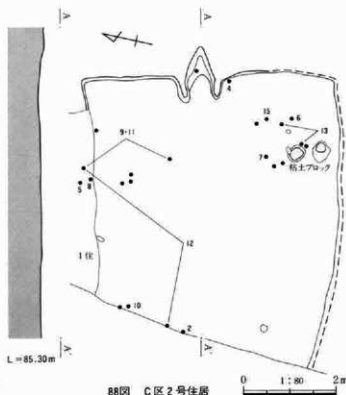
埋没土 黒褐色土層で炭化物や焼土を多く混入している。 **方位** N75°E

床面 北西の片程はやや踏み固められ、小さな起伏をもっていた。

竈 東壁、東北隅から南側2.45mに位置する。燃焼部は壁内にあり壁体は火熱を受け焼土化していた。左右の袖部は削平が著しかった。

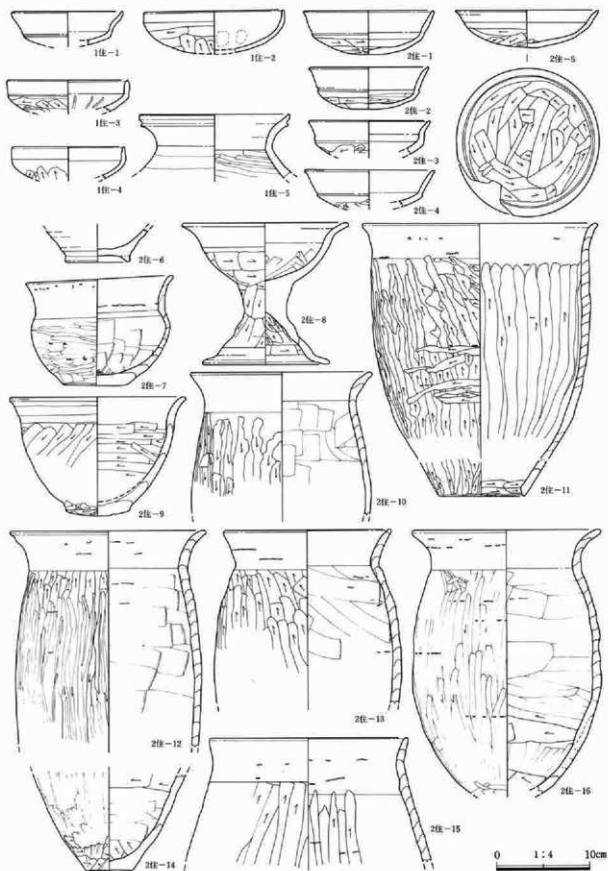
遺物 竈右前に破片の状態で多く出土している。これらと共に径40cmの粒土ブロック二箇所に認められた。竈左前からは甕(11)が出土した。(観P38・39 写PL39)

備考 高杯(8)の出土地点は北壁が真近に想定されると共に1号住居との重複部分でもある。ここに径48cm、深さ59.5cmのピットを検出した。そして埋没土中から倒立状態の甕(11)、鉢(9)、杯(2)が出土している。甕(11)



88図 C区2号住居

は本住居の床面から接合破片が出土している。ピットの所属、性格とも不明確な点が多い。



89图 C区1·2号住居出土遗物

C区4号住居

位置 V-73 写真 PL39

形状 東側の約角を検出した。西壁及び北壁の大部分は調査区域外に延びる。東壁も南半分は攪乱を受ける。規模は南北5.33m、東西4.75m以上である。壁面は南東隅で33cm、北東隅で11cmを測った。

床面 やや踏み固められていたが南北方向に溝状の攪乱が3条入り込み遺存状態は不良であった。

柱穴 南東隅、南壁から1.3mの位置に2本重複して検出した。他の状況が不明であるが主柱穴の1本で

建て替えの可能が推定される。南側のP₁が径41cm、深さ45cm。P₂が径28cm、深さ34cmであった。

遺物 床面からの出土品は無い。埋没土中から手握土器(1)や高杯が出土している。壁際の三箇所から円礫が出土した。(観P39 写PL39)

備考 竈の所在は不明である。貯蔵穴、壁溝も検出されなかった。南壁中央は15号土坑による攪乱を受けている。

C区5号住居

位置 u-73 写真 PL40

形状 壁面は北壁と東壁の一部のみの確認であるが正方形に近い隅丸矩形を呈していたと思われる。床面の規模は南北4.35m、東西4.25mを測る。

面積 19.2m(推定) 方位 S55°30'W

床面 特に踏み固められていなかった。

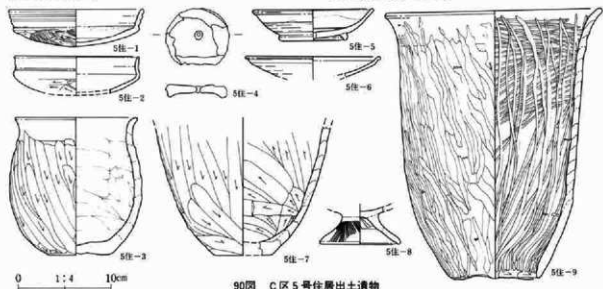
竈 西壁中央からやや南側に位置すると思われる。燃焼部は壁内にあり、細い煙道に続く。左袖部はほとんど崩壊して流れ出していた。

柱穴 北側の2本を検出した。北西のP₁は径45×35cmで二段掘りの断面形状である。深さは70cmと59cmである。建て替えの可能性がある。P₂は径38×35cm、深さ42cmを測る。

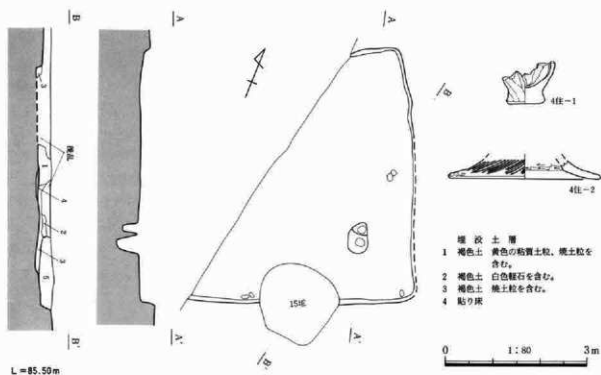
貯蔵穴 竈左側のビットは柱穴としてはやや不自然な位置にあり貯蔵穴と思われる。径75×46cmの楕円形に近い形状で深さ43.5cmを測った。東側は緩やかな土立ち上がりである。下層から甕(9)が横倒して出土している。

遺物 貯蔵穴出土の甕(9)の他に床面からは、東壁際中央近くから杯(1)が、貯蔵穴の東側からは甕が破片の状態で、また、高杯(8)が出土している。また、埋没土中から平安時代の土器が多く出土し、その中に底部破片に穿孔した土器(4)が含まれていた。(観P37 写PL41)

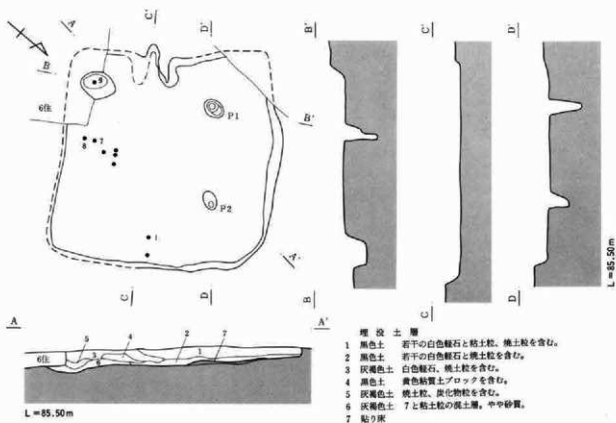
備考 南西隅で6号住居と重複するが土層の状態から本住居が前出である。



90図 C区5号住居出土遺物



91図 C区4号住居とその出土遺物



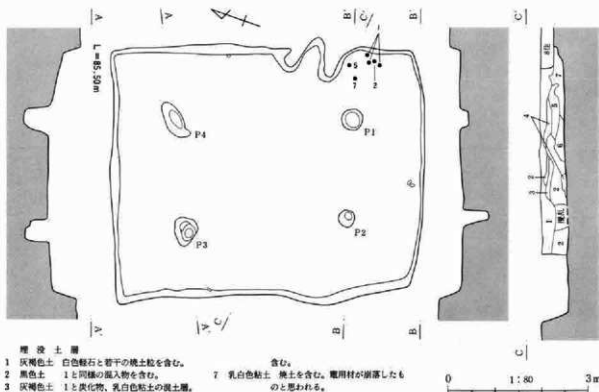
92図 C区5号住居

C区7号住居

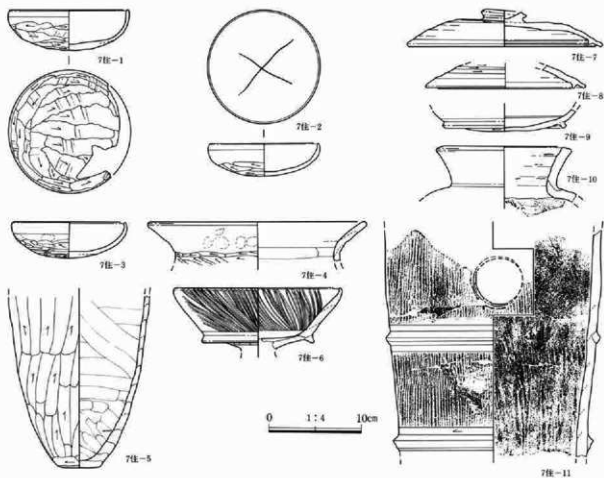
位置 s-74 **写真** PL40
形状 南北に長軸を有する横長矩形を呈する。南北6.64m、東西5.30mを測り、西壁がやや乱れ、南壁が小さく内彎するが四隅の整然とした形状である。
面積 34.2㎡ **方位** N86°30'E
埋没土 7層に分けられる。浅間Cを含む黒色土をベースに焼土粒、炭化物が混入する。
竈 東壁中央から南側へ58cmに位置する。燃焼部は壁内に粘質の灰白色土を用いて構築されたが崩壊し、手前に広く流れ出していた。
柱穴 4本検出したが位置、形状とも企画性に乏しい。
遺物 竈右側に集中する。杯(1)と(2)は入れ子状に重なっていた。右袖部近くからは甕(5)、須恵器蓋(7)の破片が出土した。(観P40・41 写PL41)
備考 8号住居、9号住居と重複関係にある。本住居は二つの住居よりも先出である。

C区8号住居

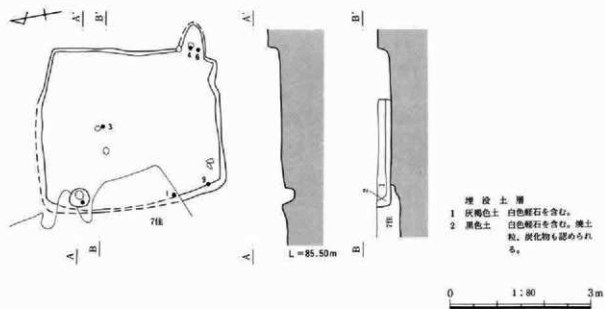
位置 s-74 **写真** PL42
形状 南北に長軸を有する矩形を呈している。北壁と南東隅の壁面は一部乱れている。また、西壁、7号住居との重複部分も壁面の検出が困難であった。規模は東西3.2m、南北3.8mと思われる。壁面の残高は14~22cmである。**面積** 11.4㎡(推定)
埋没土 黒色味を帯びる暗褐色土が2層堆積していた。**方位** S86°E
竈 南東隅に近接して位置する。燃焼部は壁外に構築されている。中央には自然礫が据えられており支脚と思われる。
遺物 竈燃焼部内から高台付椀の破片(4・6)が出土した。床面中央やや北よりからは高台付椀(3)が出土している。墨書の記された杯(1)は西壁際、床面から8cm離れての出土である。埋没土中からは円筒埴輪(13)、板状鉄製品(12)が出土した。(観P41・42 写PL43)
備考 本住居は7号住居に後出して構築されている。



93図 C区7号住居

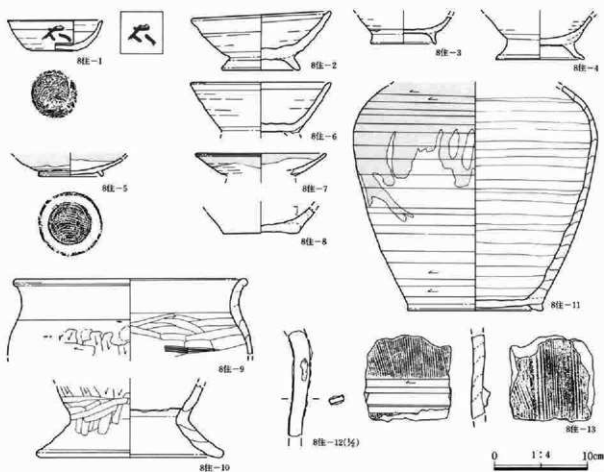


94図 C区7号住居出土遺物

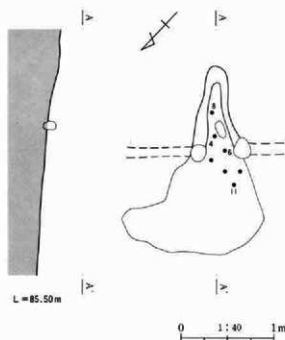


95図 C区8号住居

第2章 調査された遺構と遺物



96図 C区8号住居出土遺物



97図 C区9号住居

C区9号住居

位置 r-74

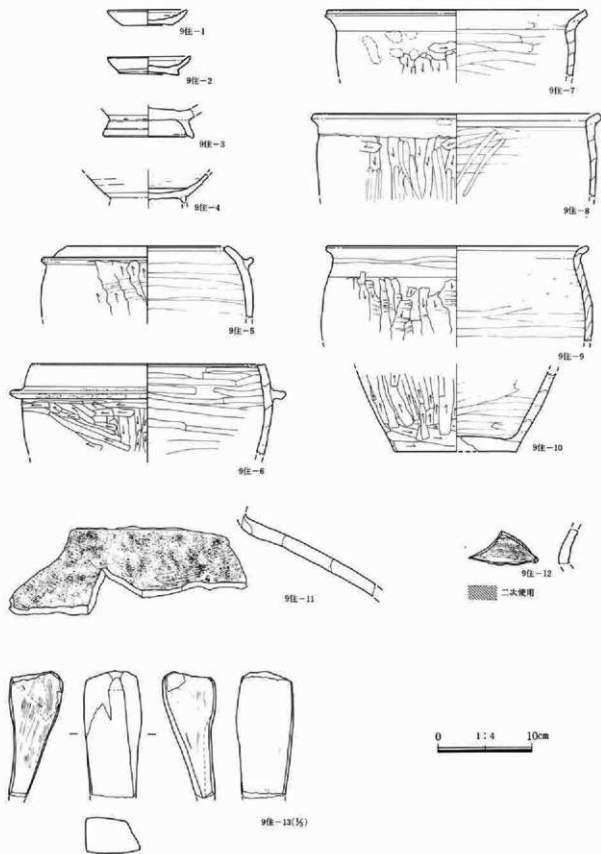
形状 削平の進行及び確認面が7号住居の埋没土であった為、竈周辺の検出に止まった。

竈 燃焼部は狭く、焚口の両側に自然円礫を据え袖部とするものである。また、燃焼部中の礫は支脚と思われる。燃焼部は弱い傾斜をもって煙道に続いている。

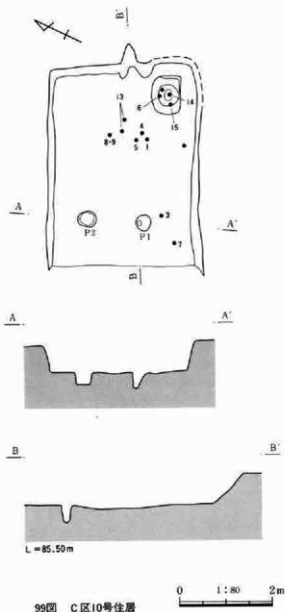
遺物 燃焼部、焚口前から小破片が出土している。高台付椀(4)、羽釜(6)、土釜(8)が見られた。埋没土から鉄滓(重量29.1g)、砥石(13)が出土した。

(観P42・43 写PL43)

第1節 住 居



98圖 C区9号住居出土遺物



C区10号住居

位置 q-73 写真 PL44・45

形状 東西に長軸を有する矩形を呈する。西壁は擾乱を受け未検出であるが各壁面四隅とも整然としている。南東隅で11号住居と重複している。規模は南北2.5m、東西4.5m以上を測る。壁面はやや外傾するが残高54~65cmと良好であった。**方位** N62°E
竈 東壁中央から南側へ17cmの所に位置する。燃焼部は壁際に構築され壁内に袖部が延びていたと思われるが基部を除いて崩壊が著しかった。煙道は緩やかに傾斜している。

貯蔵穴 竈の右側、南東隅にある。上端は80×62cmの矩形で、中位に稜をもち下端は25×17cmの円形を呈している。深さ64cmを測り、上端から甕(14・15)を、落ち際から杯(6)が検出された。

柱穴 2本検出されたが位置、形状にやや不自然な点がある。規模はP₁が径32×30cm、深さ33.5cm、P₂は径40×32cm、深さ26.5cmである。

遺物 貯蔵穴の他に、床面中央の竈に寄った位置、南壁際、P₁周辺などから杯、甕、壺が出土したがいずれも床面から3~8cm離れていた。

(観P43・44 写PL45)

備考 11号住居との新旧関係は確認できなかった。出土土器の対比からは大きな時間差は認められない。

C区18号住居

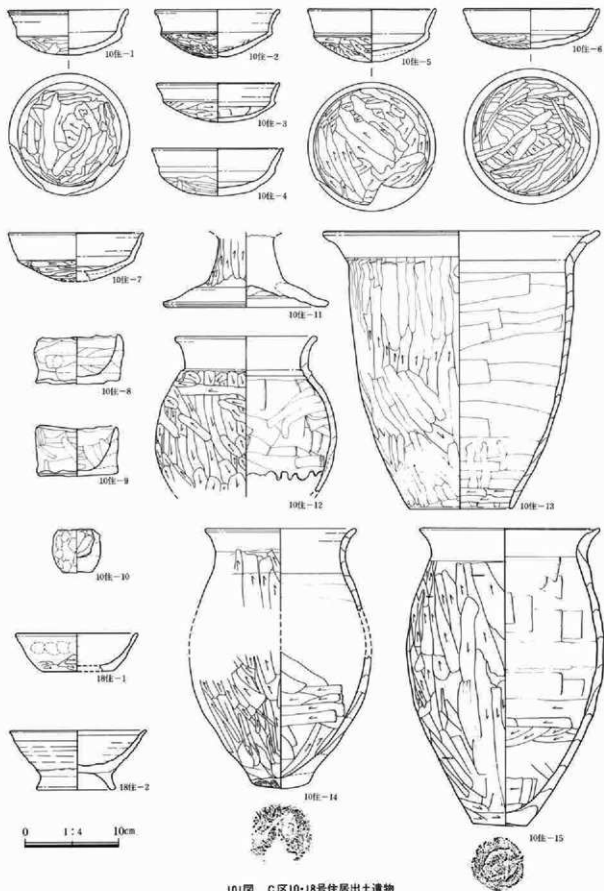
位置 r-78

形状 21号住居の埋没土を確認面としたため検出に困難を極め竈燃焼部の一部を検出したに止まった。左側壁体の自然礫は袖石の可能性もある。

遺物 燃焼部埋没土中から杯(1)、高台付壺(2)が出土した。

(観P51 写PL53)





101图 C区10·18号住居出土遗物

C区11号住居

位置 q-74

写真 PL46

形状 10・12号住居と重複、部分的に壁面の検出が不可能であった。正方形に近い矩形であるが北東、南西の隅が鈍角となり歪んだ形状である。壁面の残存は良好な北西隅で62cmを測った。

面積 28.5m²(推定)

方位 N77°E

床面 特に踏み固められていないが竈焚口部前がややしまっていた。

竈 東壁の中央、やや南側に位置する。壁際に構築され、燃焼部の左右の袖部が壁内に延びている。煙道は壁面を掘り込み73°の傾斜で立ち上がる。

柱穴 主柱穴と思われる4本を検出した。住居の平面形同様、企画性に欠け設置位置が歪んでいる。各柱穴とも平面形はやや崩れるが断面形は円筒形で良好であった。規模はP₁は径35×30cm、深さ77cm、P₂は径36×32cm、深さ62cm、P₃は径38×36cm、深さ61cm、P₄径39×30cm、深さ64cmを測った。

遺物 出土遺物は竈周辺の床面に集中している。右袖隙から甕(25)、甗(27)が出土、竈左側、東壁隙では杯(3・4・6・16・18)がまとまって、やや離れて杯(8)が出土している。P₁の際からは須恵器高杯(22)の脚部破片が横転して検出された。また、埋没土中から手握ね土器(15・17)が出土している。

(観P45～47 写PL47)

備考 12号住居と重複する。

C区12号住居

位置 P-47

写真 PL48

形状 11号住居と重複する為に東壁の状況把握が不十分であった。南北に長軸を有する矩形を呈する。四隅はやや丸味を帯びるが企画性は乏しい。確認した規模は南北3.35m、東西3.1mである。残存壁高は11号住居との重複部分で4～8cm、南西隅で48cmを測った。

面積 9.2m²

方位 N67°E

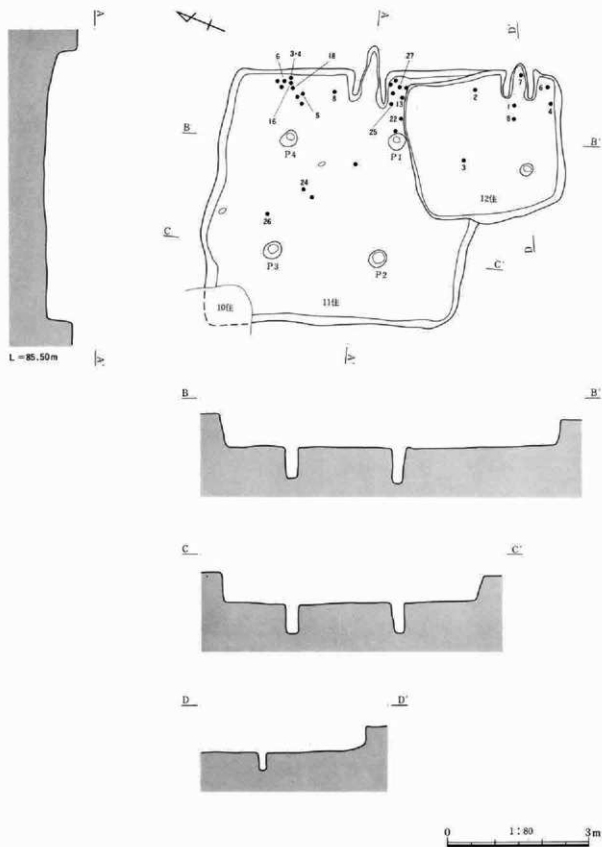
竈 東壁中央から南側へ86cmの所に位置している。燃焼部は壁内にあり、灰色の粘質土を構築材とする両側の袖部が壁内に残存していた。煙道は11号住居同様、住居壁面を掘り込み、急傾斜で立ち上がる。火床に灰、炭化物が薄く堆積しており、中央やや奥側に土製支脚(7)が横倒していた。

柱穴 南西側から1本検出された。規模は径27×23cm、深さ34cmを測った。

遺物 竈周辺から出土した。杯(1)は口縁部を下に伏せられたような状態で、甕(4・6)は右袖外側、住居の壁隙から出土した。樽型甗(8)は割れ口を上にしていた。杯(2)は床面直上から、甕(3)は4cm離れた出土であるが11号住居に帰属する可能性が高い。

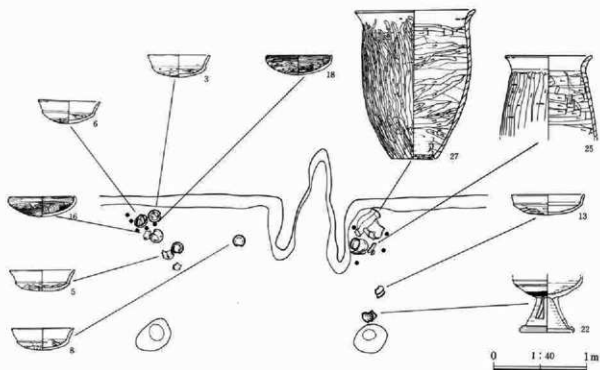
(観P47 写PL49)

備考 11号住居と重複するが築造の前後関係は本住居が先出と考えられる。

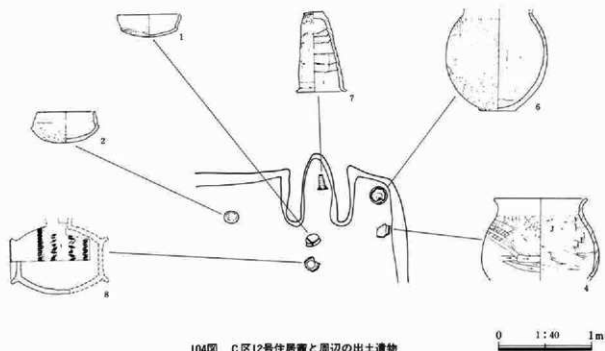


102图 C区11・12号住居

第2章 調査された遺構と遺物

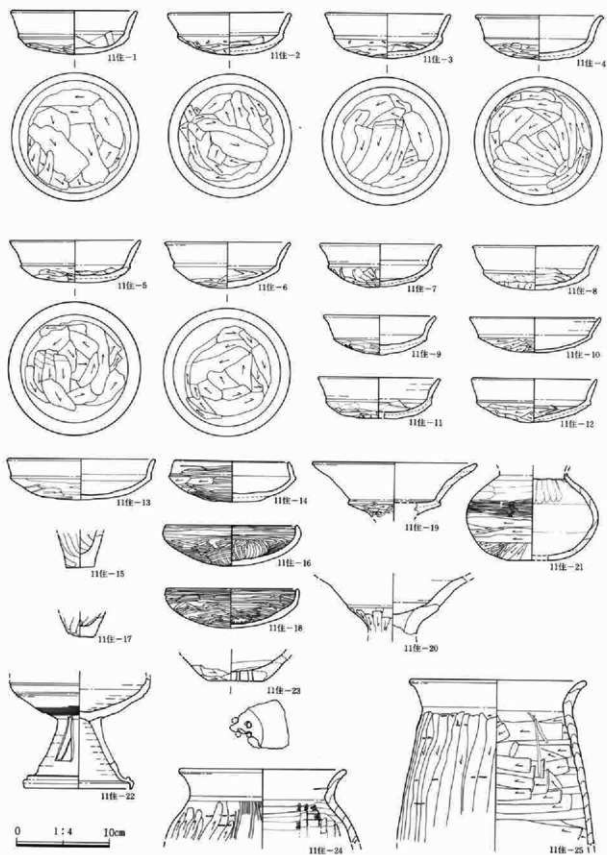


103図 C区11号住居遺構と周辺の出土遺物



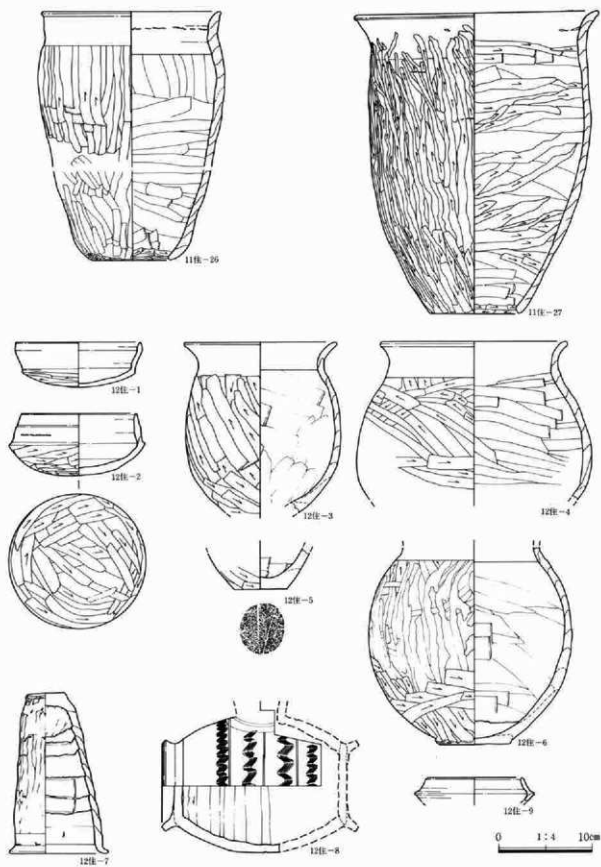
104図 C区12号住居遺構と周辺の出土遺物

第1節 住 居



105图 C区11号住居出土遗物

第2章 調査された遺構と遺物



106図 C区11・12号住居出土遺物

C区13号住居

位置 z-74 写真 PL48

形状 東西に長軸を有する矩形である。南西隅を中心とした北・西壁の半分は未検出である。各隅はやや丸味を有していたと思われる。規模は東西4.9m、南北3.7mを測る。壁面は各隅で崩れ、やや外傾するが垂直に近い形状で23~46cmの残高を測る。

方位 N23°30'W **面積** 16.8㎡(推定)

床面 全体にやや踏み固められている。

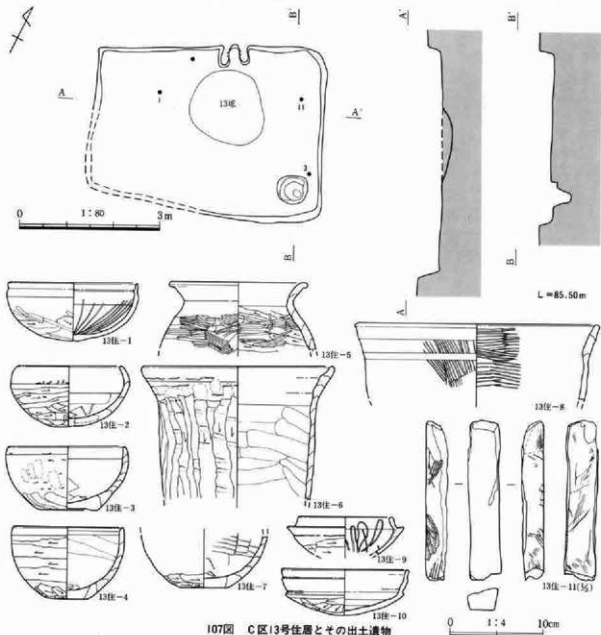
竈 北壁中央から東側へ47cmの所に位置する。壁際

に構築され、煙道は全て削平されている。燃焼部は壁内に粘質土から成る袖部が残存していた。火床には炭化物が薄く残っていた。

貯蔵穴 南東隅にあるピットがこれにあたると思われる。径61×58cm、深さ38cmの不整形円形である。中位に椀をもち漏斗状を呈する。

遺物 竈左前の床面から杯(1)、貯蔵穴際から椀(3)が出土した。北東隅の床面近くから砥石(11)が出土している。(観P48 写PL49)

備考 竈手前に13号土壇がある。住居との関係は把握できなかったが床下土壇の可能性もある。



107図 C区13号住居とその出土遺物

C区14号住居

位置 r-75 写真 PL50

形状 15号住居との重複により、南東隅は欠失する。東壁が短かく北壁が内側に入り込んだ形となっている。規模は東西5.55m、南北5.25mを測る。壁高は29~35cmを測る。方位 S60°30'W

竈 南西隅近くに位置する。燃焼部は壁際に位置し一部住居壁外にも及んでいる。袖部は崩壊が著しく

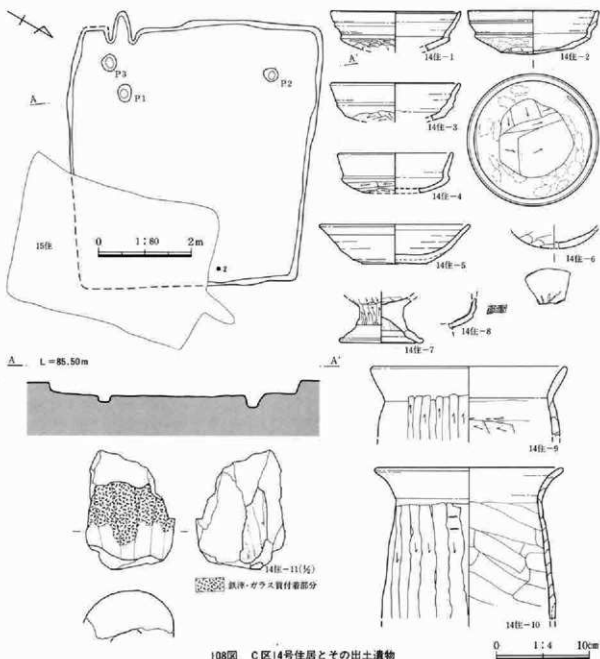
構築土が流れ出している。

柱穴 西壁近くに3本のピットが検出された。いずれも浅く柱穴の掘り方としてはやや不十分である。P₁は径30cm、深さ13cm、P₂は径29cm、深さ26cm、P₃は径33×31cm、深さ14cmである。

遺物 出土遺物は少量である。東壁際中央、床面から7cm離れて杯(2)が出土した。

(観P48・49 写PL51)

備考 15号住居との新旧関係は不明である。



108図 C区14号住居とその出土遺物

C区15号住居

位置 r-76 写真 PL50

形状 南北に長軸を有する矩形である。壁面は各辺とも歪みが著しく、特に南西隅は突出している。規模は南北4.15m、東西3.03mである。削平が進み電左側は範囲のみの確認である。壁面の残存は22~34cm、14号住居との重複部分では4~6cmである。

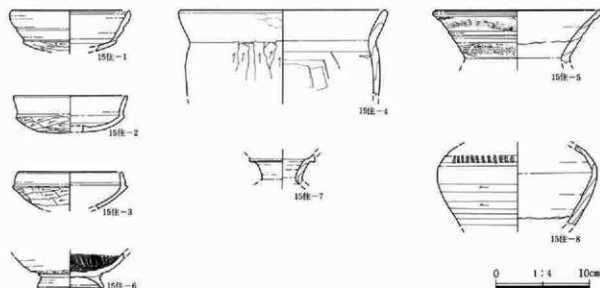
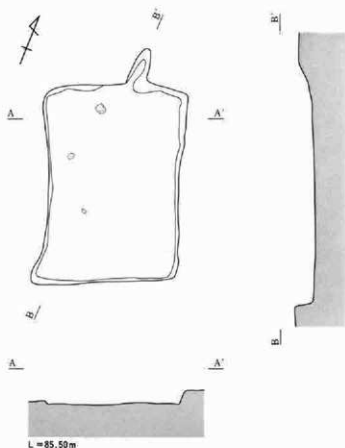
面積 12.3㎡ 方位 N13°W

電 形状は判然としなかった。燃焼部は壁際に構築され、緩傾斜の煙道へ続いたと思われる。軸線は住居の軸線から大きく東側に振れ、N8°Eの方位である。

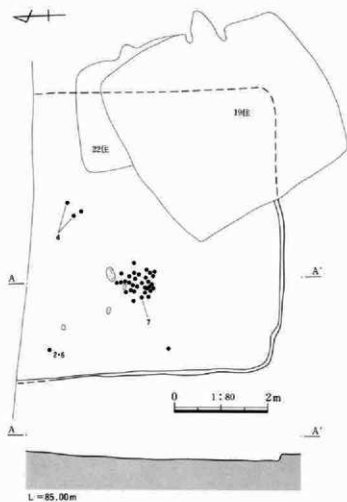
遺物 床面からの出土遺物は無く、埋没土中から杯(1・2)などが出土している。

(観P49・50 写PL51)

備考 西側部分が14号住居と重複する。



109図 C区15号住居とその出土遺物



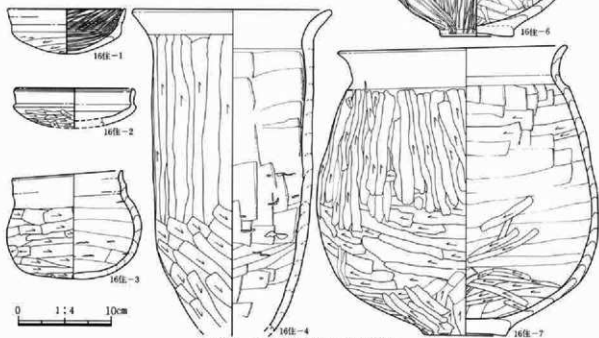
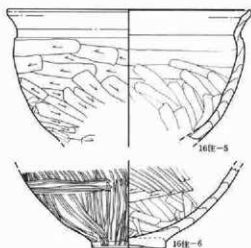
C区16号住居

位置 r-77

形状 北側は調査区域外に及ぶ。東側は19・20号住居との重複の為削平されている。床面の範囲から東西6.04m、南北5.45m以上を測ると思われる。

遺物 残存する床面の中央やや西壁近くに竈(7)が小破片になり広がっていた。また、北側調査区域境近くからは竈(4)が出土している。(腰P50・51 写PL51)

備考 竈は検出されなかった。本住居は19・22・30号住居に先出すると思われる。



110図 C区16号住居とその出土遺物

C区17号住居

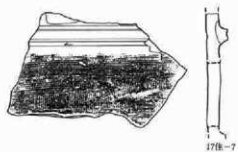
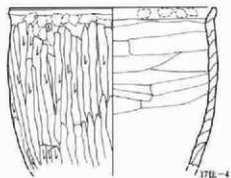
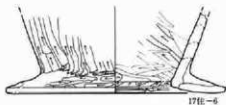
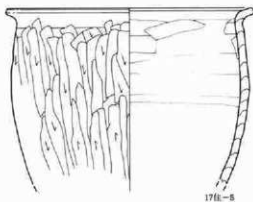
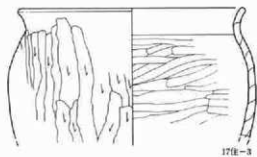
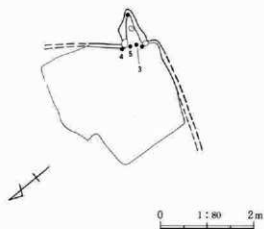
位置 r-74 写真 PL50

形状 竈周辺の壁面と床面の一部を検出した。

竈 燃烧部は壁外にあり、焚口部の両脇には自然円礫を埋置し袖部を補強している。燃烧部奥には小礫が支脚として据えられている。焚口部には炭化物が広がる。長軸の方位はS60°Wである。

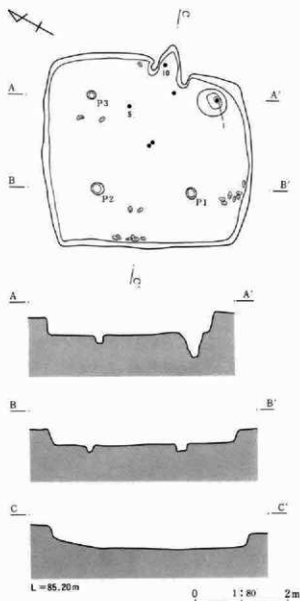
遺物 焚口部から3個体分の土釜の破片(3~5)が出土している。また、埋没土中に円筒埴輪(7)の破片が認められた。

(観P51 写PL51)

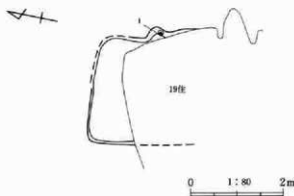


0 1:4 10cm

111図 C区17号住居とその出土遺物



112図 C区19号住居



113図 C区22号住居

C区19号住居

位置 r-78 写真 PL52・53

形状 南北に長軸を有する矩形を呈するが、各壁面とも丸く弧状に張り出す。また、南壁と北壁の長さが異なることにより東壁は竈の左右で大きく食い違ふ。南北の最大長は4.36m、東西は北壁で3.9m、南壁で3.3mを測り、最大長は4.05mである。壁面は全体にやや外方に開く断面形で残存高は24～52cmをはかった。

面積 16.2m² **方位** N71'E

竈 東壁中央から南側に25cmの所に位置する。燃焼部は壁際にあり、灰色の粘質土を用いた左右の袖部が残存していた。使用最終時には炭化物、灰が堆積し、火床は斜めに立ち上がって煙道に続いていた。燃焼部中央やや左袖寄りからは竈(10)が倒立して出土した。支脚として二次利用した可能性がある。

貯蔵穴 竈右側、南東隅に位置する。南北に長軸をもち径62×56cm、深さ53cmを測る円形状を呈していた。

柱穴 3本検出したが掘削深度がやや浅い。規模はP₁が径20cm、深さ15cm、P₂は径25cm、深さ15cm、P₃は径17×15cm、深さ12cmを測った。

遺物 床面からの出土土器は少ない。貯蔵穴の底面から杯(1)が出土した。床面の三箇所から菰編み石状の自然円礫が出土している。南壁、南西隅近くから7個、西壁際から6個、少し離れて2個、P₂の際から2個が検出された。(観P54 写PL53)

C区22号住居

位置 r-78 方位 S85'E

形状 19号住居の埋没土を確認面とした部分が多く一部分の検出に止まった。東西2.25mを測った。

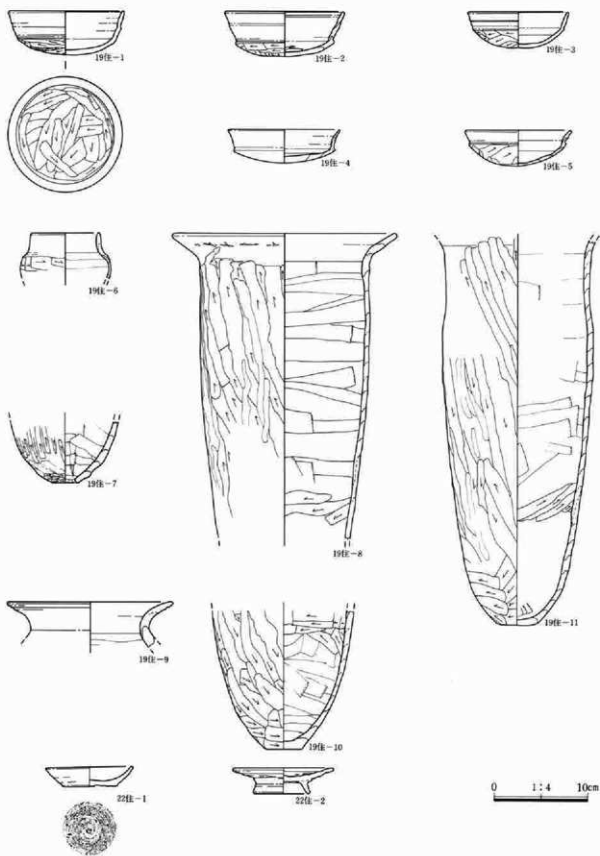
竈 東壁に構築されており、燃焼部は壁外にあったと思われるが大部分が削平されていた。

遺物 燃焼部から杯(1)が出土している。

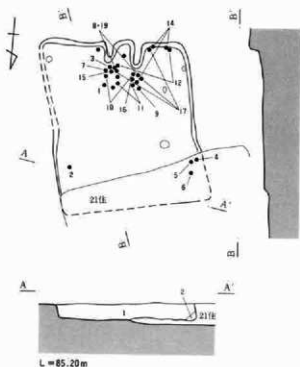
(観P55 写PL53)

備考 19号住居に先出する。

第1節 住 居



114图 C区19·22号住居出土遗物



C区20号住居

位置 r-79 写真 PL54

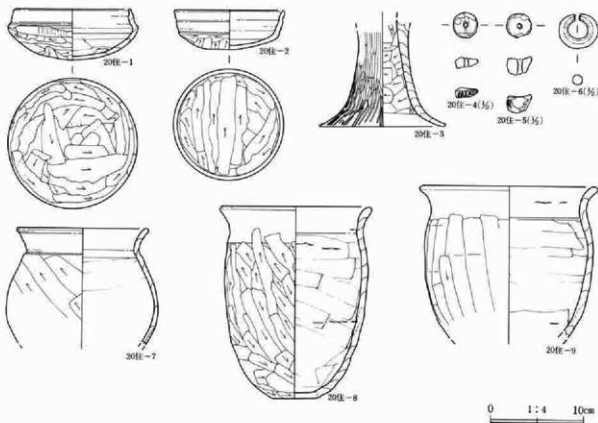
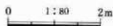
形状 21号住居と重複し、北壁が検出できなかったため全体の形状は把握できなかった。南東隅は鋭角で全体の形状を歪めている。壁面は12~27cmの残存であった。

竈 集中する土器の出土状況と合わせ、竈の形状は判然としない点が多い。南壁中央の壁際に構築されていたと思われ煙道部は削平されていたか。袖部の崩壊は著しい。

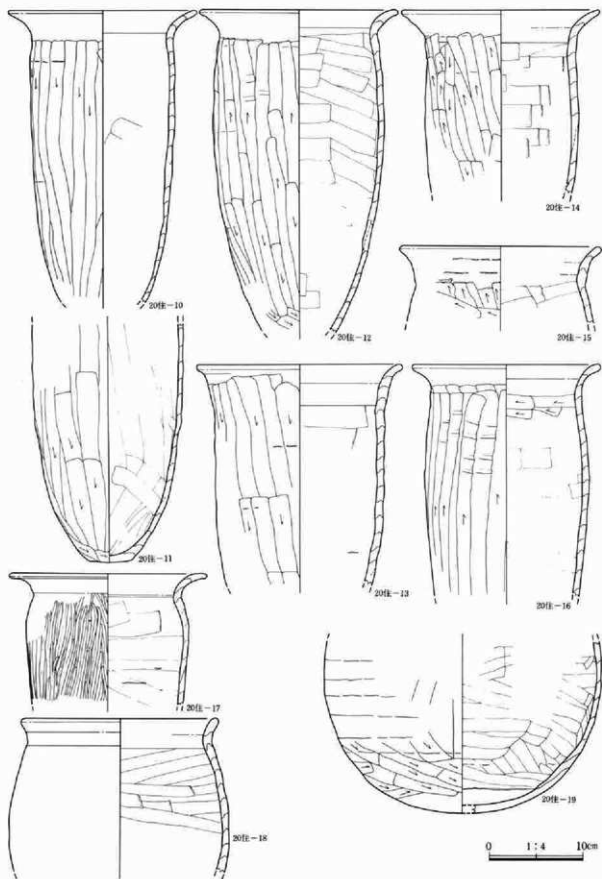
遺物 竈前に集中する。甕(7~12・15~17・19)、高杯(3)、杯(1)が入り乱れて出土した。西壁の残存部北端の床面からは耳環(6)と白玉(4・5)が出土している。(観P52・53 写PL54・55)

埋没土層

- 1 褐色土 炭化材を多く含む。白色軽石、焼土粒も散見する。
- 2 褐色土 1に類するがやや黄色味を帯びる。



115図 C区20号住居とその出土遺物



116图 C区20号住居出土遗物

C区 23号住居

位置 P-73

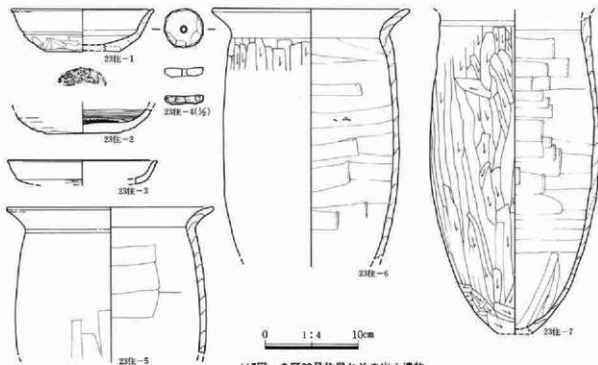
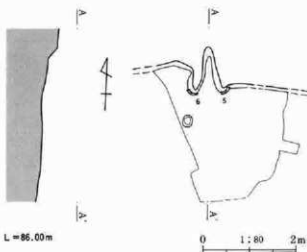
形状 竈周辺の壁・床面を検出したに止まった。

竈 北壁に構築されていた。燃焼部は狭く緩やかに埋道と続く。左右の袖部は短く、先端には竈が埋置されていた。

遺物 床面からの出土遺物は無い。埋没土中から土器と共に白玉(4)1個を出土した。

(観P56 写PL53)

備考 竈左手前に径23×20cm、深さ25cmのピットがある。



117図 C区23号住居とその出土遺物

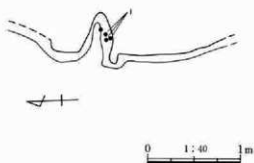
C区 30号住居

位置 r-77

形状 16号住居の埋没土を確認面としたため竈及びその周辺の壁面の検出のみに止まった。竈は東壁に構築され、燃焼部は壁際におかれたようである。

遺物 竈燃焼部から土釜(1)の破片が出土している。

(観P58)



118図 C区30号住居

C区26号住居

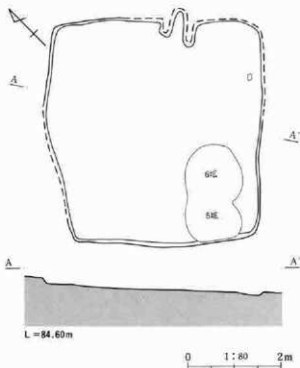
位置 k-74

形状 規模は竈の構築された壁面を北面と呼称すると南北4.73m、東西4.65mを測る。北東隅周辺及び西壁中央部分は床面の範囲を確認したに止まった。また、本住居より後出の5~8号土壇により南壁及び床面が攪乱を受けていた。**方位** N49°E

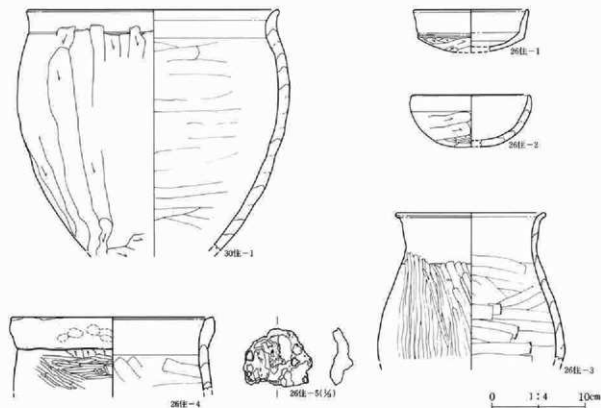
竈 北壁に構築されていたと思われるが削平著しく範囲のみを確認した。燃焼部は壁際であり、幅狭く煙道に続くと思われる。壁内に左右の袖部の痕跡が延びていた。

遺物 床面からの出土遺物は無かった。埋没土中からの土器は古墳時代から平安時代に及んでいる。また、鉄滓(5)(重量56.5g)が出土している。

(観P56 写PL57)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

119図 C区26号住居



120図 C区26・30号住居出土遺物

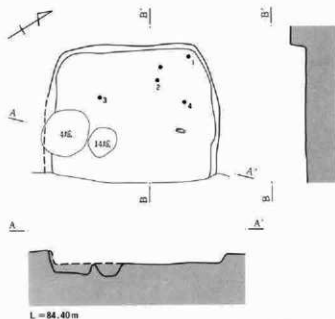
C区 24号住居

位置 i-73 写真 PL56

形状 擾乱を受け、東壁は検出できなかった。北壁もやや張り出し、全体に不整形であるが隅丸の矩形を基本としたと思われる。
床面 西側に高くなる。やや踏み固められている。

遺物 土器は杯(1)、高台付碗(2~4)が出土したがいずれも床面から4~6cm離れていた。(観P53 写PL57)

備考 竈は検出されなかったが東壁に構築されていたと思われる。南壁に重複する4号土坑は住居より後出である。この北側に14号土坑がある。



121図 C区24号住居

C区 25号住居

位置 j-73 写真 PL56・57

形状 竈の構築された壁面を南壁と呼称すれば南北に長軸を有する矩形である。南東隅を含む東壁の大部分は24号住居の築造に際し削平されている。南北4.40m、東西3.8mを測る。南壁は竈の左右でやや食い違っていた。壁面は6~31cm残存していた。北壁近くの床面から炭化材の断片が2片出土し、北東隅一帯に炭化物の薄層が広がっていた。本住居が焼失家屋である可能性がある。方位 N 8°E

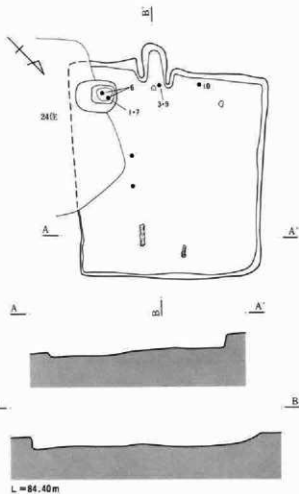
竈 南壁中央から東側へ25cmの所に位置する。燃焼部は壁際に構築され、両側の袖部は崩壊が進んでいたが基部が残存していた。

貯蔵穴 竈左側、南東隅に位置したと思われる。24号住居に破壊されているが一辺66cm程の隅丸の矩形を呈していたと思われる。深さ28cmで2個体の壺(6・7)の破片が検出された。

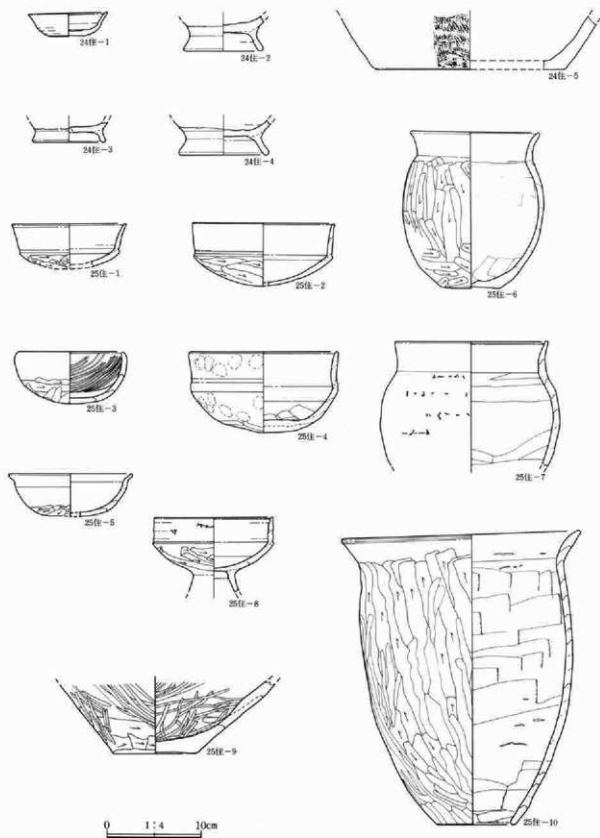
遺物 竈口部から杯(3)、壺(9)が出土した。また、竈右側、壁際には甕(10)が倒置されていた。

(観P58 写PL57)

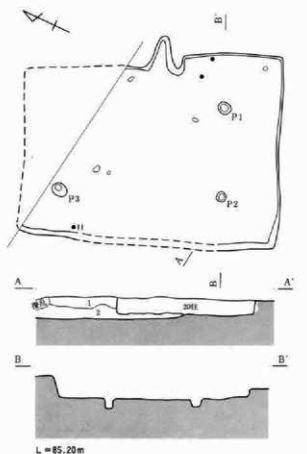
備考 24号住居との重複関係は本住居が先出である。



122図 C区25号住居



123图 C区24・25号住居出土遺物



C区21号住居

位置 S-79 写真 PL54・55

形状 北側に調査区域外に延びる為、全体の形状は把握できないが南北に長軸を有する矩形を呈すると思われる。壁面は東側で8~13cm、南西で43cmを測る。東西4.2m、南北5.46m以上を測る。 **方位** N75°30'E

竈 南東隅から2.6m、東壁中央近くに構築されていたと思われる。住居の壁面は竈の左右で食い違う。壁際に構築され、右側の袖部が残存する。

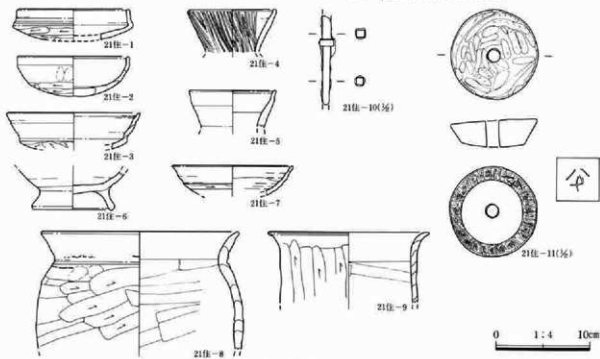
柱穴 3本を検出したが堀削深度は浅い。規模はP₁が径29×26cm、深さ17cm、P₂は径20cm、深さ23cm、P₃は径32×27cm、深さ60cmである。

遺物 床面からの土器の出土は無い。鉄鏝(10)、紡錘車(11)は埋没土中の出土である。西壁際北端の床面には瓢箪み石状の小円礫が6個集まっている。 (観P55 写PL55)

備考 本住居は20号住居よりも先出と思われる。

埋没土層

- 1 灰褐色土 白色軽石、小円礫を多く含む。
- 2 黒褐色土 1と同様の混入物を含む。



124図 C区21号住居とその出土遺物

C区27号住居

位置 k-73

形状 数次にわたる重複状況から住居構築面と埋没土の識別が困難となり、竈と周辺の床面検出に止まり、全容の把握はできなかった。

竈 東壁に構築され軸線の方向はS83°Eを測る。右袖部には円礫が埋置されていた。左袖部は判然としない。

遺物 埋没土中から出土している。(観P57 写PL57)

C区28号住居

位置 K-23

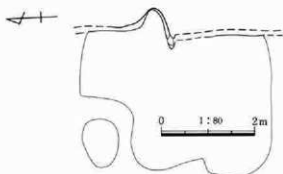
形状 竈のみの検出に止まった。左袖には自然礫が埋置されていた。軸線はS49°E。

遺物 埋没土中から出土。(観P57 写PL57)

C区29号住居

位置 K-23

形状 東壁に竈が構築されていたと思われる。



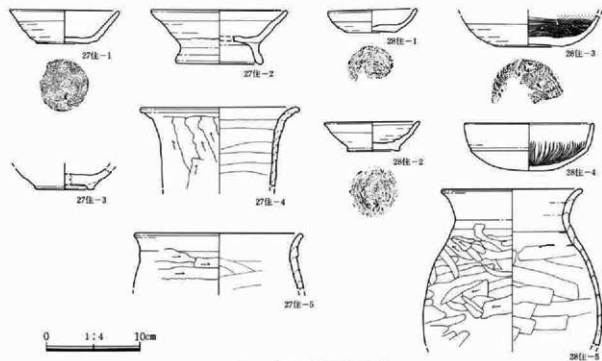
125図 C区27号住居



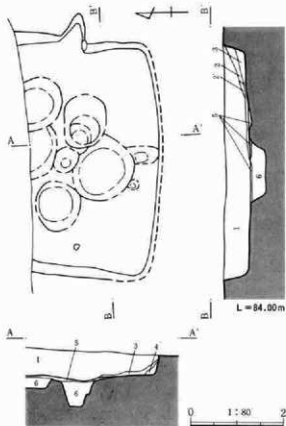
126図 C区28号住居



127図 C区29号住居



128図 C区27・28号住居出土遺物



埋没土層

- 1 暗褐色土 灰白色の粘土粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 焼土を多く含む。
- 3 暗褐色土 炭化物を含む。
- 4 焼土と炭化物が混在した状態。
- 5 暗褐色土 やや黄褐色味を帯びる。
- 6 貼り床
- 6 床下土層埋没土

D区1号住居

位置 h-66 写真 PL58

形状 東西5.1mを測る。矩形を呈するが、南壁は2号住居の埋没土を確認面としたため識別に困難を極めた。北側は調査区域外に及び全体の半分程の検出に止まった。東壁の残存は46~62cmであった。

埋没土 灰白色の粘土粒を含む褐色土から成る。壁際には灰褐色土や黄色味をもった砂粒が堆積していた。

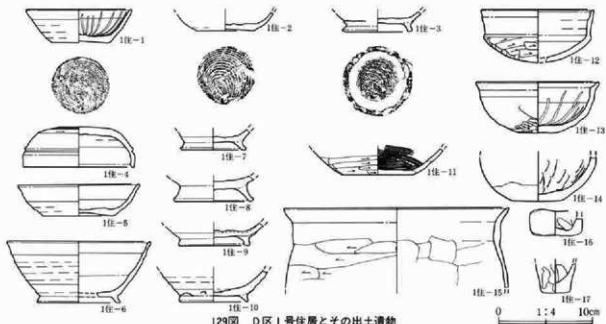
床面 掘り方を有し、大小6基の床下土層が掘削されていた。床下土層上面は貼り床が施されていた。

竈 東壁に設けられていた。東南隅に寄っているとされる。燃焼部は壁外に構築され、焚口部右脇には偏平な自然円礫が据えられていた。壁体はあまり焼けていないが火床部には炭化物が認められた。

長軸の方位はN87°30'E。

遺物 床面から出土遺物は無かった。埋没土中からは古墳時代~平安時代に至る土器が出土している。床下土層の埋没土からも土器、炭化種子が出土した。種子はソバと思われる。(観P59・60 写PL59)

備考 埋没土層の検討により本住居は2号住居より後出であることが確認された。



129図 D区1号住居とその出土遺物

D区2号住居

位置 8-66 写真 PL58

形状 東西4.98m、東西に長軸を有する縦長あるいは正方形に近い形状の矩形と思われる。東壁の北側半分と北壁は1号住居の構築時に削平を受けている。壁面は南東隅で48cmを測った。

埋没土 黄褐色土の小粒を霜降り状に含む褐色土が主体となっている。

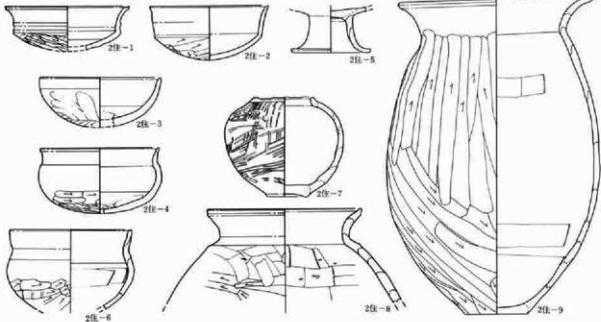
床面 東側、竈周辺はやや踏み固められている。西側は貼り床が施され、灰や焼土が認められた範囲もあるが3号住居との関係と思われる。

竈 東壁、南東隅から北側へ1.8mにある。燃烧部は住居の壁内にあり、壁体はやや焼けていた。灰褐色の粘質土から成る袖部は左側が1号住居により削平されている。長軸の方向はN58°Eである。

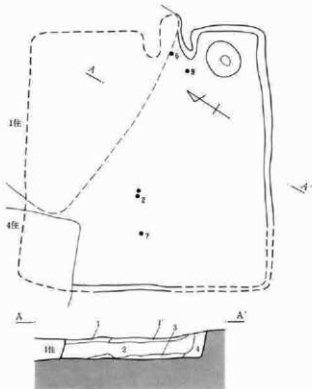
貯蔵穴 竈右側にある。上端の径77×70cm、深さ97cmの円筒状を呈していた。

遺物 電鍮口部から壺(6)が出土している。右袖部前からは壺(9)が潰れた状態で床面から4cm離れて出土していた。床面中央やや西寄りからは杯(2)と埴(7)が出土したが床面から5cm程離れていた。

(観P60・61 写PL59)



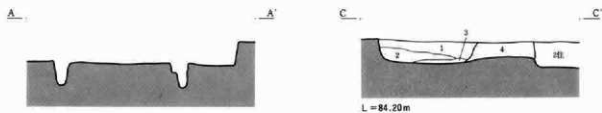
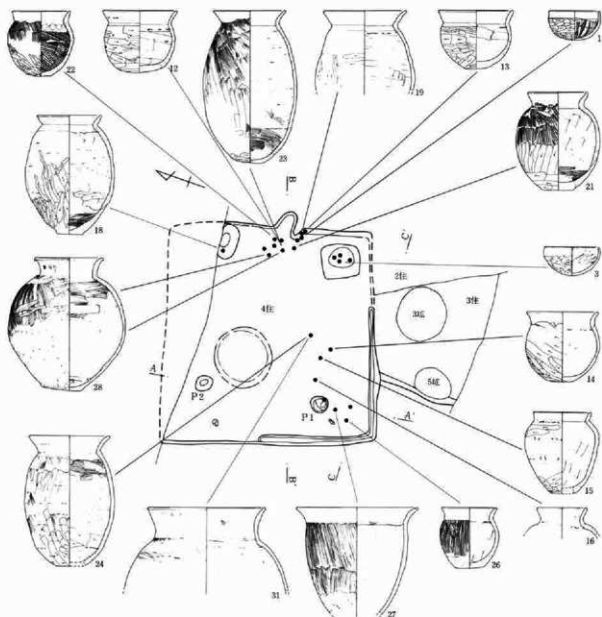
130図 D区2号住居とその出土遺物



埋没土層

- 1 暗褐色土 やや灰色味を帯びるとともに土粒が粗い。
- 1' 暗褐色土 色調が明るくなる。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒が霜降り状に多く入る。
- 3 灰褐色土 7近くには灰化物が散見される。
- 4 黄褐色土

第2章 調査された遺構と遺物



- 埋 没 土 層
- 1 暗褐色土 白色軽石を多く含む。
 - 2 暗褐色土 1よりも黒色味を増し締まる。ローム小粒をまばらに含む。
 - 3 暗褐色土 ロームの小ブロックを多く含む。
 - 4 暗褐色土 1よりも黒色味が強い。
- 1~3 4号住居埋没土、4 3号住居埋没土

0 1:80 3m

131図 D区3-4号住居

D区4号住居

位置 8-65 写真 PL60・61

形状 東西4.6mを測る矩形であるが、北側は調査区域外に延び、南北は4.15m以上になる。壁面の良好な部分は43~60cmの残高を測った。

床面 ローム層を床面とするところを中心に踏み固めが認められる。

竈 東壁の中央からやや南側に寄った位置で住居の壁面が斜めに掘り込まれ煙道状を呈していた。燃烧部の形状は不明な点が多く焼土・灰を含み流れ出した灰褐色土の中に多量の土器が混在していた。

貯蔵穴 住居南東隅に位置する。各辺80×70cmの隅丸の矩形であり中位以下から杯、碗が出土した。

柱穴 2本検出したがP₁は壁面近くにある。規模は

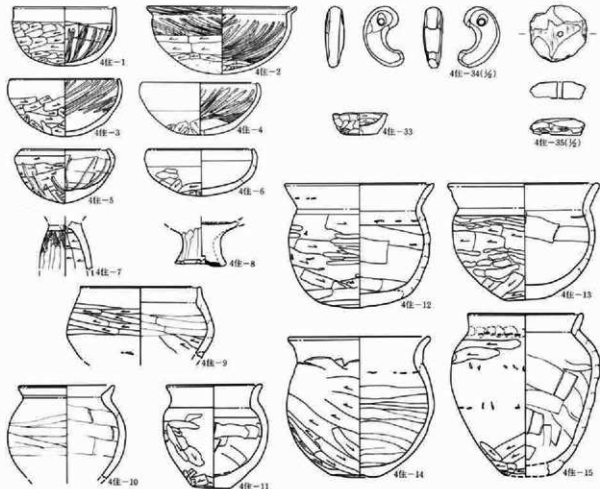
径46×44cm、深さ51cm、P₂は径45cm、深さ47cmである。

壁溝 幅5~10cm、深さ5~7cmであった。

遺物 竈手前では胴下半を欠損する甕(19)が口縁部を下にして床面から出土した。他に甕(13・22・23・28)、碗(1)など完形品が集中したがいずれも床面から5~13cm離れていた。床面の南西部、P₁の東側からは完形の甕(14・15・24)が出土している。P₁の西側には完形の甕(26)、甕(27)の破片が床面からやや離れて出土した。竈北側、調査区域壁に接して長軸85cmの楕円形の掘り込みからは甕(18)が出土した。その他埋没土中から勾玉(33)、白玉(34)が検出した。

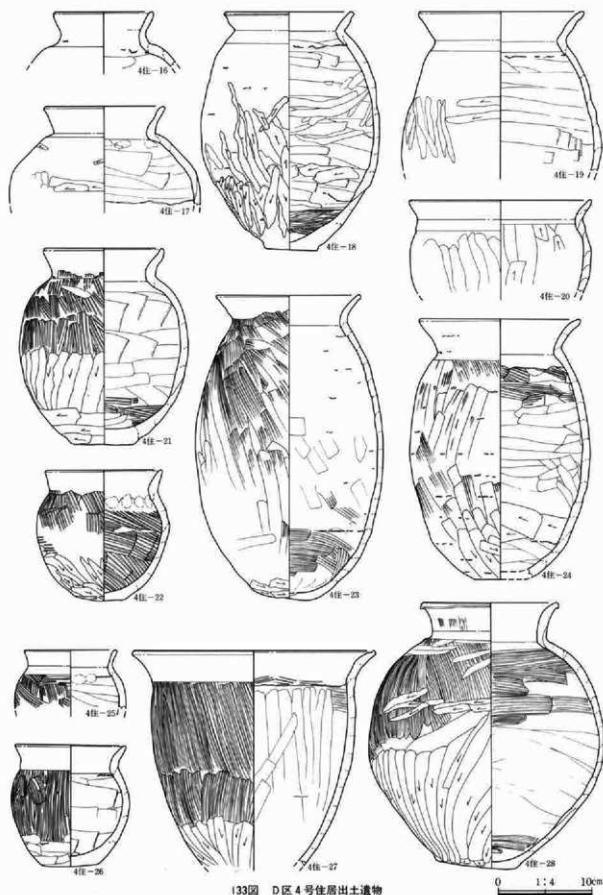
(観P61~64 写PL62・63)

備考 重複関係にある2・3・15号住居のうち2・15号住居は本住居より後出と思われる。

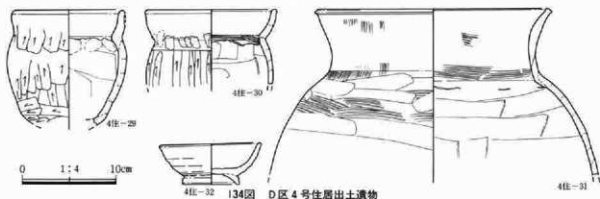


132図 D区4号住居出土遺物

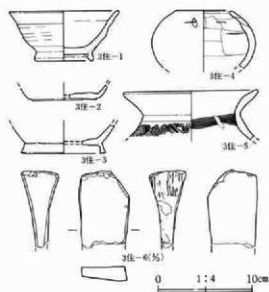
第2章 調査された遺構と遺物



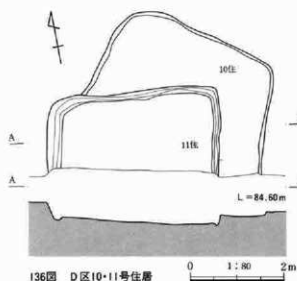
133図 D区4号住居出土遺物



134図 D区4号住居出土遺物



135図 D区3号住居出土遺物



136図 D区10・11号住居

D区3号住居

位置 K-65

形状 西壁とそれに続く床面を検出したに止まった。2号住居の床面に焼土、灰の散見できる範囲があり甕は住居の東側に構築されていたと思われる。床面の確認部分はローム層中であり、やや踏み固められていた。中央の径117×102cmの楕円形の3号土壇は床下土壇の可能性ある。

遺物 埋没土中から土器と磁石(6)が出土した。

(観P61 写PL62)

備考 重複関係にある2・4号住居のうち2号住居は本住居より後出である。

D区10号住居

位置 h-71

形状 北側の半分程を検出したと思われる。甕は丸味をもつ。壁面の残存は西壁の南端で29cmを測ったが他は7~14cmであった。

備考 本住居は11号住居に先行して構築されている。出土遺物は全く無かった。

D区11号住居

位置 K-71

形状 北壁を中心とし東・西両壁の一部を検出した。壁際には壁溝が巡る。幅は5~13cm、深さは5~7cmを測る。

備考 出土遺物は皆無であった。

D区5号住居

位置 h-70 写真 PL64

形状 東西4.93m、南北4.05m以上の矩形で整美な形状を呈している。壁面は削平が著しく24~29cmの残存高であった。

方位 N69°30'E

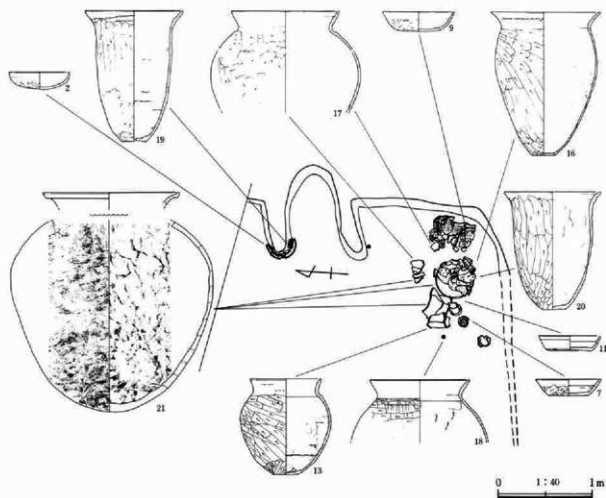
床面 灰褐色の砂壤土を床面とする。

竈 東壁の中央からやや南側寄りに位置すると思われる。燃焼部は壁際に設けられ、灰褐色のやや粘性を有する構築土により左右の袖部が作られている。左袖部の先端には壘(19)が補強材とされていた。焚口部から右側、土器の集中する範囲までには炭化物のひろがりが見られた。竈の長軸は南にふれている。

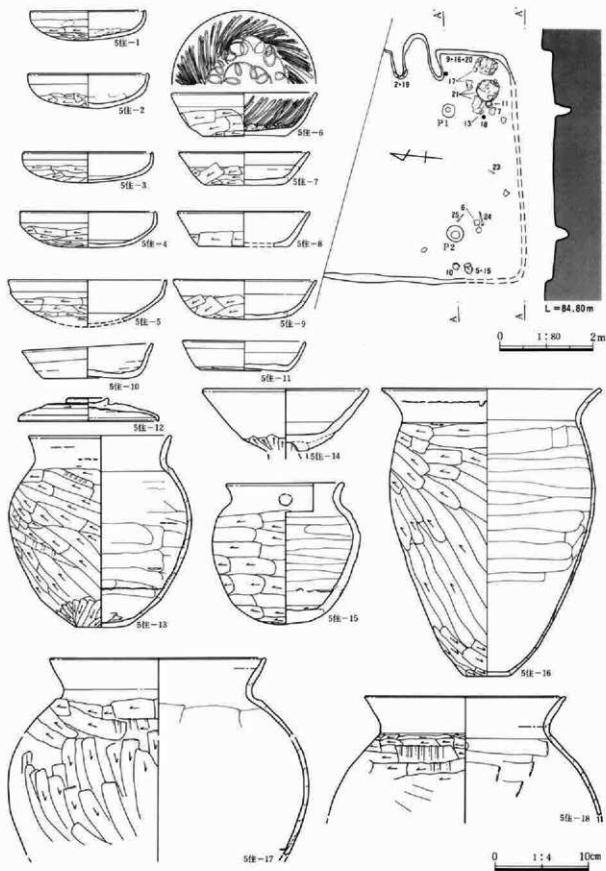
柱穴 南側の2本を検出した。規模はP₁が径35cm、深さ28cm、P₂は径28×25cm、深さ35cmと浅い。

遺物 竈右側、住居の南東隅に集中していた。壘(16・20)は完形で東壁に寄りかかるようにして潰れていた。その西側には須恵器大壘(21)胴上部の破片が周辺から認められた。(21)に接して須恵器杯(11)がある。杯(6)は内面に棒状工具による螺旋状の文様が施されているが床面から5cm程離れていた。また、床面から鉄製品3点刀子(23)、鏝(24)、棒状鉄製品(25)が出土している他埋没土中からも鉋(22)が出土した。(観P66・67 写PL65)

備考 12・13号住居と関係にあるが本住居はいずれの住居より先出である。

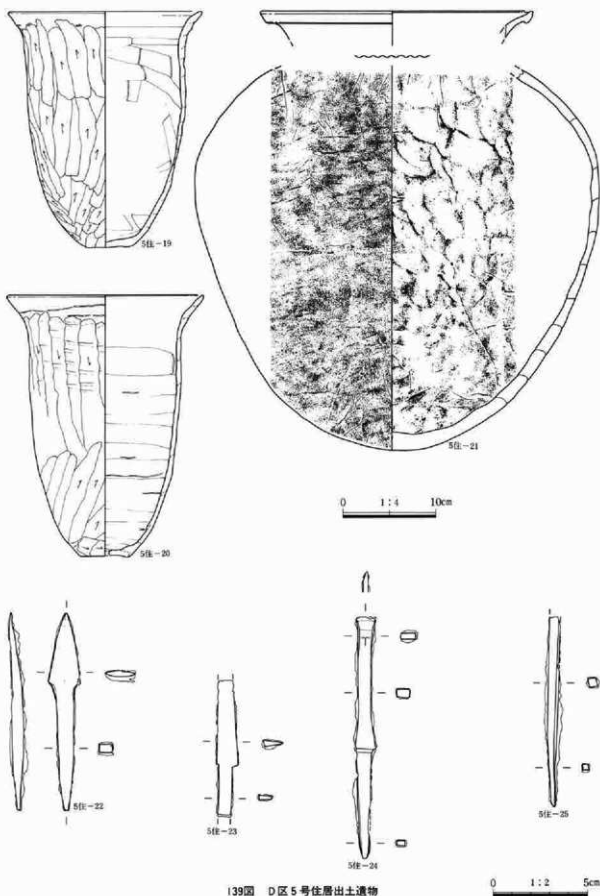


137図 D区5号住居竈と周辺の出土遺物



138図 D区5号住居とその出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



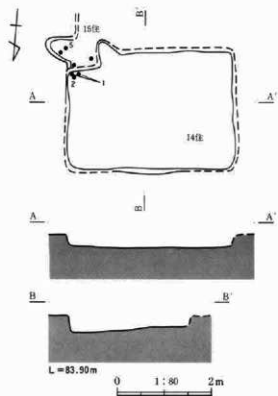
〔39〕 D区5号住居出土遺物

D区14号住居

位置 8-65

形状 15-20号住居と重複関係にあり、埋没土の識別に困難を極め、壁面は一部分の検出に止まった。床面の範囲は東西3.47m、南北2.55mであろうか。竈は南壁中央から東側に偏しては付設されている。

遺物 南東隅の床面から3cm程離れて高台付椀(1)が出土している。(観P69 写PL68)



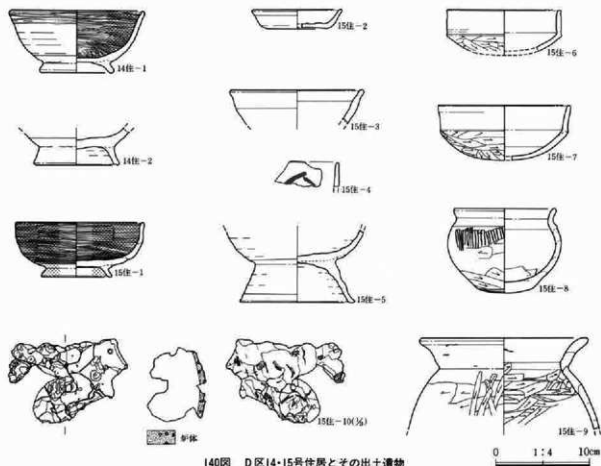
D区15号住居

位置 8-65

形状 14号住居の東側に竈のみを検出した。竈の軸線の方向はS79°Eであった。

遺物 竈燃焼部内から高台付椀(5)を出土した。

(観P68 写PL68)



140図 D区14-15号住居とその出土遺物

D区7号住居

位置 h-68 写真 PL66

形状 南北に長軸を有する矩形を呈すると思われる。南壁を除いて、8・9号住居の埋没土を確認面とした為壁面の検出は困難であった。南壁の残存高は18cm程である。

方位 S73°30'E

床面 特に踏み固められていない。

竈 東壁の東南隅寄りに位置する。燃烧部は壁外にあり焚口の両脇には自然円礫が袖石として埋置され

ていた。奥のやや左寄りには支脚に利用したと思われる円礫が認められたが、最終使用時の火床面ではほとんど埋没していたであろう。

貯蔵穴 竈右側、住居の南東隅に位置する。径65×57cm、深さ11cmの浅い掘り込みで炭化物が流れ込んでいた。土釜(4)が出土した。

遺物 竈焚口部前から出土した2片の瓦(1)は接合した。(観P64 写PL66)

D区8号住居

位置 h-68 写真 PL66

形状 竈と南東隅周辺を検出したに止まった。西壁は9号住居の埋没土を掘り込んで形成されていたと思われるが確認できなかった。壁高は南東隅で28cmを測った。床面は特に踏み固められていなかった。

竈 東壁にある。南東隅に寄って構築されていたと思われる。燃烧部は壁外にあり、火床面は緩やかに

立ち上がる。

遺物 出土遺物は竈焚口部左前から裏(4)の破片が出土したのみでその他は埋没土中からの出土である。(観P69)

備考 本住居は9号住居より後出で7号住居に先立って構築されたと考えられる。

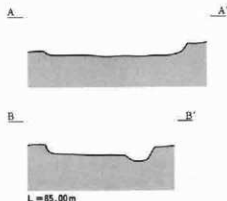
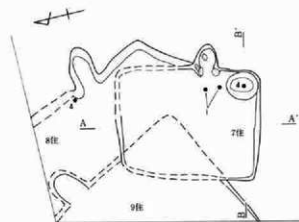
D区9号住居

位置 h-68 写真 PL66

形状 7・8号住居により削平を受け、南壁の一部と竈の位置を確認し得たのみである。竈は削平を受けていたが、炭化物、焼土の散見から東壁に構築され

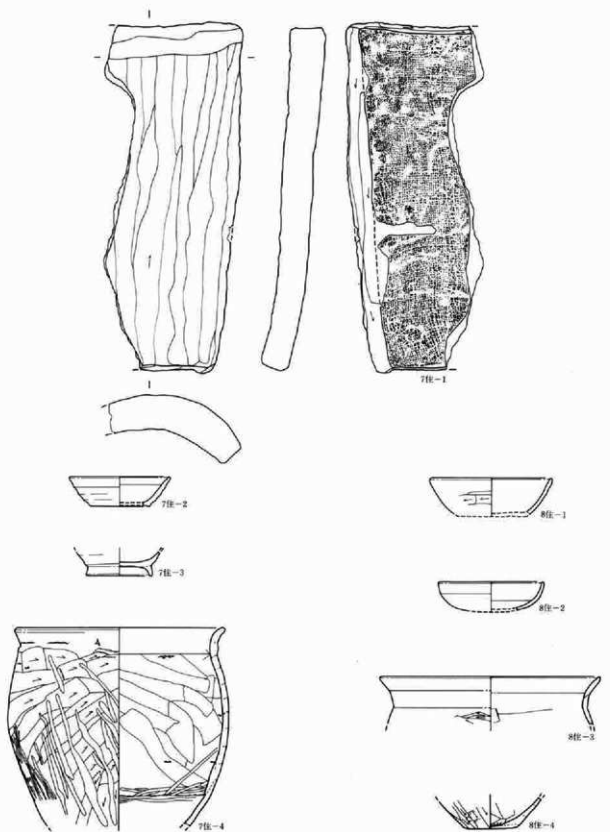
燃烧部を住居の壁外にもつ構築と思われる。

備考 出土遺物は認められなかった。本住居は7・8号住居に先行すると思われる。



141図 D区7・8・9号住居

0 1:80 2m



142图 D区7·8号住居出土遗物

0 1:4 10cm

D区12号住居

位置 g-70

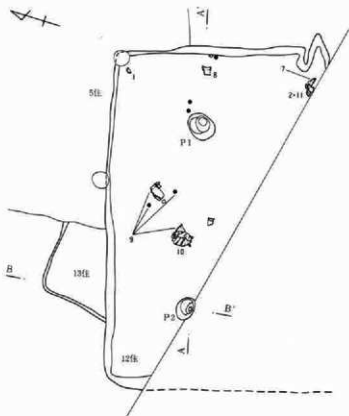
写真 PL67

形状 東・南壁を中心とした北側の片を検出した。東西7.12m、南北の残存長は4.53mである。北東・北西の隅は整美な形状であった。壁面は上半がやや崩れているが垂直に近い立ち上がりで竈近くは30cm、西隅で61cmの残存であった。

床面 特に踏み固められていない。P₁の周辺はやや高くなっている。 **方位** N72°E

竈 東壁に構築されている。燃焼部は壁内に構築され、煙道は住居の壁面を削り斜めに立ち上がる。袖部は崩壊が著しかった。

柱穴 4本支柱穴と思われるが北側の2本を検出した。良好な位置にある。いずれも上端は楕円形で底面は中心からずれている。規模はP₁が径59×48cm、深さ73cm、P₂は径48×35cm、深さ37cmであった。



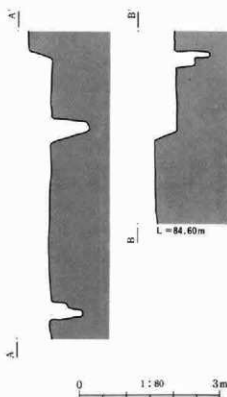
遺物 出土土器はいずれも床面から2~3cm覆れている。甕(10)は完形、甕(8)と甗(9)は大形破片である。竈焚口部前からは完形の甕(11)、杯(2)、高杯(7)が出土した。埋設土中から鉄滓(重量49.9g)が出土している。 (観P65 写PL67)

備考 貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。本住居は重複関係にある5号住居に先立って構築されている。

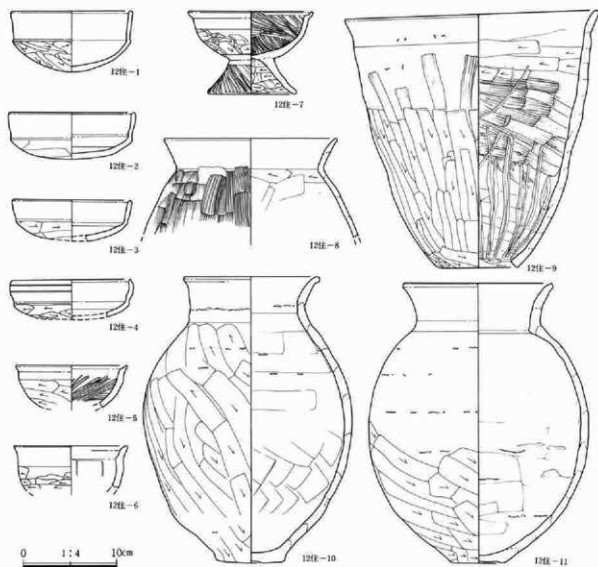
D区13号住居

位置 h-69

形状 西北隅とその周辺を検出した。その他は5・12号住居との重複により削平されている。壁面の残存は16cmである。出土遺物は無かった。



143図 D区12・13号住居



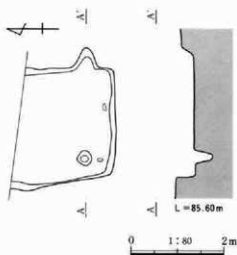
144図 D区12号住居出土遺物

D区6号住居

位置 h-69 写真 PL66

形状 南北に長軸を有した隅丸矩形と思われるが北側は調査区域外に及んでいた。東西2.43mを測った。壁面は31~35cmの残存であった。**方位** S89°30'E
竈 東壁、南東隅に寄って構築されている。燃焼部は壁隙にあり、袖部の有無は確認できなかった。
遺物 土器・鉄器などの出土は無かった。南壁寄りの床面から菰編み石状の自然円礫が2点出土している。

備考 南西隅から径30cm、深さ39cmのピットを検出した。貯蔵穴の可能性もあるか。



145図 D区6号住居

D区 18号住居

位置 8-64

形状 北東隅周辺を検出したのみで全容を解明できなかった。19号住居調査中に検出した為、前後関係

は不明である。

遺物 埋没土出土の土器は古墳時代から平安時代に及んでいる。(観P69・70 写PL68)

D区 19号住居

位置 8-64 写真 PL69

形状 南北4.83m、東西4.90m、ほぼ正方形に近い矩形を呈していたと思われるが南西隅は調査区域外に及び未検出である。他の住居との重複関係が著しく壁面の残存は不良であり北壁、竈東側で65cm、他は16~30cmであった。方位 N39°30'W

埋没土 暗褐色土である。色調、ロームブロックの混入の度合から分層できる。

床面 ローム混りの黒色土が踏み固められた部分が認められた。

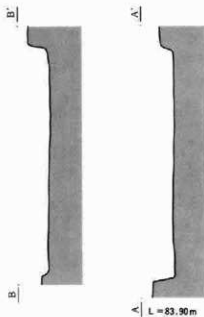
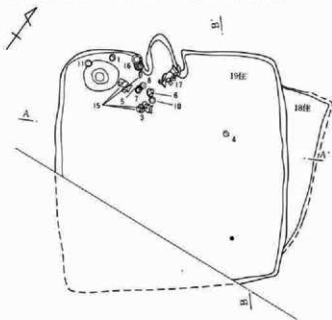
竈 北壁の中央から両側へ25cm寄った位置にある。燃焼部は壁際であり、一部住居壁面を掘り込んでいる。左右の袖部は粘性のある灰褐色土から成るが崩

壊が著しい。焚口部前及び貯蔵穴側の床面には炭化物の層が広がっていた。

貯蔵穴 竈左側にある。上・下端とも円形を呈し、径70×65cm、深さ74cmを測った。

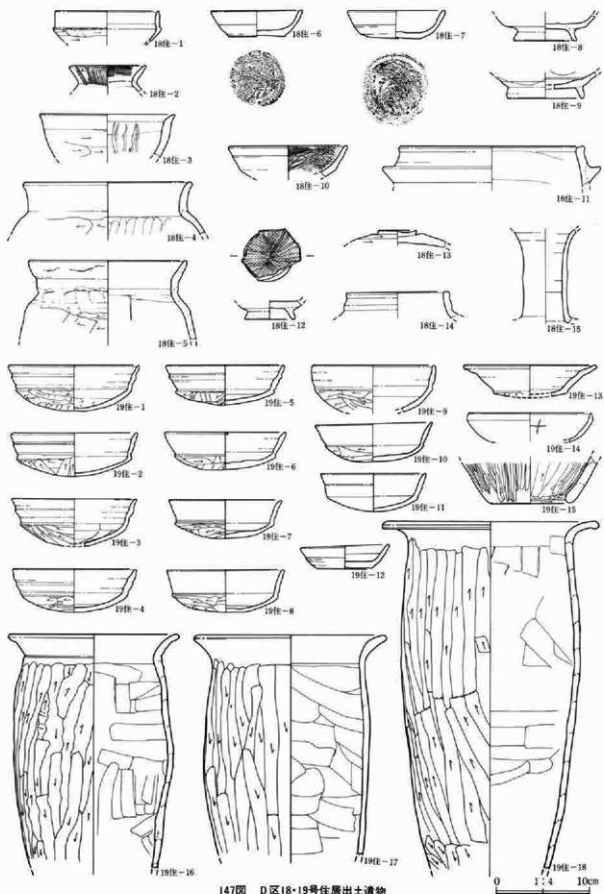
遺物 竈周辺から多くの土器が出土した。竈焚口部から壺(17)が出土、左側外側からは甕(16)が口縁部を上にして出土した。左側前の完形の杯(8)は床面から5cm離れて出土したものである。貯蔵穴際からは杯(1・11)が出土した。埋没土から出土した杯(14)には刻書が認められた。(観P70~72 写PL68・69)

備考 本住居は22号住居より後出に構築されている。また、21号住居よりも新しい可能性が高い。



146図 D区19号住居

第1節 住 居



147图 D区18·19号住居出土遗物

D区16号住居

位置 g-62

形状 四隅の整美な矩形を基本とするが各壁面とも多少の出入りをする。北側は調査区域外に及んでいる。壁面は削平が進行し、18~31cmの残存であった。

床面 45号住居と重複する部分も含め、特に踏み固められた部分は認められなかった。南西隅はやや高くなっていた。 方位 N90°E

竈 東壁、南東隅に接して構築されていた。燃焼部は

壁面際であり、傾斜の緩い煙道へと続いている。袖部は右側が残存し、長さ30cm程度壁内に延びていた。

遺物 床面からの出土遺物は無く、埋没土中から土鍾(2)、平瓦(1)の破片が出土した。土器は高台付椀、土釜などの小破片が出土したが資料化するには至らなかった。(観P68)

備考 本住居は26・45号住居と重複関係にあり兩住居より後出である。

D区17号住居

位置 f-64

形状 北東隅を中心とし、北・東壁及び床面の一部を検出した。主体は調査区域外に及んでいる。

遺物 床面からの出土遺物は無かった。埋没土中から須恵器の甕の破片が出土したが資料化し得なかった。

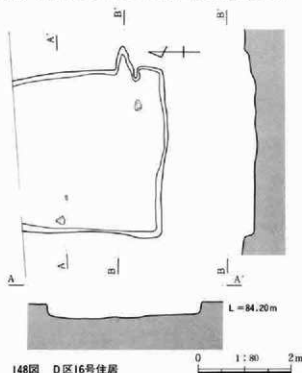
D区21号住居

位置 g-64 写真 PL70

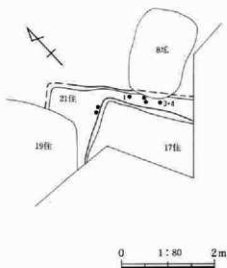
形状 19号住居の南側にある。北東隅の一部を検出した。17~19号住居と重複関係にあり削平を受け、わずかな調査に止まった。

遺物 東壁が8号土坑により削平を受けた部分に土

器が集中した。周辺の床面には炭化物の広がり認められ、竈が削平された可能性が高い。杯(1)は床面から、甕(3・4)は床面から7~12cm離れて出土した。杯(1)のやや北側の床面からは杯が出土している。(観P72・73 写PL70)

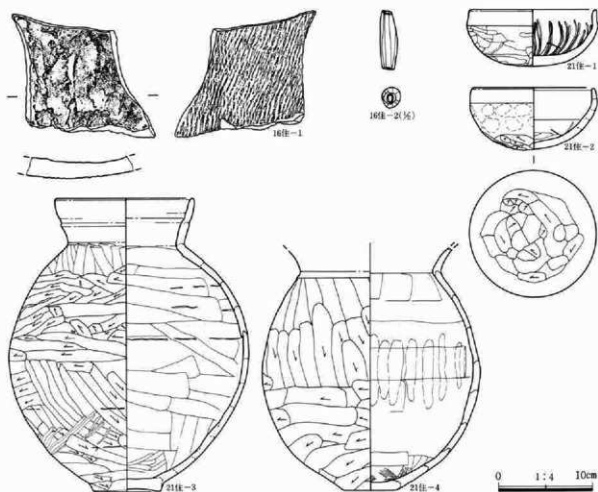


148図 D区16号住居



149図 D区17・21号住居

第1節 住居



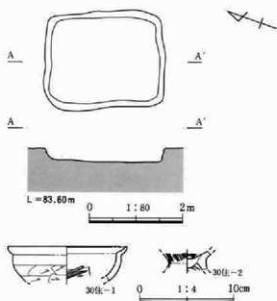
150図 D区16・21号住居出土遺物

D区30号住居

位置 f-63

形状 南北2.55m、東西2.04mの矩形で四隅はやや丸味を帯びていた。竈は検出されなかったが27号住居により削平された可能性もある。壁面は20~25cmの残存であった。22・23・25・27号住居と重複関係にあるが27号住居のみが後出である。

遺物 床面からの出土は無かった。台付塞(2)は混入品と思われる。(観P76 写PL73)



151図 D区30号住居とその出土遺物

D区22号住居

位置 g-63 写真 PL70

形状 19・23号住居の削平を受け南西隅とその周辺の検出に止まった。床面は特に踏み固められていない。

遺物 床面から杯(1)、甕(5)などの土器を出土、また、これらの土器と共に長軸15~20cmの自然円礫が4個出土している。(観P73 写PL70)

備考 重複関係にある14号土坑は本住居よりも後出である。

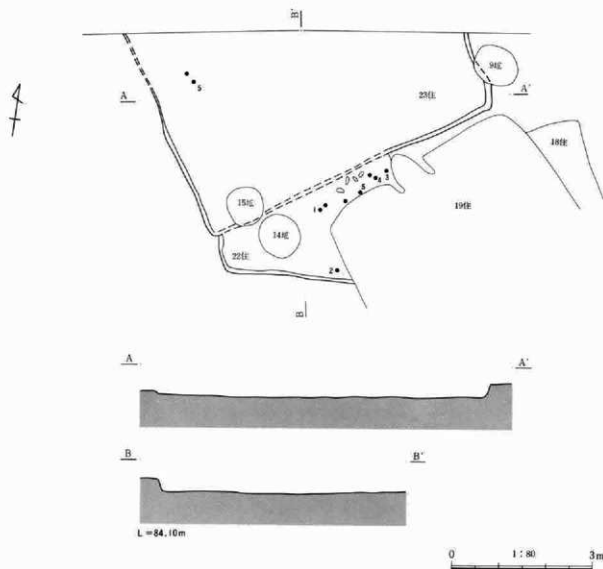
D区23号住居

位置 g-63 写真 PL71

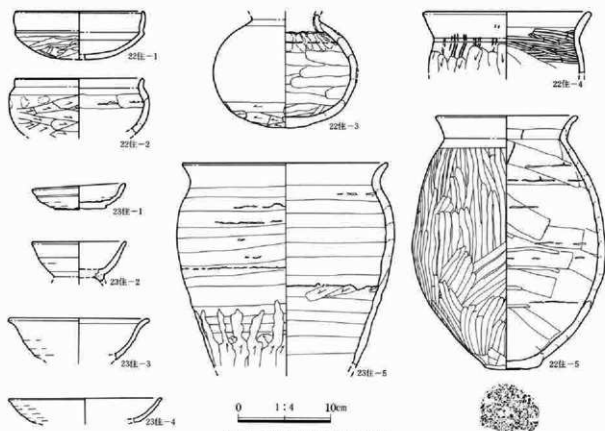
形状 東西6.70mの矩形であるが北側の片程は調査区域外に及んでいる。壁面の残存は25~27cmである。
埋没土 暗褐色土が堆積していた。混入物、色調の相違から3層に分層ができる。

遺物 床面の北側、西壁寄りの床面から土釜(5)が出土した。(観P73 写PL71)

備考 重複関係にある遺構は22・25・26・30号住居、9・15号土坑である。22号住居を除く各遺構は本住居より後出である。



152図 D区22・23号住居



153図 D区22・23号住居出土遺物

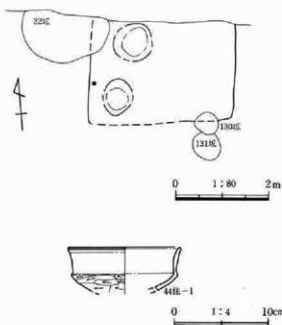
D区44号住居

位置 f-58

形状 確認面と埋没土の土粒が類似していたため壁面の検出は困難であった。床面には貼り床が施され二箇所で床下土壇を確認できた。これにより住居の存在が確認できた。北側は調査区域外まで及んでいる。東西3.1m、南北2.15m以上を測る。

遺物 埋没土中から土器が少量出土したが資料化し得たものは杯(1)だけである。(観P88)

備考 57号住居と重複関係にある。本住居より後出であろうか。西側の22号土壇は本住居を切って掘り込まれている。



154図 D区44号住居とその出土遺物

D区25号住居

位置 f-63 写真 PL71

形状 他住居との重複が激しく、壁面は北西隅とその周辺を検出に止まった。東壁の一部も確認したが全体の形状をやや崩す走行である。

床面 中央や北壁よりに径96×88cm、深さ47cmの円形を呈する床下土坑が掘削されていた。

遺物 埋没土中から高台付椀(4)が出土した。床下土坑からは5個体の資料化可能な土器が出土した。杯(1・2)は共に墨書が記されており、(1)は埋没土の中位から、(2)は底面近くから出土した。高台付椀(8)も底面からの出土である。土釜(7)は埋没土の出土であるが外面に墨書が記されていた。

(観P74 写PL71)

備考 22~24・27・30号住居と重複関係にあるかいずれの住居よりも先出と考えられる。

D区24号住居

位置 f-62

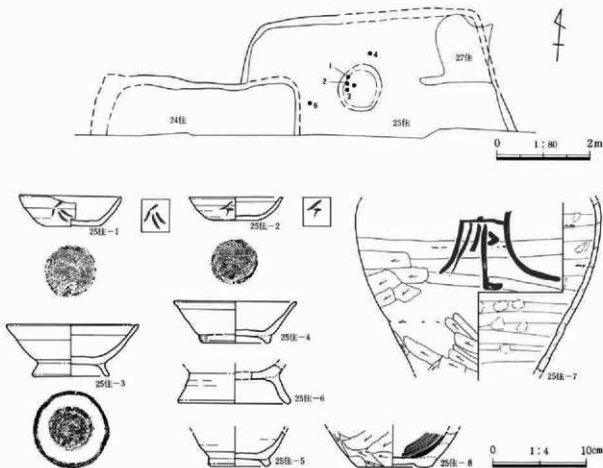
形状 北側の一部を検出した。西側は覆乱を受けるが東西4.30m程の矩形を呈すると思われる。埋没土は黒味のある暗褐色土であった。

備考 出土遺物は無かった。25号住居との重複関係は本住居が後出と思われる。

D区27号住居

位置 g-63

形状 25号住居調査時に非常に良く踏みしめられた貼床の面を検出した。全容は全く把握できなかったが重複関係にある19・22・25・30号住居のいずれよりも後出の住居が存在したと思われる。



155図 D区24・25・27号住居と25号住居出土遺物

D区26号住居

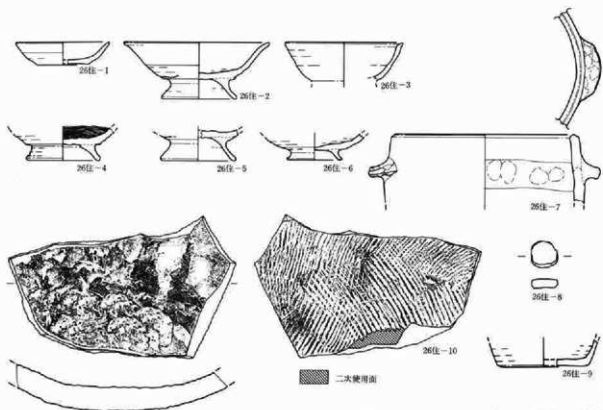
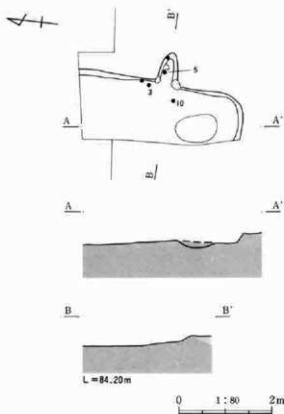
位置 R-63 写真 PL72

形状 隅丸の矩形を呈すると思われるが16号住居による削平と、遺構の範囲が北側調査区域外に延びることから東壁の電周辺の検出に止まった。壁面の残存は20~25cm程である。方位 S 88°30' E

電 東壁に付設され、燃焼部は壁外に構築されていた。焚口部の両脇には小円礫が埋置され袖部の補強がされていた。右側は角閃石安山岩である。燃焼部内には支脚と思われる円礫が横倒していた。火床部に認められた炭化物は焚口前にまでひろがっていた。

遺物 電燃焼部から高台付椀(5)が、電左側の床面から高台付椀(3)が出土するがいずれも破片である。電右袖部前では床面から12cm離れて平瓦(10)の破片が出土した。埋没土からは円形土版(8)、円筒埴輪片の出土があった。(観P74-75 写PL73)

備考 本住居は東側23号住居の西壁を削平し構築されている。



156図 D区26号住居とその出土遺物

D区20号住居

位置 E-64

形状 14・18号住居との重複関係もあり、全容を確認するに至らなかったが東西4.0m、南北3.50mの矩形を想定した。

竈 東壁の南西隅寄りに偏して構築されている。燃烧部は壁際に付設され、左右の袖部は壁内に延びていた。燃烧部は矩形の掘り方を成し、焼土、炭化物が多く認められた。

遺物 竈燃烧部内から高台付碗(3)を出土した。壺(1)は燃烧部と竈左側出土の破片が接合している。竈右側袖部先端には高台付皿(4)が床面から12cm離れて出土、碗(2)は床面からの出土である。

(観P72 写PL70)

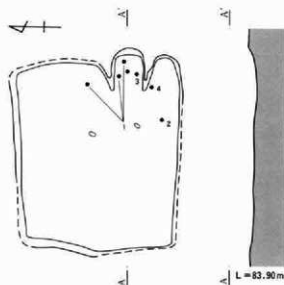
D区32号住居

位置 f-62 写真 PL74

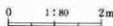
形状 31号住居東側に掘り込みが認められたが詳細は把握できなかった。

遺物 埋没土中から少量が出土した。

(観PL77 写PL75)



157図 D区20号住居



D区31号住居

位置 f-61 写真 PL74

形状 北側のほぼ全程を調査し得た。東西4.68m、やや隅丸の矩形を呈する。壁面は24~33cmの残存である。方位 N84°30'E

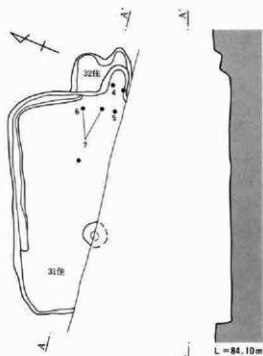
竈 東壁に位置し、燃烧部は壁外に構築されたようである。燃烧部には竈天井部の崩壊によると思われる焼土の堆積が認められた。焚口部手前には土器が潰れており、炭化物、灰と共に混在していた。

壁溝 北壁際、北西隅から1.3mの場所から東壁の竈横まで掘削されていた。幅は5~16cm、北東隅下が細くなっていた。深さは2~8cmである。

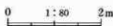
遺物 竈周辺に集中していた。燃烧部から壺(7)が口縁部を下にして出土した。焚口部前から2個体の壺(5・7)が潰れた状態で出土している。

(観P76 写PL74)

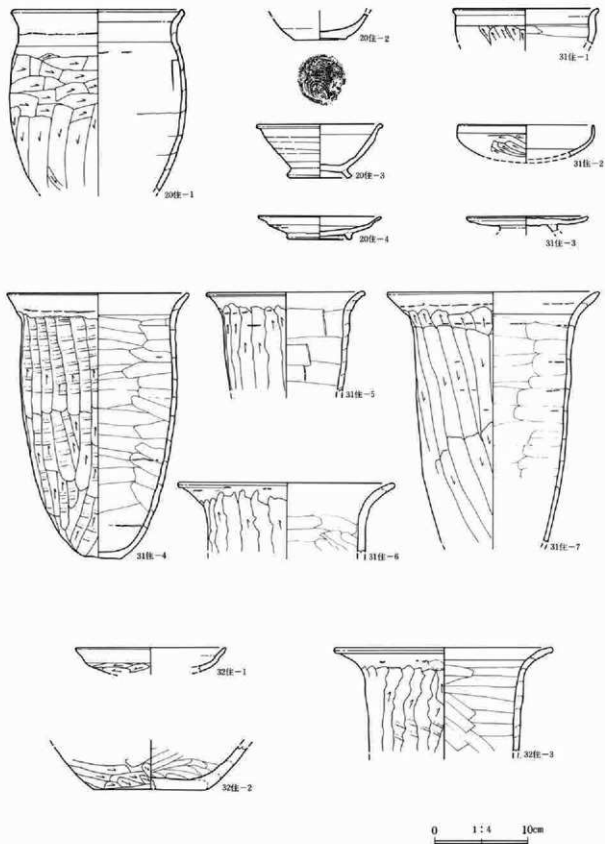
備考 西壁寄りの床面に径50cm、深さ18cm以上のピットがあり、北側半分を検出した。28・29号住居よりも先に構築されている。



158図 D区31-32号住居



第1節 住居



159図 D区20・31・32号住居出土遺物

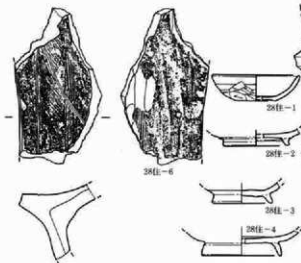
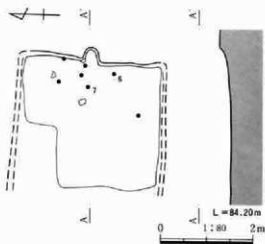
D区 28号住居

位置 f-62 写真 PL72

形状 重複する住居の埋没土を確認面としたため全容を把握できなかった。確認できた床面の範囲は東西2.8m以上、南北2.74m以上である。壁面は東壁の電周辺のみ検出できた。 **方位** N89°E

竈 東壁に構築され、燃焼部は壁外にあった。焚口部左脇には小角礫が埋置されていた。火床面は炭化物、灰の層が堆積し上昇していた。

遺物 土器は床面から出土していない。電右前の床面からは形象埴輪片(6)、円筒埴輪片(7)が出土している。 (観P75 写PL73)



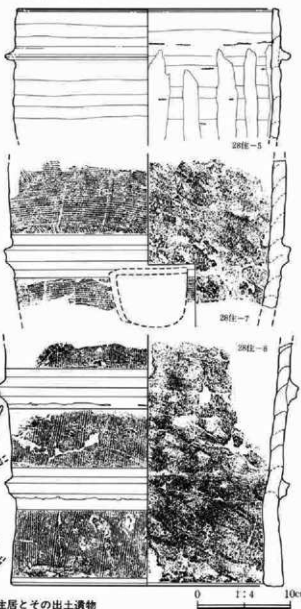
備考 重複する住居の中で31・32・45号住居は本住居よりも先出である。29・51号住居とも重複すると思われるが新旧関係は不明である。

D区 37号住居

位置 f-59 写真 PL75

形状 36号住居の北側に南東隅の一部を検出した。主体は北側に及ぶうえ、西側は土域状の掘り込みに削平され全容をうかがうには遠く及ばなかった。

遺物 灰釉陶器、台付長頸壺(1)の胴下半部が底面を上にして出土した。 (観P77 写PL75)



160図 D区28号住居とその出土遺物

D区36号住居

位置 f-59 写真 PL75

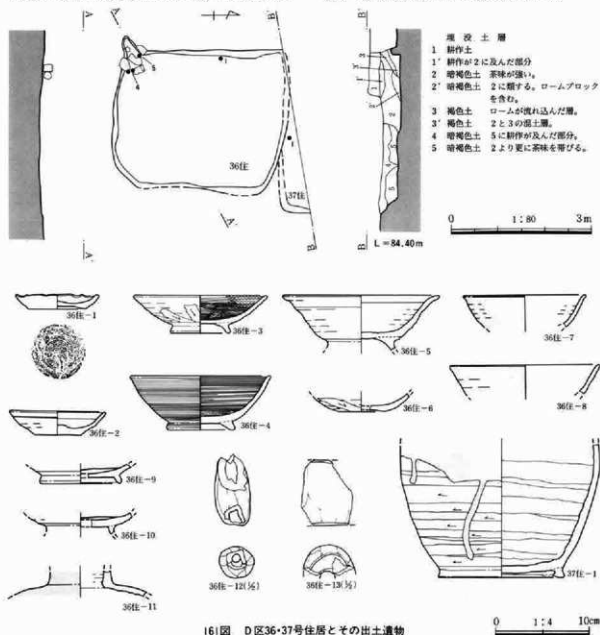
形状 南北3.70m、東西2.87mを測る。隅丸の矩形を呈すると思われるが、東壁は短く、南東、北東の二隅は丸味が一段と強い。削平が進んでいたが壁面は13~34cmをはかった。

竈 南西隅に構築され、軸線は住居のそれから約45°振れS59°Wであった。燃焼部は壁外に構築されていたが削平が著しかった。焚口部両脇にはやや大型の円礫が埋置され袖石とされていた。この両袖の石

は元来1個体であったものを敲打し二分割したものである。焚口部からは扁平な礫も出土しており、これは天井部の補強に用いられた可能性がある。燃焼部奥には円礫を利用した支脚がある。

遺物 竈燃焼部から高台付椀(5)を、焚口部前から高台付椀(4)を出土した。西壁中央寄りの床面からは杯(1)が出土した。埋設土中からは土鍾2個(12・13)が出土している。(観P79・80 写PL75)

備考 37号住居を削平して構築されている。



161図 D区36・37号住居とその出土遺物

D区 33号住居

位置 f-61 写真 PL76・77

形状 東西4.37m、南北5.65mの横長矩形を呈する。四隅はやや丸味を帯びる。壁面の残存高は、41~70cmであった。 方位 N86°30'E

床面 電前はやや固い。

埋没土 暗褐色である。中位にはロームブロックが多く混入する。下層は黒褐色土の混入が顕著である。

竈 東壁中央から南にやや偏した所に位置する。燃焼部は壁際に位置し、最終時の火床面は緩やかに立ち上がり煙道に続いている。焚口部は幅80cmと広く、焼土や灰のひろがり方が認められた。壁内には灰褐色土から成る袖部が延びるが崩壊が著しい。

遺物 土器の他に砥石(23)、鉄釘(19)、座金(18)、板状鉄(17)、鉄滓2個(総量416.1g)、土鏝(13~16)が出土した。電燃焼部からは鎌(20)が、焚口部から杯(1)が出土した。南壁際からは杯(4)が、東壁際からは鎌(21)が出土している。平安時代の土器が多く出土したが34・46号住居との関係が考えられる。

(観P78-79 写PL77)

備考 重複する29・31・34・35・42・46号住居のうち本住居に先出するものは31・42号住居と考えられる。南東隅にある径104×68cm、深さ24cmの楕円形を呈する掘り込みは貯蔵穴の可能性もある。

D区 34号住居

位置 g-61

形状 33号住居北壁に接して検出した。埋没土中から平安時代の土器を多く出土しており、33号住居に先立つ住居の存在が考えられるが全容の把握は極めて困難であった。土坑状の遺構の可能性もある。

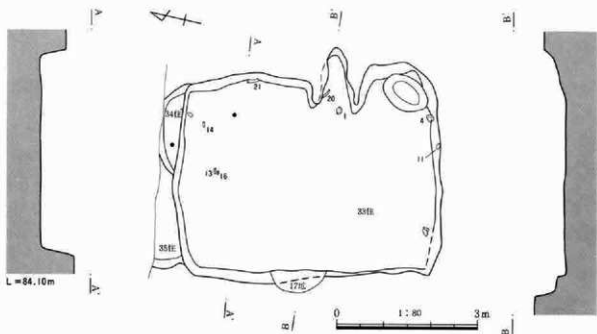
遺物 出土遺物は全て埋没土中から出土した。土器の他に砥石(7)があった。 (観P77 写PL75)

D区 35号住居

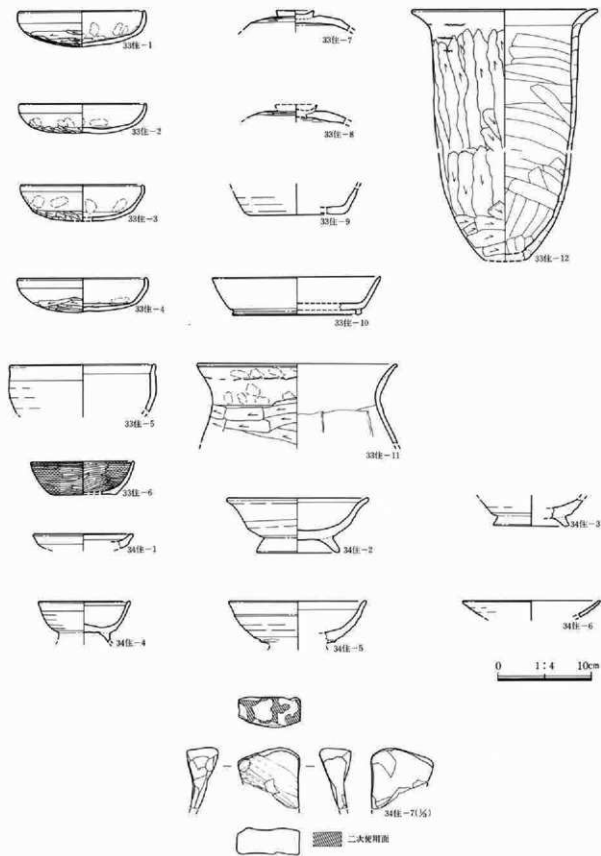
位置 g-60

形状 33号住居に接して検出され、南壁の極く一部を検出した。全体の形状は全く不明、33号住居に後出した可能性もある。

遺物 全く検出されなかった。

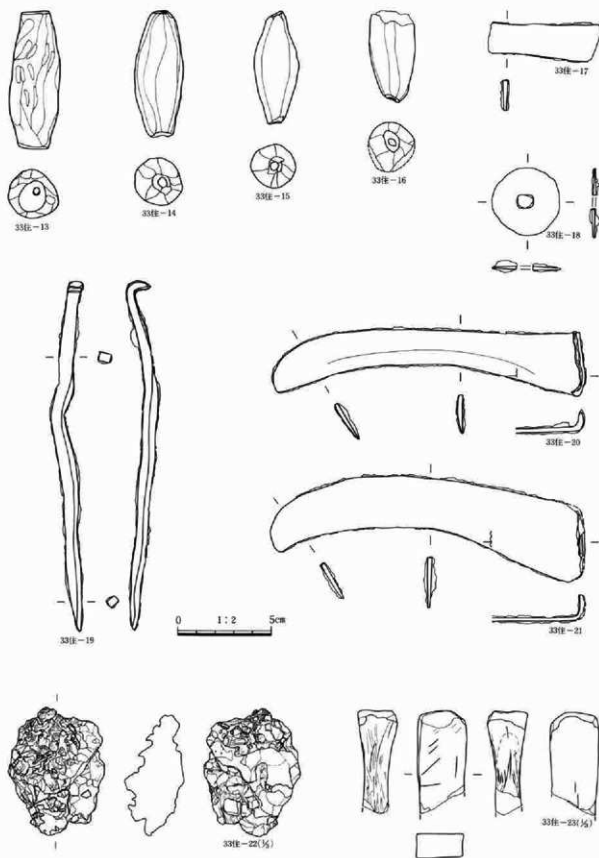


162図 D区33・34・35号住居



163图 D区33-34号住居出土遗物

第2章 調査された遺構と遺物



164図 D区33号住居出土遺物

D区40号住居

位置 f-59

形状 南北4.6m以上、東西3.9m以上を呈すると思われるが北壁は調査区域外、東壁は攪乱を受け規模が確定できなかった。壁面の残存は21~30cmである。

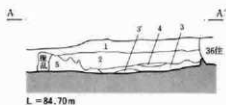
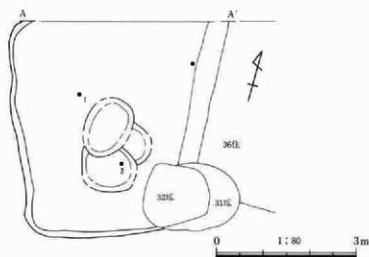
埋没土 ロームの小ブロックを含む暗褐色土が主体となっている。

床面 床面は特に踏み固められていない。床面の中

央やや南側寄りには3基の床下土坑が掘削されていた。

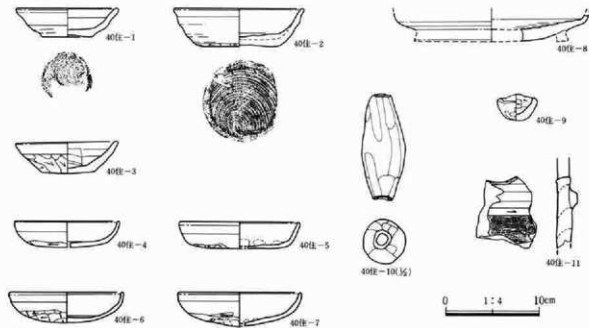
遺物 床面直上からの遺物は無い。杯(1)は床面から3cm程離れていた。杯(2)は床下土坑内出土である。埋没土中からは手摺ね土器(9)、土鍾(10)、円筒埴輪片(11)が出土した。(観P86 写PL80)

備考 本住居は38号住居よりも先出と思われる。また、南東隅は31・32号土坑により削平されている。

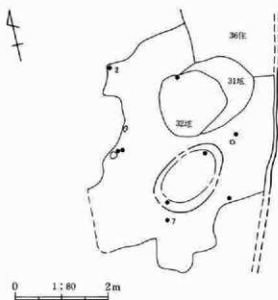


埋没土層

- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 白色軽石がやや混入する。
- 3 暗褐色土 ロームの小ブロックがまばらに含まれ茶味を帯びる。
- 3' 暗褐色土 ロームの混入量が多い。
- 4 黒褐色土 炭化物を多く含む。
- 5 暗褐色土 茶味を帯びるが粘りがない。



165図 D区40号住居とその出土遺物



D区38号住居

位置 e-59 写真 PL78

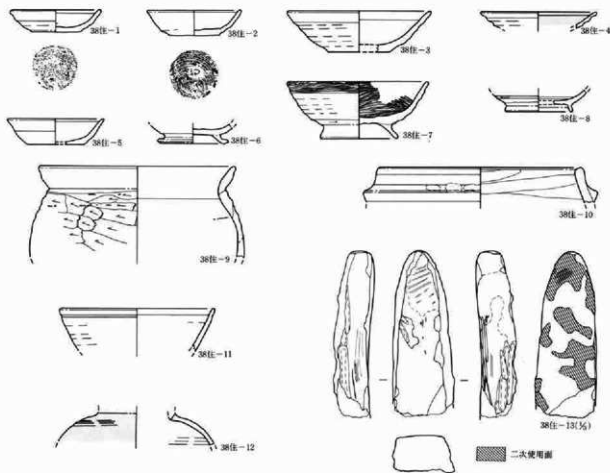
形状 36・40号住居と重複関係にあり、東壁の一部を検出ただけである。全容は解明できなかった。範囲は南側調査区域外に及ぶと思われる。

床面 踏み固められ堅くなっていた。

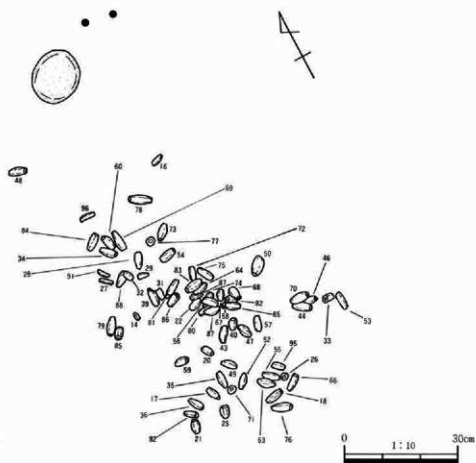
遺物 床面の西側、80×60cmの範囲から土鍾76個が出土した。これらの東側からも4個がまばらに出土しており、埋没土中出土も合わせると総数85個に及んだ。土器は床面から杯(2)、高台付椀(7)が出土している。埋没土中から砥石(13)、鉄滓が出土した。

(観P80~85 写PL79)

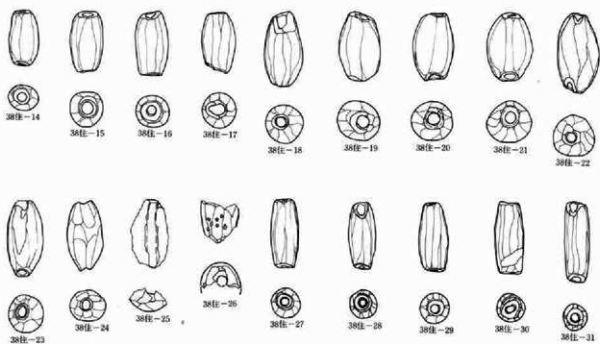
備考 土鍾の出土状態からすると本住居は40号住居より後出であろうか。



166図 D区38号住居とその出土遺物

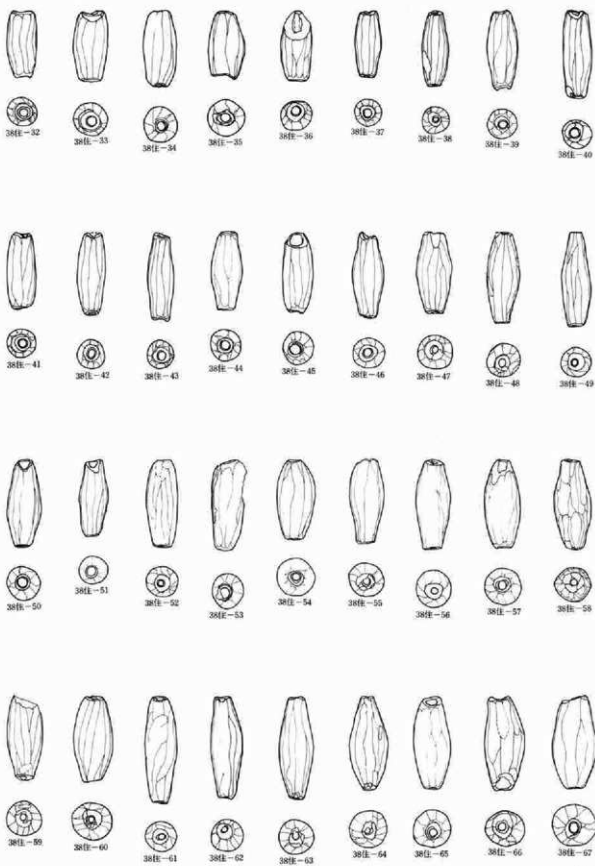


167図 D区38号住居出土の土鏡



168図 D区38号住居出土土遺物

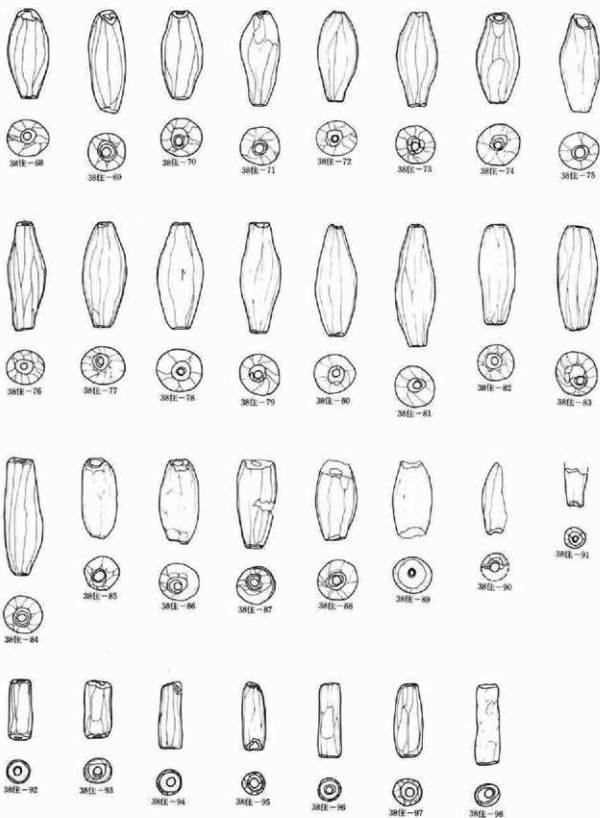
第2章 調査された遺構と遺物



169図 D区38号住居出土遺物

0 1:2 5cm

第1節 住 居



0 1:2 5cm

170图 D区38号住居出土遗物

D区29号住居

位置 f-61

形状 西壁の一部とそれに続く床面を出土した。31・33号住居よりも先出と思われるが調査時には壁面、床面の検出は困難であった。28・46・51号住居により削平を受けたと思われる。

遺物 床面出土の遺物は無く埋没土中から杯(2)、土釜(1)片を出土している。(観P76 写PL73)

D区46号住居

位置 f-61

形状 29・33号住居の埋没土を確認面としたため壁面の検出に困難を極め東壁の竈周辺を検出したに止まった。

床面 竈左手前から床下土壇2基が検出された。南

D区51号住居

位置 g-61

形状 46号住居、38号土壇の削平を受けている。29号住居とも重複関係にあり、竈周辺を検出したに止まった。

竈 東壁に構築され、壁外に狭い燃焼部が掘り込まれている。軸線方向はN78°Eである。

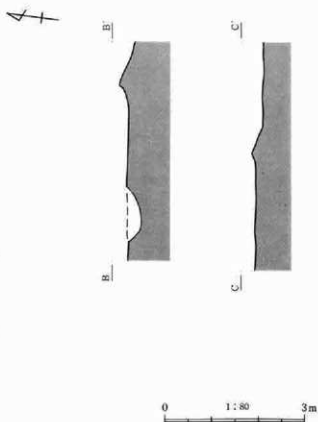
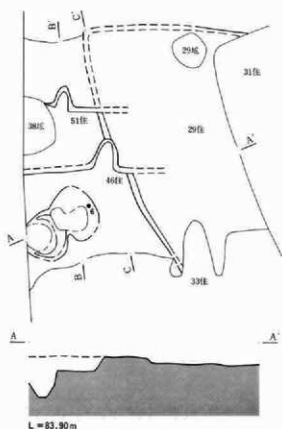
遺物 埋没土中から少量出土。(観P92 写PL84)

側は深さ31cm、北側は深さ79cmであった。

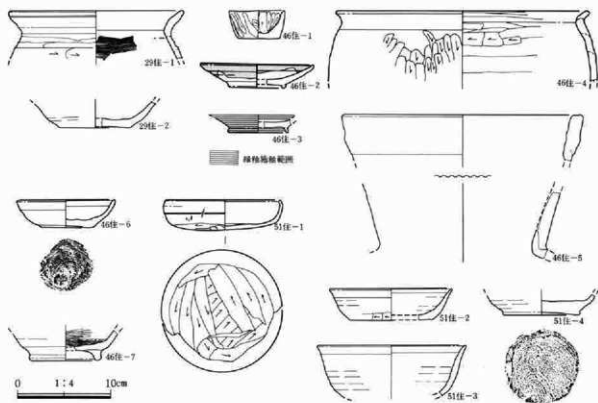
竈 東壁に位置し、燃焼部は壁外に構築される。

遺物 床面直上からの出土遺物は無い。南側の床下土壇内から杯(6)が出土した。(観P89 写PL80)

備考 重複する29・33・51号住居より後出である。



171図 D区29・46・51号住居



172図 D区29-46-51号住居出土遺物

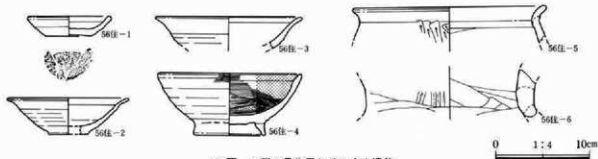
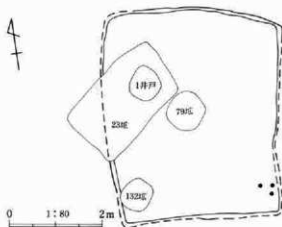
D区56号住居

位置 e-57 写真 PL85

形状 埋没土の確認が困難で壁面の検出は北壁のみで、他は床面の範囲を確認したに止まった。南北4.45m、東西3.65mの規模が予想される。

遺物 埋没土中から少量が出土。(観P94 写PL84)

備考 本住居は重複する47号住居よりも後出で57号住居より先出であろう。23号土壇、1号井戸は本住居よりも後出である。79号土壇は床下土壇の可能性もある。



173図 D区56号住居とその出土遺物

D区41号住居

位置 e-60

形状 43号住居の西側にその一部を検出した。42号住居を切り込む北壁が認められ、残存壁高は43cmである。43号住居との関係は不明確であるが43号住居が新出と思われる。

遺物 埋没土中から少量出土している。

(観P86・87 写PL80)

D区42号住居

位置 f-60 写真 PL80

形状 南北3.48m以上、東西4.16m以上を測る。33・41・43号住居と重複するため全体形状は把握できなかった。北西隅も20号土坑の削平を受けている。

遺物 床面、西側寄りから出土したがいずれも床面から23~25cm離れていた。埋没土から(10)をはじめ

とした円筒埴輪片を多く出土した。52・55号住居出土のものと同接したものもある。また、混入品と思われるが平安時代の杯の底部に穿孔を施したもの(4)が出土した。

(観P87 写PL80)

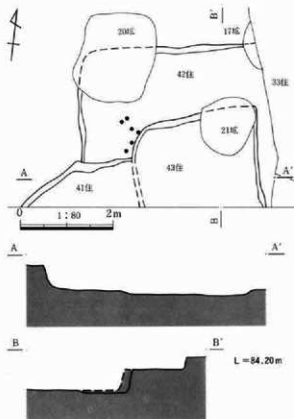
備考 重複関係にあるいずれの住居、土坑よりも先出である。

D区43号住居

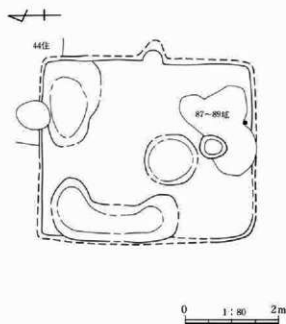
位置 f-60

形状 南北に長軸を有する矩形と思われるが北側部分を調査した。南側は調査区域外に延びる。西壁は41号住居との関係で検出できなかった。東西2.5mを測る。北東隅は21号土坑の掘削により変形するが各隅ともやや丸味を帯びていたようである。壁面の残存は27~32cmである。

備考 埋没土中を含め出土遺物は無かった。41・42号住居よりも後出と考えられる。



174図 D区41・42・43号住居



175図 D区57号住居

D区 57号住居

位置 e-58 写真 PL85

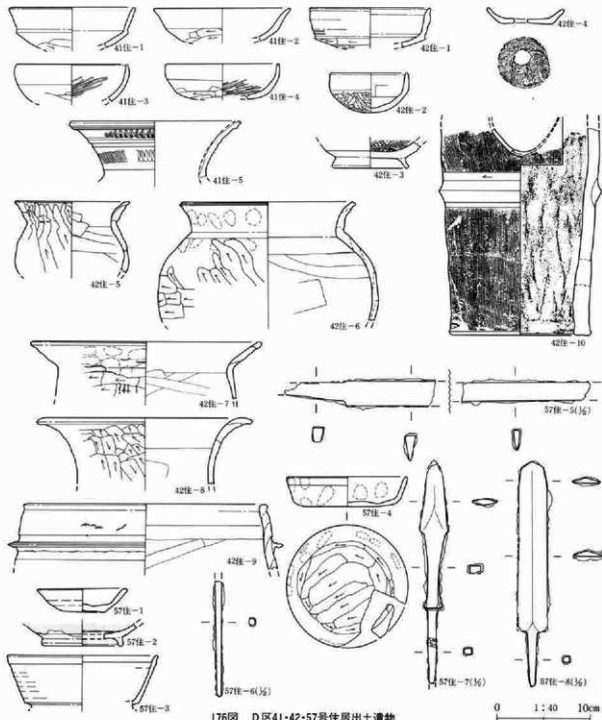
形状 南北4.5m、東西3.8mを測る矩形を呈するが、壁面は南西隅、北東隅で一部分検出しただけである。竈は東壁中央に構築されたが燃焼部の輪郭を確認した。

床面 床下土が掘られている。

遺物 埋没土中から少量の土器と共に鉄鏝(7)、鏝(8)、棒状鉄製品(6)が出土した。

(観P94・95 写PL84・149)

備考 本住居は56・58号住居に後出、44号住居に先立って構築されたと思われる。87~89号土坑は本住居の床下土坑の可能性がある。



176図 D区41・42・57号住居出土遺物

D区45号住居

位置 g-62 写真 PL81

形状 東西4.35mを測る隅丸矩形であるが歪んでいる。北側は調査区域外に延びている。壁面は西壁の上半が崩壊していたが57~76cmの残存高であった。

竈 東壁、中央からやや南側に位置するか。燃焼部は壁際に構築され、煙道は住居壁面を掘削して立ち上がっている。また、左右の袖部は灰褐色の粘性土から成るが崩壊が著しかった。火床面は焚口部分で若干低くなり、炭化物が多く堆積していた。竈の軸線はN80°30'Eで、住居の南壁の走行がN71°Eであるのに比してやや南に振れている。

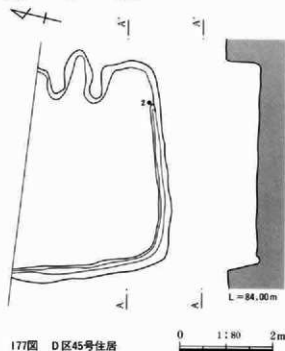
壁溝 西壁下と南壁下にあった。南壁の東端は序々に浅くなる。幅は5~13cm、深さ6~10cmである。

遺物 南壁際、南東隅近くからの杯(2)が出土した。埋没土中からは平安時代の土器と共に瓦(10)の破片が出土している。(観P88 写PL81)

備考 16・28号住居と重複関係にあるがいずれの住居よりも新しい。

D区48号住居

位置 e-56 写真 PL81



177図 D区45号住居

竈 検出が困難で竈周辺の確認に止まった。主体は西側に延びている。竈は壁外に燃焼部をもち、続く煙道は緩やかに立ち上がる。焚口部両脇には自然円礫の袖子を埋置していた。また、燃焼部中央の自然円礫は支脚と思われる。左右の袖子は元来一個体の礫を二個に打ち割って利用した可能性が高い。火床部には炭化物の堆積が顕著に認められた。軸線の方向はS68°30'Eである。

遺物 竈燃焼部から杯(1)、土釜(2)の破片が出土している。(観P89 写PL81)

D区49号住居

位置 e-56

竈 東壁に設置され燃焼部は壁外に突出している。焚口部の左側には円礫、右側には角礫が裾えられていた。燃焼部内、焚口部寄りに検出した円礫は支脚に利用されたと考えられる。

遺物 埋没土中からは土釜(4)の破片などの土器と共に棒状鉄製品(6)が出土した。(観P91 写PL80)

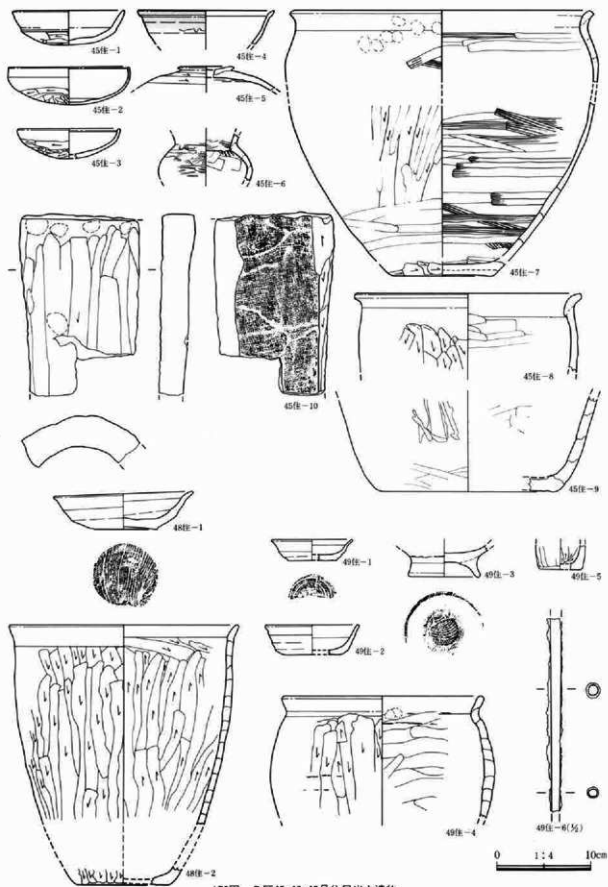
D区50号住居

位置 e-56

竈 東壁に構築されており、47号住居の壁面を破壊している。燃焼部は壁外に構築され、焚口部の左脇に円礫が二石裾えられ、袖部の補強に用いられていたと考えられる。また、南側にもう1つ竈が構築されていた可能性もある。



178図 D区48・49・50号住居



179图 D区45・48・49号住居出土遺物

D区 47号住居

位置 e-57 写真 PL82

形状 南北4.82m、東西4.95mの矩形を呈すると思われる。壁面の残存は16~32cmを測った。

貯蔵穴 南東隅で検出した。長辺70cm、短辺50cmの矩形で深さは49cmであった。

柱穴 主柱穴と思われる4本を検出した。住居の形状に合わせ整然と配置されていた。いずれも掘り方の一方が傾斜をもって掘削されている。規模はP₁が径37×35cm、深さ48cm、P₂が径35×24cm、深さ21cm、P₃が径42×37cm、深さ60cm、P₄は径57×50cm、深さ

57cmである。

遺物 床面から出土した遺物は無かった。杯(3)は南東隅の床面から4cm程離れて出土した。P₃の埋没土中から紡錘車(17)が出土した。埋没土中から鉄滓5個(総量212.3g)を出土している。埋没土中からは平安時代の土器を多く出土したが82号住居に所属するものもあると思われる。(観P90・91 写PL83)

備考 竈は検出されなかったが東壁中央から南側へ70cmの部分で壁面に浅い突出が認められた。焼土等の散見も不明瞭であるが竈構築の可能性がある。50・56・82号住居と重複関係にある。いずれの住居よりも先出であろう。

D区 61号住居

位置 e-47

形状 北西の一隅を検出したのみで全容を解明できなかった。

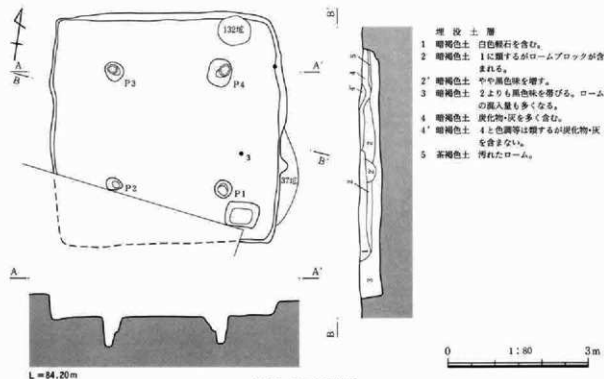
竈 北壁に設置され燃焼部は壁内にある。右側の袖部は欠損していたが、左側は長く延びて先端は臺により補強が施されていた。軸線はN54°Wと北西隅の

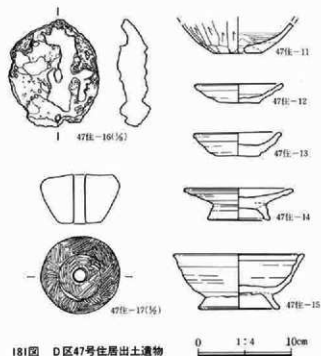
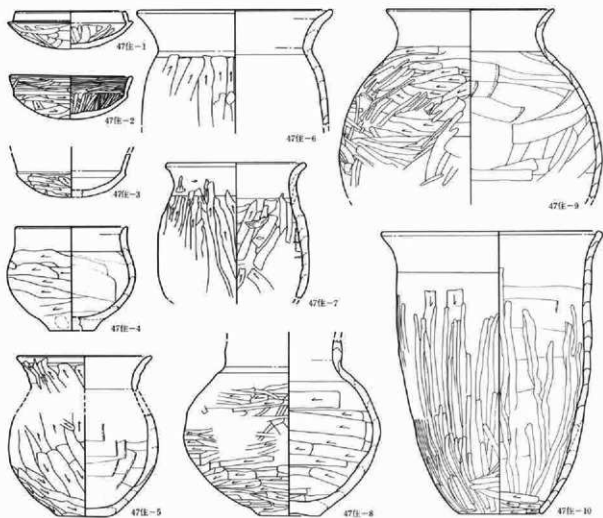
壁面の方向と大きく異なっていた。

貯蔵穴 竈の左側、北西隅に2つのピットがある。西側は径56cm、深さ24cm、東側は径56cm、深さ34cmである。いずれかが貯蔵穴である可能性がある。東側のピットからは杯(2)が出土している。

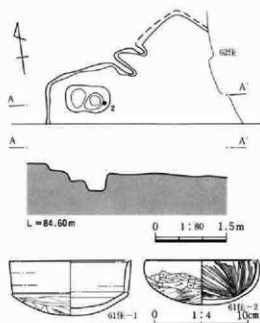
遺物 杯(2)の他、埋没土中から少量の土器が出土した。(観P99 写PL88)

備考 62号住居との重複関係は不明瞭である。

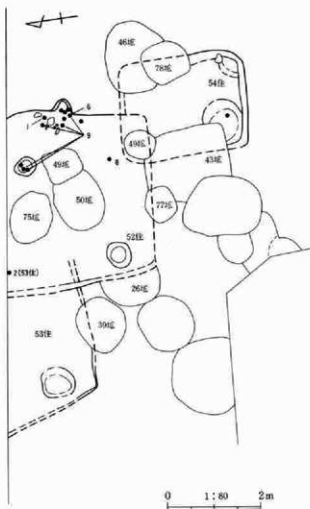




181図 D区47号住居出土遺物



182図 D区61号住居とその出土遺物



183図 D区52・53・54号住居

D 区 52 号 住 居

位置 f-56

形状 竈を東壁に構築し、矩形を呈すると思われるが、竈周辺と西壁の一部を検出したに止まった。53・54号住居、26・44・77号土坑と重複関係にある。また、床面の中央付近には49・50・75号土坑があり、攪乱を受けている。

竈 燃焼部を壁外に設置する形状であるが削平の為焚口寄りが残存していた。袖部の存在は確認できなかった。

遺物 竈焚口部周辺に集中していた。焚口部からは土釜(6)破片が出土した。焚口部前からは杯(1)、形象埴輪(9)が床面から10cm程離れて出土した。紡錘車(8)は床面出土である。管状鉄(7)も見られる。

(観P92・93 写PL84)

備考 竈左手前には径41×36cm、深さ14cmのピットがあり、台付皿、形象埴輪が出土している。形象埴輪は竈手前から出土した形象埴輪(9)と同一個体であろう。

D 区 53 号 住 居

位置 f-56

形状 52号住居及び周辺の土坑との重複により、全容を把握することはできなかった。北側は一部調査区域外に及んでいる。52号住居よりも後出であったのか。

床面 南西隅に円形の床下土坑がある。径69×63cm、深さ42cmであった。

遺物 高台付椀(2)などの土器類の他に埋没土中から底部穿孔の土製品(1)、鉄滓(30.1g)が出土している。
(観P93 写PL84)

D 区 54 号 住 居

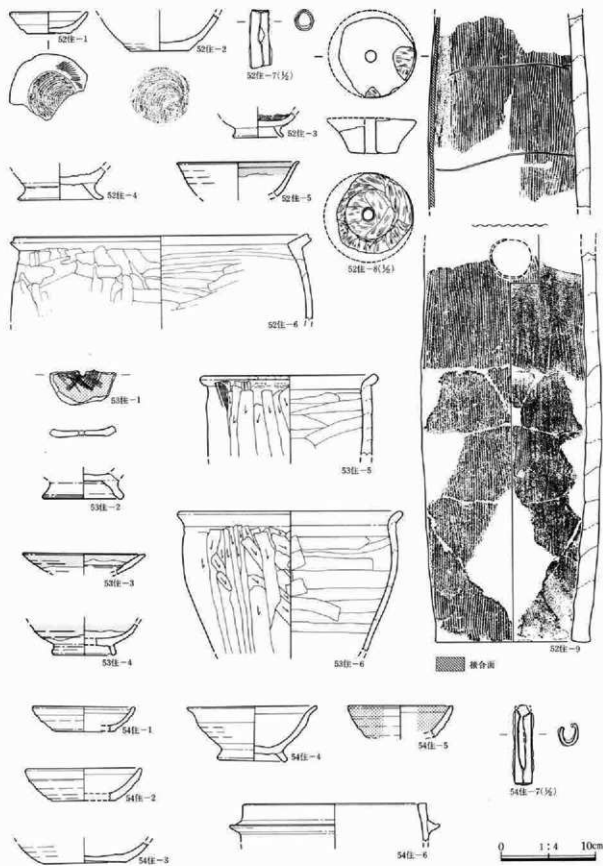
位置 e-57

形状 52号住居、43・44・46・78号土坑との重複により全体形状は把握できなかった。規模は、東西2.06m、南北2.7m以上を測った。四隅はやや丸味をもっている。壁面の残存は、26cmであった。

床面 南側に床下土坑と思われる掘り込みが二箇所に見られた。

遺物 埋没土中から杯、羽釜が出土している。また、管状鉄(7)が出土している。

(観P93・94 写PL84)



184图 D区52-53-54号住层出土遗物

D区 58号住居

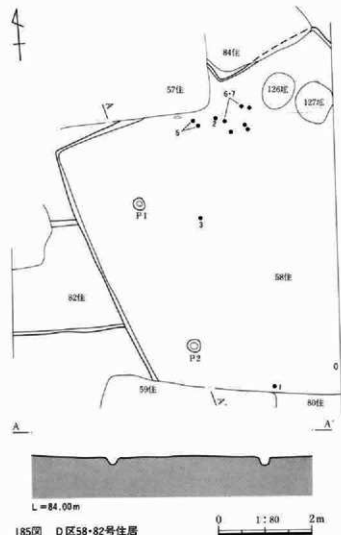
位置 e-57 写真 PL86

形状 東西6.26m、南北7.64m以上の縦長矩形を呈すると思われる。南側は59号住居により削平されている。壁面は13~21cmを確認した。

竈 北壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は壁際に構築されているが西側半分は57号住居により削平されている。袖部の有無も確認できなかった。

柱穴 住居内からは2本のピットを検出した。掘削深度が浅い。規模はP₁が径26×23cm、深さ15cm、P₂が径29×25cm、深さ14cmである。

遺物 電手前から杯(2)、台付壺(5)、甕(6・7)などが出土したがいずれも床面から離れていた。床面中央から杯(3)、南側からは杯(1)が出土している。



185図 D区58・82号住居

埋没土中から円筒埴輪片、鉄滓(重量7.9g)1個が出土した。(観P95・96 写PL87)

備考 本住居は57・82号住居より先に構築されている。126・127号土坑はそれぞれの深さが75、72cmで貯蔵穴の可能性もある。

D区 59号住居

位置 d-58

形状 80号住居と重複関係にある。南北4.28m、東西3.41m程の隅丸矩形を呈するとおもわれる。

床面 南東部分には炭化物のひろがりか認められ近接して竈が存在したと思われる。6基の床下土坑が掘られ黒褐色土が埋没していた。

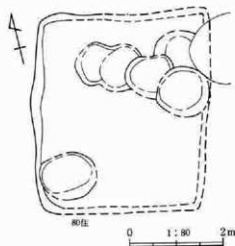
遺物 埋没土中から多量の土器と鉄滓(重量7.9g)1個が出土した。(観P96~98 写PL87)

D区 82号住居

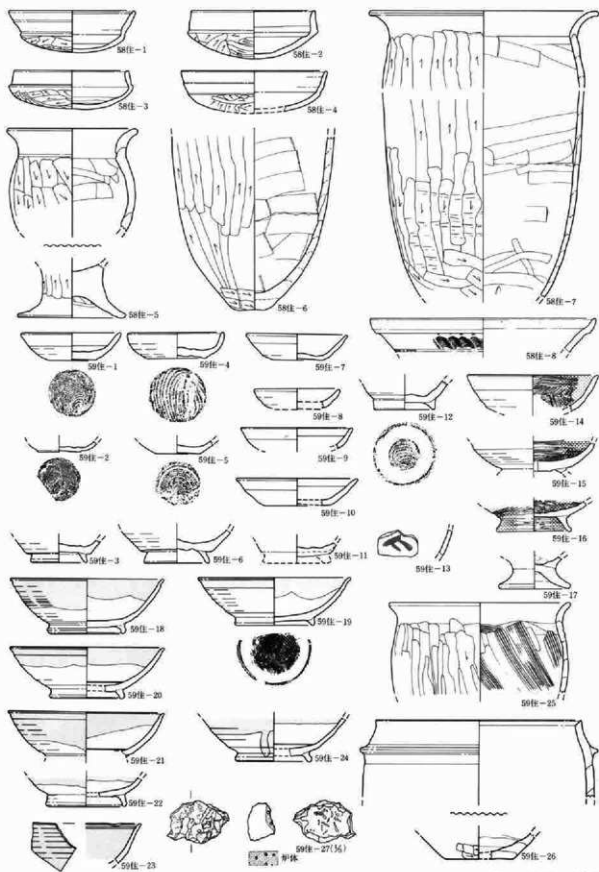
位置 d-57

形状 47・58号住居の間で南壁の一部を検出した。壁面の残存は7~9cmである。

遺物 埋没土中から出土した高台付碗があるがこれが本住居に伴うとすれば本住居は47・58号住居のいずれよりも後出と思われる。



186図 D区59号住居



187图 D区58·59号住居出土遗物

D区60号住居

位置 e-46

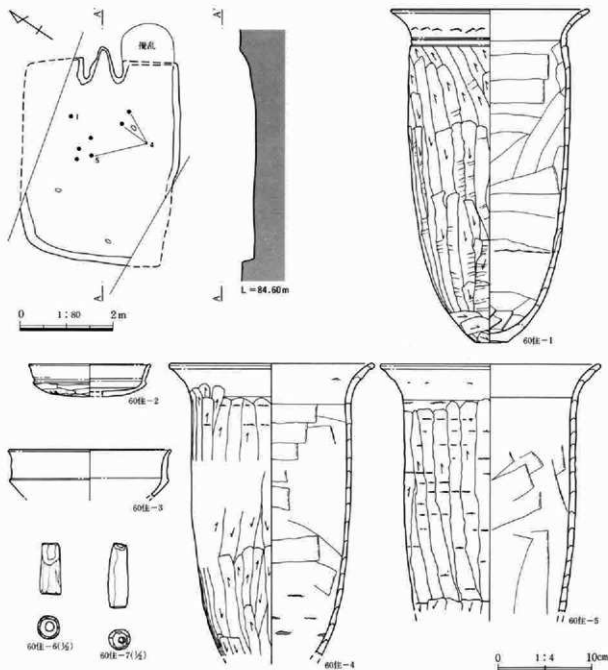
形状 南北両側の一部が調査区域外に及んでいる。
規模は東西4.23m、南北3.23mを推定できる。壁面は
29~32cmの残存であった。方位 N56°30'E

竈 東壁のほぼ中央に位置すると思われる。燃烧部
は壁内に構築され、住居の壁面を掘り込んで煙道が

立ち上がっていた。

遺物 竈左手前から床面中央にかけて数点検出し
た。壺(1)はほぼ完形で、壺(5)は $\frac{1}{2}$ 個体程が床面
から出土した。壺(4)は三箇所からの破片が接合し
た。また、埋没土中から土錘(6・7)が出土している。

(観P98 写PL88)



188図 D区60号住居とその出土遺物

D区67号住居

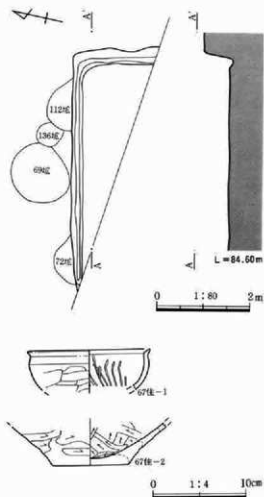
位置 e-49

形状 北東隅を中心とした北・東壁の一部を検出した。主体は南側調査区域外に及ぶが壁面、隅とも整った形状を呈していると思われる。東西の残存は4.24mである。壁面は46~57cmの残存高であった。床面はほぼ平坦である。

壁溝 検出部分で全周する。幅6~10cm、深さ6cmを測る。

遺物 土器が埋没土中から少量出土した。(観P103)

備考 北壁は72・112号土塚により削平を受けている。



189図 D区67号住居とその出土遺物

D区68号住居

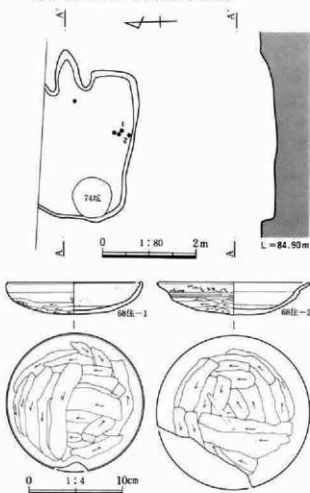
位置 f-49 写真 PL93

形状 東西3.2mを測る隅丸矩形である。各壁面とも出入りが多く、西壁は丸味をもって張る。北側の一部分は調査区域外に及んでいる。壁面の残存は23~33cmであった。

竈 東壁に位置している。燃焼部は壁際に構築され壁外におよんでいる。最終使用時は奥側が埋没し、火床部が斜めに立ち上がっていたと思われる。左右の袖部が残存していたが右側は崩壊が著しかった。長軸の方向はS88°Eである。

遺物 南壁中央壁際から杯(1・2)が出土した。いずれも床面から3~5cm離れていた。杯(1)は竈内と埋没土出土の接合資料である。(観P101 写PL93)

備考 南西隅に74号土塚が重複する。



190図 D区68号住居とその出土遺物

D区 62号住居

位置 e-47 写真 PL89

形状 東西4.67mを測る隅丸矩形であるが南側は調査区域外に及んでいる。西壁の一部は弱く張り出している。壁面は北西隅で34cm、63号住居と重複した北・東壁は10~11cmであった。方位 S86°30'E

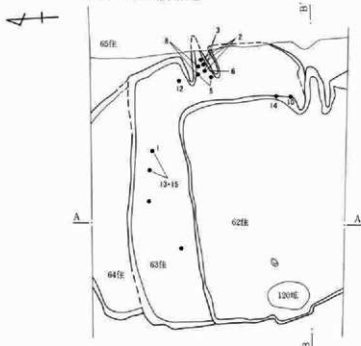
竈 東壁に構築され狭い燃焼部は壁内にある。煙道は燃焼部よりも若干幅狭く、火床部から一段立ち上がり、壁外へ延びていた。

遺物 竈左側の壁際から杯(10)と壺(14)が出土している。その他に床面からの出土は無く埋没土中からは平安時代の土器を多く検出した。また、鉄滓15個(総量1046.2g)を出土した。(観P99-100 写PL88)

備考 本住居は63号住居よりも後出である。



191図 D区63号住居竈



192図 D区62・63・64号住居

D区 63号住居

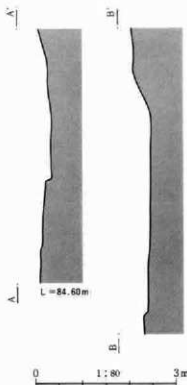
位置 f-47 写真 PL89・90

形状 東西に長軸を有する隅丸矩形を呈していたと思われるが北壁は丸味をもって張り出し、東壁との隅は鈍角をなしている。東西5.55m、南北3.65mを推定できる。方位 N85°30'E

竈 東壁中央からやや北側寄りに位置する。燃焼部は壁際に構築され、奥側は65号住居の構築により削平されている。左右の袖部も削平され下半部のみ残存していた。壺(6)と(8)は底部を下にして出土しており使用時の状況を表出していた。また、竈左側の床面には甕(12)が横倒していた。

遺物 竈燃焼部内の他に北壁際中央から土釜(13)、杯が出土した。床面から6~12cm離れた出土状態や竈出土土器と比較すると本住居と重複関係にある住居が存在した可能性が強い。埋没土中からは磁石(16)が出土した。(観P100-101 写PL91)

備考 本住居は64号住居より後出で62号住居に先立って構築されている。

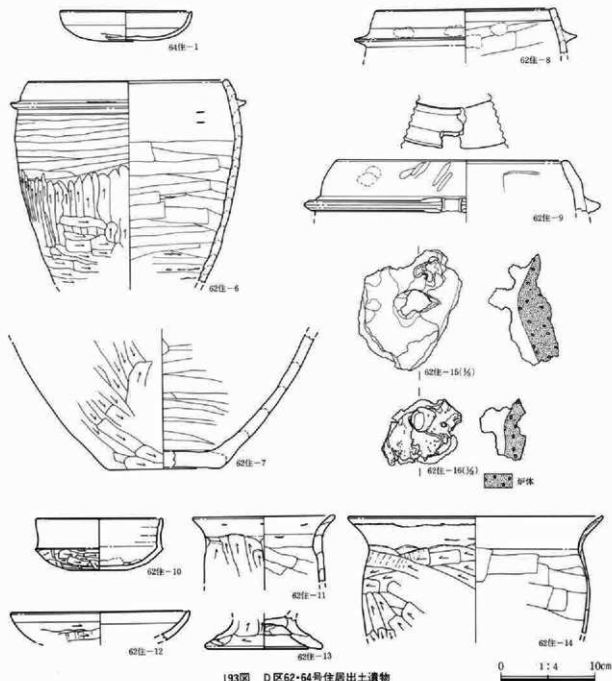


D区64号住居

位置 f-47 写真 P L 89

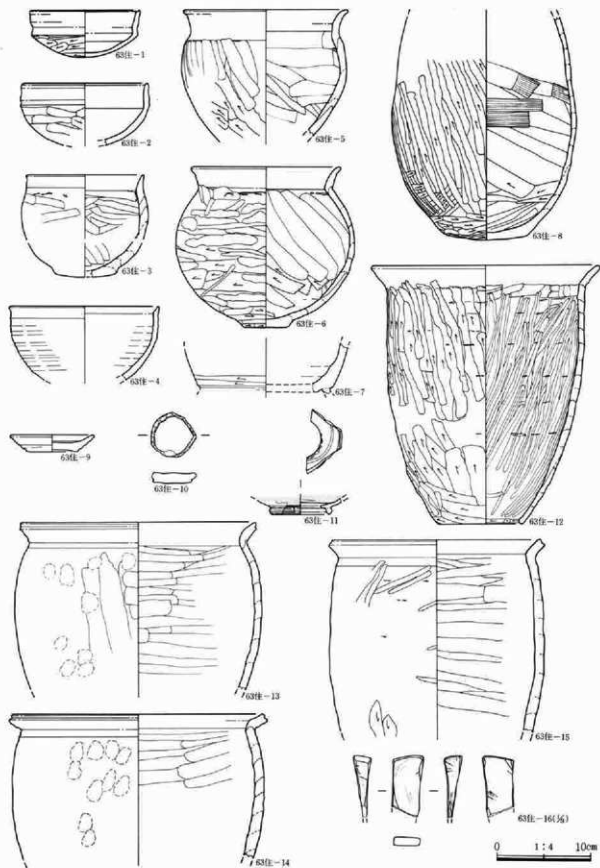
形状 北西隅と東壁の一部をそれぞれ検出した。南側は63号住居に削平されている。北壁の大部分は調査区域外に及んでおり、全容は不明確であった。

遺物 埋没土中からの土器は少量で杯(1)を資料化し得た。(観P102)



193図 D区62-64号住居出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



194図 D区63号住居出土遺物

D区70号住居

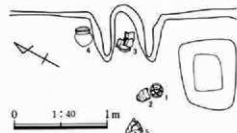
位置 f-51 写真 PL95

形状 東西4.10m、南北3.45mを測る縦長矩形である。東壁は竈の北側がやや外方に開いている。また、土壇との重複などから四隅はいずれも不明瞭であるが全体に整然とした形状を呈していたと思われる。

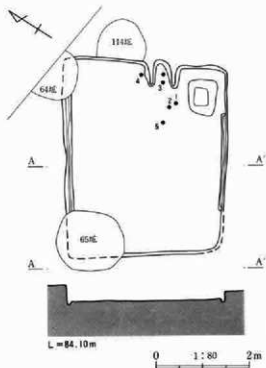
面積 14.3㎡(推定) **方位** N58°E

竈 東壁の中央から南側へ28cmの所に設置されている。燃焼部は壁内にあり、粘質土からなる左右の袖部が延びるが削平が著しい。焚口部の内幅は35cmである。

貯蔵穴 竈右側、南東隅に位置する。各辺74×60cm



195図 70号住居竈



196図 D区70号住居とその出土遺物

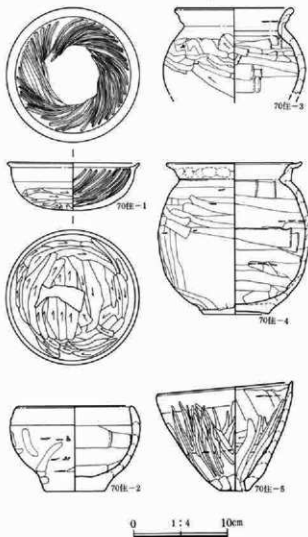
の矩形で深さ40cmを測る。底面も同様の形状である。

壁溝 南壁、北壁下に認められた。南壁は東西両端が不明瞭である。幅は3~6cmと狭い。深さは5~11cmを測った。

遺物 竈燃焼部内から甕(3)が出土した。竈左側からは甕(4)が口縁部を斜め上にして出土した。焚口部手前の床面からは杯(1)、鉢(2)の破片が出土した。この二つから20cm離れて櫃(5)が横倒していた。

(観P104 写PL95)

備考 本住居の壁面にかかる64・65・114号土壇はいずれも本住居よりも後出である。



D区66号住居

位置 f-47 写真 PL92

形状 南北6.9mを測る。南・北両側とも調査区域外に及んでいたが南東隅は整美な形状であった。壁面は20~36cmが残存していた。

床面 竈前を除いて特に踏み固められていなかった。P₁とP₂の間は他の部分に比して9cm程、皿状に落ち込んでいた。

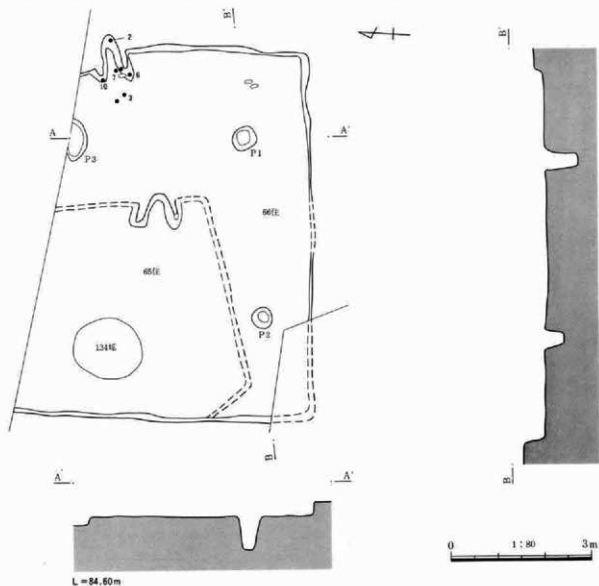
竈 東壁に位置していた。燃焼部は壁際にあり左右の袖部が残る。袖部の先端には倒立した壺(6・10)が据えられ補強材とされていた。燃焼部奥壁は強く

立ち上がり、水平に延びる煙道に接続する。燃焼部には炭化物が多く認められた。

柱穴 南側の2本を検出した。両方とも南壁に近い位置にあり、円筒形の掘り方であった。規模はP₁が径49×45cm、深さ71cm、P₂が径37×32cm、深さ39cmであった。

遺物 竈の燃焼部内からは壺(7)が、煙道部分からは杯(2)が出土した。また、焚口前の床面からは壺(3)が出土している。P₁と東壁との中間の床面からは弧編み石状の円礫2個が出土した。(観P103 写PL93)

備考 本住居は63号住居より後出で、65号住居に先立つ構築と思われる。



197図 D区65-66号住居

D区65号住居

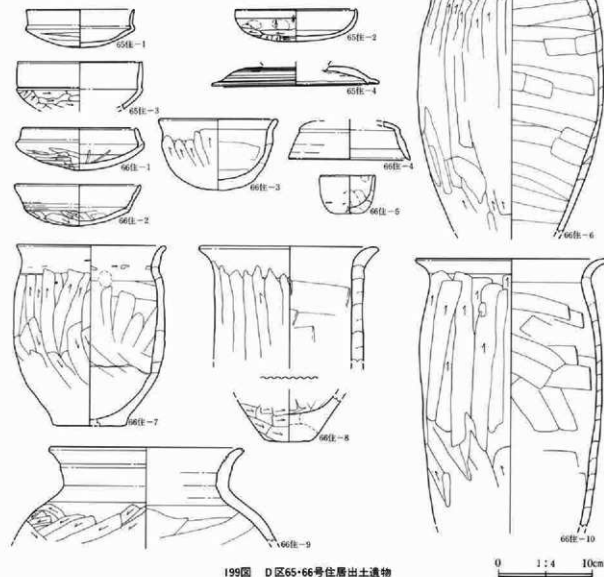
位置 f-46 写真 PL92

形状 66号住居調査中に竈を検出し存在を確認した。壁面は66号住居の埋設土を掘り込んで構築されていたため全く検出できなかった。床面は66号住居と比較してもほとんど差が無かったが竈手前では5cm程の段差があった。

竈 東壁際にあり燃焼部の一部は壁外に及んでいる。煙道は強い傾斜で立ち上がっている。燃焼部内には若干炭化物が散見された。

遺物 埋設土中から少量の土器が出土した。

(観P102 写PL93)



199図 D区65・66号住居出土遺物

D区69号住居

位置 f-50 写真 PL94

形状 東西3.5mを測る隅丸矩形を呈する。北側は調査区域外に及ぶ。壁面の残存は31~39cmである。

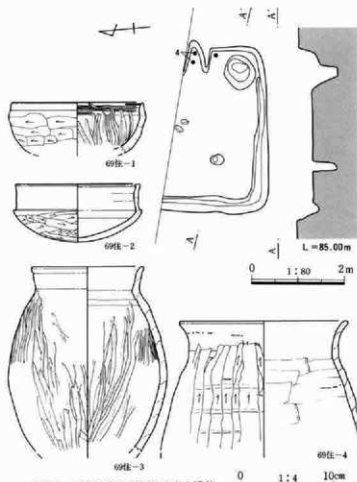
竈 東壁に位置する。軸線の方向はN86°30'Eである。

貯蔵穴 竈右側、南東隅に位置する。径70×60cmの不整円形、中位に稜を持ち大きく外反する断面形状を呈する。深さは54cmである。

壁溝 貯蔵穴周辺を除いて認められた。幅5~20cm、深さ6~12cmである。

遺物 竈燃焼部内中央には甕が倒置され、その奥側から壺(4)が破片で出土した。竈右側からは甕の小破片が出土している。(観P102 写PL94)

備考 床面中央から西壁寄り径30×20cm、深さ47cmのピットを検出した。柱穴になる可能性が高い。



200図 D区69号住居とその出土遺物

D区71号住居

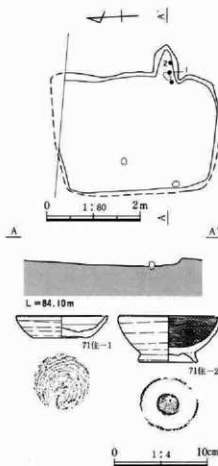
位置 f-52 写真 PL96

形状 南北に長軸を有する横長矩形と思われるが壁面の検出に困難を極め西側半分は床面の範囲を確認したに止まった。床面は南北3.4m、東西2.41mを測った。南東隅を例にとれば四隅はやや丸味を帯びていたと思われる。壁面の残存は10~22cmである。

竈 東壁中央から南側に偏した所に構築され、燃焼部は壁外に掘り込まれている。袖部の有無は確認できなかったが杯(1)に接する円盤が支脚としての原位置を保つとすれば壁内に燃焼部が延びていた可能性もある。

遺物 竈燃焼部内から杯(1)と高台付碗の破片(2)が出土した。(観P104 写PL96)

備考 本住居は72号住居の一部を削平して構築されている。



201図 D区71号住居とその出土遺物

D区72号住居

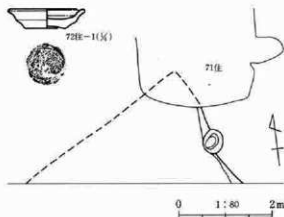
位置 e-51

形状 東壁の一部とそれに続く床面を検出したが71号住居と重複関係にあり、また、南側は調査区域外に及ぶことなどから全容は把握できなかった。

遺物 埋没土中から杯(1)が出土した。

(観P104 写PL96)

備考 71号住居との構築順序は不明確である。



202図 D区72号住居とその出土遺物

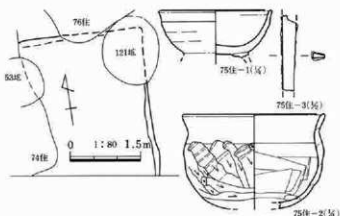
D区75号住居

位置 e-53 写真 PL96

形状 北西隅を中心とした部分的な検出である。74・76号住居、53・121号土坑と重複、削平されている。壁面は東壁で36cm、西壁で26cmの残存であった。

遺物 床面出土の遺物は無く埋没土中から少量の土器と刀子(3)が出土している。

(観P108 写PL96)



203図 D区75号住居とその出土遺物

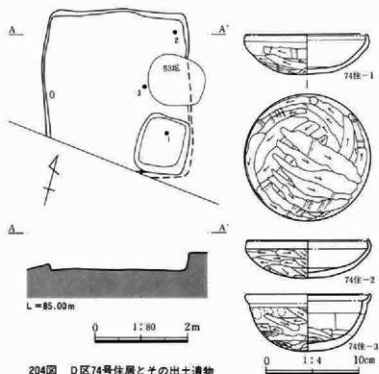
D区74号住居

位置 e-53 写真 PL96

形状 南北に長軸を有する横長矩形で東西3.05mを測った。四隅はやや丸味を帯びる。東側は75号住居、53号土坑と重複しており不明確であった。壁面は良好な部分で28cmであった。

遺物 土器の出土量は少量であった。北東隅の床面から杯(2)が出土している。(観P106・107 写PL96)

備考 重複する75号住居との新旧関係は不明確である。53号土坑は本住居よりも新出である。53号土坑の西側の床面の乱れは電掘り方面の可能性がある。



204図 D区74号住居とその出土遺物

D区73号住居

位置 e-52 写真 PL98

形状 東西3.50m、南北3.37mを測る矩形を呈する。東壁の南側半分は74号住居と重複する。壁面の残存は35cm前後、南壁は削平が著しく15cmであった。

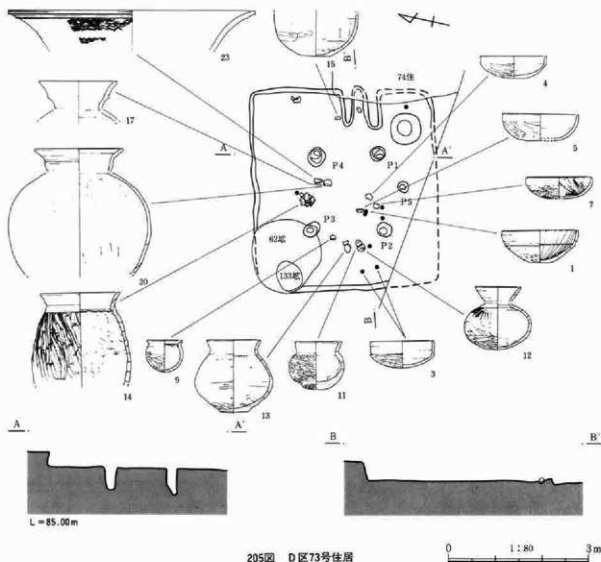
床面 電手前からP₁とP₄を結ぶ付近まではやや踏み固められていた。

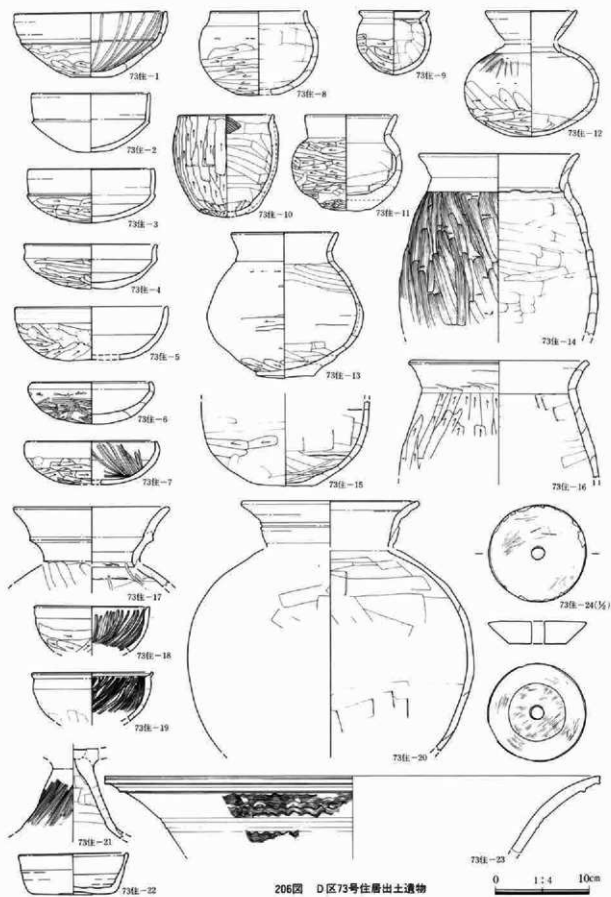
竈 東壁の中央からやや南側に偏して付設されている。燃焼部は壁内に構築され、やや粘性のある構築材から成る左右の袖部が延びている。奥部は74号住居により削平されている。火床部から小円礫が検出されており支脚に利用されていた可能性がある。

貯蔵穴 竈右側、南東隅に位置する。径64cmの円形のピットで深さ64cmの断面形を呈する。

柱穴 5本のピットが検出された。P₁~P₄は主柱穴の可能性がある。四隅の対角線上に位置するが他の住居に比して床面の中央寄りに掘削されている。規模はP₁が径30cm、深さ53cm。P₂が径30cm、深さ17cm。P₃が径28×24cm、深さ27cm。P₄が径40×32cm、深さ43cmである。P₅はP₁とP₂を結ぶ中間、やや南壁寄りに位置する。径21cm、深さ52cmの規模である。

遺物 土器は床面中央寄りに集中していたが多くは5~10cm程床面から離れていた。床面直上からの出土は杯(1)、甕(13)である。埋没土中から紡錘車(24)が出土した。(観P105・106 写PL99)





206图 D区73号住居出土物

D区76号住居

位置 f-53 写真 PL97

形状 南西隅周辺を検出した。主体は北側調査区域外に及んでいる。東側は77号住居により、西壁は51号土壇により削平されていた。

貯蔵穴 南西隅にあり、一辺67cmの隅丸矩形を呈し深さ65cmを測った。

遺物 貯蔵穴の南側から甕(9)が口縁部を上、西側からは甕(8)が横位の状態で出土している。埴(4)は床面から27cm、甕(7)は7cm離れて出土している。(観P107 写PL97)

備考 甕(7)が出土した部分には炭化物の分布が認められたが、近接して竈が存在する可能性が高い。

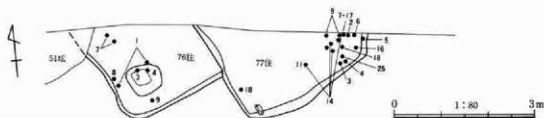
D区77号住居

位置 f-54 写真 PL100

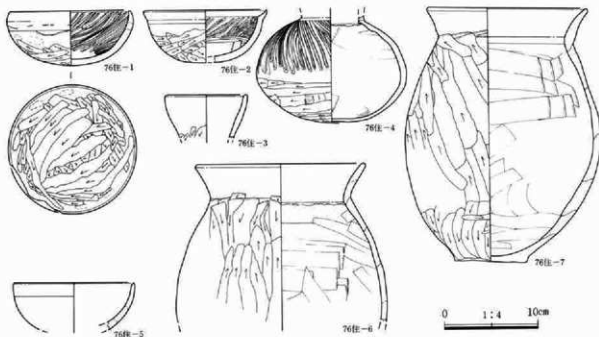
形状 東壁とその周辺を検出した。隅丸の矩形と思われるが主体は北側、調査区域外に及んでいる。東壁の長さは3.07m以上である。壁面は南西隅で52cmを測った。精査が及ばなかったが北東隅の土器が集中する部分には貯蔵穴が存在したと思われる。

遺物 西壁際から甕(10)が出土した。南東隅は床面上30cm程から土器が集中していた。瓶(11)、杯(2~4)、高台付椀(17)は床面とほぼ同じレベルから、甕(16)、脚付盤(14)、須恵器大甕胴部破片(18)は床面レベル以下からの出土である。

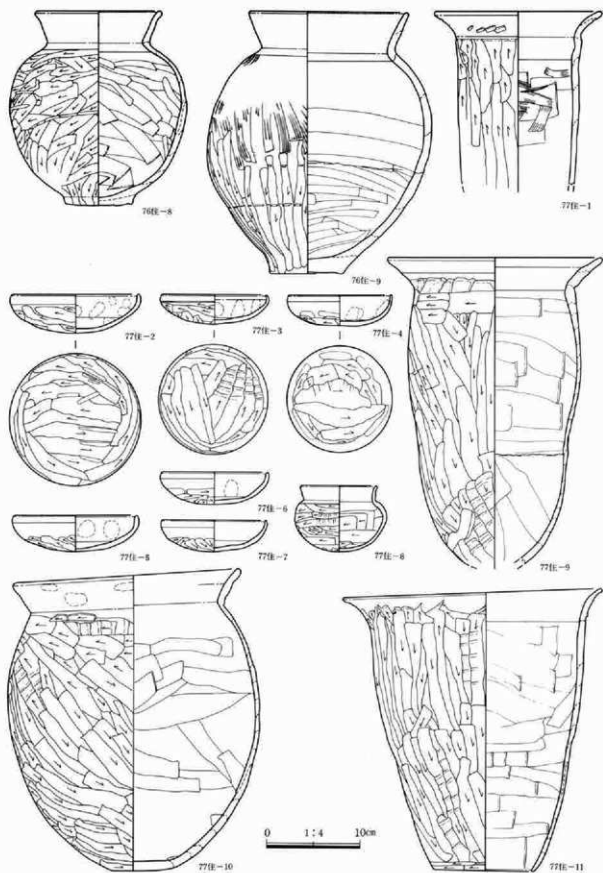
(観P108・109 写PL101)



207図 D区76・77号住居

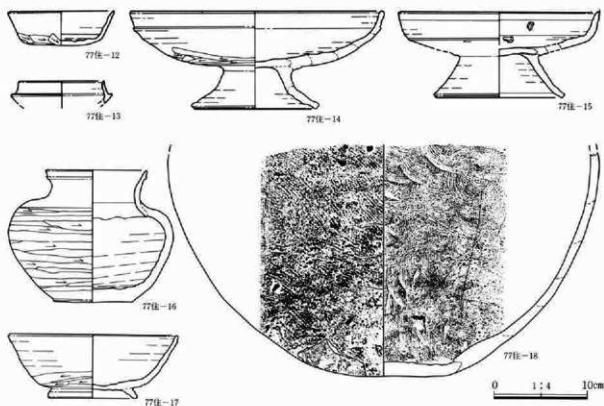


208図 D区76号住居出土遺物

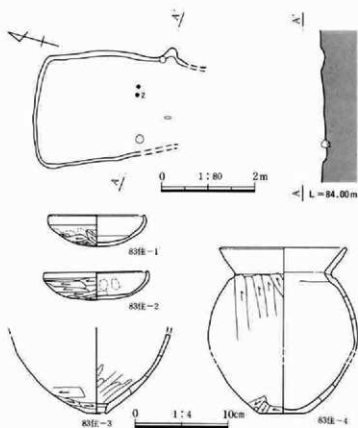


209图 D区76·77号住居出土遗物

第2章 調査された遺構と遺物



210図 D区77号住居出土遺物



211図 D区83号住居とその出土遺物

D区83号住居

位置 e-47

形状 南北に長軸を有する横長の矩形と考えられるが、東壁は削平され未確認である。また、全体形状も歪んでいる。規模は東西2.31m、南北3.05m以上を測った。壁面の残存は9~14cmであった。

竈 東壁に付設され、燃焼部は壁外に構築されていたと思われるが削平が著しく焚口部が残存していた。焚口部左脇の小円礫は袖部の補強と考えられる。

遺物 竈左前、床面中央付近から杯(2)が出土している。

(観P112 写PL103)

D区78号住居

位置 f-55 写真 PL102

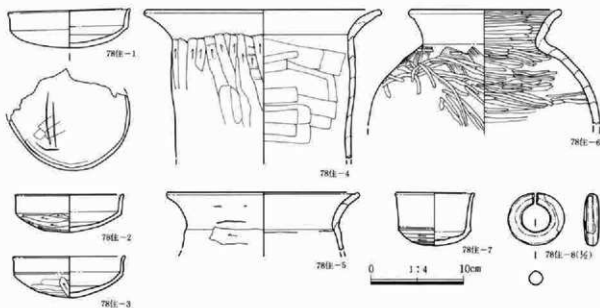
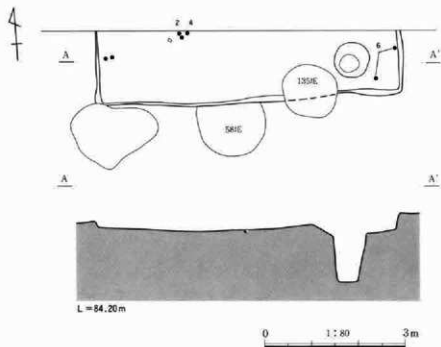
形状 南壁及び、南東、南西隅を検出したが主体は北側調査区域外に及んでいる。東西の規模は6.48mを測る。壁面は58・135号土壇との重複や削平を受け残存高は11～33cmであった。

貯蔵穴 南東隅にある。径73cmの円形で深さ95cmで

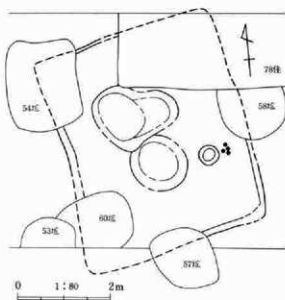
ある。上半はやや崩壊し漏斗状を呈していた。

遺物 床面直上からの出土土器は無い。西壁寄りの床面から紡錘車が出土した。埋没土中からは耳環(8)一個が出土している。(観P112 写PL103)

備考 南西隅は79号住居の床下土壇によって削平を受けている。



212図 D区78号住居とその出土遺物



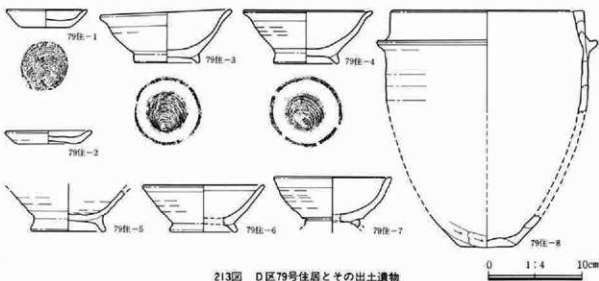
D区79号住居

位置 f-55 写真 PL102

形状 78号住居、54・57・58・60号土壇などの重複関係が著しく全体形状は把握できなかった。規模は南北4.41mの範囲を推定できる。

遺物 東壁寄りの床面から3cm程低い位置から高台付椀(4・5)などが出土している。土器は浅い掘り込み内から出土しており、竈に関する遺構から出土したと思われる。(観P110 写PL103)

備考 床面の中央には床下土壇が掘られている。また、このやや東側寄りには径40cm、深さ20cmのピットが認められた。出土遺物の検討からは78号住居に先立って構築されたと思われる。



213図 D区79号住居とその出土遺物



214図 D区84号住居

D区84号住居

位置 e-58

形状 埋没土の識別が困難であった為に壁面を検出することはできなかった。床面の確認範囲も歪んでいる。南北2.23m、東西2.4mを測った。

備考 58号住居よりも後出であるが西側の57号住居との関係は不明瞭であった。

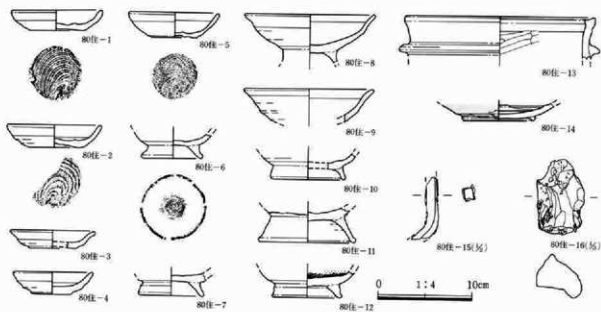
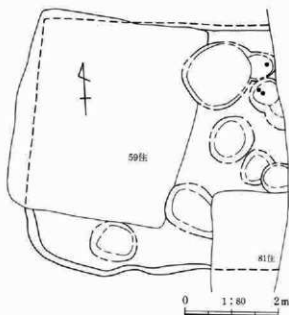
D 区 80 号 住 居

位置 c-58 写真 PL102

形状 59号住居、81号住居と重複関係にあり、全体の形状は把握できなかった。南北5.22m、東西5.47m以上をその範囲と考えたが2軒以上の住居が重複したと思われる。

床面 住居内に検出された土坑は床下土坑と考えられる。埋没土は黒褐色土のみものと黒褐色土に焼土が多く混入したものがある。東側調査区域外寄りの床下土坑からは杯(2・5)、高台付椀(10)、鉄製品(15)が出土した。

遺物 埋没土中から多くの土器と共に鉄滓(16)を出土した。(観P110・111 写PL103・149)



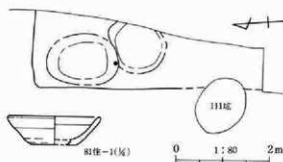
215図 D区80号住居とその出土遺物

D 区 81 号 住 居

位置 c-58

形状 80号住居の南側にある。2軒の住居の重複関係は不明である。床面には黒褐色土を埋没とする床下土坑が認められる。

遺物 床下土坑中から杯(1)などが少量出土した。(観P111)



216図 D区81号住居とその出土遺物

E区2号住居

位置 Y-58 写真 PL104

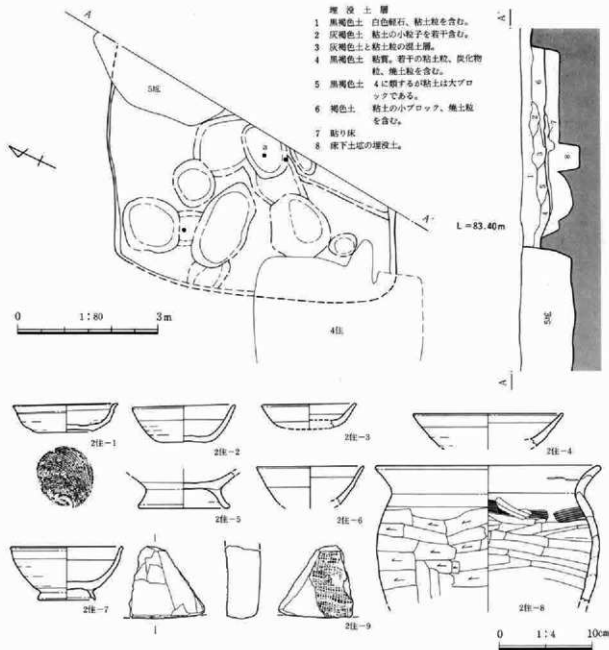
形状 平面形は1・3～6号住居との重複により形状を確認できなかった。床面はほとんど確認できなかった。調査時に床下土域を通例の土域として認識し、掘り下げをおこなった為である。

床面・掘り方 床面は褐色土と粘質の灰褐色を固めた貼り床である。床下土域は黒色土、褐色土を埋没土

としており、粘土粒を多く混入している。床下土域a部分では貼り床中に薄い灰層の堆積が認められた。

遺物 遺物は住居の埋没土と床下土域の埋土中から出土している。(観P114 写PL105)

備考 重複する住居中1・4号住居は本住居より後出、3・5・6号住居は先出と思われる。また、北東隅の5号土域は本住居よりも後出である。

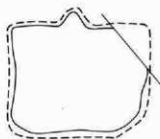


E区1号住居

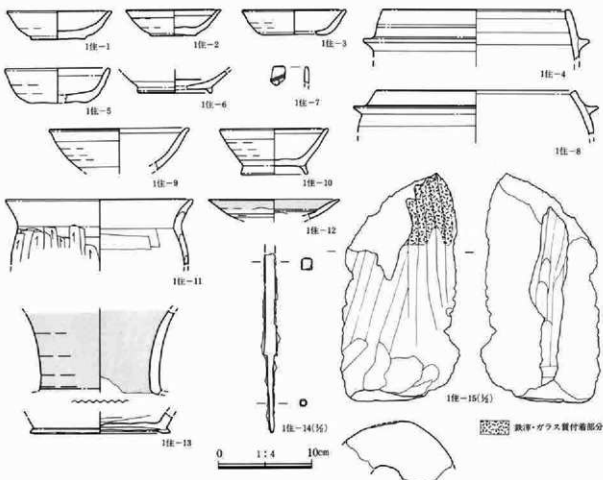
位置 Z-58

形状 2号住居の埋没土を確認面としたため床面の範囲を検出したに止まり、壁面の形状は全く不明である。東壁の中央に竈が構築され、南北2.7m、東西2.25m程の矩形を成していたと思われる。

遺物 埋没土中から墨書の記された杯の破片(7)、羽口の破片(15)、鉄滓5個(総重量306.4g)を出土している。(観P113・114 写PL105)



0 1:80 2m



218図 E区1号住居とその出土遺物

E区6号住居

位置 Z-58 写真 PL108

形状 西側の一部を検出したが、2・5号住居との重複もあり、全容を解明できなかった。

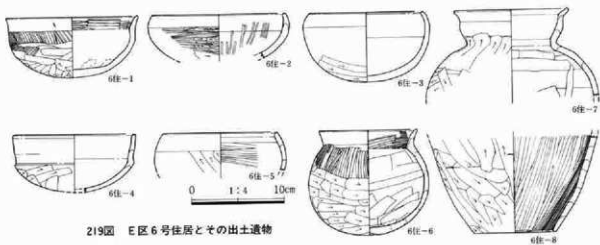
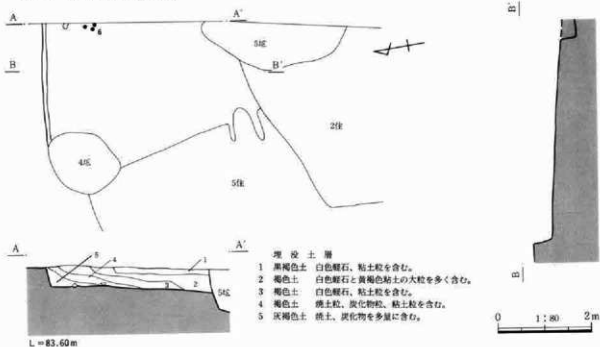
床面 南側に向かって緩やかに下がる。全体にやや

踏み固められていた。

遺物 床面からの出土遺物は無い。調査区東側、北壁際から杯(1)、甕(6)が出土しているがそれぞれ8cm、4cm程床面から離れている。(観P118 写PL109)

備考 2・5号住居よりも先出と思われる。竈、柱穴は検出されなかった。

第2章 調査された遺構と遺物



219図 E区6号住居とその出土遺物

E区3号住居

位置 X-58 写真 PL106

形状 地形は本住居の南側で緩やかに傾斜する。耕作の掘削も深いためか、南壁は削平されている。検出できたのは西壁の一部分である。規模は南北6.0m、東西5.48m以上を測ると思われる。

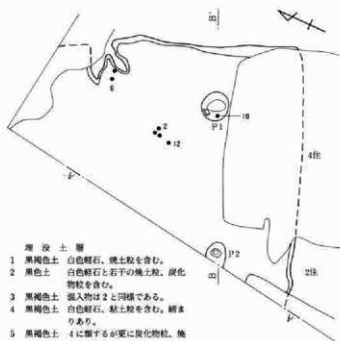
竈 西壁に構築されている。壁内に粘質土を用いて作られた左右の袖部が延びている。火床部には炭化物の薄い層が堆積していた。

柱穴 2本を検出した。規模はP₁が径59cm、深さ42

cm。P₂が径42cm、深さ24cmを測った。

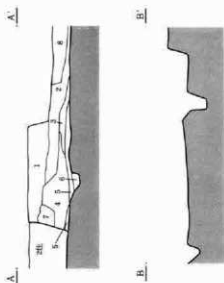
遺物 竈焚口部から杯(6)が出土している。住居の床面からの出土遺物は無く、杯(2)は11cm、甕(10)は9cm、甕(12)は4cm床面から離れて出土した。埋没土中から羽口(13)、鉄滓3点(総重量130.3g)、鉄鏝(15)を出土した。(観P114・115 写PL107)

備考 本住居は2・4号住居と重複関係にあるが2号住居に後出し、4号住居に先だつものと思われる。

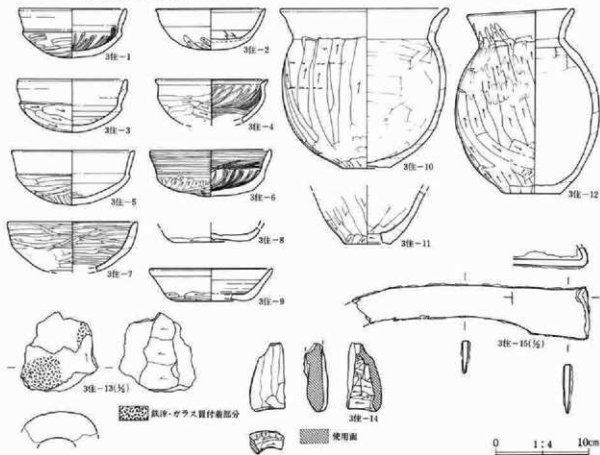


埋 没 土 層

- 1 黒褐色土 白色軽石、焼土粒を含む。
- 2 黒色土 白色軽石と右下の焼土粒、炭化物粒を含む。
- 3 黒褐色土 埋入物は2と同様である。
- 4 黒褐色土 白色軽石、粘土粒を含む。締まりあり。
- 5 黒褐色土 4に類するが更に炭化物粒、焼土を混入する。
- 6 黒褐色土 柱穴埋没土。
- 7 黒褐色土 粘土粒、焼土粒を含む。
- 8 黒色土 粘質。白色軽石、炭化物がめだつ。住居の埋没土をまぎっている。



L=83.40m



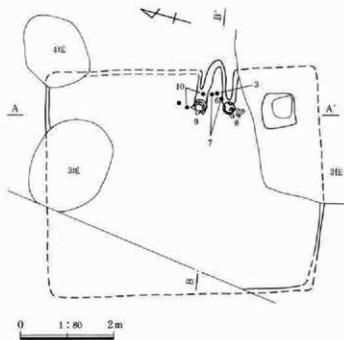
220図 E区3号住居とその出土遺物

E区5号住居

位置 Z-58 写真 PL108

形状 2・6号住居、3号土壇との重複により削平等が著しく全容を把握するには至らなかった。南北は5.83mを測ると思われる。

竈 東壁中央からやや南側に寄って位置すると思われる。燃焼部は壁内にあり、壁内に灰褐色の粘質土から成る左右の袖部が延びている。両袖とも先端に壺(8)、甔(9)を倒立させ補強している。長軸の方位はN81°Eである。



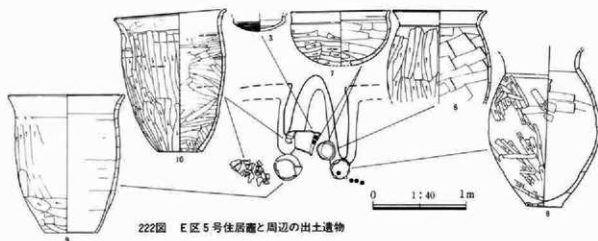
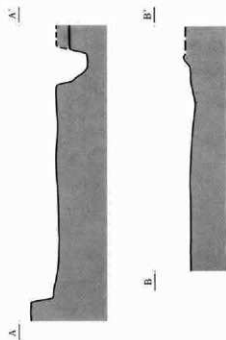
221図 E区5号住居

貯蔵穴 南東隅に位置する。上端70cmの正方形に近い矩形で深さ67cmを測った。

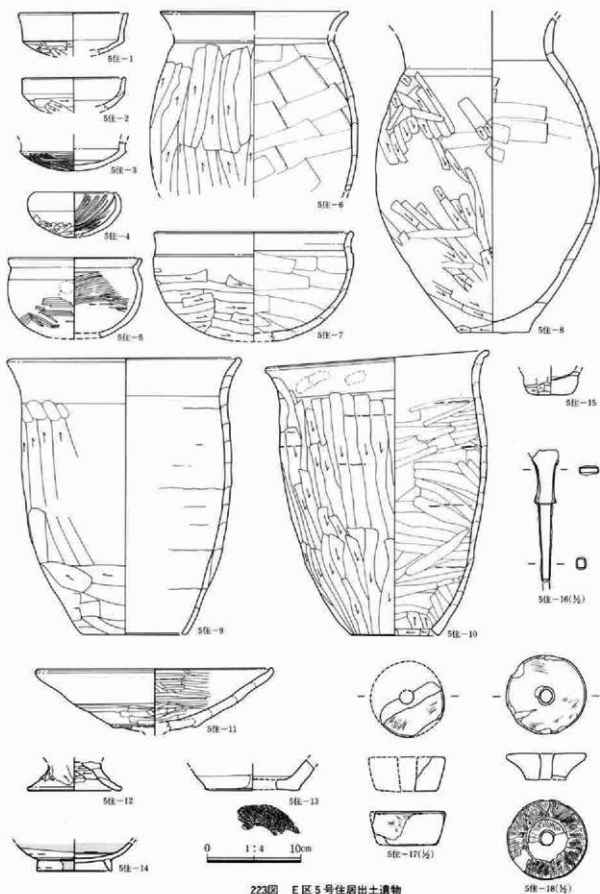
遺物 竈燃焼部内から甔(10)が横転した状態で出土し、左袖部外側から出土した破片と接合している。右袖の壺(8)に接しては鉢(7)が出土し、内側に(8)の破片が含まれていた。埋没土中から紡錘車2点(17・18)、鉄鏝(16)が出土している。

(観P116・117 写PL105・109)

備考 重複関係は6号住居が先出、1・2号住居、3号土壇が後出である。



222図 E区5号住居竈と周辺の出土遺物



223図 E区5号住居出土遺物

E区4号住居

位置 Y-58 写真 PL106

形状 東西に長軸を有する矩形と思われる。東壁の竈南側と南壁は3号住居の埋没土を確認面としたため検出が困難であった。

方位 N81°E

埋没土 若干の白色軽石、炭化物、焼土粒を含む褐色土を主体に上層に黄色の粘質土の小ブロック、白色軽石を含む黒褐色土が堆積していた。

床面 床面は壁際にして中央がやや低くなっているがこれは床下土壇の存在と関連があると思われる。床下土壇の上面には貼り床が認められ、粘質土粒、灰を含んだ褐色土でやや踏み固められていた。

掘り方 床面の南側半分程の調査をおこなったこと

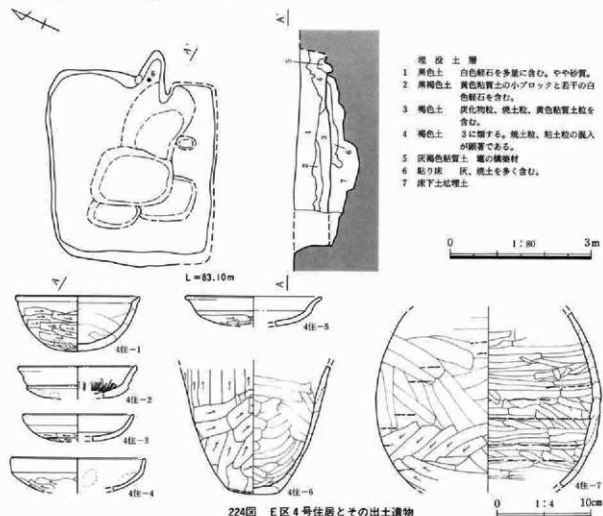
る床面中央に大小5基の床下土壇が確認された。埋土は白色軽石を含む褐色土から成り、焼土、灰、黄色粘土粒を多く含んでいた。

竈 東壁のほぼ中央に位置すると思われる。燃焼部は壁際から壁外にかけて構築されている。右側は短い袖部が壁内に延びる。灰褐色の粘質土を構築材としている。左脇には自然礫が埋置され補強材となっている。焚口部前1m程は灰及び炭化物の薄い層が数枚、約5cmの厚さで堆積していた。

遺物 燃焼部内から竈の下半部(6)が底部を上にして検出された。その他埋没土中から多くの土器が出土している。

(観P117 写PL107)

備考 3号住居との重複関係は出土遺物の検討から本住居が後出と考えられる。



224図 E区4号住居とその出土遺物

F区1号住居

位置 J-47

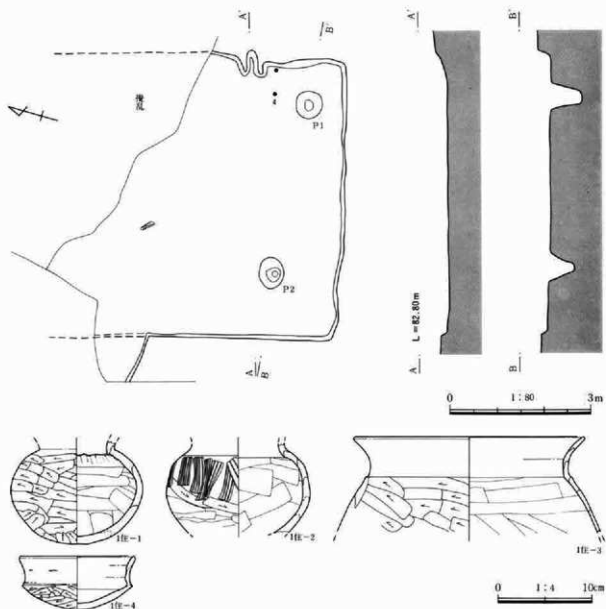
形状 東西5.8mを測る矩形を呈する。北側は広範囲にわたり攪乱を受け、床面の3/4程は削平を受けていると思われる。南北方向の残存長は約6.2mである。西壁の一部は更に西側に張り出すようにも見える。

竈 東壁にあり、南東隅から2.0mを測る。狭い燃焼部は壁際に作られ、左右の袖部は崩壊が著しかった。軸線方向はN75°Eである。

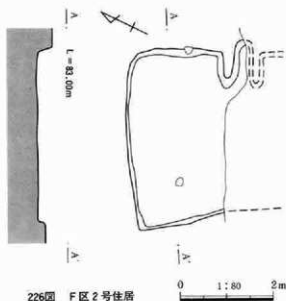
柱穴 2本を検出した。規模的には良好であるがP₁は壁面に近接しており貯蔵穴の可能性もある。規模はP₁が径65×53cm、深さ56cm。P₂は径56cm、深さ58cmである。

遺物 床面からの出土遺物は無い。電右手前から杯(4)が出土したが床面から8cm離れている。また、中央やや北側寄りの床面から炭化物の細片が出土した。(観P118 写PL111)

備考 北側の2号住居とは実質的には重複関係にあるが攪乱の為新旧関係は確認できなかった。



225図 F区1号住居とその出土遺物



226図 F区2号住居

F区2号住居

位置 K-47

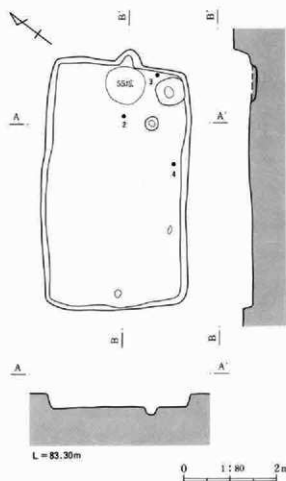
形状 東西3.6mを測る矩形であるが南側は擾乱を受け削平されている。南北の残存長は2.58mである。壁面は12~34cmの残存であった。

竈 東壁に構築されたが擾乱を受け、燃焼部中央から南側は右袖部を含め削平される。燃焼部は壁際にあり、煙道は削平されている。

遺物 床面からの出土遺物は無かった。埋没土中出土の壺(1)の破片が資料化たる土器である。

(観P119)

備考 柱穴、壁溝は確認されなかった。1号住居と重複関係にある。



227図 F区3号住居

F区3号住居

位置 L-47 写真 PL110・111

形状 東西に長軸を有する縦長矩形である。各壁面は弱く弧状に張り、各隅も丸味を帯びる。規模は東西5.27m、南北3.12mを測る。壁面は垂直に近い立ち上がりで残存高は22~34cmであった。

面積 15.9㎡ **方位** N55°30'E

床面 多少の起伏はあるがほぼ平坦、特に踏み固められていない。

竈 東壁中央の掘り込みがそれと思われる。燃焼部の一部は住居の壁を掘り込んでいる。袖部の有無は不明である。

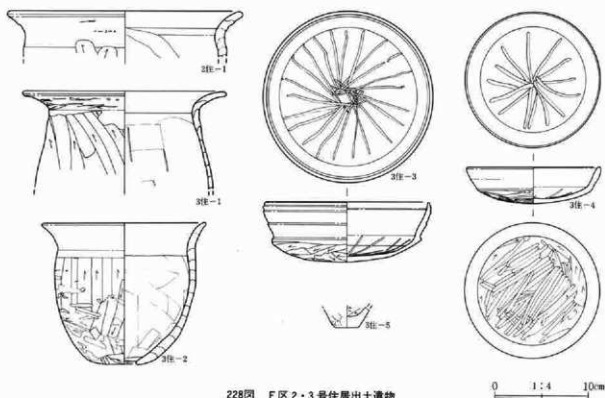
貯蔵穴 南東隅に位置する。径58cmの円形を呈し、深さ37cmを測った。

柱穴 電右手前にピットを検出した。位置的には良好であるが径26cm、深さ15cmとやや浅い。

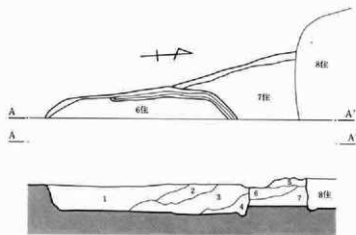
遺物 電手前の床面から甗(2)が潰れて出土している。南壁際からは杯(4)が、電右側の壁際からは5cm離れて杯(3)がいずれも完形で出土している。また、南壁、西壁の際には自然礫が認められた。

(観P119 写PL111)

備考 竈焚口部分に55号土壌が認められる。性格や住居との重複関係は確認できなかった。



228図 F区2・3号住居出土遺物



L=83.40m

229図 F区6・7号住居

埋没土層

- 1 暗褐色土 やや黒味を帯びる。白色軽石、ローム粒を混入する。
- 2 暗褐色土 1に類するが軽石の混入が少なくなる。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 黒味が薄れるとともに混入物も少なくなる。
- 5 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を混入する。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを混入する。

F区6号住居

位置 O-47

形状 西壁及び床面的一部分を検出したに止まり主体は東側に広がると思われる。全容を把握できないが隅丸の矩形と思われる。壁面の残存は30cmを測った。

埋没土 黒味のある暗褐色土層で、ローム粒の混入

状態で分層できる。

床面 やや踏み固められていた。

壁溝 西壁の北側半分に認められたが南側に行くに従い不明瞭になる。幅5cm、深さ9cmを測る。

遺物 資料化に足る遺物は出土していない。

備考 7号住居を削平して構築されている。

F区7号住居

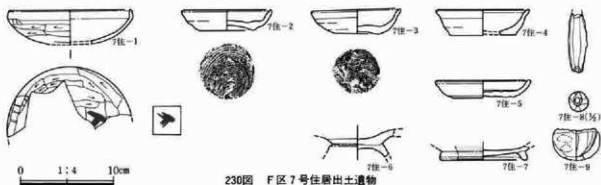
位置 O-47

形状 6・8号住居と重複関係にあり、両住居に削平され一部分の検出に止まった。主体は東側に延びる

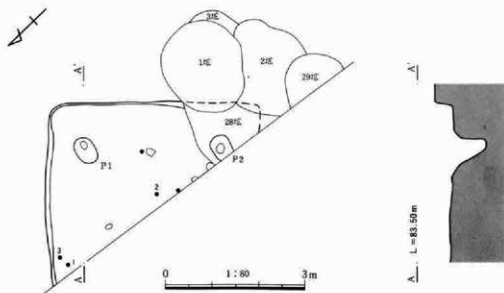
と思われる。残存壁高は35～37cmである。

床面 貼床が施されている。

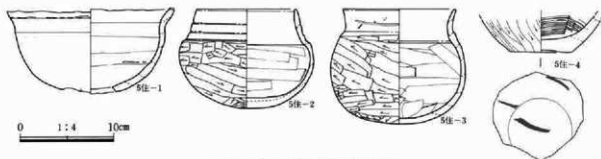
遺物 埋没土中から土器片を多く出土している。また、貼床下、掘り方内から土錘(8)、鉄滓4個体(総重量199g)が出土した。(観P120・121 写PL115)



230図 F区7号住居出土遺物



231図 F区5号住居とその出土遺物



F区5号住居

位置 O-47

写真 PL113

形状 南東隅を中心とする約 $\frac{1}{2}$ の調査を実施できた。隅丸の矩形を呈していたと考えられる。残存長は東西3.6m、南北3.83mを測った。南東隅の壁高は40cmである。

柱穴 主柱穴は4本と思われるが2本を検出したがP₁は深さが浅く柱穴とするには疑わしい。P₂は据

り方の西側が傾斜、平面形は楕円状を成す。規模はP₁が径58×42cm、深さ68cm、P₂が径54×50cm、深さ13cmである。

遺物 鉢(1)と壺(3)は東壁際の床面から口縁部を上にして出土した。短頸壺(2)は床面中央からの出土である。P₁とP₂の間の床面からは一辺20cm程の自然礫が検出された。(観P120 写PL113)

備考 竈、貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。南壁の西端は1・2・28号土壇と重複関係にある。

F区9号住居

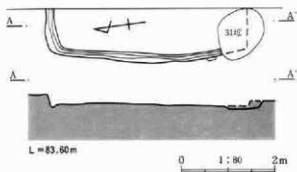
位置 Q-47

形状 西壁とその周辺部分を調査した。主体は東側調査区域外にある。また、南側は31号土壇により削平を受けており、南北の規模は4.62m以下である。壁面の残存は5~22cmであった。

壁溝 確認部分で全周していた。幅4~7cm、深さ4cmを測る。底面のレベルは床面同様、南側に向かって徐々に下がっている。

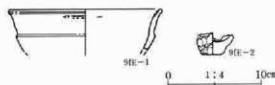
遺物 床面からの出土遺物は無い。資料化し得た杯(1)、手握ね土器(2)も破片及び欠損品である。

(観P122 写PL115)



L=83.60m

0 1:80 2m



9E-1 9E-2

0 1:4 10cm

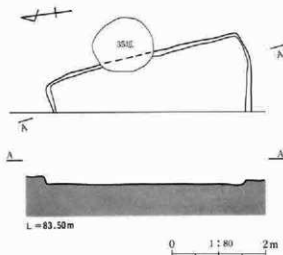
232図 F区9号住居とその出土遺物

F区11号住居

位置 Q-47

形状 東壁とその周辺部分を検出した。東壁の規模は4.30mである。二つの隅は整然としているが、南壁はやや内側に入りこむようである。壁高は8~22cmを測った。

備考 竈、柱穴、貯蔵穴などは検出されなかった。また、出土遺物は皆無であった。35号土壇は本住居より後出である。



L=83.50m

0 1:80 2m

233図 F区11号住居

F区4号住居

位置 O-47 写真 PL112

形状 隅丸の矩形であるが、北壁と南壁の長さが異なり、南壁を底辺とする台形状を呈する。規模は南北が3.75m、東西は南壁で3.82m、北壁で3.45mを測る。壁面は垂直に近く立ち上がり、45~58cmの残存高であった。

面積 13.9㎡ 方位 N67°E

床面 ロームブロックと黒褐色土の混土層が認められたが特に踏み固められてはいない。

竈 東壁中央から南側へ54cmの所に位置する。燃焼部は壁際に構築される。左右の袖部は灰褐色の粘質土を構築材とするが崩壊が著しく、粘質土は広範囲に流れ出していた。煙道は燃焼部奥を垂直に立ち上

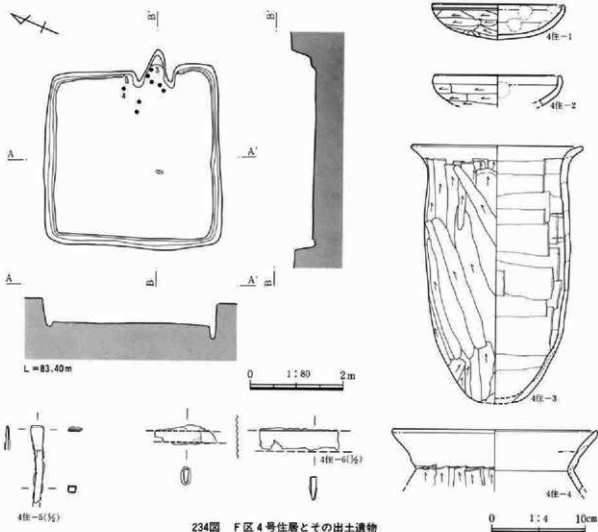
がる。

壁溝 全周し、上幅6~12cm、深さ5~8cmを測った。

遺物 竈周辺を除いた床面からの出土遺物はない。竈燃焼部の最終床面は使用の為電構築時よりも高くなっていてが壺(3)が中位まで埋没して出土しており、他にも壺の破片が認められる。左袖部外側にも壺(4)が、焚口前からも壺が破片となり出土した。埋没土中から刀子(6)、棒状鉄製品(5)が出土した。

(観P119・120 写PL113)

備考 北西隅には1号土塚をはじめとする5基の土塚群が構築されており、本住居は1~3・28号土塚を破壊して構築されている。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。



234図 F区4号住居とその出土遺物

F区8号住居

位置 P-47 写真 PL114

形状 南北に長軸を有する隅丸の矩形で各壁面とも外側に張り出している。東側の二隅は調査区域外にある。規模は南北3.70m、東西2.54m以上である。壁高は北西隅で42cm、7号住居との重複部分では6cmの残存であった。

埋没土 白色軽石を含み黒色味を帯びる褐色土であるが、竈周辺には粘質土粒が多く混入される。

床面 全体的にやや踏み固められていた。焚口部前ではより顕著である。

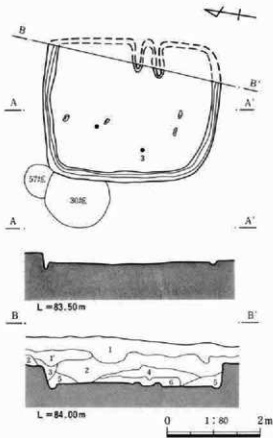
竈 東壁の中央やや南側に構築されていたと思われる。燃烧部は壁内にあり、灰褐色の粘質土を構築材とする左右の袖部の先端を検出した。崩壊が進み構築材は広範囲に流れ出していた。

壁溝 検出部分では全周している。幅は4~10cm、深さは4~6cmを測る。

遺物 床面からは甕の破片が二箇所から出土した。埋没土中から棒状鉄製品(7)が出土している。

(観P121 写PL115)

備考 南壁は7号住居を切っている。また、西壁北部分は30号土壇により削平を受けている。



埋没土層

1 耕作土

1' 暗褐色土 1と2の混土層。

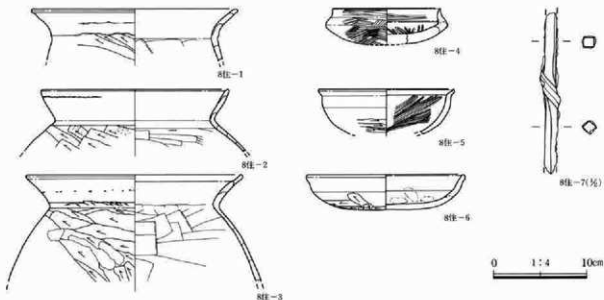
2 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を混入する。

3 暗褐色土 やや茶色味を帯びる。

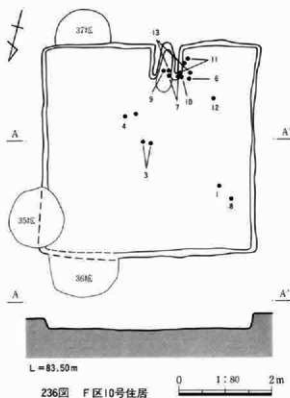
4 暗褐色土 粘土粒を含む。

5 暗褐色土 黒色味が薄れ混入物も少なくなる。

6 竈構築材が崩壊して広がっている。



235図 F区8号住居とその出土遺物



236図 F区10号住居

F区10号住居

位置 R-47 写真 PL114

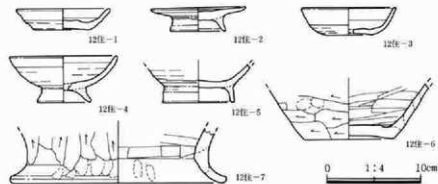
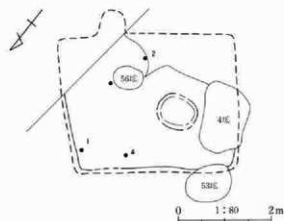
形状 四隅が直角に近く整然とした平面形を呈する。規模は南北が4.50m、東西は東・西壁中央を結ぶ距離が4.50mを測る。壁面の残高は16~35cmであった。

面積 20.7㎡ 方位 N10°W

竈 北壁の中央から東側へ30cmの所に位置する。燃焼部は壁内に構築され、左右の袖部の残存が認められた。右袖部の先端に接して甕(10)が底部を下にして出土したが甕補強材の可能性がある。

遺物 竈燃焼部と右袖部外側に集中して出土した。燃焼部からは甕(9)が、また、甕(7)は右袖部外側の破片と接合した。甕(11)も口縁部が甕外側から出土している。その他、甕(12)、甕(8)、杯(1・3・4)が出土したがいずれも床面から2~5cm離れていた。また、埋没土中から円筒埴輪片(14)、鉄滓(重量51g)が出土した。(観P122・123 写PL115)

備考 南西隅で35・36号土坑と、北壁で37号土坑と重複するがいずれの土坑よりも本住居が先出である。



237図 F区12号住居とその出土遺物

F区12号住居

位置 U-47

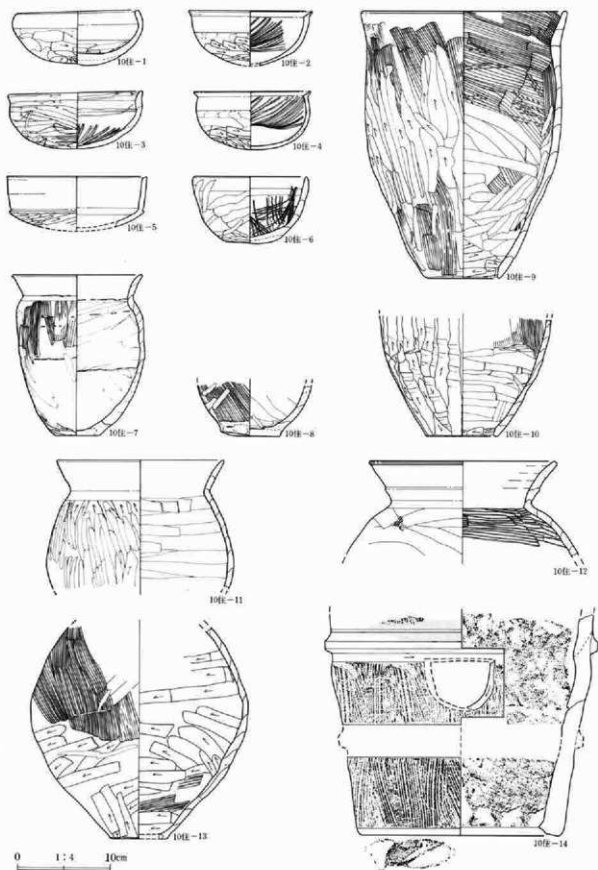
形状 16・17号住居の埋土を確認面とした為、床面の範囲を確認したに止まった。但し調査範囲の東側部分には焼土、灰の広がりが見られることから東側に竈の構築が推定される。

床面 部分的に床下土坑が掘削されていた。

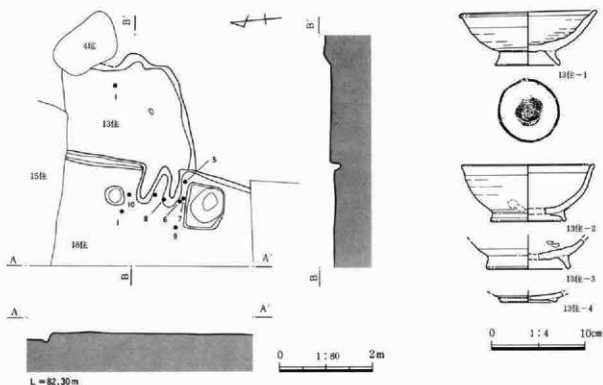
遺物 床面からは皿(2)、杯(1)が出土している。また、埋没土中から鉄滓(重量117g)が出土した。

(観P123 写PL117)

備考 4・53・56号土坑と重複する。



238图 F区10号住居出土遺物



239図 F区13・18号住居と13号住居出土遺物

F区13号住居

位置 T-47

形状 南東隅を中心とした一部を検出した。南壁の残存は23～29cmを測る。

竈 東壁、南東隅から北へ66cmに位置する。燃焼部は壁際に構築されたが削平が著しく、全容は判然としない。竈手前には炭化物、灰の層が認められた。

F区18号住居

位置 T-46 写真 PL118

形状 竈の構築された東壁とその周辺の床面を検出した。北側は15号住居と重複している。

竈 東壁に位置する。燃焼部は壁内にあり、灰褐色の粘質土を構築材とした左右の袖部が延びている。軸線の方向はS67°30'Eである。

貯蔵穴 竈右側にある。径70×67cm、深さ97cmの不整形形で、上端に矩形で95×80cm、深さ6cm程の浅い掘り込みがある。

壁溝 竈から北側の東壁下に掘削されている。幅6～12cm、深さ8cmであった。

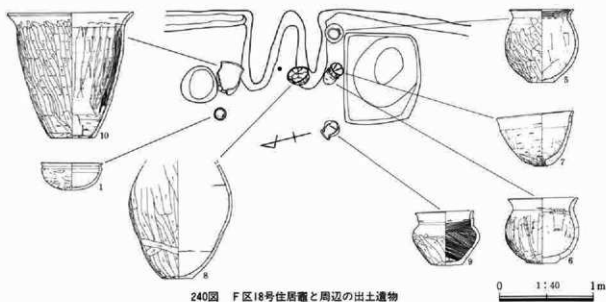
遺物 出土遺物は少量であった。竈左手前の床面から碗(1)が出土した。(観P124 写PL117)

備考 15～18号住居の4軒とは重複関係にある。部分的検出に止まったが実際は本住居がいずれの住居よりも後出である。

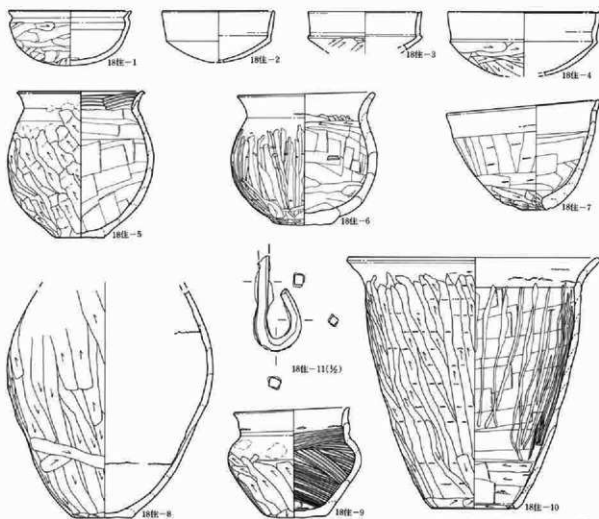
遺物 竈周辺から完形、半完形品が出土した。電燃焼部には甕(8)が立位で出土した。右袖部外側に接して甕(5・6)、甕(7)が出土、特に(7)は(6)に掛けられた状態で出土した。杯(1)、甕(9)、甕(10)も床面直上から出土した。埋設土中からフック状を呈した棒状鉄製品(11)が出土した。

(観P126・127 写PL119)

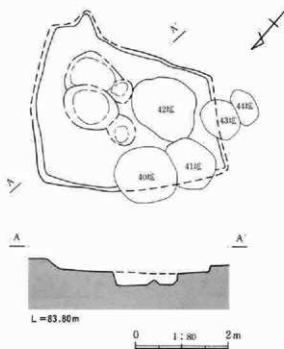
備考 本住居は13・15号住居より先出である。特に竈部分は13号住居構築時に大きく削平されている。竈左前には径41cm、深さ19cmのピットが穿ってある。



240図 F区18号住居遺と周辺の出土遺物



241図 F区18号住居出土遺物



F区14号住居

位置 V-47

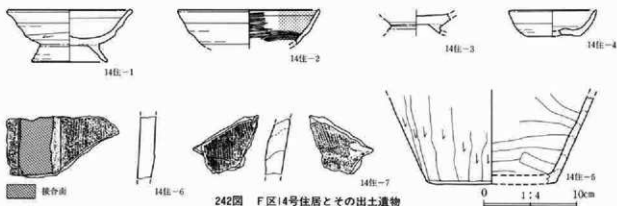
形状 16-19号住居の埋没土を確認面としたことと削平が進行していたことから範囲の確認に止まった。竈は南東隅に寄った南壁に構築されたと考えられる。規模は東西3.8m、南北3.35m程であろうか。

床面 一部に貼床(ロームブロックを含む黒色土)が認められる。

遺物 埋没土中から杯(4)、高台付碗(1)とともに形象埴輪(6)が出土した。(観P124 写PL117)

埋没土 焼土、炭化物を含む黒色土である。

備考 床面の確認範囲には土壇状の掘り込みが認められる。一部はセクションの状況から床下土壇の可能性もあるが、プランから突出するものもあり判断としなかった。



242図 F区14号住居とその出土遺物

F区15号住居

位置 U-46 写真 PL116

形状 南北4.98m、東西4.15m以上を測る矩形である。西壁は調査区域外にある。東壁は竈の左右でやや食い違い、30cm程ずれている。

床面 ほほ平坦で、中央部分はやや踏み固められている。

方位 N88°30'E

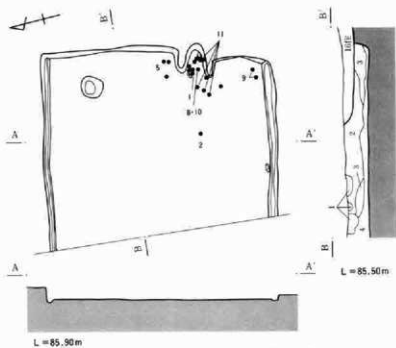
竈 東壁中央から南側へ93cmの所に位置する。燃焼部は壁内にあり、灰褐色の粘質土から成る左右の袖部が延びていた。火床の最終使用面は構築時よりまだいぶ高くなっている。燃焼部奥には自然円礫がの

ぞいており支脚と思われた。

壁溝 南北両壁下に認められる。幅5~13cm、深さ3~9cmである。

遺物 土器は竈とその周辺から出土している。燃焼部内からは壺(10-11)が破片状態で出土、(11)は焚口前の大型破片と接合した。杯は燃焼部から(1)が、左袖部外側から(5)が、焚口部手前から(2)が出土している。南東隅の壁面からは壺(9)の口縁部が出土した。(観P126 写PL117)

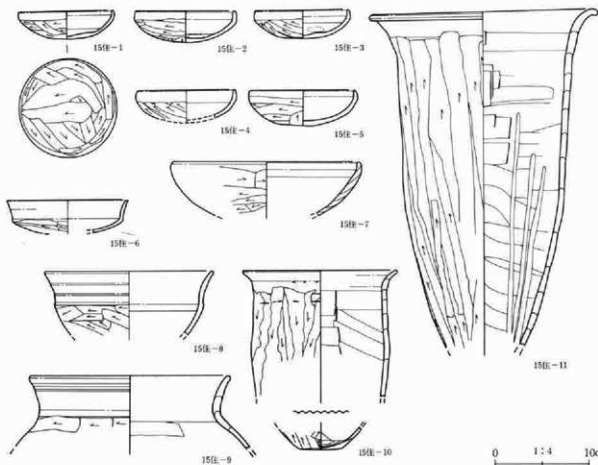
備考 重複する遺構との関係であるが16-18号住居よりも後出、13号住居、53号土壇より先出である。貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。



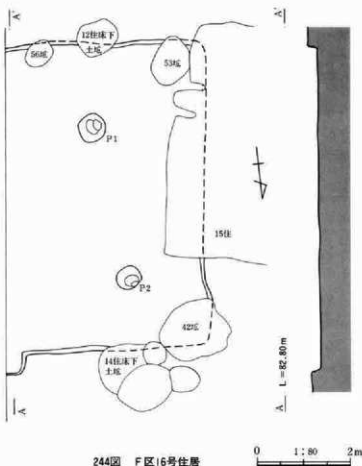
埋 設 土 層

- 1 耕作土 やや大きな黄色粘質土粒、焼土粒、若干の白色軽石を含む。
- 2 褐色土 黄色粘質土粒、焼土粒を含む。1に類するが白色軽石を含まず。
- 3 黒褐色土 炭化物粒、ロームブロックの混入がみられる。

0 1:80 2m



243図 F区15号住居とその出土遺物



244図 F区16号住居

F区16号住居

位置 U-47

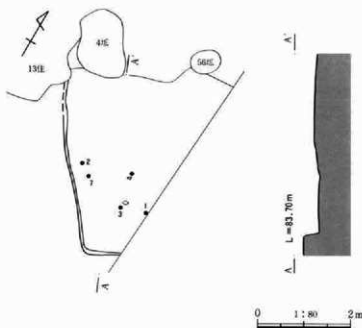
形状 15号住居及び多数の土坑と重複し、残存状態は不良である。また、東側は調査区域外へ延びている。南北7.52mを測る。

埋没土 ロームブロックを含む褐色土が主体となり、軽石、焼土、炭化物を含む黒褐色土が堆積している。

柱穴 2本検出したが位置的にはやや不自然な位置にある。規模はP₁が径52×46cm、深さ75cm、P₂が径55×43cm、深さ75cmである。

遺物 床面からの出土遺物は無かった。埋没土中からの土器も全て破片であった。(観P125)

備考 12・13・15号住居は本住居より後出である。17号住居は先出の可能性が高い。



245図 F区17号住居

F区17号住居

位置 T-47

写真 P L118

形状 主体は東側調査区域外に延びている。また、12・13・16号住居により削平を受け、南西隅とその周辺を検出しただけに止まった。壁面の残高は16~25cmである。

遺物 壺(7)は床面に横転し潰れていた。杯(1・2)は床面から20・17cm離れた出土である。また、埋没土中から土鍾(8)が出土した。

(観P125 写PL119)

備考 4・56号土坑は本住居より後出である。

F区19号住居

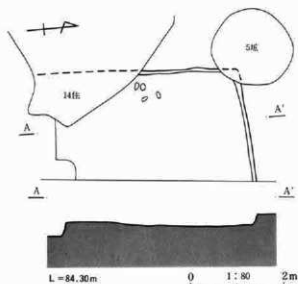
位置 V-47

形状 北西隅とその周辺を検出した。東側は調査区域外に及んでいる。南側は16号住居、北側は20号住居と重複する。南北の長さは4.2m以上である。

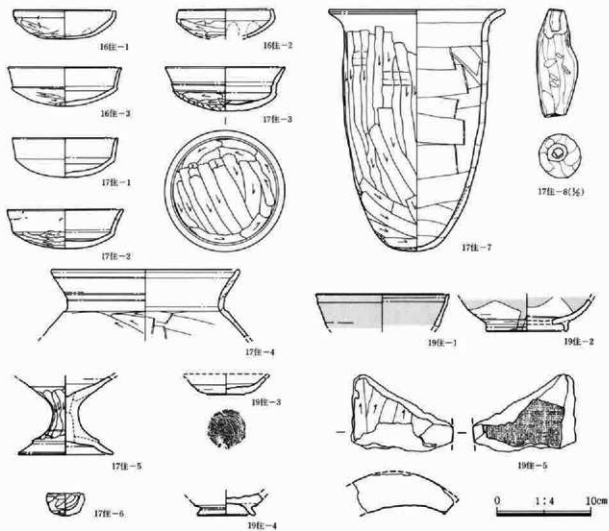
遺物 床面からの出土遺物は無い。埋没土中から杯(3)、椀(1・4)に伴い瓦(5)の破片が出土している。また、菰編み石状の自然隙が4個出土した。

(観P127・128 写PL121)

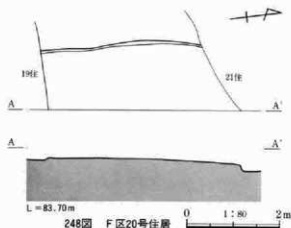
備考 本住居は重複する14号住居に後出するが、16・20号住居との関係は判然としない。



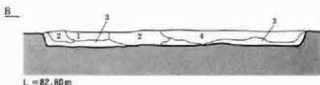
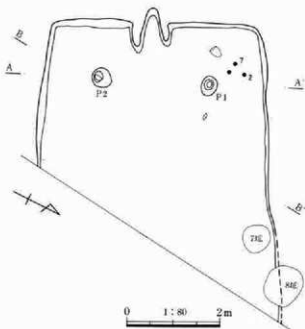
246図 F区19号住居



247図 F区16・17・19号住居出土遺物



248図 F区20号住居



249図 F区21号住居

F区20号住居

位置 W-47

形状 西壁の一部を検出した。南側は19号住居、北側は21号住居と重複する。壁面の残存高は9~17cmである。

遺物 埋没土中から土器が出土した。(観P128)

F区21号住居

位置 W-47 写真 PL120

形状 西壁に竈を構築するが北東隅の形状を把握できなかった。南北4.95m、東西4.8m以上の正方形に近い矩形を呈すると思われる。西側の二隅はやや丸味を帯びる。壁面は良好な南西隅で32cmであった。

方位 S67°W

竈 西壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は壁内にあり両側の袖部が付されていた。袖部は灰褐色の粘質土を構築材としているが崩壊が著しかった。火床面は焚口部より4cm程低く窪んでいた。

柱穴 支柱穴と考えられる両側の2本を検出した。両者とも斜めに掘り込まれた壁面が上位で礎をもち以下円筒状を呈している。規模はP₁が径39×32cm、深さ57cm。P₂が径40cm、深さ57cmであった。

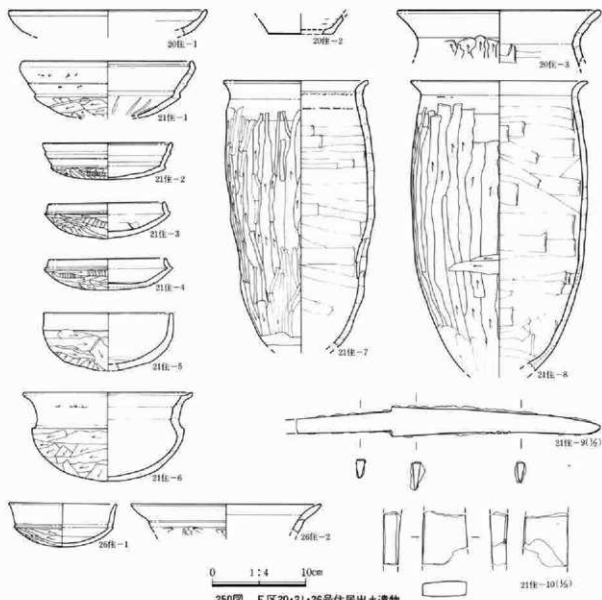
埋没土 下層に白色軽石、ローム粒を含む黒褐色が堆積し、上層には灰褐色土、褐色土が堆積している。

遺物 床面からの出土遺物は無かった。竈右側、西北隅から杯(2)、壺(7)が出土したが床面からは15cm離れていた。埋没土中からは砥石(10)、刀子(9)が出土した。(観P129 写PL121)

備考 竈左側、西南隅に円形のピットがあり貯蔵穴の可能性もある。また、東北部分には7号土坑がある。これも径59cmのピット状を呈する。

埋没土層

- 1 褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 2 灰褐色土 若干のローム粒と焼土粒を含む。
- 3 黒褐色土 白色軽石とローム粒を含む。
- 4 褐色土 ローム粒を含む。



250図 F区20・21・26号住居出土遺物

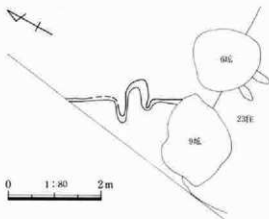
F区26号住居

位置 Y-46

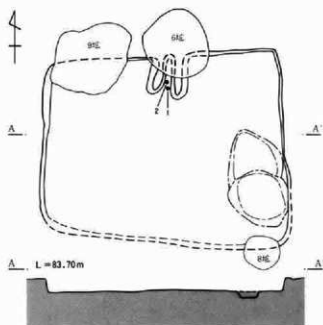
形状 竈とその周辺を検出したが主体は西側調査区域外に延びている。竈は壁際に構築され、左右の袖部は短かく残存していた。竈の軸線はN67Eの方向である。

遺物 杯(1)は9号土壇に落ち込むようにして出土した。(観P129 写PL123)

備考 23号住居とは重複の位置にあるが前後関係は把握できなかった。



251図 F区26号住居



252図 F区23号住居



F区23号住居

位置 X-47 写真 PL120

形状 東西5.10m、南北3.45m以上を測る矩形と思われる。22・24・26号住居、6・8・9号土坑、1号溝と重複し残存状態は不良である。

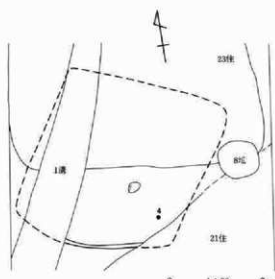
方位 N11°E

竈 北壁の中央に位置する。幅の狭い燃焼部をもつが奥側は6号土坑との重複で欠如し、左右の袖部は崩壊、削平を受け基底部のみ残存していた。燃焼部内からは壺(2)の底部と倒置された状態で杯(1)が検出された。杯は支脚として利用された可能性もある。

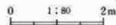
遺物 床面からの出土遺物は無かった。

(観P130 写PL121)

備考 全ての土坑及び1号溝は本住居構築後の遺構である。24号住居についてもその可能性が強い。



253図 F区22号住居



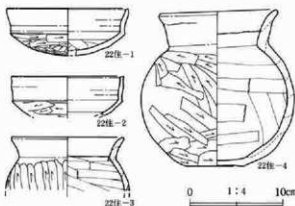
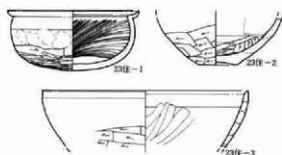
F区22号住居

位置 X-47 写真 PL120

形状 21・23号住居、1号溝と重複関係にある。南壁の一部を検出したが全容は把握できなかった。

遺物 壺(4)が南壁寄りの床面から+9cm離れて出土した。

(観P128 写PL121)



254図 F区22・23号住居出土遺物

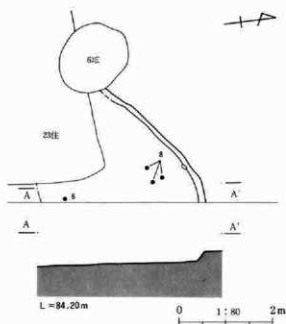
F区24号住居

位置 Y-47

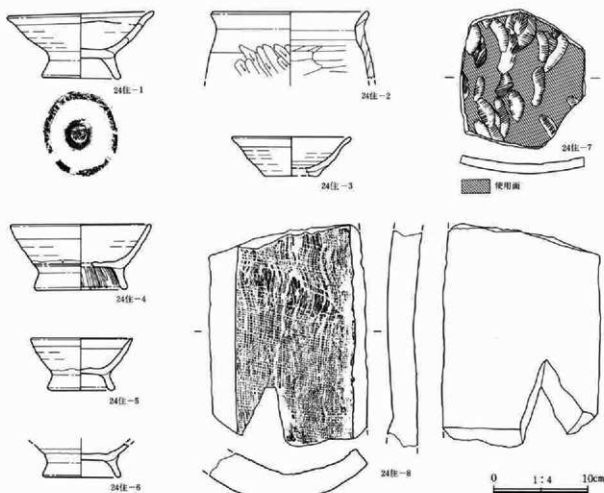
形状 遺構は東側調査区域外にまで延びる。また、一部は23号住居の埋没土を確認面とするため部分的な検出に止まった。壁面は約25cm残存していた。

遺物 床面直上からの遺物は無かった。椀(6)は床面から6cm離れ高台部を上にして出土した。また、瓦(8)が3片の破片となり出土した。埋没土中からは須恵器片を再利用した硯(7)が出土している。

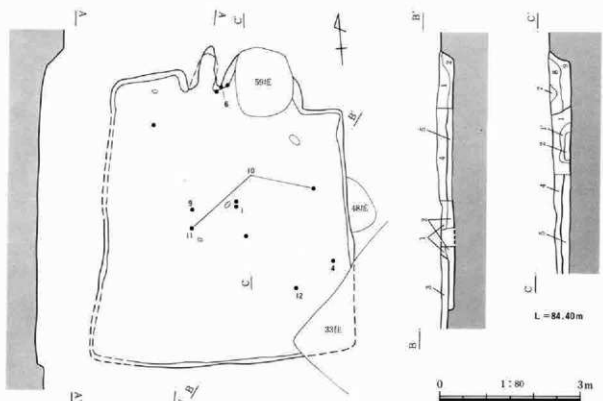
(観P130 写PL123)



255図 F区24号住居



256図 F区24号住居出土遺物



- | | | |
|---------|--------|-------------------------------|
| 埋設土層 | 4 黒色土 | 白色軽石、焼土粒を含む。(F区59号住居埋設土) |
| 1 黒褐色土 | 5 黒色土 | ロームブロックを多く含む。(30号住居陥没) |
| 1' 黒褐色土 | 6 耕作土 | |
| 2 褐色土 | 7 灰褐色土 | 白色軽石、焼土粒を含む。(F区59号土地埋設土) |
| 3 黒褐色土 | 8 褐色土 | 粘性、ローム塊、炭化物、焼土粒を含む。(59号土地埋設土) |

257図 F区31号住居

F区31号住居

位置 b-46

写真 PL122

形状 南北に長軸を有する矩形、東壁は中位、北東隅から1.28mで更に東側に張り出している。但し、形状が不自然で2軒の住居が重複したものの可能性が強い。南北は最長6.28m、最短5.2m(推定)、東西は最長5.38m、最短4.04mを測った。壁面の残存は13~33cmである。

面積 32㎡(推定)

方位 N12°E

埋設土 主体は白色軽石、焼土粒を含む黒褐色土で部分的に炭化物、ロームブロックを含む褐色土である。

床面 特に踏み固められていない。

竈 北壁のはほぼ中央に位置する。燃焼部は一部が壁外に張り出しており、壁内に左右の袖部が延びていた。崩壊は著しかったが天井部の一部が残存していた。煙道は強い傾斜で立ち上がっている。火床面には炭化物の層が認められ、焚口部前にも広がっていた。

遺物 床面の出土遺物は少量であった。竈右袖部周辺から甕の小破片が出土した。また、中央やや東側から杯(1)の1/4個体分が出土している。その他、甕(9・10)は床面から数cm離れた出土である。埋設土からは鉄滓(重量24.6g)が出土している。

(観P131 写PL123)

備考 貯蔵穴、柱穴、壁溝は検出されなかった。29・30号住居は本住居より後出である。33号住居とも重複関係にある。

F区29号住居

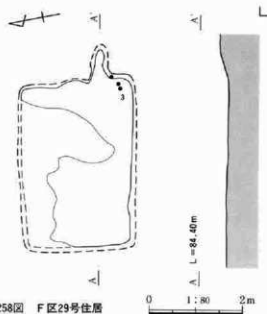
位置 a-47

形状 東西は長軸を有する矩形を呈する。全体に削平が進行していたことと北側が31号住居の埋没土を確認面としたため壁面の検出は竈周辺に止まった。規模は東西3.63m、南北2.40m程と考えられる。

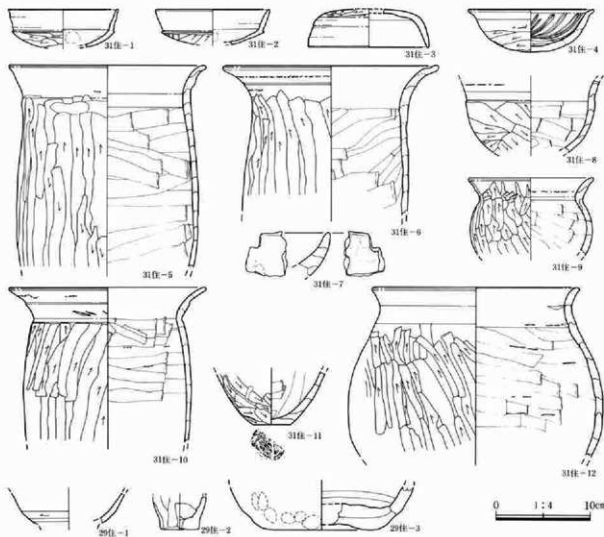
埋没土 ロームブロック、白色軽石を含む黒褐色から成る。 方位 S80°E

竈 東壁中央から南側へ45cmの所に位置する。燃焼部は壁外にある。袖部の有無は確認できなかった。

遺物 竈の右側、南東隅から土釜(3)など数点が出土した。(観P132 写PL123)



258図 F区29号住居



259図 F区29-31号住居出土遺物

F区32号住居

位置 a-48 写真 PL124

形状 北側の約笥を検出した。北壁は整然とした二箇所の隅を有し5.68mを測った。南北は4.04m以上の規模である。壁面は部分的に崩壊していたり、33号住居の調査との関係から削平した部分もあるが36~52cmと良好な残存状態であった。

床面 電手前がやや低くなるが大きな起伏は無い。また、特に踏み固められていなかった。

方位 N5°W

竈 北壁中央から南側へ20cmの所に位置する。燃焼部は壁外にあり、傾斜の強い煙道に接続する。粘性

を有する灰褐色土を構築材とするが崩落が進行し、左右の袖部は高さ15cm程の残存であった。火床部には炭化物、灰が認められた。

柱穴 北西隅の一本を検出した。径65×56cm、深さ70cmを測る。

遺物 床面からの出土遺物は少量で杯(1)が出土している。(観P132 写PL125)

備考 33号住居と重複するが本住居が後出である。竈左側は14号土壇により削平を受けている。北西隅には長軸120cm、短軸80cm、深さ25cmの不定形の掘り込みがある。

F区33号住居

位置 a-47 写真 PL125

形状 南北5.8m、東西5.85mを測る正方形に近い矩形を呈しているが32号住居、14・54号土壇と重複し、南西隅を中心に南壁、西壁の一部は削平されている。また、西壁の中位から北東隅にかけての床面は1号溝の掘削により擾乱を受けていた。壁面は南側で5cm、北側で23~36cmの残存である。

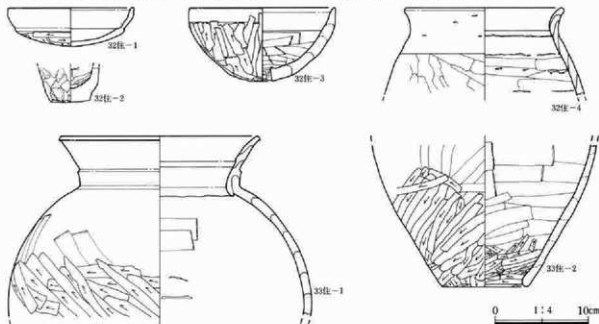
埋没土 黄色味を帯びる灰褐色土で粘性も有してい

た。ロームブロック、灰色味の相違で分層できる。

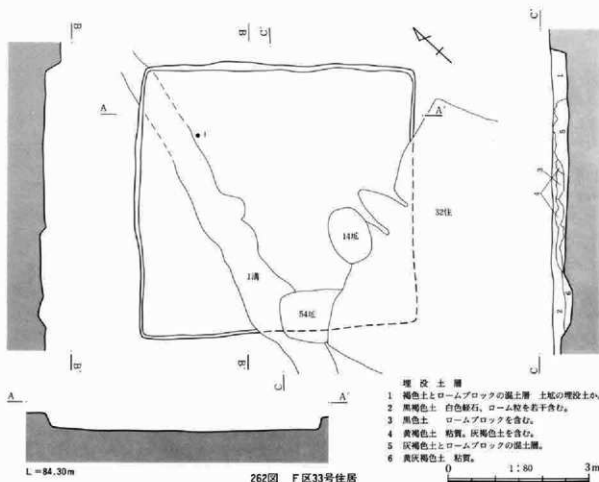
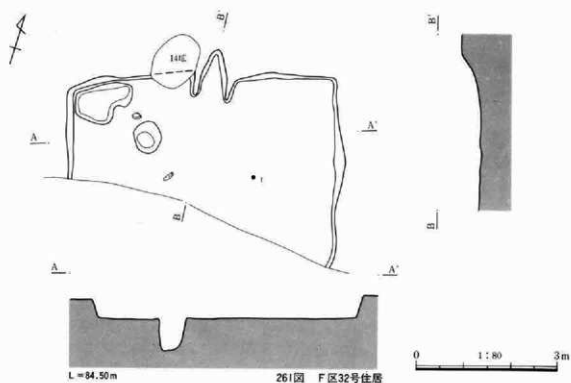
床面 住居の中央部分はロームを床面とし、良く踏み固められていたが他は貼り床で軟弱であった。

遺物 住居の北東部分、床面から7cm程離れて壺(1)が破片で出土している。(観P132 写PL125)

備考 竈は南壁に構築されていたと考えられる。柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。北西隅では30・31号住居と重複関係にある。



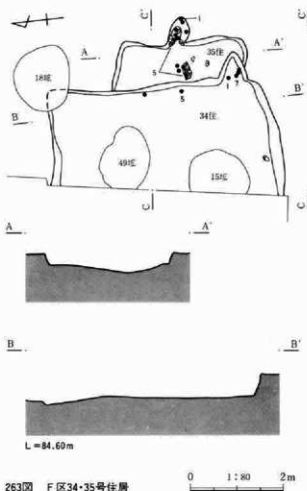
260図 F区32・33号住居出土遺物



埋 込 土 層

- 1 褐色土とロームブロックの混土層 土底の埋込土か。
- 2 灰褐色土 白色軽石、ローム粒を若干含む。
- 3 黒色土 ロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土 粘質。灰褐色土を含む。
- 5 灰褐色土とロームブロックの混土層。
- 6 黄灰褐色土 粘質。

第2章 調査された遺構と遺物



263図 F区34・35号住居

F区34号住居

位置 c-47 写真 PL126

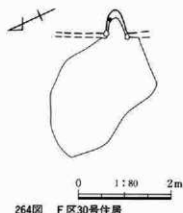
形状 西側は調査区域外に延び、西側の二箇所の隅は未検出である。南北4.67m、東西2.33m以上を測る。壁高は南壁西端で43cmを測ったが他は20cm以下である。 **方位** S82°30'E

床面 ほぼ水平、特に踏み固められていない。

竈 東壁、南東隅寄りにある。燃焼部は壁外に構築されている。袖部の有無は確認できなかった。

遺物 竈燃焼部内から杯(1)、土釜(7)の小破片が出土している。埋没土中からは土器に混じり円筒埴輪片が少量出土している。(観P133 写PL127)

備考 柱穴、貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。本住居は東側の35号住居を削平して構築されているが、床面は15・18・49号土壇により攪乱を受けている。



264図 F区30号住居

F区30号住居

位置 a-47

形状 31号住居の埋没土を確認面としたため電周辺の検出に止まった。床面の残存状況から東西1.85m以上、南北2.43mの規模を有していたと思われる。

埋没土 白色軽石、焼土粒を含む黒色土。

竈 東壁に位置し、焚口部の両脇には自然円礫が補強材として据えられていた。

遺物 土器は燃焼部、埋没土中から少量出土したがいずれも資料化するに足り得なかった。

F区35号住居

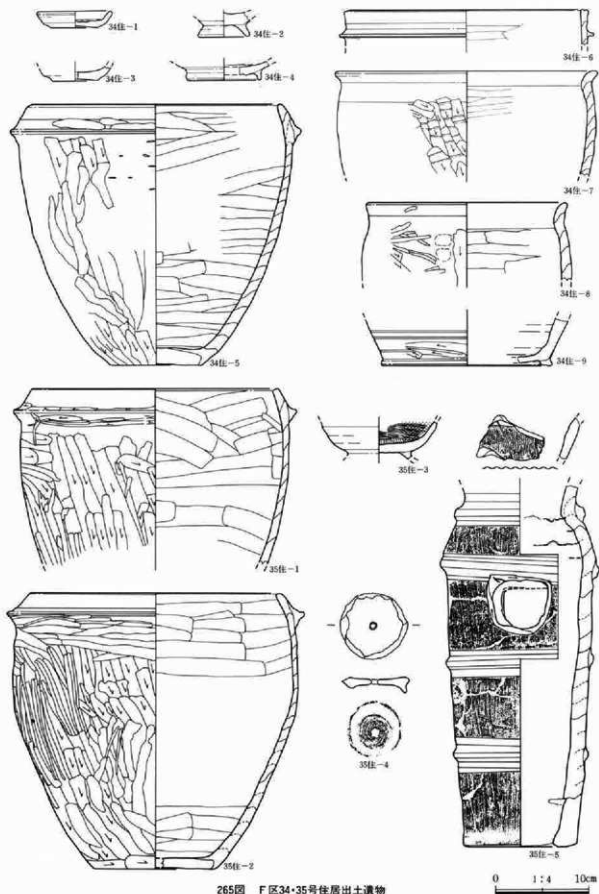
位置 c-47

写真 PL126・127

形状 南北2.73mの小型住居である。34号住居により東壁と一部床面を残して削平されていた。

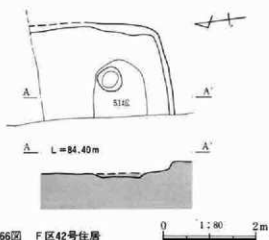
竈 東壁の中央からやや北側に寄っている。燃焼部は壁外に構築され焚口部の両脇には自然円礫が据えられていた。また、燃焼部中央にも同様の円礫が支脚として埋置されていた。煙道は削平されている。竈の軸線の方向はS68°30'Eである。

遺物 燃焼部から羽釜(1)、椀(3)が出土している。また、焚口前の床面からは朝顔形埴輪(5)の胴部が横倒して出土、竈燃焼部出土の破片と接合した。埋没土中からは椀の底部を穿孔した製品(4)が出土している。(観P134 写PL127)



265图 F区34·35号住居出土遗物

第2章 調査された遺構と遺物



266図 F区42号住居

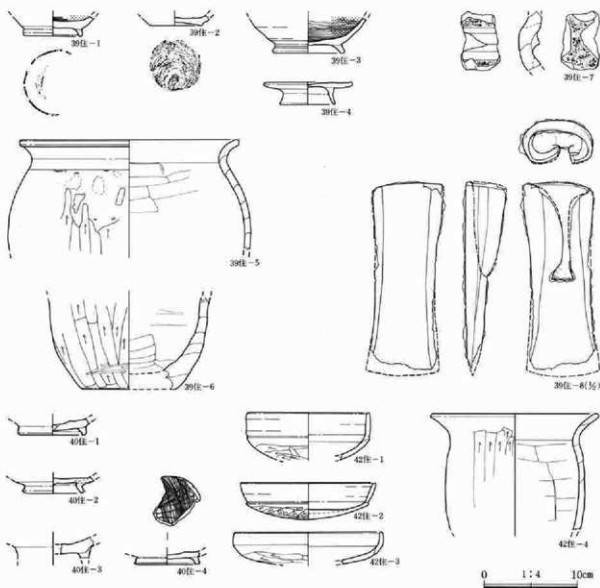
F区42号住居

位置 e-47

形状 東西に長軸を有する隅丸矩形を呈すると思われる。南北3.10mを測った。西側は調査区域外に延びている。壁面は27~30cmの残存である。

遺物 床面からの出土遺物は無く、埋設土中から少量の土器を出土した。(観P137 写PL129)

備考 床面の南壁寄りに51号土坑と径50cm、深さ30cmのビットがある。住居構築後の掘削と思われる。



267図 F区39・40・42号住居出土遺物

F区39号住居

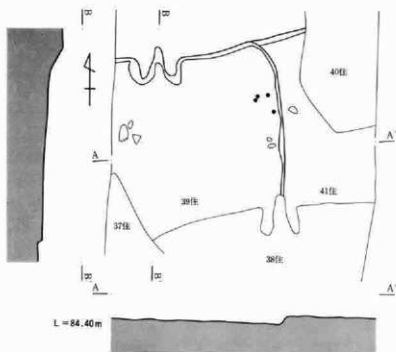
位置 d-47

写真 PL128

形状 西側は調査区域外に延びる。南側は37・38号住居の重複を受け削平されている。残存状況は東西3.56m、南北3.55mを測った。壁面は良好な部分で31cmであった。

竈 北壁に構築され、燃焼部を壁内に持っている。煙道は強い傾斜で立ち上がっていたと思われる。軸線の方位はN2°Eである。

遺物 床面からの土器の出土はなかった。埋没土中からは土器に混じり手斧(8)、朝顔形円筒埴輪片(7)が出土した。床面の二箇所から自然円礫が出土している。東壁際の2点は菰編み石状の大きさである。(観P136・137 写PL129)



268図 F区39・41号住居

0 1:80 2m

F区41号住居

位置 d-47 写真 PL128

形状 周囲の38~40号住居と重複関係にあり、床面の一部分を検出したに止まった。構築時期は不明。

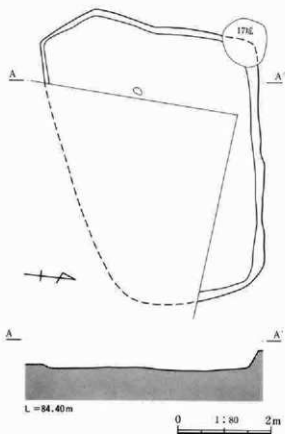
F区40号住居

位置 e-47 写真 PL128

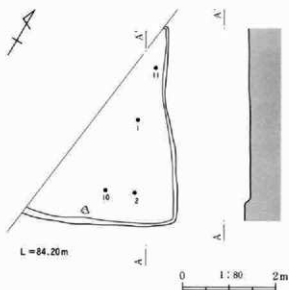
形状 D区との接続部分にある。南東部分は調査区域外にある。東西5.7m、南北4.55m測り、東西に長軸を有する矩形を呈すると思われるが西壁は不自然に突出する。

遺物 埋没土中から少量出土した。(観P133)

備考 北壁はD区1・2号溝により著しく削平を受けている。41号住居と重複関係にあるが新旧関係は把握できなかった。



269図 F区40号住居



F区37号住居

位置 d-47

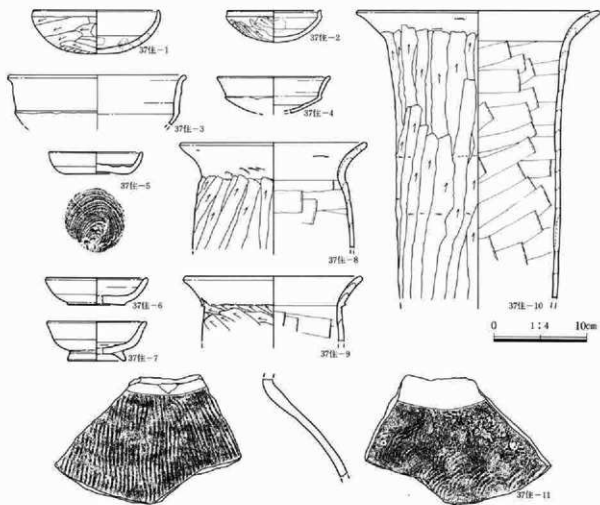
写真 PL128

形状 南東隅を中心として東側の一部分を掘出しえたが主体は西側調査区域外に及んでいる。南北4.16m、東西3.17m以上を測る。床面はほぼ平坦で堯(10)の西側はやや踏み固められていた。

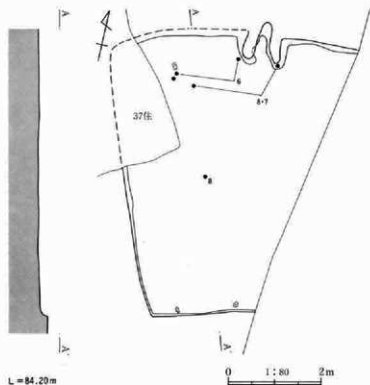
遺物 床面近くから土器が数点出土している。杯(2)と堯(10)、須恵器堯(11)の破片は床直、杯(1)は3cm程離れた出土である。

(観P134・135 写PL129)

備考 38・39号住居と重複関係にある。



270回 F区37号住居とその出土遺物



271図 F区38号住居

F区38号住居

位置 d-47

写真 PL128

形状 南北5.88mを測るが東側半分は調査区域外に、また、北壁は39・41号住居の埋没土を確認面としたため、全容は把握できなかった。やや縦長の矩形を呈するか。

方位 N16°W

竈 北壁の中央付近に位置すると思われる。燃焼部は壁内にあり、灰褐色の粘質土を構築材とした左右の袖部が延びている。長軸の方位はN1°Wで住居の軸線とやや食い違っていた。

遺物 床面からの出土遺物は無い。

(観P136 写PL129)

備考 周囲の住居との重複関係であるが39・41号住居は本住居よりも前出、37号住居は後出と思われる。44号住居とは不明確である。



272図 F区43・44号住居

F区43号住居

位置 c-47

形状 床面を小範囲検出したのみである。

遺物 南壁寄りの床面から羽釜(5)を出土した。また、埋没土中から鉄鏝(7・8)が出土している。

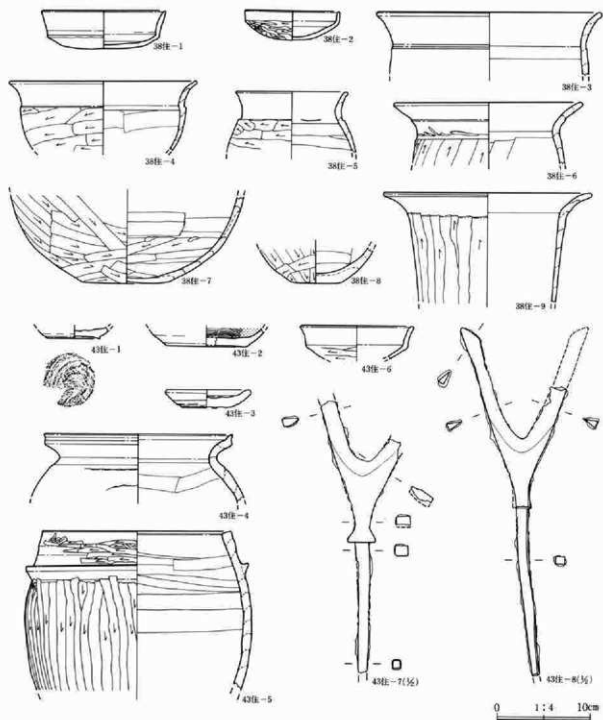
(観P135 写PL127・129)

F区44号住居

位置 c-47

形状 周囲の住居群と重複関係にあり、南壁とそれに続く床面の一部を検出した。

第2章 調査された遺構と遺物



273図 F区38・43号住居出土遺物

第2節 浅間B埋没水田

水田はA区で、住居や溜井が形成された台地の西側の沖積地から検出した。この沖積地は本遺跡の上流0.5kmに谷頭をもち台地末端から流出する湧水により形成されたと考えられ幅80mの規模である。現在の地目は水田であった。

水田は現地表下0.8～1.0mのところで厚さ10cm前後の浅間Bに直接埋没した状態で検出された。調査面積は820㎡であった。

水田は4号溜井の掘削された小さな谷頭の形状にそってくの字の帯状に検出された。調査範囲内の比高差は40cmあり、西側に向かって傾斜する面を棚田状に造成したものと思われる。区画のための畦畔は確認できず、3～10cmの段差をもつ帯状の面を3枚検出した。第1枚目は台地の縁辺から幅2.65m～3.65mで標高80.31～80.38mのところに第2枚目との段差がある。第2枚目の幅は4～10m、第3枚目は6m以上で標高80.21～80.24mのところに3～10cmの段差がある。いずれの面にも径5～20cmの小穴が無数に認められ、浅間Bにより直接埋没していた。

水田への給水方法であるが水田に付随すると考えられる溝の検出は無く、4号溜井から直接懸け流しのおこなわれていたと思われる。また、その他の溜井との関係では浅間Bの堆積状況から浅間Bに直接埋没した水田耕作時には2・3号溜井はすでに埋没して機能していなかったと考えられる。1号溜井の導水路は水田同様浅間Bで埋没していたが、溝の底面は水田面よりも低く水田面を切るように南西に延びている。従って1号溜井は検出した水田よりも更に西側で低位にある水田への用水を供給する役割を担っていたと思われる。このことから浅間B下の水田は沖積地に広く耕作がおこなわれていたことが想定できる。また、2・3号溜井の埋没状況や各溜井出土の遺物の内容などから水田耕作はさらに時期を逆のぼっておこなわれていた可能性が高い。

写真 PL132

(観P138)

第3節 溜 井

溜井群の概要 本遺跡で検出された溜井は4基でA区に集中し、台地と沖積地が接する部分に立地している。各溜井は北側から順次1～4号と呼称した。1～3号溜井は台地縁辺に沿うように掘削されているが4号溜井は他の3基とはやや間隔をおいて台地斜面に開析された小さな谷頭に位置している。溜井の掘削されている標高は80～82m前後である。

溜井の構造 溜井とは水田への灌漑用水の確保・取水を目的として掘削された井戸である。構造としては地下からの湧水を取水・貯水しておく掘り込み部分の湧水・貯水部とその水を水田に供給するための導水路から成り機能分化している。

溜井は湧水の自噴により農業用水を確保し、これを貯水しながら給水するという施設で、河川からの導水による貯水を目的とする溜池とは構造的に異なるものである。また、通常の井戸との相異は、溜井には導水路が掘削されており、湧出した地下水は常に導水路から流出・給水される構造になっているのに対して、井戸は湧出した地下水がそのまま掘り方内に貯水されている点にある。

A区1号溜井

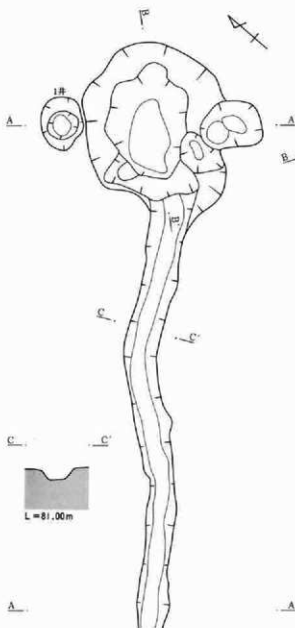
位置 R～T-31～33 **写真** PL133

形状 貯水部は径4m程のやや南北に長い不整形円で残存の掘削深度は1.53mである。導水路は等高線に直行するように南西の方向に延びており、直線距離で11.4mを確認した。幅は0.75～0.85m、深度は0.14～0.25mをはかった。底面の比高差は7cmであった。貯水部の開口部近くの側壁には木杭が2本打ち込まれており、その周辺から小礫数個を検出したがこれは側壁の土留めを目的としたものと思われる。

埋没土 貯水部の底部と導水路中には浅間Bが純粋で堆積していた。

遺物 木製品、曲物の底部断片が出土したほか土師器の小破片が出土している。 (観P138)

備考 貯水部の北側にA区1号井戸が隣接する。



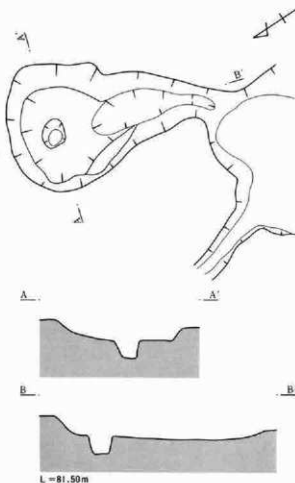
L = 81.00m

L = 81.40m

L = 81.40m

274図 A区1号溜井

0 1:100 3m



275図 A区3号溜井

0 1:100 3m

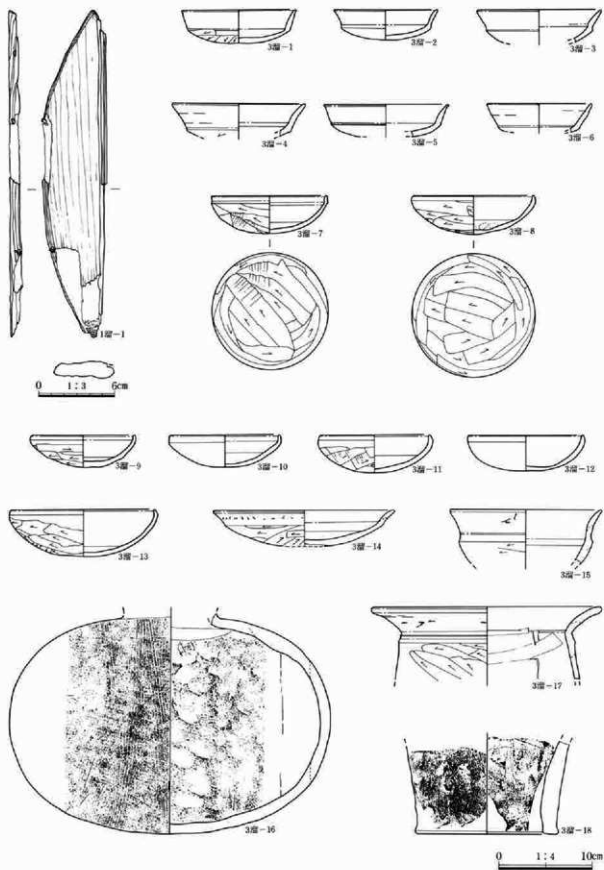
A区3号溜井

位置 Q・R-34・35 写真 PL134・135

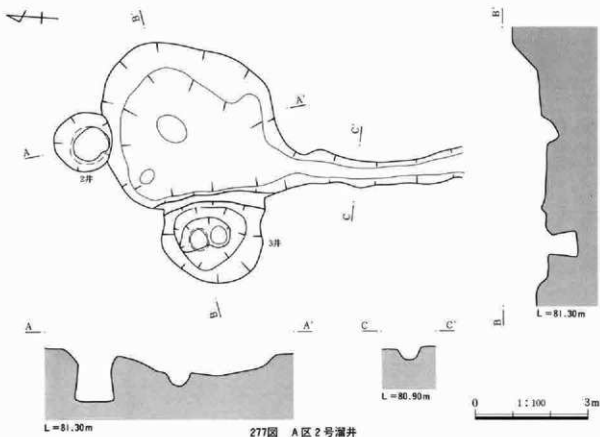
形状 貯水部は、径3.4mの楕円形に近い不整形を呈する。掘削深度は0.52m、底面の中央に径0.64×0.75m、深度0.49mの小穴がある。導水部は幅0.85~2.1mを測り、開口部から2.5m程で狭小になる。末端は幅が広くなり、貯水池状の掘り込みを持ち2号溜井の導水部と連結している。

埋没土 浅間Bの堆積は認められなかった。

遺物 底面から10~20cm離れた状態で土師器と須恵器が10数片出土している。土師器の杯は口縁部が底部との間に稜を持って立ち上がるものと内堀して立ち上がるものがほぼ同率の割合で出土している。その他に土師器の甕、須恵器の横瓶、円筒埴輪片が出土している。(観P140~141 写PL135・143)



276图 A区1·3号溜井出土遺物



277図 A区2号溜井

A区2号溜井

位置 R・S-33・34 写真 PL134

形状 貯水部は径3.7×4.6mの不整形円形で掘削深度は0.9mである。底面の中央に径0.9×0.6m、深度0.57mの小穴がある。この北西部部分にも径0.4×0.3m、深度0.68mの小穴がある。導水部は長さ5m、幅0.6～0.8m、深度0.26～0.32mを測る。等高線に沿って南方向に延び、その末端は3号溜井の導水部に連結する。

埋没土 浅間Bは認められなかった。

遺物 いずれも埋没土から出土している。土師器と須恵器がある。土師器には杯、甕、鉢がある。須恵器では蓋、杯、高台付杯、盤などが出土している。

(観P138～140 写PL135)

備考 井戸が貯水部の北側と西側に接して一基づつ隣接する。北側のそれは径1.55m、深度1.45mを測る。西側のそれは径2.15×2.7mの不整形円形で底面には二つの小穴がある。

A区4号溜井

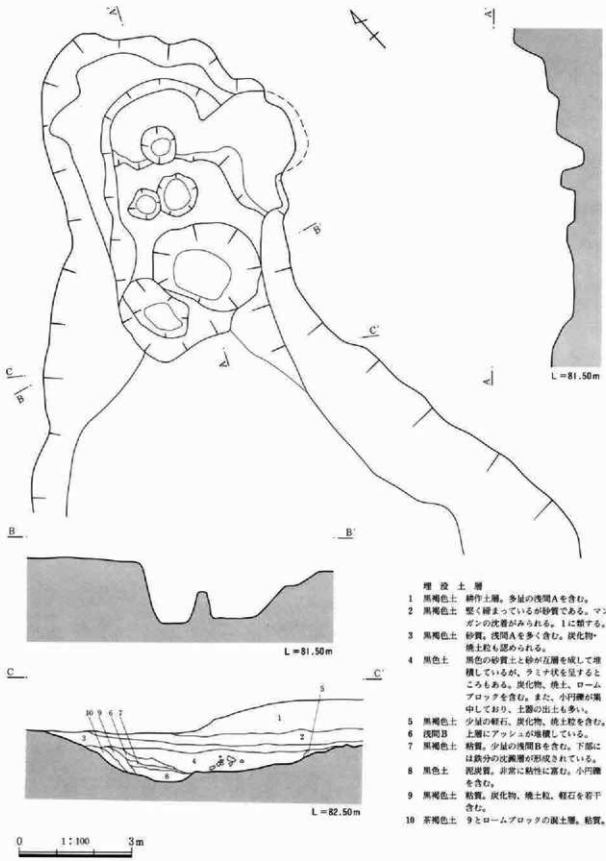
位置 O～Q-36～38 写真 PL136

形状 4基のうち最大規模をもつ。貯水部は径6.7×9.0mの不整形を呈する。小さな谷頭を掘り込んで作られているが掘削は段掘りによっておこなわれており一段の差が0.3～0.6mで二段、三段に及んでいる。底面には径0.75～2.9mの小穴5基掘られている。深度は0.44～0.78mであった。小穴1の南側壁に2本、小穴2の東側壁に2本の木杭が打ち込まれていた。

埋没土 開口部を南北に横断した土層断面には土層中位に0.1～0.2mの厚さで浅間Bの純層が堆積しており、浅間B降下以前にかなり埋没が進行していたことがうかがえる。

遺物 土師器、須恵器、陶器、円筒埴輪、鉄滓が認められた。土師器は、杯、甕、瓶、土釜が出土している。須恵器も杯、平瓶、短頸壺、甕、甕と器種が多かった。円筒埴輪も10片以上を数えた。

(観P141～144 写PL137)

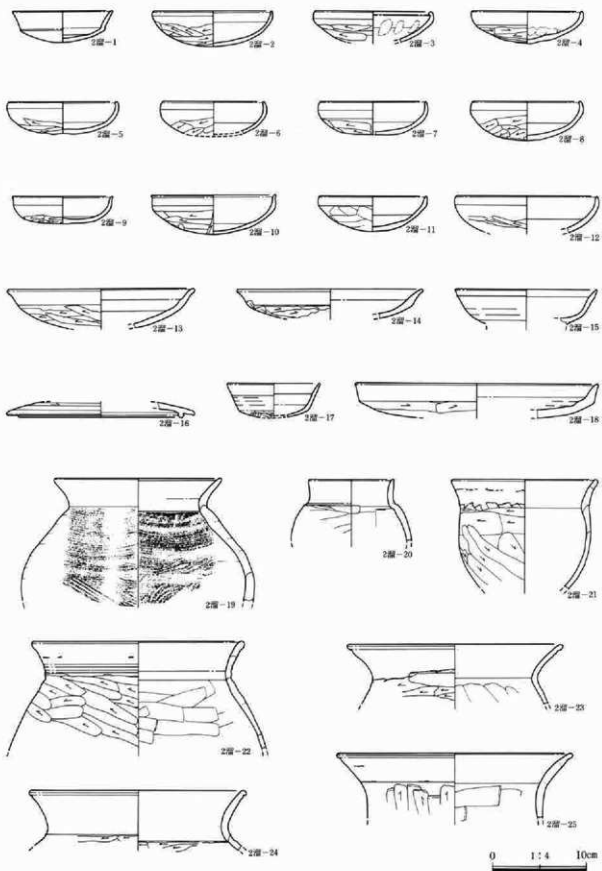


埋 設 土 層

- 1 黒褐色土 耕作土層。多量の浅間Aを含む。
- 2 黒褐色土 堅く締まっているが砂質である。マンガンの沈着がみられる。1に類する。
- 3 黒褐色土 砂質。浅間Aを多く含む。炭化物・焼土粒も認められる。
- 4 黒色土 黒色の砂質土と砂が互層を成して堆積しているが、ラミナ状を呈するところもある。炭化物、焼土、ロームブロックを含む。また、小円礫が集中しており、土器の出土も多い。
- 5 黒褐色土 少量の軽石、炭化物、焼土粒を含む。
- 6 浅間B 上層にアッシュが堆積している。
- 7 黒褐色土 粘質。少量の浅間Bを含む。下部には鉄分の沈澱層が形成されている。
- 8 黒色土 泥炭質。非常に粘性に富む。小円礫を含む。
- 9 黒褐色土 粘質。炭化物、焼土粒、軽石を若干含む。
- 10 茶褐色土 9とロームブロックの混土層。粘質。

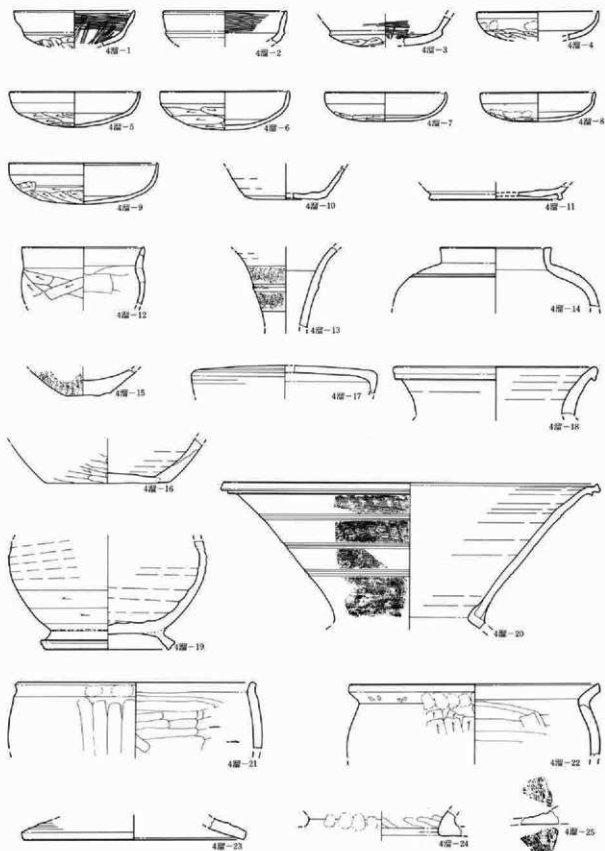
278図 A区4号灌井

第2章 調査された遺構と遺物



279図 A区2号溜井出土遺物

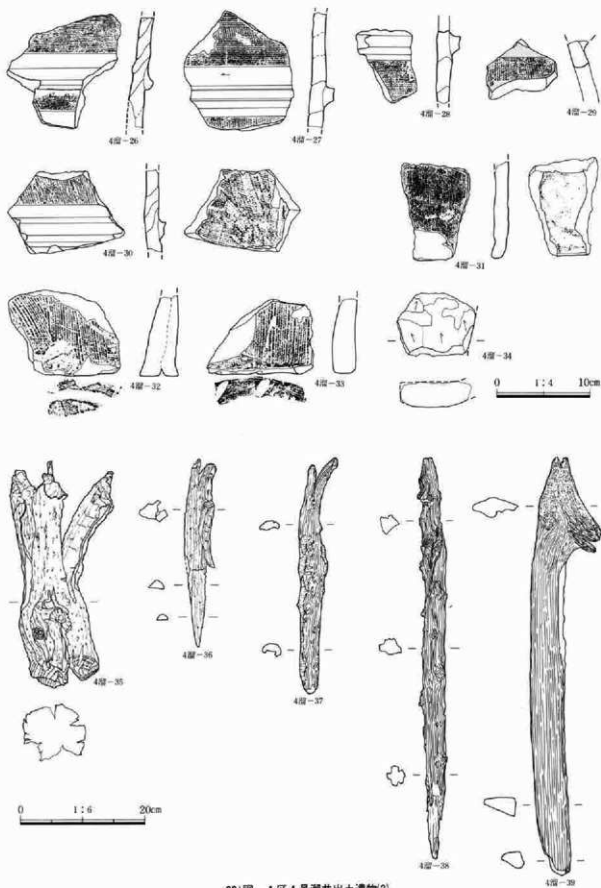
第3節 溜 井



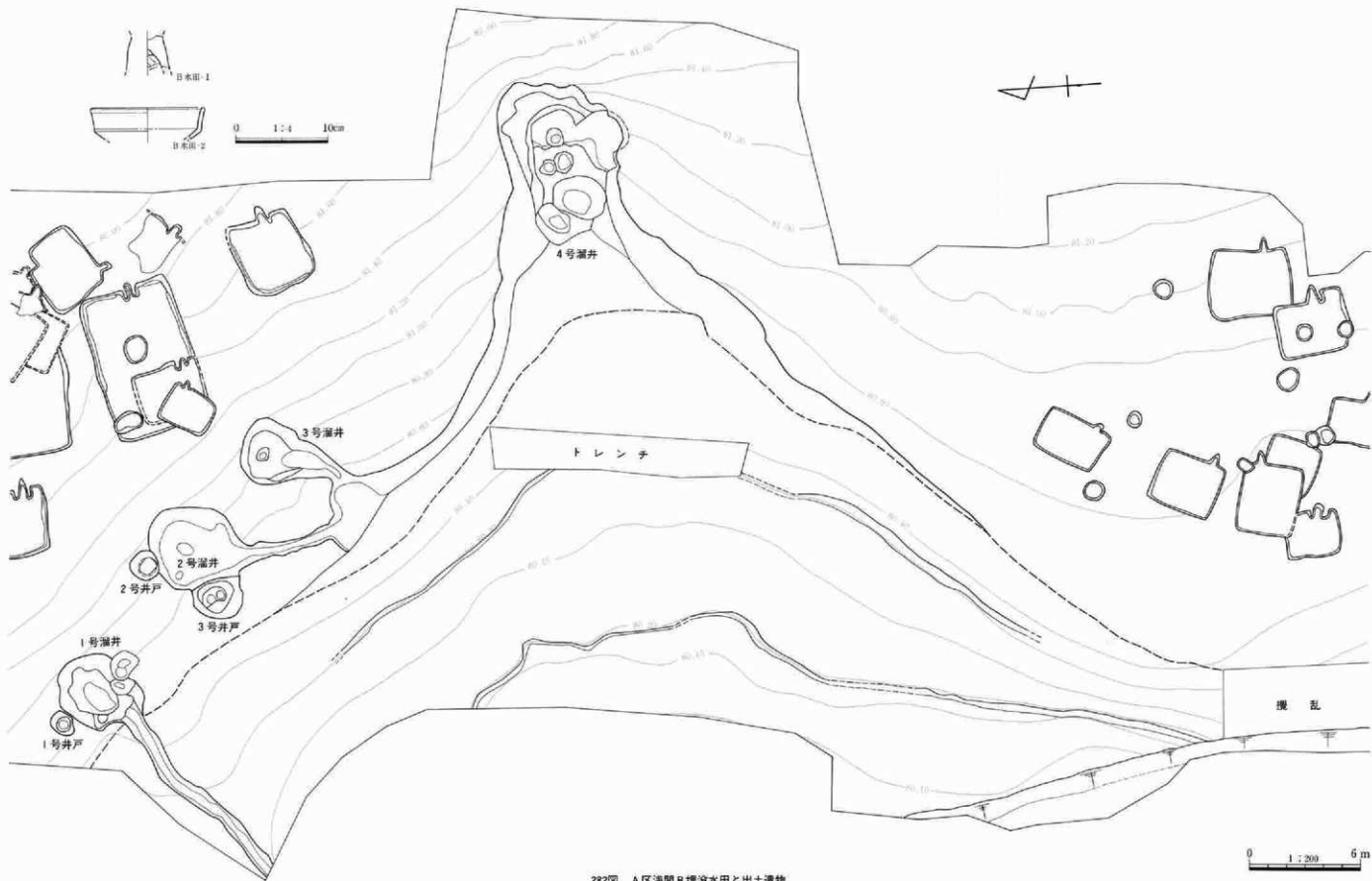
280图 A区4号溜井出土遗物(1)

0 1:4 10cm

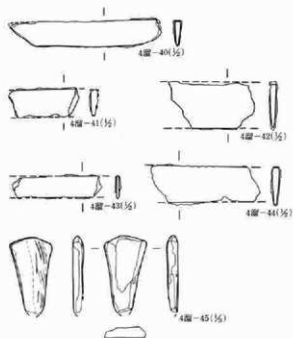
第2章 調査された遺構と遺物



281図 A区4号窖井出土遺物(2)



282図 A区浅間B地区水田と出土遺物



283図 A区4号掘井出土遺物(3)

第4節 畠

畠はG区で検出された。G区はA区沖積地の西側、砂壤土からなる微高地上にあり、調査面積は85m²と狭いものであった。現状の地目は水田で水田耕作土、水田床土の下から5条の鋤跡列を検出した。鋤跡は黄灰色砂壤土を確認面とし、浅間Cを多量に含む黒色土を埋没させていた。

第1列は9.36m。両端とも調査区域外に延びている。列の方向はN63°Wで西端はやや南に曲がり弱い弧をなす。鋤跡の幅は約24cm、確認面からの深さは4.5~11cmである。第2列との間隔は2.2mである。第1列と第3列、第5列はそれぞれの間隔が2.2m、2.5mとやや異なるが掘削の方向がほぼ一致しており同時性が認められる。また、いずれの列も調査区域外に鋤跡が延びており広範囲に高作耕作が行われていたことが予想される。第5列は東側には延びず一単位の端部と思われる。

G区は宮川遺跡と同一微高地上に立地する。宮川遺跡では古墳時代前期の住居が検出されており本調査区の畠との関連性が注目されることである。

写真 PL138



284図 G区畠

第5節 竪穴状遺構

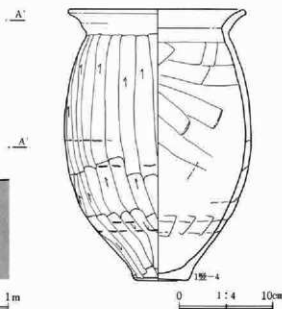
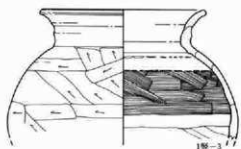
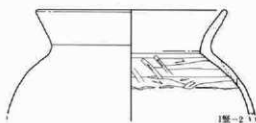
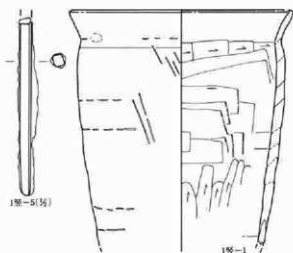
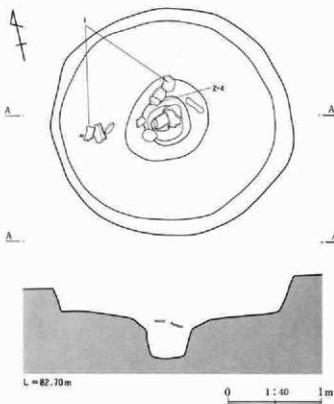
A区1号竪穴状遺構

位置 Z-33 写真 PL140

形状 東西2.59m、南北2.38mの円形を呈する。壁面は斜め上方に開いて立ち上がり、残存壁高は24~42cmを測った。底面中央には上端の長径が0.95m、短径が0.81mのピットがある。深さは0.46m、中位に弱い稜を有し、コップ状の断面形を呈していた。

遺物 埋設土中から土器、棒状鉄製品(5)、三角錐形石器(314図-17)が出土している。土器はいずれも非完形品である。壺(1)は二箇所から出土した破片が接合した。壺(2・4)はピット上方の埋設土から出土した。(観P144・145 写PL140)

備考 A区2号住居の北1mに位置するが他遺構との直接の重複関係は無い。他の土器に比して形状、規模とも特異であるが埋設土や底面に炭化物・焼土等を確認することはできなかった。



285図 A区1号竪穴とその出土遺物

第6節 井戸

A区1号井戸

位置 T-32

写真 PL139

形状 上端はやや不整形の円形を呈する。規模は径1.15×1.4m、深さ0.95mを測った。

備考 1号溜井に北接する。埋設土中から少量の遺物が出土している。調査時にも比較的短時間で上面まで滞水した。

A区2号井戸

位置 S-34

写真 PL139

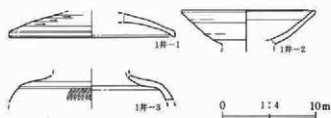
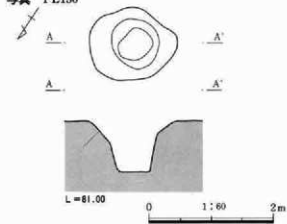
形状 上端は北側がやや傾斜するが円形に近い形状を呈する。その規模は、1.55mを測る。断面形は上面から0.5m程で最も細くなり、底面では径1.0mと広がっている。深さは1.45mである。

備考 2号溜井に北接する。遺物の出土は無かった。

A区3号井戸

位置 S-3

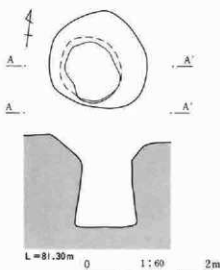
写真 PL130



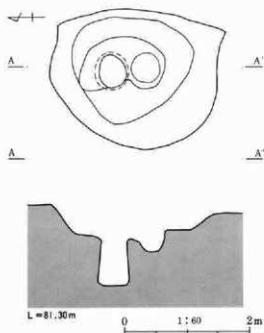
287図 A区1号井戸とその出土遺物

形状 上端は径2.15×2.7mを測る不整形円形である。断面形は上面から0.4m程を掘り込み、その中央に径0.4mを測る二つの井筒を設定している。北側の井筒は深さ0.72mを測り、壁面は底面に向けてオーバーハングしている。南側のそれはビット状である。

備考 2号溜井の西側に接する。遺物は出土していない。



286図 A区2号井戸



288図 A区3号井戸

D区1号井戸

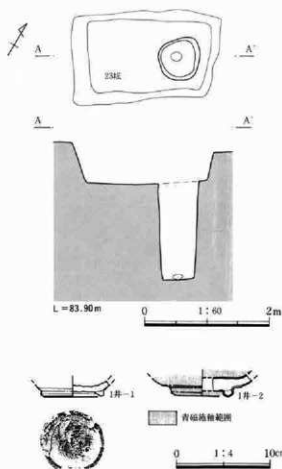
位置 e・f-57 写真 PL139

形状 上端の形状はやや不整の円形である。D区23号土壇底面での規模は径0.73×0.67m、深さは土壇底面から1.54m、D区56住居床面から2.0mをはかった。断面形は円筒形を呈し、石組等の施設は確認できなかった。

遺物 埋没土中から(1)の高台付椀の他に土釜、須恵器の甕の破片が出土しているが(2)の青磁高台付椀の年代がこの遺構の構築時期に近いと思われる。

(観P145)

備考 重複する遺構のうちD区57号住居は本井戸に先行すると思われるが23号土壇との関係は不明である。なお、この井戸は、台地の中央やや南東寄りに位置する。確認面の標高は108.37m、調査時にも少量であるが滞水した。



289図 D区1号井戸とその出土遺物

第7節 土 塚

総数201基を検出した。多少の粗密は見られながらも遺跡の全域に分布していると思われる。中には床下土、倒木痕、根痕なども含まれると思われる。また、近代以降につくられた穀物などを貯蔵するためのいわゆる「イモ穴」の可能性のあるものも含まれると思われる。但し、洪積台地上のそれらに通例認められる埋没土の状況（ロームブロック・ローム土粒を多量に含む）は見られなかった。

A区 現象的には溜井群の南と北側に分かれるが4号溜井の埋没土中に存在したかは不明である。溜井群の南側には円形またはそれを基本とする形状のものも10基、比較的まとまっている。溜井群の北側にもいくつかの集中箇所がある。A区2号住居と重複関係にある4号土塚をはじめとした8基は小径で掘り込みも不明瞭であり倒木痕の可能性が考えられる。矩形あるいはそれに近い形状のものが6基（近接するD区に2基）検出されたがこれらは地形の傾斜に対し平行あるいは直交して掘削されている。

C区 調査区の南側に集中する。

D区 調査区の中央、すなわち台地中央に集中して検出された。多くが円形、楕円形、不整形であるが51号土塚、63号土塚は張り出しのある矩形を呈している。また、調査区の東側寄りにある11号土塚はD区14・15・20号住居と重複するが不整形の平面に起伏の著しい底面をなすがいわゆる「採掘塚」に類した形状を呈している。

E区・F区 D区と同様の分布状況が続いており、台地を南北に貫いて調査したF区においても散在的ながらも間断なく検出された。

検出した土塚の中で遺物の出土したものは68基であった。その大半は埋没土中から土器の小破片が出土したもので住居等との重複状況を考えるとこれらの遺物をもってただちに土塚の構築年代を決定することは困難と思われる。遺物の出土の顕著な例として次のものがあげられる。A区1号土塚・D区7号土塚・D区22号土塚・D区43号土塚である。また、

D区19号土塚から鉄鏝が、D区27号土塚からは刀子が、D区27・41号土塚からは鉄釘が、D区53・57号土塚からは鉄洋が出土している。

以上のように構築年代を決定づける遺物の出土は少ないが多量は住居よりも新しいとおもわれる。ただし、切り合いによりA区12号土塚はA区14号住居よりも、また、D区32号土塚はD区36号住居よりも古いことが確認できた。F区10号土塚はF区1号溝よりも新しく、1号溝と重複関係にある他の土塚に同様の例が予想される。

A区1号土塚

位置 Y-31 写真 PL141

形状 やや隅丸の矩形を呈し、上端の長軸1.25m、短軸1.08mを測る。南北軸の方位はN9°30'Wである。ローム層を掘り込む壁面の残存高は0.4mである。41・42号土塚と重複している。

遺物 底面近くから3個体分の土器の大型破片が出土している。5は小型の甕の胴下部で底面から3cm離れていた。2は甕の胴部、破片の状態で8cm離れていた。底面中央からは甕の胴下半の破片が出土している。その他に埋没土中から古墳時代の土器が出土した。（観P146 写PL141）

A区25号土塚

位置 K-34 写真 PL143

形状 南北方向に長軸を有する長円形を呈する。規模は、長径1.05m、短径0.95mであり、残存壁高は0.54mである。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は、壁際がやや高くなっている。遺物の出土は無かったが埋没土の中位に灰がレンズ状に堆積していた。

D区7号土塚

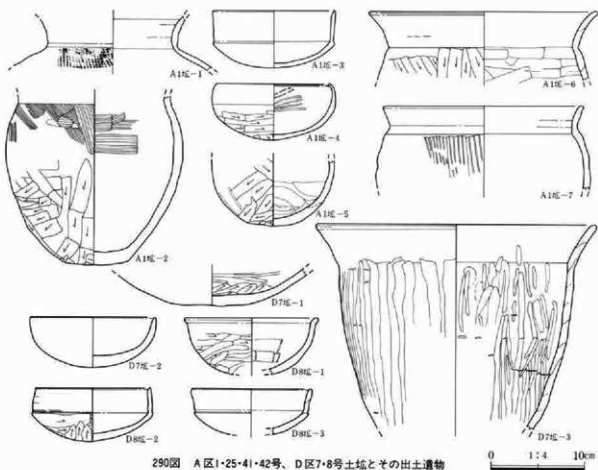
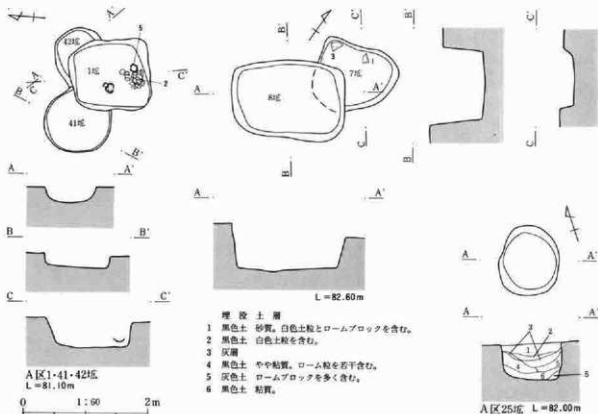
位置 E-65 写真 PL144

形状 平面形は矩形に近い不整形を呈し、規模は長軸1.28m、短軸1.0m、残存壁高0.25mを測った。長軸の方位は、N84°Eである。重複する8号土塚よりも新しい可能性が高い。

遺物 北壁際から甕と甕の破片が出土したがいずれも底面から10cm離れていた。

（観P146・147 写PL144）

第2章 調査された遺構と遺物



290図 A区1・25・41・42号、D区7・8号土壇とその出土遺物

D 区 11 号 土 塚

位置 R-65 写真 PL144

形状 南北方向1.68m、東西方向1.62mを測るが平面形、断面形とも不整形で非計画的な構築状況であることが伺われる。底面は一定せず5つ程の掘り込みを寄せ集めたような状態で、深さは0.8~1.2mを測った。壁面はオーバーハングしている部分もある。埋没土は黒褐色土とローム粒・ロームブロックが混土状を成していた。

遺物 底面の中央とそれよりやや南寄りの二箇所から4個体の土器がいずれも口縁部を上にして出土している。5の高台付椀は底面に密着し、1の杯は5に重なる位置にあり底面から約5cm離れていた。底面中央からは4の高台付椀が底面から20cm離れて、3の高台付椀が41cm離れて出土している。

(観P147 写PL145)

備考 特異な形状、埋没土器の状況からいわゆる「探掘塚」の可能性も考えられる。

D 区 22 号 土 塚

位置 f-58 写真 PL146

形状 長円形を呈していたと思われるが北側部分は調査区域外に及んでいる。規模は、長軸1.86m、短軸1.05m以上、残存壁高0.26mを測った。重複するD区44号住居よりも新しいと思われる。底面の中央には炭化物の薄い層が広がっていた。

遺物 埋没土中からは杯、高台付椀、高台付皿、須恵器大甕、灰釉陶器の壺、椀、段皿などが出土した。杯のほかは破片が多く、底面から10cm前後の層位に集中していた。

(観P148・149 写PL146)

D 区 43 号 土 塚

位置 e-56 写真 PL147

形状 隅丸の矩形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5mを測る。長軸の方向はN7°Eである。四隅は41・44・77号の各土塚と重複する。

遺物 ほほ平坦な底面の中央南寄りからは高台付椀の高台部が、北寄りからは高台付椀と小型の甕の破片が出土している。

(観P150 写PL147)

D 区 51 号 土 塚

位置 f-53 写真 PL148

形状 下端の一方の辺の長さが1.78mを測る矩形の主体部に矩形の張り出し部が付くと思われる。北側部分は調査区域外に及ぶが長軸の長さは2.63m、最大幅1.30m以上である。残存壁高は、主体部で1.17m、張り出し部で0.7mを測った。

遺物 埋没土中からは杯、大型の甕が出土している。

(観P151 写PL148)

備考 平面形からは地下式(土)塚との近似性を指摘できるが地下式(土)塚に通例認められる天井部は存在しなかったし、埋没土も暗褐色土で天井部が崩落したような状況も検知できなかった。

D 区 63 号 土 塚

位置 f-52

形状 D区51号土塚と同様に張り出し部の付く形状である。規模は、最大長2.47m、最大幅1.52mを測る。長軸の方向はN65°Eである。主体部は、下端の長さが東西1.4m、南北1.2mの矩形、張り出し部も東西0.64m、南北0.85mの矩形を呈していた。残存壁高は、主体部が0.85m、張り出し部が0.45mである。埋没土は黒味のある暗褐色土で天井部の存在は推定できない。

遺物 杯、灰釉陶器の高台付椀などの破片が出土している。

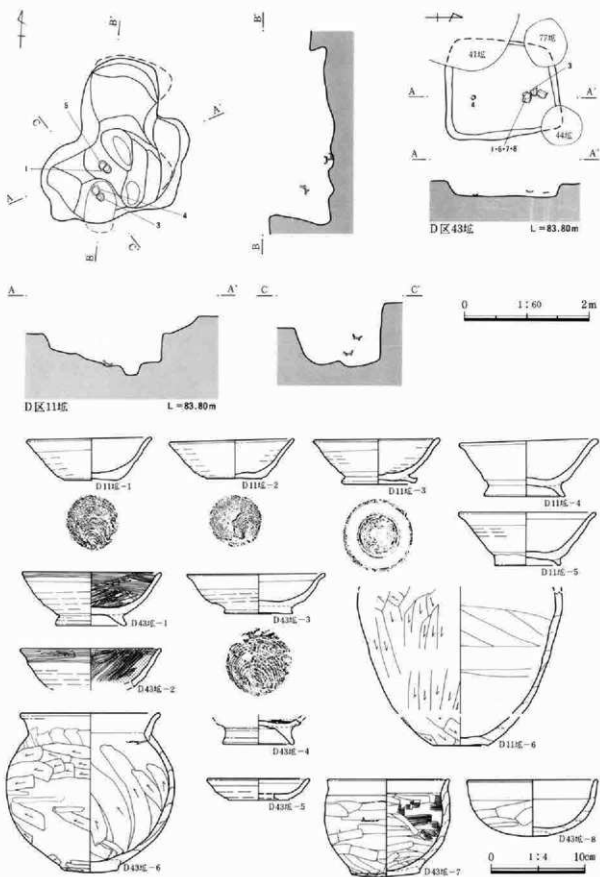
(観P152)

F 区 49 号 土 塚

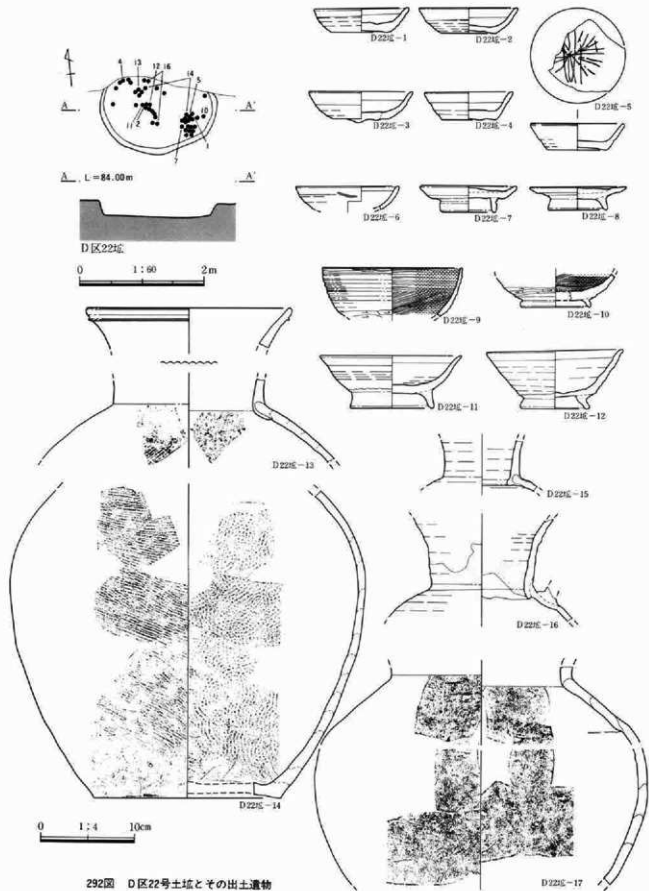
位置 c-47

形状 上端の規模は、東西1.29m以上、南北1.07mを測る。南北軸の方向はN7°Eである。壁面の上半部は東壁をはじめ崩落が著しく下端の形状からすれば上端の形状も隅丸の矩形を呈していたと思われる。残存壁高は1.88mと他の土塚に比してとりわけ深く井戸の可能性も考えられるが調査時の湧水はなく確証は得られなかった。F区34号住居と重複するがこれよりも新しいと思われる。

第2章 調査された遺構と遺物

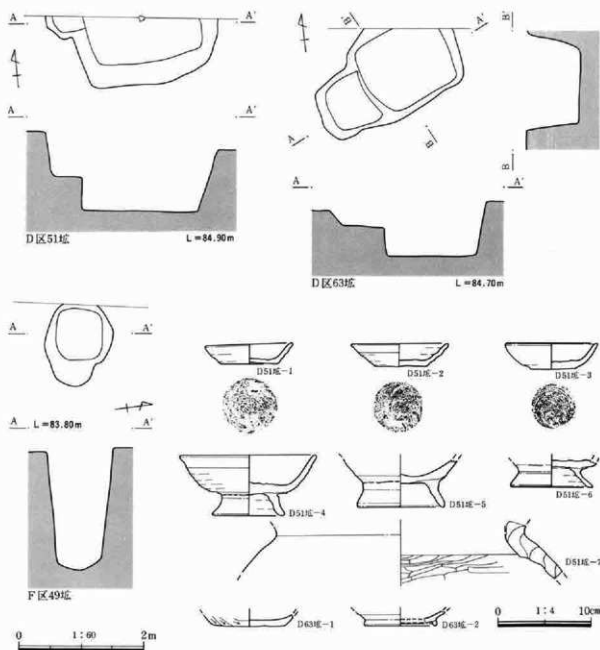


291図 D区11・43号土坑とその出土遺物



292図 D区D22号土塚とその出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



293図 D区51・63号、F区49号土坑とその出土遺物

3表 土坑一覧

番号	位置 (グリッド)	形状	規模		残存 壁高	遺構		遺物		備 考
			確認図	底面		挿図	写真	挿図	写真	
A-1	Y-32	矩形	1.25×1.08	1.08×0.99	0.4	290図	PL141	290図	PL141	41-42号土坑と重複。土器は床面から2～8cm程離れて出土。
A-2	Y-30	矩形	2.02×1.36	1.80×0.92	0.63	294図	PL141			平面はやや隅丸。中央が狭くなる。
A-4	Y-33	不整形	0.55×0.40	0.46×0.37	0.25	294図	PL141	307図	PL141	北壁はオーバーハングする。
A-5	Y-33	長円形	1.28×1.24	1.00×0.86	0.85	294図	PL141			

番号	位置 (グリッド)	形状	規 模		残存 壁高	遺 構		遺 物		備 考
			礎礎面	底面		挿 団	写 真	挿 団	写 真	
A-6	Y-33	長円形	0.72×0.61	0.52×0.36	0.24	294図	PL142	307図		北壁には小ピットが重複する。
A-7	Y-33	不整形	0.86×0.64	0.60×0.44	0.31	294図	PL142			底面は長円形を呈する。
A-9	Y-32	円形	1.26×1.18	1.24×1.16	0.29	294図	PL142			断面は階段状を呈し下端は不明確。
A-10	V-32	矩形	1.38×0.80	1.15×0.63	0.22	294図	PL142			壁面はやや乱れている。
A-11	V-32	矩形	1.55×1.00	1.33×0.83	0.24	294図	PL142			隅丸で東辺はやや長い。
A-12	V-33	矩形	1.80×1.58	1.46×1.30	0.92	294図	PL ¹⁴¹ ₁₄₂			14号住居と重複、住居よりも古い。
A-13	W-34	矩形	1.34×0.82	1.15×0.60	0.24	294図	PL142			やや隅丸である。
A-14	Y-35	矩形	1.35×1.03	1.16×0.84	0.25	294図	PL142			東側の2隅丸である。
A-15	Z-35	円形	1.43×1.42	1.18×1.13	0.41	294図	PL143			
A-20	Y-34	長円形	1.05×0.90	0.82×0.71	0.29	295図	PL143			3号住居と重複する。
A-22	S-36	長円形	1.40×1.15	1.26×0.77	0.33	295図	PL143			17号住居よりも新しい。
A-23	T-35	長円形	1.35×0.97	1.40×0.78	0.12	295図	PL143			17号住居よりも新しい。
A-25	K-34	長円形	1.10×0.95	0.90×0.80	0.54	290図	PL143			埋設土の中心に灰層が認められる。
A-27	I-35	長円形	1.14×1.14	1.08×0.94	0.28	295図	PL143			埋設土の中心に灰層が認められる。
A-28	I-35	不整形	1.05×0.87	0.68×0.68	0.40	294図	PL144			31号住居、29号土壇と重複いずれよりも新しいと思われる。底面に二箇所小ピットがある。
A-29	I-35	不整形	0.93×0.70	0.72×0.55	0.43	294図	PL144			30号住居、28号土壇と重複いずれよりも新しい。底面に0.53×0.20、深さ0.11mのピットがある。
A-30	J-36	円形	1.05×1.00	0.84×0.82	0.16	295図	PL144			埋設土は暗褐色土である。
A-31	K-35	長円形	0.85×0.74	0.52×0.43	0.13	295図				
A-32	J-35	矩形	(0.76)×0.65	0.72×0.50	0.28	295図				28号住居よりも新しい。やや隅丸。
A-33	I-36	長円形	0.98×0.88	0.82×0.77	0.32	295図				33号住居と重複、床下土壇の可能性もある。
A-34	I-36	長円形	0.83×0.72	0.70×0.60	0.65	295図				33号住居の南壁と重複、住居より新しい。
A-35	F-35	長円形	0.69×0.63	0.30×0.25	0.28	295図				36号住居より新しい。
A-36	Y-34	不整形	1.16×1.10	0.98×0.83	0.30	295図				3号住居と重複するが新旧関係は不明。隅丸矩形に近いと思われる。
A-37	Y-33	長円形	0.73×0.58	0.52×0.37	0.27	295図				2号住居と重複、床下土壇の可能性もある。東側に38号土壇が接する。
A-38	Y-33	長円形	0.72×0.58	0.53×0.44	0.20	295図				37号土壇と同様。
A-39	Y-33	長円形	0.69×0.52	0.34×0.30	0.17	295図				37号土壇と同様。
A-40	Y-33	長円形	0.82×0.64	0.64×0.47	0.25	295図				37号土壇と同様。西壁はピットが重複的。

第2章 調査された遺構と遺物

番号	位置 (ブロット)	形状	規模		残存 壁高	遺構		遺物		備考
			確認面	底面		押図	写真	押図	写真	
A-41	Y-31	円形	1.06×	0.98×0.93	0.27	290図				1・42号土壇と重複、新旧関係は不明。
A-42	Y-31	不整形	(0.86)×0.82	0.62×0.27	0.27	290図				隅丸の矩形か。
A-43	V-32	長円形	1.84×0.75	1.67×0.53	0.12	296図				
A-44	V-32	円形	1.20×1.20	1.08×1.03	0.18	293図				
A-45	U-34	不整形	0.98×0.90	1.14×1.08	0.21	296図				12号住居と重複する。床下土壇の可能性あり。原形は円形を呈していたか。
A-46	U-36	円形	1.25×(1.13)	1.17×1.03	0.42	296図				9・13号住居と重複するがいずれの住居よりも新しいと思われる。
A-47	U-36	矩形	0.93×0.86	0.77×0.67	0.28	296図				9・11・13号住居と重複。
A-48	a-31	不整形	1.75×1.10	1.40×0.70	0.36	296図				39号住居と重複する。二基の土壇が重複している可能性もある。
A-49	Y-33	円形	0.74×0.67	0.58×0.53	0.10	296図				底面中央から角礫が出土していた。
A-50	Y-33	長円形	0.48×0.40	0.21×0.15	0.12	296図				2号住居と重複する。
A-51	U-32	長円形?	1.07×(0.62)	0.80×(0.48)	0.19	296図				14号住居と重複する。
A-52	U-35	長円形?	(0.90)×(0.46)	0.71×(0.36)	0.41	296図				12・13号住居と重複する。
A-53	U-35	不明	(1.10)×(0.96)	0.80×(0.40)	0.26	296図				13号住居と重複する。
C-1	B-73	矩形	2.30×1.45	1.95×1.23	0.64	296図		307図		2号土壇と重複。1号住居とも重複するが住居よりも新しい。
C-2	j-73	矩形	(1.20)×1.03	(1.03)×0.94	0.45	296図				1号土壇と重複。新旧関係は不明。
C-3	r-77	長円形	0.68×0.59	0.45×0.40	0.30	297図				増設土の中心から小円礫が出土した。
C-4	i-73	長円形	1.00×0.98	0.86×0.73	0.18	297図				24号住居よりも新しい。
C-5	j-74	長円形	1.20×	1.05×	0.23	297図		307図	PL57	26号住居内、6号土壇と重複する。
C-6	j-74	長円形	(1.23)×1.23	(1.20)×1.03	0.20	297図				26号住居内、5号土壇と重複する。
C-7	j-73	不整形	1.25×	1.88×0.43	0.24	297図				26号住居、8号土壇と重複する。南部分は緩やかな立ち上がり中にテラスをもつ。2基の可能性もある。
C-8	j-73	不整形	1.18×	0.90×0.70	0.10	297図				26号住居、7号土壇と重複する。円形を呈していたと思われる。
C-9	k-73	円形	0.85×0.85	0.75×0.75	0.10	297図				
C-10	k-73	長円形	1.19×0.96	1.03×0.73	0.32	297図				
C-11	j-74	不整形	1.50×0.89	1.22×0.56	0.16	296図				原形は隅丸の矩形であったと思われる。
C-12	i-72	長円形	1.05×0.78	0.77×0.48	0.12	297図				27号住居とは重複関係にあつたか。
C-13	f-73	円形	1.57×1.53	1.38×1.34	0.21	297図				13号住居内にある。床下土壇の可能性はある。
C-14	i-73	長円形	0.63×0.57	0.31×0.30	0.24	297図				24号住居内にある。住居よりも新しい。

第7節 土 壇

番号	位置 (グリッド)	形状	規 模		残存 壁高	遺 構		遺 物		備 考
			確認面	底面		挿図	写真	挿図	写真	
C-15	u-15	不整形	(1.60×0.76)	1.34×0.77	0.30	297図				4号住居と重複する。
D-3	k-65	長円形	1.17×1.03	0.96×0.84	0.23	297図				3号住居内にあり床下土壇の可能性もある。
D-5	k-65	長円形	0.82×0.59	0.64×0.41	0.42	298図				3号住居よりも新しいと思われる。
D-7	k-65	不整形	1.28×1.00	1.13×0.87	0.25	290図	PL144	290図	PL144	8号土壇と重複するが古い。埋没土中床面から10cm離れて土器2片が出土した。
D-8	k-65	瓶 形	1.80×1.22	1.57×1.06	0.77	290図	PL144	290図	PL144	やや隅丸を呈する。21号住居、7号土壇よりも新しい。
D-9	k-64	長円形	0.99×0.80	0.87×0.60	0.28	298図				23号住居よりも新しい。
D-11	k-65	不整形	1.68×1.62	—	1.12	291図	PL144	291図	PL145	14・15・20号住居の構築下にある。埋没土中、底面に接して高台付礎がやや離れて高台付礎2個体、杯1個体が出土している。床下土壇の可能性もある。
D-14	k-63	円 形	0.92×0.87	0.71×0.67	0.25	298図	PL144			22・23・27・30号住居と重複関係の位置にあるが、新旧関係、帰属については不明である。
D-15	k-63	円 形	0.81×0.81	0.60×0.48	0.24	298図	PL144			14号土壇と同様の重複関係が認められる。底面から8cm離れて径30cmの縄出土。
D-17	f-60	円形?	(1.80×0.80)	(0.87)×0.39	0.46	299図				33号住居より新しい。
D-18	f-60	不整形	1.59×1.02	1.30×0.83	0.29	300図	PL145			隅丸の矩形に近い。
D-19	f-60	長円形	1.38×1.12	1.20×0.97	0.38	300図	PL145	307図	PL145	
D-20	f-60	矩 形	1.83×1.62	1.67×1.49	0.40	297図	PL145	307図	PL145	隅丸であるがやや形が乱れる。42号住居と重複、住居より新しいと思われる。
D-21	f-60	長円形	(1.22)×(1.08)	(1.08)×(1.08)	0.07	300図				42・43号住居と重複する。42号住居の床下土壇の可能性がある。
D-22	f-57	長円形?	1.86×(1.05)	1.21×(0.90)	0.26	292図	PL146	292図	PL146	北側は調査区域外に及ぶ。埋没土中から多数の土器が出土した。
D-23	e-57	矩 形	2.35×1.40	1.96×1.14	0.51	299図	PL146	307図	PL147	56号住居、1号井戸と重複する。住居より新しい。
D-26	f-56	円 形	1.26×(0.77)	1.07×(0.67)	0.41	300図		307図		27・39号土壇が接する。
D-27	e-56	長円形	1.20×1.14	98×100	0.38	300図		307図	PL147	26・40号土壇が接する。
D-28	e-55	不整形	1.11×1.08	0.95×0.85	0.47	300図		307図	PL147	123号土壇が接する。円形が乱れている。長円形か。
D-31	f-59	不 明	(1.44)×1.42	(0.86)×1.35	0.40	300図				36・38・40号住居、32号土壇と重複関係にある。36号住居より古い。
D-32	f-59	不整形	1.37×1.37	0.68×0.56	0.36	300図		307図	PL147	重複関係は31号土壇と同様である。
D-37	e-57	不 明	(2.00)×(0.37)	(1.70)×(0.20)	0.24	299図				47号住居より新しい。

第2章 調査された遺構と遺物

番号	位置 (グラフ)	形状	規模		残存 壁高	遺構		遺物		備考
			確認図	底面		掘削	写真	掘削	写真	
D-38	R-61	円形	1.20×(0.50)	0.92×0.60	0.41	300図				北側は調査区域外に及ぶ。51号住居と重複、住居よりも新しいか。
D-39	f-56	長円形	1.15×1.05	1.05×0.87	0.08	300図				53号住居より新しい。
D-40	e-56	円形	1.82×(1.27)	1.40×(1.15)	0.27	300図				南側は調査区域外に及ぶ。27号土壇接近。
D-41	e-56	長円形	1.58×1.25	1.40×1.10	0.31	302図		307図	PL147	48・50号住居、42・43号土壇と重複関係の位置にある。
D-42	e-56	円形	(0.65)×0.71	(0.62)×0.58	0.22	302図				41・48号土壇と重複、48号住居とも重複関係の位置にある。底面から2～3cm離れ4個の礫が出土した。
D-43	e-53	矩形	1.80×1.50	1.54×1.32	0.15	2918図	PL147	2918図	PL147	隅丸。52・54号住居、41・44・77号土壇を重複するが新旧関係は不明である。埋没土中から多数の土器が出土している。
D-44	f-53	円形	0.65×0.52	0.46×0.37	0.09	2988図	PL147	308図	PL147	52・54号住居、43号土壇と重複する。埋没土中、底面から10cm程離れて土器と礫が出土している。
D-46	e-57	長円形?	1.50×(1.40)	1.22×(1.08)	0.15	302図				54号住居、23・78号土壇と重複する。
D-47	e-56	不明	(0.33)	(0.3)	0.16	300図		307図	PL147	48号住居、48号土壇と重複。長円形か。
D-48	e-56	不明	(1.38)×(0.88)	(1.20)×(0.72)	0.23	300図				41・42・47号土壇と重複する。
D-49	f-56	不整形	0.75×0.65	0.60×0.56	0.23	302図				52号住居内にあり50号土壇と重複する。埋没土中に焼土混入。形象曜輪片が出土し、52号住居出土破片と接合する。
D-50	f-56	長円形	(1.16)×1.04	(1.06)×0.80	0.20	302図		307図		52号住居内にあり、49号土壇と重複する。
D-51	f-53	凸状を呈する	(2.63)×(1.36)	(2.25)×(0.70)	1.17	2938図	PL148	2938図	PL148	やや隅丸矩形の土壇の西側に張り出し部がついたものである。張り出し部の深さは70cm、76号住居より新しい。
D-52	e-52	長円形	1.20×1.04	1.10×0.86	0.50	300図	PL148	307図	PL148	74・75号住居重複、住居より新しいと思われる。
D-53	e-54	円形?	1.17×(0.59)	1.04×(0.48)	0.34	302図		308図		60・61号土壇と重複する。南側は調査区域外に及ぶ。
D-54	f-54	矩形	1.87×1.53	1.64×1.38	0.36	2998図	PL149	308図	PL149	79号住居よりも新しいと思われる。
D-57	e-55	不明	(1.40)×(1.18)	(1.30)×(1.04)	0.47	301図		308図	PL149	約5/6は調査区域外に及ぶ。79号住居よりも新しいと思われる。長円形か。
D-58	f-55	円形	1.48×(1.10)	1.42×(0.93)	0.27	3018図				78・79号住居よりも新しいと思われる。
D-60	e-54	長円形	(1.40)×(1.20)	(1.30)×(1.22)	0.21	302図				79号住居、53号土壇と重複、住居より新しいと思われる。
D-61	e-54	長円形	(0.96)×1.10	0.94×1.06	0.21	302図				53号土壇と重複する。
D-62	f-52	円形	(1.48)×150	(130)×130	0.51	3018図				79号住居内に位置する。

番号	位置 (ブリード)	形 状	規 模		残存 壁高	遺 構		遺 物		備 考
			縦断面	裏 面		掃 図	写 真	掃 図	写 真	
D-63	f-52	凸状を呈する	2.47×1.52	2.12×1.21	0.85	293図		293図		矩形の土壌の西側、やや南側寄りに深さ45cmの掘り出しがついている。71号住居よりも新しい。
D-64	f-51	不 明	0.80×1.00	0.80×0.80	0.35	301図				70号住居よりも新しいと思われる。
D-65	e-51	長円形	1.46×1.22	1.18×1.12	0.52	301図				70号住居よりも新しいと思われる。
D-66	e-50	不整形	1.30×1.37	1.17×0.99	0.42	303図	PL149			矩形か。67-113号土壌と重複する。
D-67	e-50	長円形?	1.23×1.12	1.23×0.87	0.21	301図				66-113号土壌と重複する。
D-68	f-50	円 形	1.13×1.08	0.90×0.90	0.31	301図	PL149	308図	PL149	
D-69	e-49	長円形	1.26×1.20	1.03×0.93	0.45	301図				136号土壌をはきみ112号土壌が被する。
D-70	f-50	長円形	1.05×1.05	0.91×0.82	0.31	303図	PL149	308図	PL149	71号土壌と重複する。
D-71	f-50	不整形	1.00×1.54	0.98×1.36	0.31	303図	PL149			北側は調査区域外に及ぶ。70号土壌と重複する。
D-72	e-49	不 明	1.00×0.30	0.80×0.30	0.24	298図				円形か、67号住居より新しい。
D-73	e-48	長円形	1.25×1.20	1.20×1.03	0.40	301図				
D-74	f-49	長円形	0.85×0.80	0.60×0.53	0.13	298図				68号住居内にあり新旧関係不明。貯蔵穴や床下土壌の可能性がある。
D-75	f-56	長円形	1.08×0.86	0.80×0.67	0.46	298図		308図		52号住居にあり床下土壌の可能性あり。
D-77	f-56	長円形	0.75×0.65	0.44×0.42	0.73	298図		308図		52号住居、43号土壌と重複する。
D-78	e-57	矩 形	0.95×0.80	0.62×0.48	0.73	302図		308図	PL149	隅丸を呈する。54号住居、23-46号土壌と重複する。
D-79	e-57	円 形	0.79×0.75	0.58×0.60	0.32	298図		308図	PL149	56号住居内にある。土器出土。
D-87	e-58	長円形	1.10×1.00	1.07×0.64	0.25	302図		308図		88-89号土壌と重複する。58号住居よりも新しい。57号住居内にあり床下土壌の可能性もある。
D-88	e-58	不整形	0.84×0.82	0.64×0.42	0.28	302図				87-89号土壌と重複。住居との関係は87号土壌と同じ。小ピット状を呈する。
D-89	e-58	不整形	0.61×0.59	0.35×0.33	0.24	302図				87-88号土壌と重複。住居との関係は87号土壌と同じ。小ピット状を呈する。
D-111	c-58	長円形	1.13×0.98	0.89×0.61	0.30	298図				81号住居に被する。
D-112	e-50	不 明	0.90×0.90	0.82×0.80	0.25	299図				136号土壌と重複する。
D-113	e-50	不 明	0.70×1.27	0.60×0.76	0.29	303図				長円形か。66-67号土壌と重複する。
D-114	f-51	長円形	0.89×1.03	0.81×0.82	0.18	301図				70号住居よりも新しいと思われる。
D-115	e-36	円 形	1.72×1.67	1.46×1.52	0.21	301図		308図		
D-116	e-36	長円形	0.93×0.87	0.76×0.66	0.29	298図		308図	PL149	
D-117	e-36	矩 形	1.76×1.68	1.61×1.54	0.56	299図				隅丸を呈する。
D-118	f-47	長円形	0.90×0.81	0.48×0.41	0.35	298図				

第2章 調査された遺構と遺物

番 号	位 置 (グラフ)	形 状	規 模		残存 壁高	遺 構		遺 物		備 考
			確認面	底 面		押 固	写 真	押 固	写 真	
D-119	f-47	長円形	1.06×0.80	0.70×0.46	0.33	298図				
D-120	e-47	長円形	0.76×0.36	0.58×0.40	0.31	298図				62号住居内にあり、床下土壌の可能性 がある。
D-121	f-53	不 明	(1.40)×—	(1.24)×—	0.26	301図				長円形を呈するか、75号住居と重複。
D-122	e-55	矩 形	1.28×(0.60)	0.98×(0.51)	0.52	302図				隅丸を呈する。南側は調査区域外。
D-123	e-55	矩 形	(1.48)×0.70	(1.21)×(0.61)	0.19	302図				40号土壌と重複する。南側は調査区域 外。
D-124	e-56	長円形	0.74×0.54	0.60×0.53	0.25	298図				48・49号住居と重複、49号住居の床下土 壌の可能性はある。
D-125	e-56	円 形	0.50×0.50	0.40×0.37	0.17	299図				49号住居内にあり床下土壌の可能性が ある。
D-126	e-58	長円形	0.75×0.66	0.47×0.50	0.75	299図				58号住居と重複する。
D-127	e-58	円 形	0.85×0.77	0.48×0.44	0.72	299図				58号住居と重複する。
D-128	c-58	矩 形	1.43×0.90	1.29×0.70	0.23	299図				
D-129	f-62	長円形	0.72×0.62	0.60×0.57	0.29	299図				28・29号住居と重複する。
D-130	f-58	円 形	0.49×0.45	0.27×0.27	0.35	302図				44号住居、131号土壌と重複する。小 ビット状を呈する。
D-131	f-58	長円形	0.66×0.60	0.36×0.36	0.22	299図				130号土壌と重複する。
D-132	e-57	長円形	0.71×0.63	0.53×0.40	0.16	299図				47・56号住居と重複する。埋没土中、底 面から10cm分離れ円礫が出土した。
D-133	f-52	円 形	0.66×0.54	0.48×0.32	0.16	299図				73号住居内、62号土壌と重複、ビット 状を呈する。
D-134	f-46	長円形	1.46×1.27	0.94×1.04	0.33	302図				65号住居内にあり床下土壌の可能性も ある。
D-135	f-55	円 形	(1.18)×0.51	(1.04)×0.48		302図				78号住居と重複する。
D-136	e-49	円 形	(0.51)×0.45	0.38×0.32	0.21	299図				69・112号土壌と接する。
E-1	a-58	円 形	2.16×1.90	2.24×2.01	0.71	303図	PL150	308図	PL151	壁はオーバーハングし袋状を呈する。
E-2	a-58	不整形	1.63×0.90	1.38×0.77	不明	303図		308図	PL151	原形は矩形を呈していたか。
E-3	x-57	楕円形	(1.83)×(1.47)		0.52	303図		309図		5号住居と重複する。
E-4	a-58	不整形	(1.43)×(1.21)		0.46	303図				5・6号住居と重複する。
E-5	Z-58	長円形	(2.52)×(0.96)	2.48×(0.81)	0.30	303図		309図	PL150	東側は調査区域外に及ぶ。2号住居よ りも新しい。
F-1	O-47	長円形	1.98×1.63	1.62×1.42	1.58	306図	PL150	309図	PL151	4・5号住居、2・3・28号土壌と重複、 4号住居より古い。
F-2	N-47	長円形	—×1.80	(1.76)×1.67	0.33	306図	PL150			4号住居、1・3・28・29号土壌と重複す る。4号住居より古い。
F-3	N-47	不 明	—	—	0.14	306図		309図		4号住居、1・2号土壌と重複する。

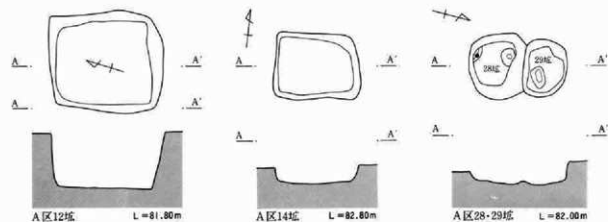
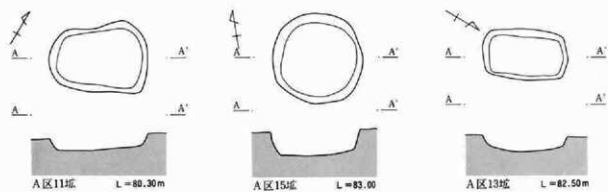
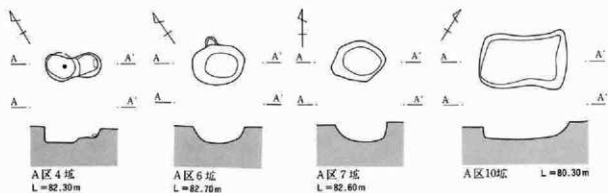
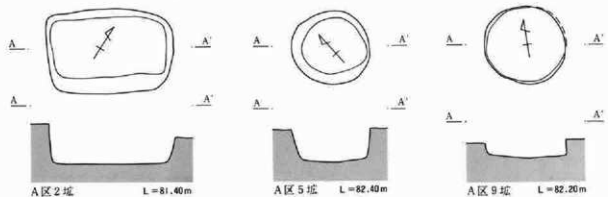
第7節 土 壇

番号	位置 (グリッド)	形状	規 模		残存 壁高	遺 構		遺 物		備 考
			確定面	底面		押 図	写 真	押 図	写 真	
F-4	U-47	不整形	1.41×0.92	1.25×0.71	0.47	303図		309図	PL151	12・13・17号住居よりも新しい。
F-5	V-47	円形	1.71×1.61	1.36×1.33	0.70	304図	PL150	309図	PL151	19号住居と重複する。
F-6	Y-47	長円形	1.42×1.40	1.31×1.07	0.71	304図	PL150			23・24号住居、1号溝と重複、住居よりも新しい。
F-7	X-47	長円形	0.59×0.59	0.30×0.25	0.75	303図		309図	PL151	径状に比して深い。帯が出土する。21号住居と重複する。
F-8	X-47	長円形	0.85×0.75	0.48×0.33	1.19	303図	PL150			21・23号住居と重複する。
F-9	Y-47	不整形	1.98×1.48	1.76×1.33	0.53	304図	PL105			23・26号住居より新しいと思われる。
F-10	Z-47	矩形	2.73×2.03	2.39×1.75	0.46	304図	PL150			隅丸。1号溝と重複、新旧関係不明。
F-13	Z-17	長円形	1.26×1.10	0.99×0.91	0.45	304図				1号溝と重複、溝よりも新しい。
F-14	a-48	長円形	1.17×0.83	1.07×0.68	0.38	304図				32・33号住居よりも新しいと思われる。
F-15	c-47	長円形	1.34×(0.90)	1.23×(0.84)	0.31	304図		309図	PL151	34号住居内にあり、西側は調査区域外に延びる。
F-16	b-47	長円形	1.09×0.96	0.92×0.90	0.53	304図				底面の形状は円形に近い。
F-17	e-47	長円形	1.03×0.94	0.77×0.64	0.54	304図				40号住居と重複する。
F-18	c-47	円形	1.33×1.09	0.90×0.89	0.13	304図				34・44号住居と重複する。
F-19	S-47	長円形	(1.14)×1.14	(1.85)×0.99	0.39	304図				20号土壇と重複する。北側部分は0.14mと狭い。
F-20	S-47	長円形	1.25×1.10	0.82×0.77	0.19	304図				19号土壇と重複する。底面は円形に近い。
F-21	S-47	円形	1.16×(1.16)	0.99×(0.91)	0.13	305図		309図		南側に58号土壇が重複する。
F-22	S-47	長円形	1.16×1.10	0.97×0.90	0.28	305図		309図		
F-23	S-47	矩形	1.56×(1.50)	1.37×(1.40)	0.18	305図				西辺は未調査、各辺とも弧状を呈する。
F-24	R-47	不整形	1.34×0.88	1.27×0.71	0.12	304図				25号土壇と重複する。西側の形状はやや不自然でもう一基が重複している可能性がある。
F-25	R-47	矩形	0.90×0.65	0.63×0.52	0.46	304図				短辺の中央は張り出し、六角形状を成す。
F-26	M-47	円形	0.98×0.94	0.88×0.78	0.17	305図				南西に27号土壇が接する。
F-27	M-47	不整形	1.10×0.65	0.83×0.39	0.13	305図				
F-28	O-47	不明	—	—	0.16	306図				5号住居、1・2号土壇と重複する。重複関係不明。円形に近い形状か。
F-29	N-47	不明	—	—	0.24	306図				2号土壇と重複する。長円形を呈すると思われるが主体は調査区域外にある。
F-30	P-47	長円形	(1.26)×(0.99)	(1.10)×(0.80)	0.38	305図				8号住居、57号土壇と重複する。

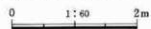
第2章 調査された遺構と遺物

番号	位置 (グリッド)	形状	規模		残存 壁高	遺構		遺物		備 考
			確認面	底面		押 固	写 真	押 固	写 真	
F-31	P-47	長円形	1.18×0.90	6.97×0.73	0.16	306図				9号住居、32号土壇と重複。住居より新しいと思われる。底面から確2点出土。
F-32	P-47	長円形	(1.70×0.86)	(1.30)×(0.70)	0.18	306図				31・33号土壇と重複する。
F-33	P-47	長円形	1.26×(1.10)	1.11×(1.03)	0.37	306図				32・34号土壇と重複。底面から円礫出土。
F-34	P-47	長円形	(1.70)×1.27	(1.61)×1.17	0.41	306図				32・33号土壇と重複する。途中で弱くくびれている。
F-35	Q-47	長円形	1.26×1.18	1.10×1.00	0.08	305図				10・11号住居と重複、いずれよりも新しい。
F-36	Q-47	矩 形	1.50×(0.83)	1.31×(0.65)	0.27	305図				やや丸味を帯びている。10号住居より新しい。
F-37	R-47	円 形	1.16×(0.80)	1.00×(0.60)	0.19	305図				10号住居より新しい。
F-40	V-47	長円形	1.30×1.18	0.90×0.85	0.59	305図				14号住居、41号土壇と重複する。14号住居は形状が不明確でこの遺構は床下土壇となる可能性がある。
F-41	V-46	長円形	1.15×(0.96)	0.82×0.67	0.43	305図				40・42号土壇と重複する。14号住居の床下土壇となる可能性がある。
F-42	V-47	不整形	(1.63)×(1.43)	(0.88)×(0.70)	0.30	306図				14号住居の床下土壇の可能性もある。
F-43	V-47	長円形	0.92×0.73	0.48×0.43	0.42	305図				14号住居、44号土壇と重複する。底面は円形に近い形状を呈する。
F-44	U-46	長円形	0.80×0.47	0.44×0.27	0.37	305図				15号住居、43号土壇と重複する。
F-48	b-47	長円形	1.17×(0.56)	1.05×(0.49)	0.24	306図				30・31号住居よりも新しいと思われる。
F-49	c-47	矩 形	1.29×1.07	0.82×0.74	1.88	293図				34号住居内にある。西壁は未調査部分がある。東壁は上半が崩落している。井戸の可能性もある。
F-50	c-47	長円形	0.81×(0.63)	0.51×0.32	0.28	306図				南側の一部は不明確である。
F-51	e-47	矩 形	(1.20)×1.14	(1.01)×0.78	0.12	306図				西側は未調整であるが隅丸の矩形と思われる。北東隅に径0.51m、深さ0.26mのピットが重複する。42号住居より新しいと思われる。
F-53	U-47	長円形	0.94×0.75	0.71×0.50	0.37	306図				12・14号住居よりも新しいと思われる。
F-54	a-47	矩 形	(1.28)×1.15	(1.13)×0.94	0.16	306図				34号住居よりも新しいと思われる。
F-55	L-47	円 形	0.81×0.78	0.68×0.62	0.12	306図				3号住居内にある。新旧関係不明。床下土壇の可能性もある。
F-56	U-47	長円形	0.66×0.48	0.46×0.37	0.08	306図				12・17号住居よりも新しいと思われる。
F-57	P-47	円 形	0.69×(0.62)	0.47×0.47	0.30	305図				30号土壇と重複。ピット状を呈する。
F-58	S-47	円 形	0.61×0.56	0.47×0.35	0.19	305図				21号土壇と重複。ピット状を呈する。
F-59	b-47	長円形	(1.53)×(1.23)	(1.02)×(1.02)	0.42	306図				31号住居と重複する。

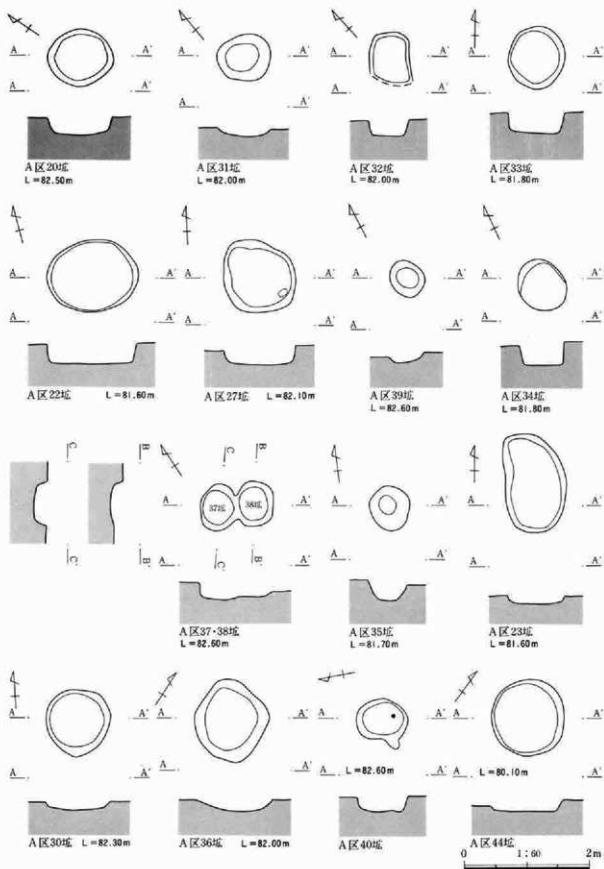
第7節 土 墟



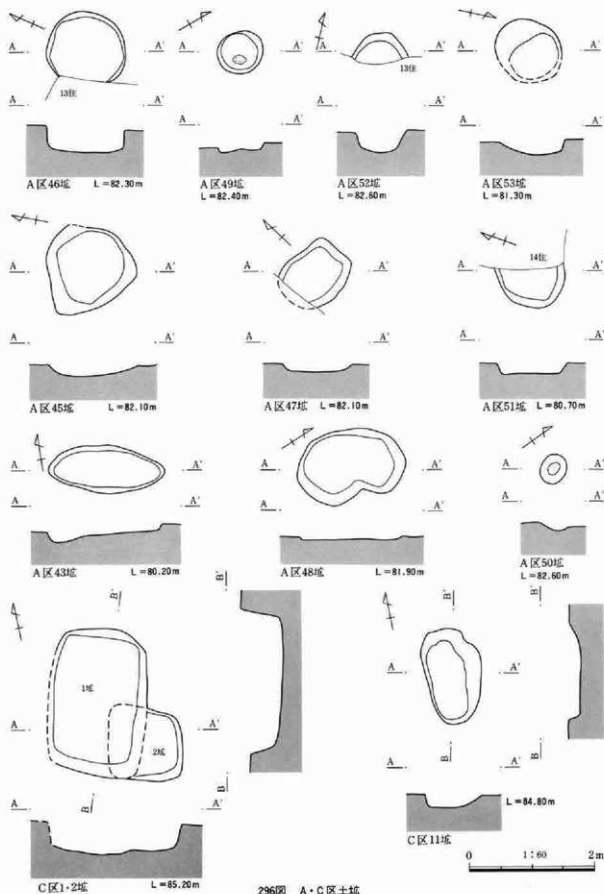
294图 A区土墟



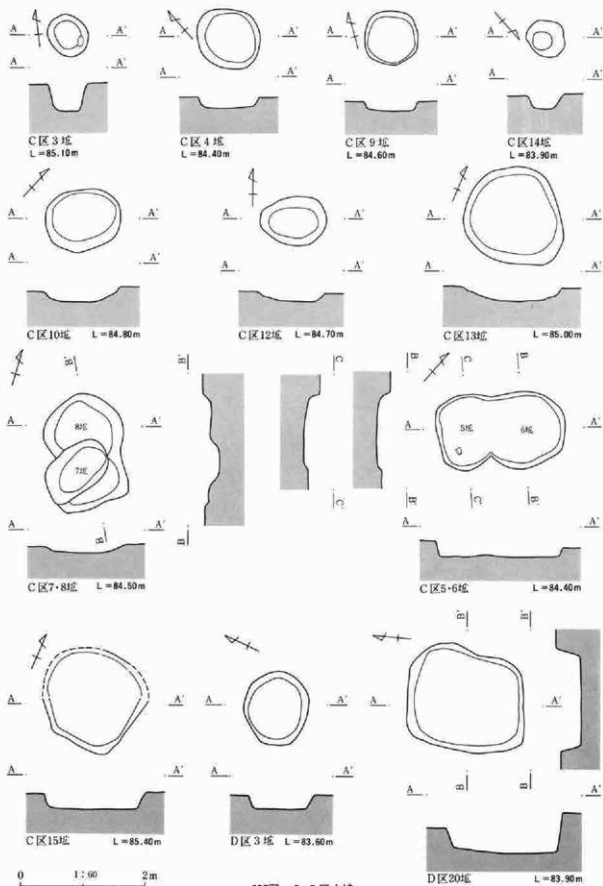
第2章 調査された遺構と遺物



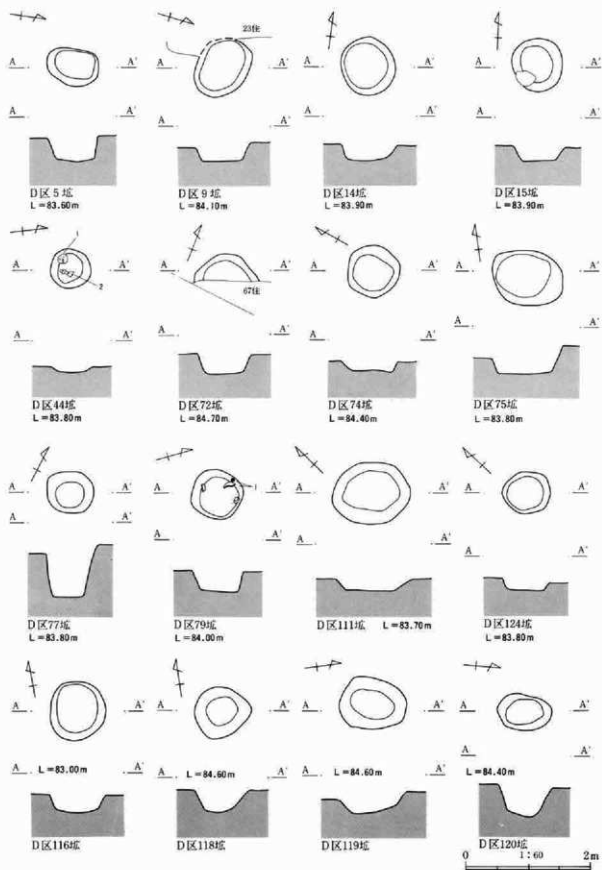
296図 A区土坑



296图 A·C区土址

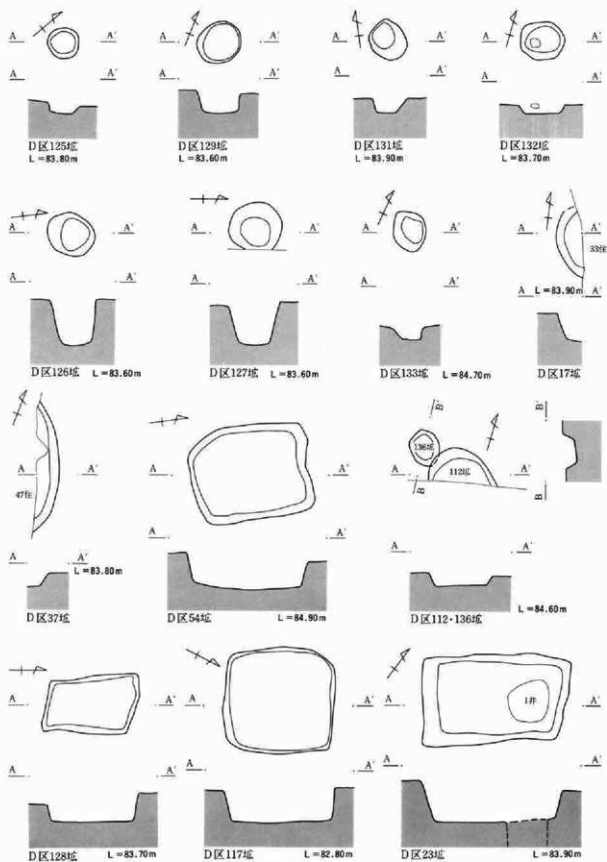


297図 C・D区土坑



298图 D区土塚

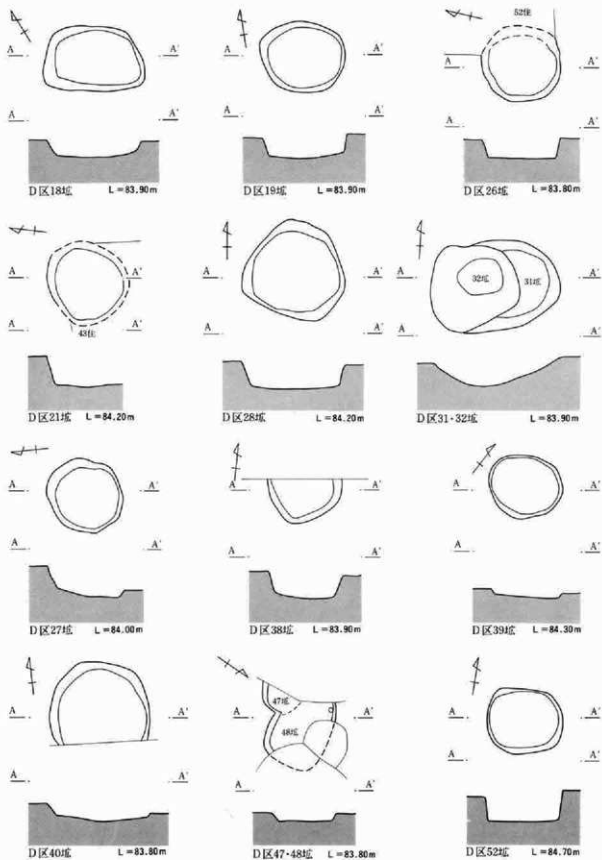
第2章 調査された遺構と遺物



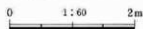
299図 D区土埵

0 1:60 2m

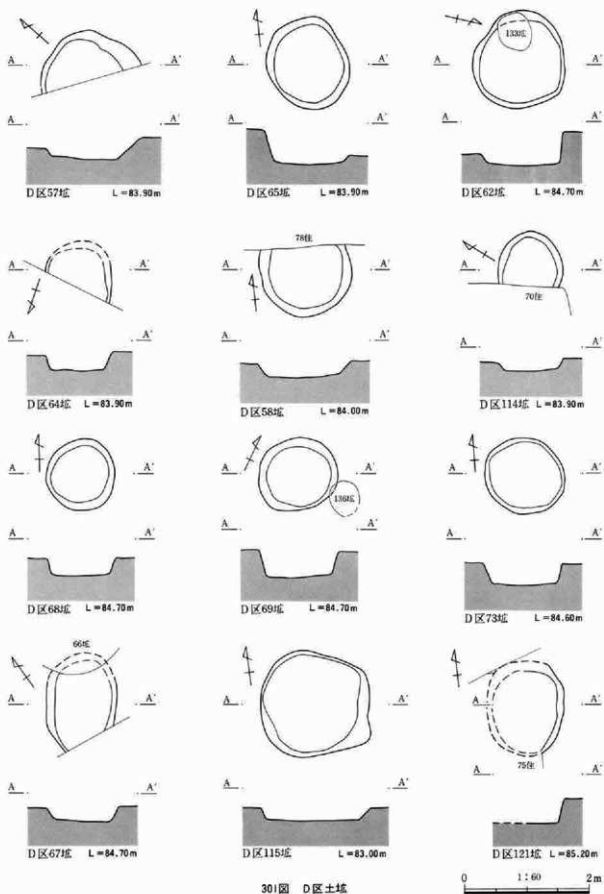
第7節 土 壇

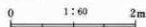
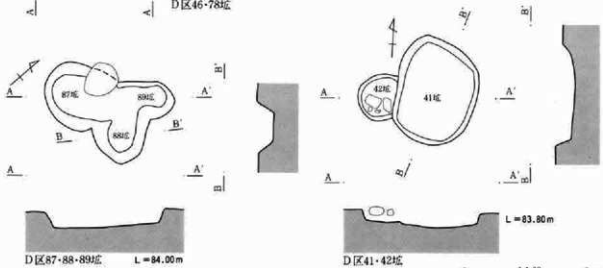
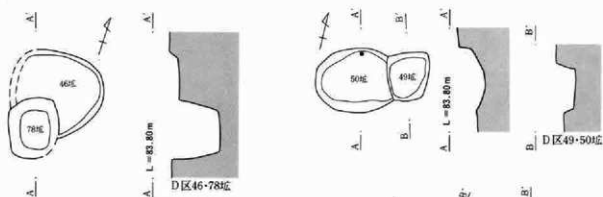
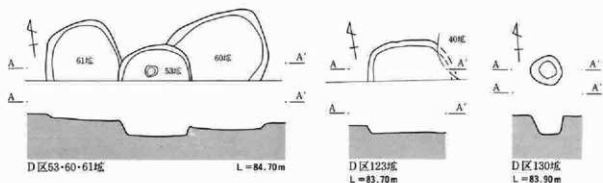
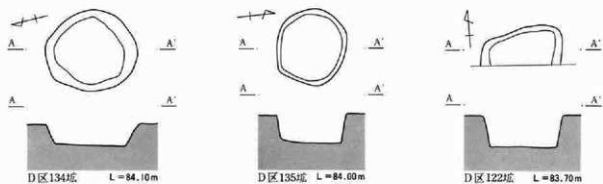


300图 D区土壇



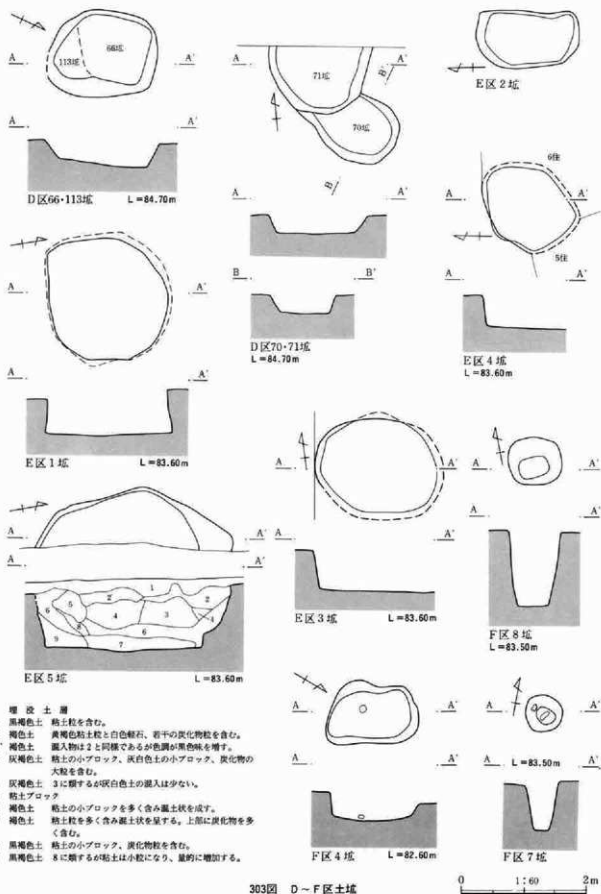
第2章 調査された遺構と遺物

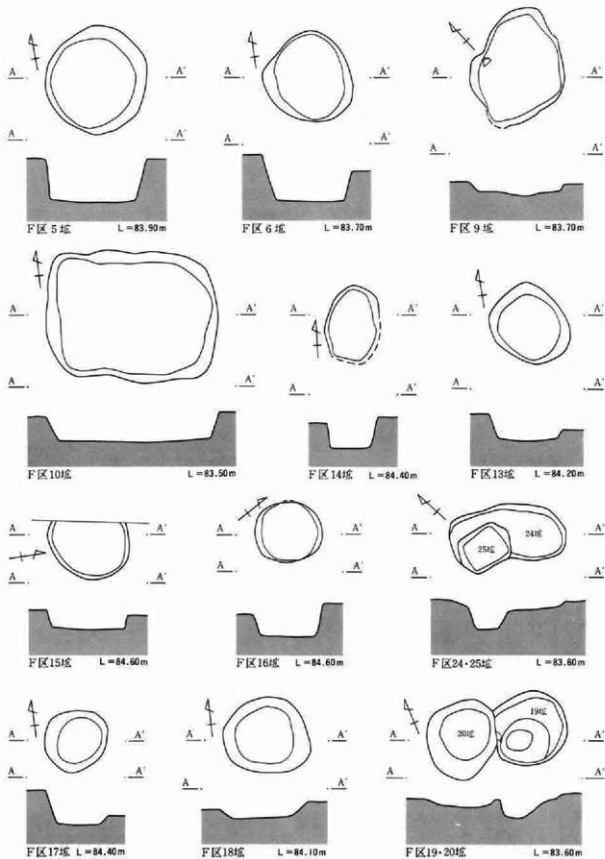




302图 D区土城

第2章 調査された遺構と遺物

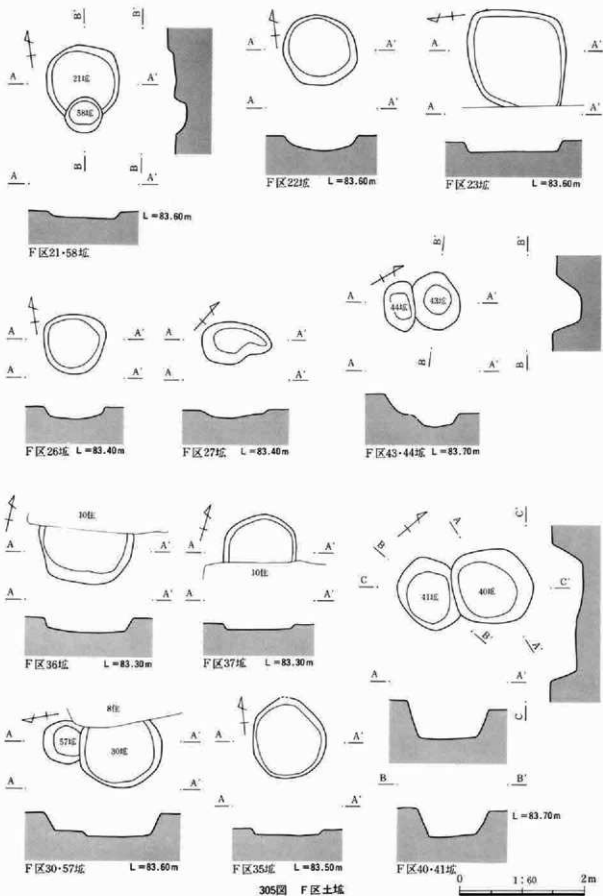


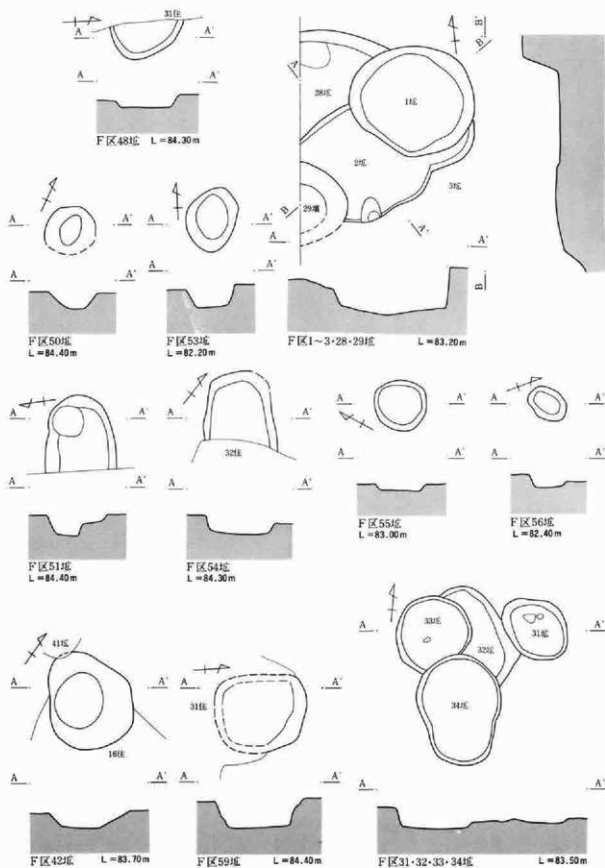


304图 F区土塚

0 1:60 2m

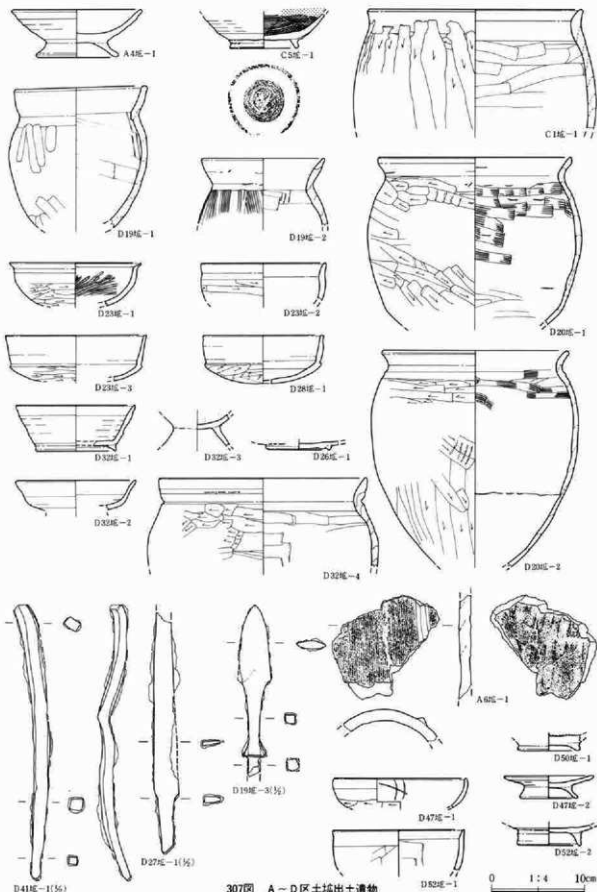
第2章 調査された遺構と遺物





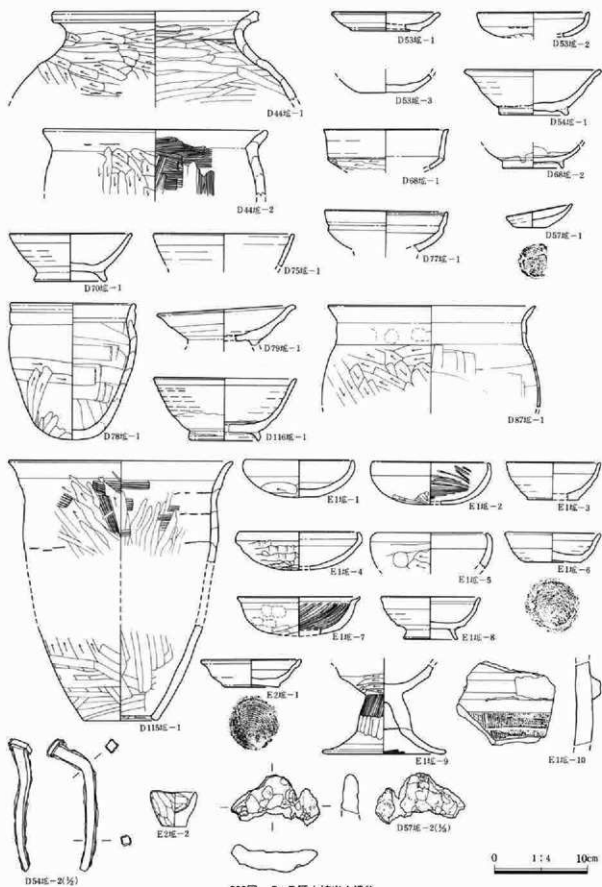
306图 F区土塚

第2章 調査された遺構と遺物



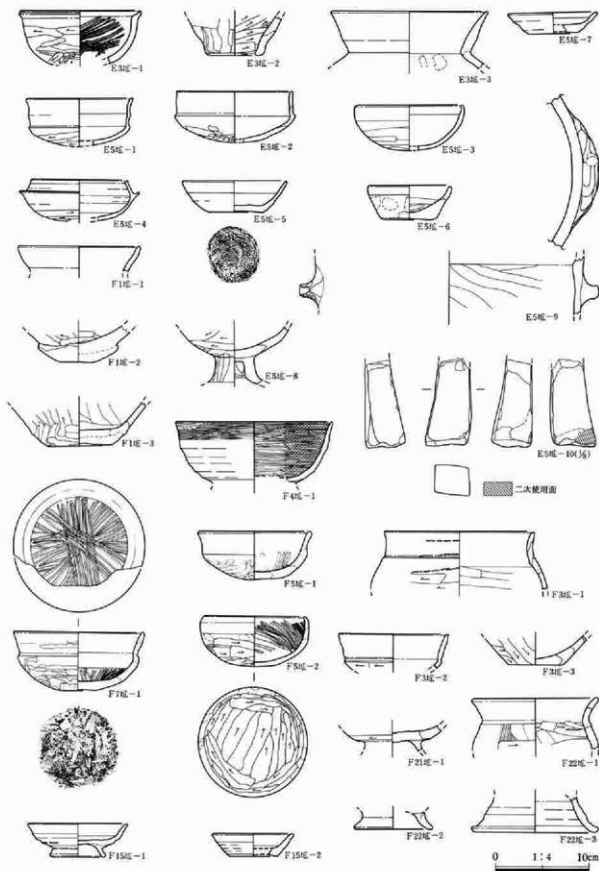
307図 A～D区土坑出土遺物

第7節 土 塚



308図 D・E区土塚出土遺物

第2章 調査された遺構と遺物



309図 E・F区土城出土遺物

第8節 溝

A区1号溝

位置 E・F-32~36 **写真** PL152
形状 A区36号住居の南側部分で東西方向に19.84mを検出した。N64~67°と北側に弱く張る弧状をなすが直線を意図して掘削されたと思われる。幅は上端が41~64cm、下端が21~40cmを測る。断面形はやや上方に開く箱型で深さは37~54cmであった。

底面の四箇所にやや乱れた円形のピットが穿たれていた。規模はPit 1の上端の径が35×28cm、底面からの深さが16cmである。以下、Pit 2が径46×33cm、深さ32cm、Pit 3が径33×28cm、深さ21cm、Pit 4が径37×20cm、深さ32cmであった。各Pit間の心々距離はPit 1と2が4m、Pit 2と3が3.9m、Pit 3と4が4.8mであった。整然とした企画性は認められないが全くアトランダムなものとも思われない。
埋没土 暗褐色土である。流水の痕跡は認められない。

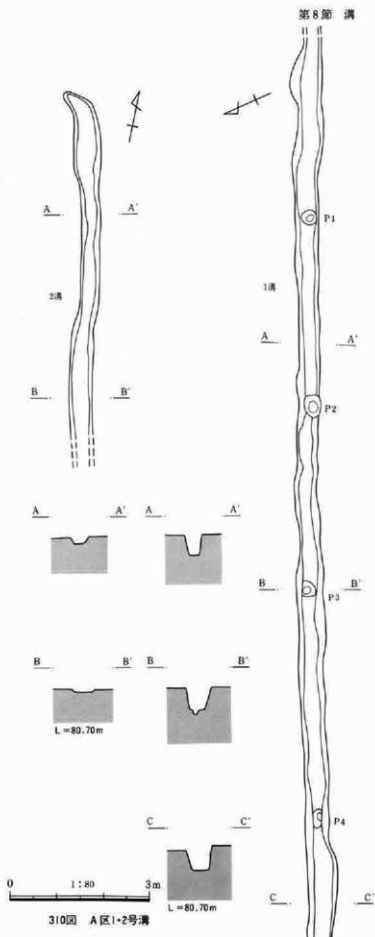
備考 東側は南流する無名河川の侵食をうけている。西側は沖積地に向かって延びている。遺物の検出は無かった。

A区2号溝

位置 D・E-34・35

形状 A区1号溝と37号住居の間で8.96mを検出した。走向はN6°30'~15°Wである。南側は無名河川により形成された涯線に向かって延びる。北端はその幅が次第に細くなり1号溝の手前で不鮮明になる。幅は上端が38~48cm、下端が20~35cmであった。深さは6~8cmと浅い。

備考 流水の痕跡は認められなかった。遺物の検出は無い。



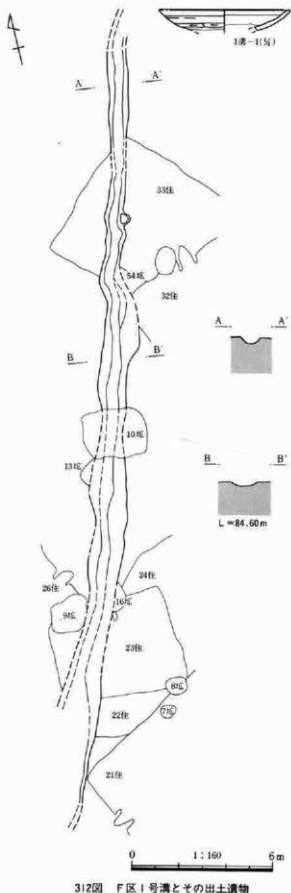
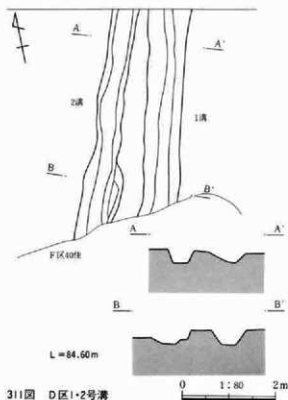
310図 A区1・2号溝

D区1・2号溝

位置 f・g-47・48 写真 PL152

形状 D区の中央、F区の調査区域と接続する部分で検出された。共に南北に延びる溝で走向は1号溝がN15°E、2号溝はN20°Eであり、そのままの走向で北側に続くとすれば検出部分の北1.6m程で双方の上端は接触することになる。1号溝は長さ4.4mを検出、規模は上幅が0.75~0.91m、下端が0.19~0.27m、深さ0.2~0.3mを測った。断面形は上方に開く台形を呈していた。2号溝は5.06mを検出した。規模は上幅が0.5~0.62m、下幅が0.23~0.33m、深さ0.25mを測った。断面形は逆台形である。検出部分の南端は東壁が乱れ中位がテラス状を呈している。

備考 共にF区40号住居の埋設土を掘り混んで形成されている。1号溝の走行する延長方向にはF区1号溝が存在しこの2つの溝は同一に延びる遺構である可能性が高い。また、2号溝もその走行方向からすればF区調査区域内での検出が予想されたが不明瞭であった。共に流水は無かったと思われる。



F区1号溝

位置 W～c-46・47

形状 F区に延びる調査区域内、台地の中央部を南北に延びており、走向はN14°Eである。長さ36mに渡り検出したが残存状態は悪かった。これは、住居、土壇との重複が激しく、壁面の検出に困難をきわめたことによる。規模は上幅が0.58～1.23m、下幅が0.38～0.52mであった。断面形は逆台形であったと思われる、残存壁高は12～27cmを測った。検出部分の南端と北端における底面の標高差は65cm、底面は南側に向かって徐々に低くなっているが部分的には起伏のあるところもある。

埋没土 F区33号住居との重複地点ではこの溝が住居の埋没土を掘り込んでいることが確認された。埋没土は二層に大別でき、上層は軽石、ローム粒を若干含む黒褐色土、下層はロームブロックを含む黒色土であった。流水は無かったと思われる。

備考 この溝の走行はD区1号溝のそれと一致するとともに圓場整備前の1,653番地と1,668番地の地境の走行ともほぼ一致しており、この溝が旧地割に関連する遺構と考えられる。

遺物 埋没土中から少量の遺物が出土したが他遺構との重複状況を考えるとそれらがこの溝の形成期を反映しているとは考えがたい。(観P156)

第9節 遺構外出土の遺物

遺構を伴わない包含層からの出土遺物としては、縄文時代の土器、石器、弥生時代から平安時代の土器、中・近世の土器の外に瓦、埴輪、土甕、鉄器、石製模造品、磁石、古銭、羽口、鉄滓が認められた。313図から324図に搭載したものはその中の一部である。また、これらの図中には竪穴住居をはじめとした遺構埋没土中出土の縄文土器、石器も含まれている。

これらの遺物は、遺跡の全域に広がって検出されている。その中でQ-36グリッドは、A区4号溜井の北側に位置する地点からは、318・319図の49から101の土器、321図136の羽口、322図148から164・169の鉄器、323図171・172・177・181の埴輪をはじめとした遺物が集中して出土した。特に、土器の量は多く、古墳時代後半から奈良時代の土師器、須恵器が遺物収納箱に3箱、杯だけでもおよそ200点を数えることができようか。出土地点やその周辺に遺構等の検出も無く、出土状態について、説明も困難であるが、A区4号溜井の出土遺物と内容、時期が共通しており、この溜井を意識した遺物の投棄行為、たとえば、水辺の祭祀などが行われていた可能性も考えられようか。

なお、この項の記載であるが、縄文時代の土器、石器については本文中で、その他の遺物については土器観察表中に行った。

縄文時代の土器(313図) 草創期後半の燃糸文土器や早期の条痕文土器、前期の羽状縄文土器、中期～後期にかけての土器片が少量検出されている。

1～4は燃糸文系土器であり、1・2は絡状体条痕文が、3・4はRの燃糸文がそれぞれ施文されている。3・4の燃糸文は節のやや粗い原体を用いてかなり密に施文しているが、3は口唇下に僅かな無文部をおいている。2は口縁部破片を利用した土器片製円板であり、周囲が研磨されている。1～3の器形は、口唇が僅かに外側に肥厚・外反する。

5～9は条痕文土器であり、5は口縁部に幅広の

隆帯をめぐらせて絡状体圧痕文を施文している。6は寛状工具による細沈線でX字状に文様構成し、円形竹管文や集合沈線文を施す。器形は6が外反した内削ぎ状の口唇を呈し、6は2段の屈曲部を有する。

10は口唇直下に2条の隆帯を貼付して棒状工具による刻みを施し、以下に複数本のRとLの絡状体を一単位とした圧痕文や円形竹管文、刺突文を施す。口唇部は角頭状を呈し、やや外反する。

11・12はO段多条のRLとLRの原体を用いて羽状に文様構成している。

13～15は胴部に懸垂文を施し、その間の縄文を磨り消している。14の口縁部には、指頭状工具による幅広い沈線によってやや形の崩れた渦巻き文が施文されている。縄文原体はいずれもRLを用いており、口縁部は横位に、胴部は縦位に施文している。14の器形は耳たぶ状の小突起をもった波状口縁を呈し、波頭部のみ外折している。

16は棒状あるいは円形竹管状工具による沈線区画文内に、LR縄文が充填されている。

5～12は胎土に繊維含む。

1～4は種荷台式、5は子母口式、6は鶴ヶ島台式、7～9は茅山式、10は花積下層式、11・12は黒浜式、13～15は加曾利E3式、16は称名寺I式にそれぞれ比定される。

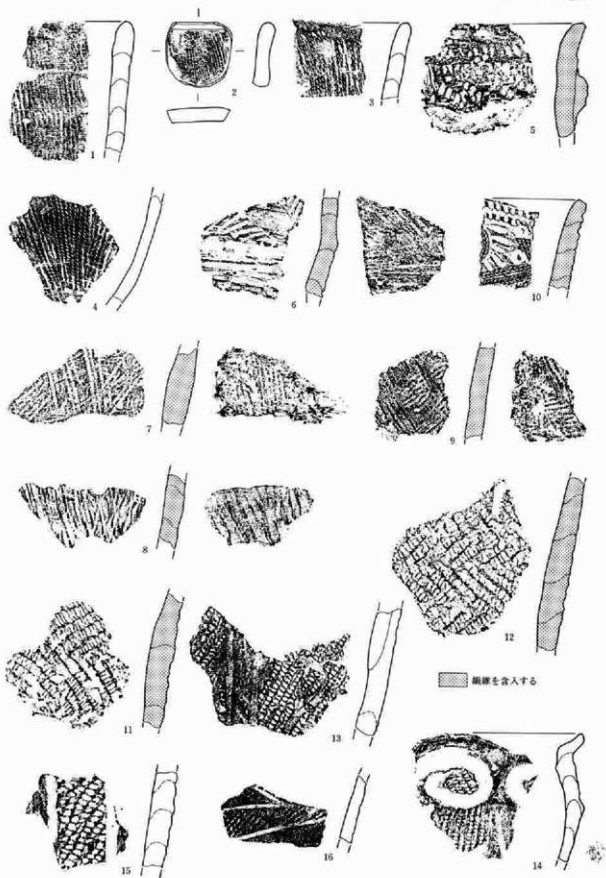
縄文時代の石器(314回～317回) 総計97点が各地点より出土しているが、A・D区より多く出土しており、台地縁辺を主体に出土する傾向が認められる。

97点の内訳は三角錐形石器2点・打製石斧16点・削器13点・加工痕ある石器11点・使用痕ある石器4点・磨石10点・石皿2点・石棒片1点・石核4点・剥片34点であり、圧倒的に黒色頁岩を用いるものが多く、ほかに黒色安山岩・チャート・片岩などがわずかにみられる。これらのうち、打製石斧には短冊形・撥形・分銅形の3形態がみられるが、各々の形態には長さ15cm・幅6～9cm前後を測る一群と長さ6～8cm・幅3～4cm前後を測る一群とが認められる。また、磨石には楕円形状を呈す偏平礫を多く用いる傾向が指摘される。これらの所属時期については、A

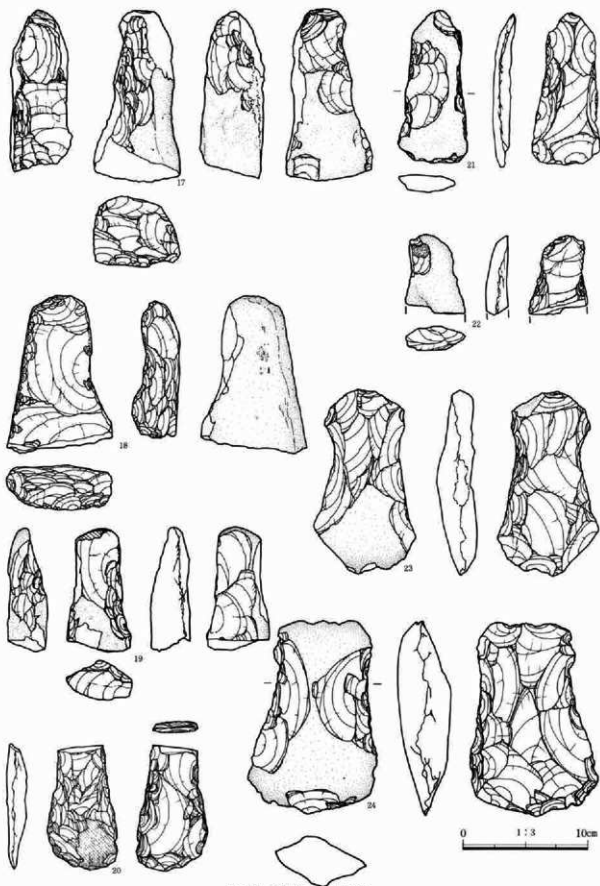
区出土の三角錐形石器2点を除き明らかではない。

314回17・18は三角錐形石器である。石器底面部は複製断面上に被われ、石器底面部と裏面のなす底面部傾角は90°前後を測る。いずれも石器裏面部および側縁部に礫表皮を残し、典型的な三角錐形石器とは相違する。17は棒状礫を、18は偏平礫を用い、それぞれ黒色頁岩を素材とする。

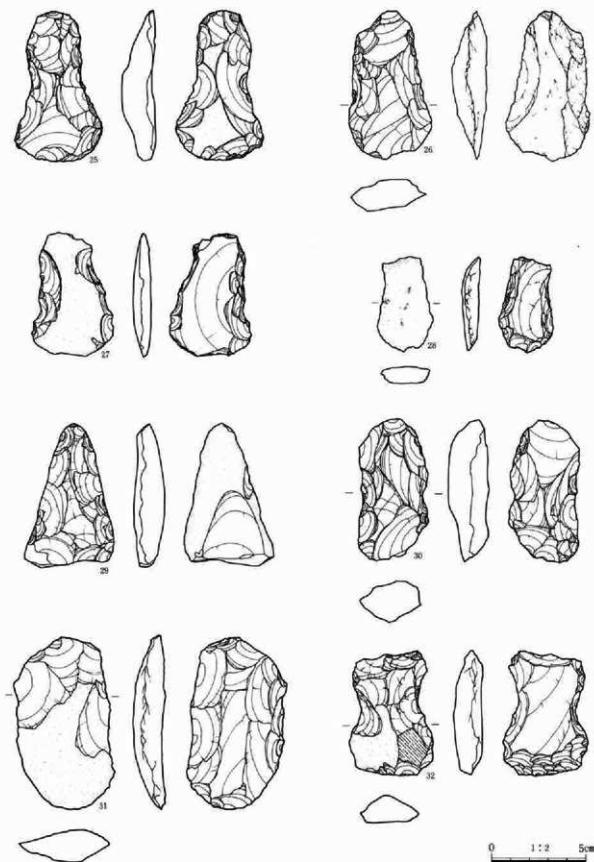
314回19～24・315回25～28・30・32、316回34はいずれも黒色頁岩を素材とする打製石斧である。19は下半部を欠損するため石器の形状は不明確であるが、概ね短冊状を呈するものと思われる。両側縁には丁寧な調整加工が施されるが、表・裏面とも礫表皮を残す。偏平礫を用いる。20は上半部を欠損するため石器の形状は不明確であるが、概ね短冊状を呈するものと思われる。両側縁には丁寧な調整加工が施される。刃部形状は円刃状を呈し、著しい摩耗痕が認められる。21・22はいずれも短冊状を呈す打製石斧である。石器の表面側に大きく礫表皮を残す。21の両側縁には丁寧な調整加工が施されるが、22の両側縁には裏面のみ調整加工が施される。23・24はいずれも撥状を呈す打製石斧である。両側縁を主体に丁寧な調整加工が施されるが、石器の表面側には大きく礫表皮を残す。いずれも器体の上半がわずかに抉れる。23の刃部形状は円刃状を、24の刃部形状は直刃状を呈す。25は撥状を呈す打製石斧である。器体の中央部はわずかに抉れ、石器の裏面側にはわずかに礫表皮を残す。両側縁には丁寧な調整加工が施されるが、潰れた状態になく、鋭い。刃部形状は円刃状を呈す。26・30は器体の上半あるいは両端を欠損するため石器の形状は不明確であるが、概ね短冊状を呈するものと思われる。両側縁には丁寧な調整加工が施される。27・28はいずれも撥状を呈す打製石斧である。石器の表面側に大きく礫表皮を残す。27には両側縁にのみ調整加工が施される。28には裏面側のみ調整加工が施され、側縁部および刃部が作出される。32は分銅形の打製石斧である。器体の中央部はわずかに抉れ、石器の表面側にはわずかに礫表皮を残す。両側縁には丁寧な調整加工が施される



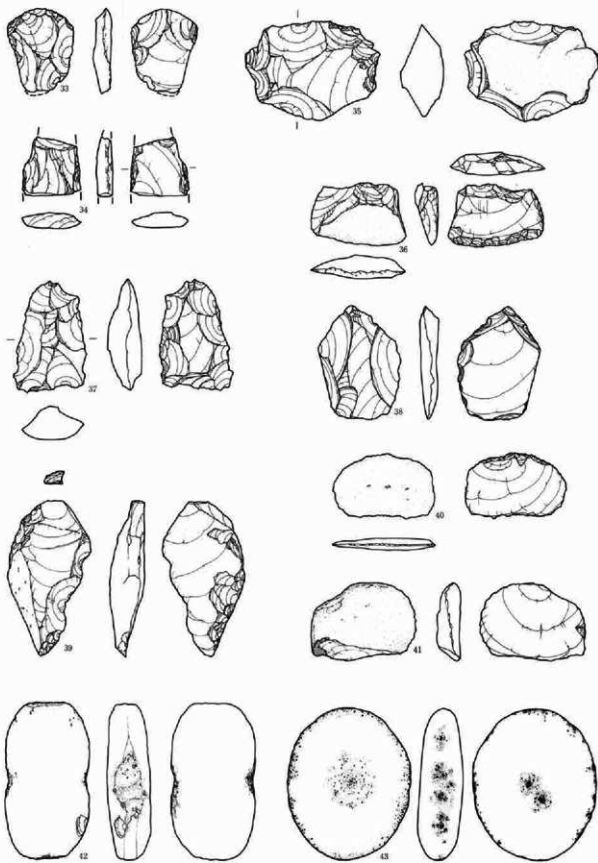
313図 遺構外出土の遺物(1)



314図 遺構外出土の遺物(2)

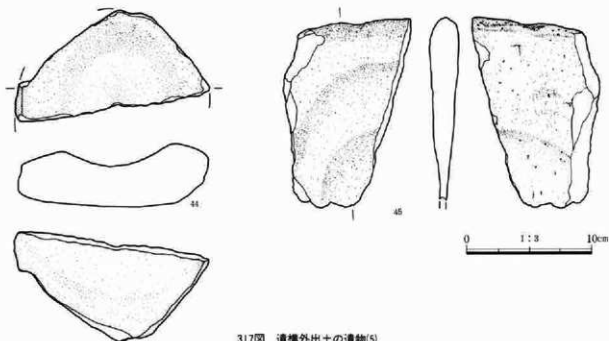


315図 遺構外出土の遺物(3)



316図 遺構外出土の遺物(4)

0 1:3 10cm



317図 遺構外出土の遺物(5)

が、潰れた状態になく、鋭い。34は両端を欠損するため石器の形状は不明確であるが、概ね短冊状を呈するものと思われる。両側縁には調整加工が施され、摩耗痕が認められる。

315図・29・31、316図33・36・38・39は削器である。29には石器の裏面側のみ調整加工が施され、直線的な側縁および鈍い先端部が作出される。器体の下半を欠損する。黒色頁岩製。31には両側縁を主体に調整加工が施され、石器の形状は楕円形状を呈す。右側縁部には微細な使用痕が認められる。黒色頁岩製。33は縦長の剥片を素材とする。右側縁部に機能部が作出されるが、調整加工は粗い。石器先端部を欠損する。黒色安山岩製。36は横長の剥片を素材とする。剥片端部および左側縁部には微細な調整加工が、打撃面には粗い調整加工が施される。剥片端部および左側縁を機能部とし、機能部には摩耗痕が認められる。石器の右半を欠損する。黒色頁岩製。38は縦長の剥片を素材とする。剥片端部および右側縁部には微細な調整加工が、打撃面には粗い調整加工が施される。剥片端部および右側縁を機能部とする。黒色頁岩製。39は縦長の剥片を素材とする。左側縁および右側縁には微細な調整加工が施され、機能部が作出される。黒色頁岩製。

316図35は分割線素材とする石核である。剥片剥離は礫表皮あるいは礫断面を打面とし、表・裏面とも求心的に行われる。黒色頁岩製。

316図37は横長の剥片を素材とする石核の未製品である。調整加工は粗く、石器の形状および機能部を作出するまでに至っていない。凸レンズ状の断面形状を呈す。黒色安山岩製。

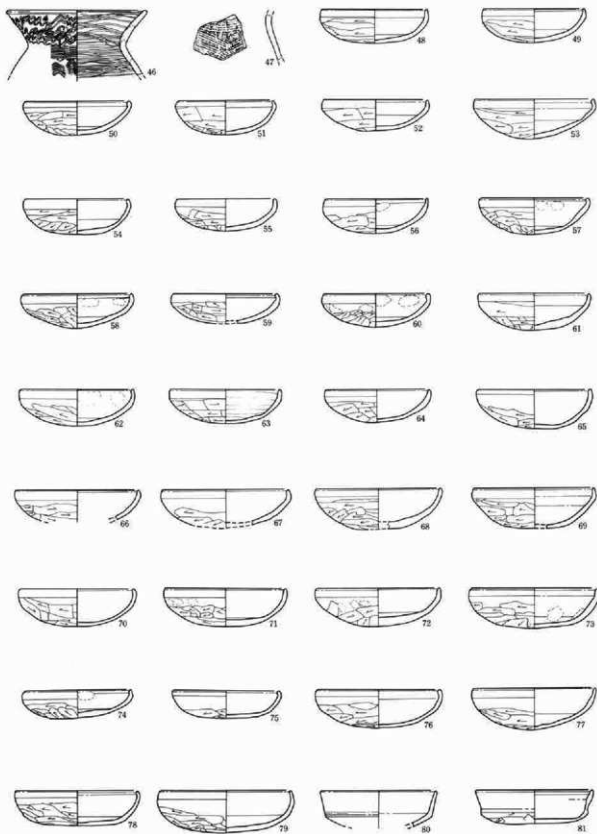
316図40・41は使用痕のある剥片であり、いずれも石器の表面に礫表皮を大きく残す縦長の剥片を素材とする。40は剥片端部を、41は右側縁部を機能部とし、微細な使用痕が認められる。いずれも黒色頁岩を用いる。

316図42には、石器の表・裏面に著しい摩耗痕が、上下両端および左右両側縁に著しい敲打痕が認められ、磨石としての機能と敲打具としての機能を備える。輝石安山岩製。

316図43には、石器の表・裏面に著しい摩耗痕および敲打痕2ヶ所が認められるほか、側縁部には敲打痕が認められる。石英閃緑岩製。

317図44・45は石皿の破損品である。44は石器の下半部を欠損する。輝石安山岩製。45は石器の3/4程度を欠損する。裏面側には線条痕がわずかながら認められる。緑色片岩製。

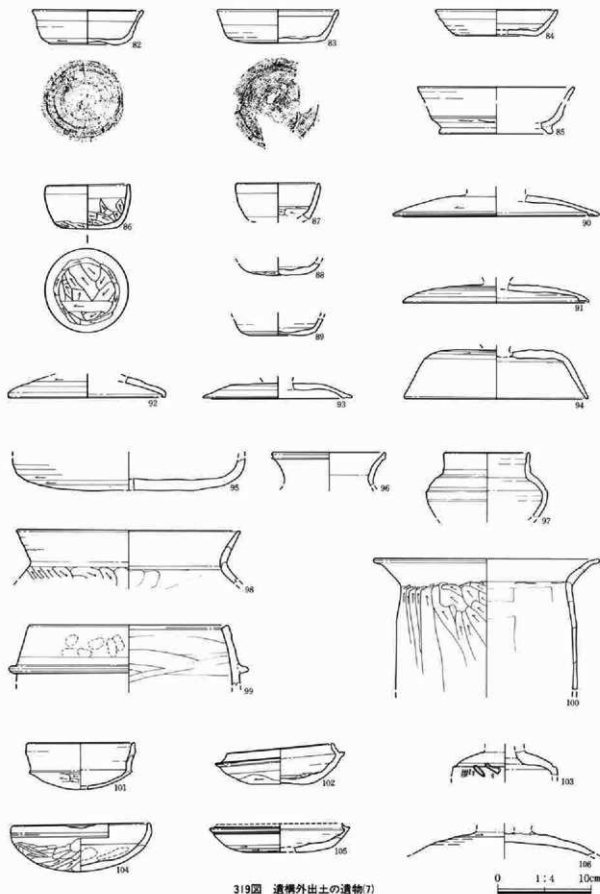
第2章 調査された遺構と遺物



318図 遺構外出土の遺物(6)

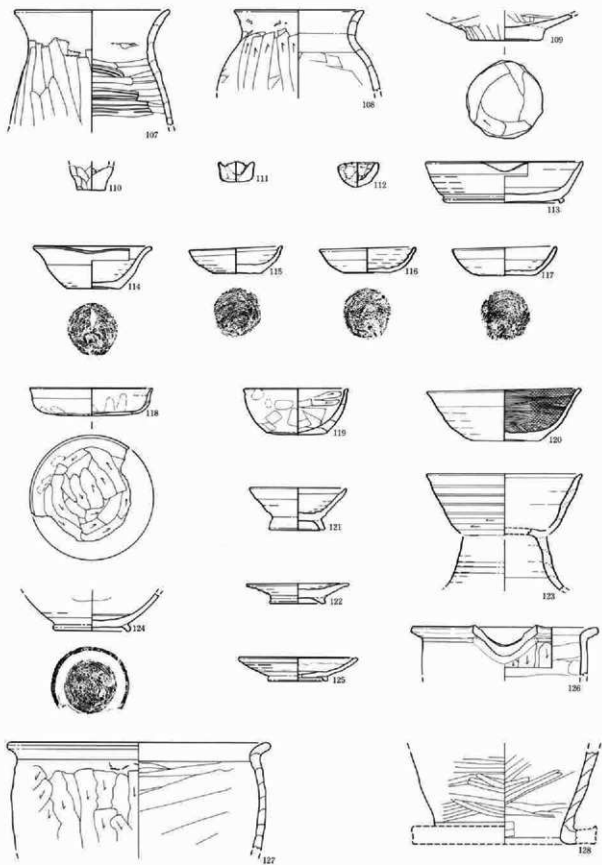
0 1:4 10cm

第9節 遺構外出土の遺物



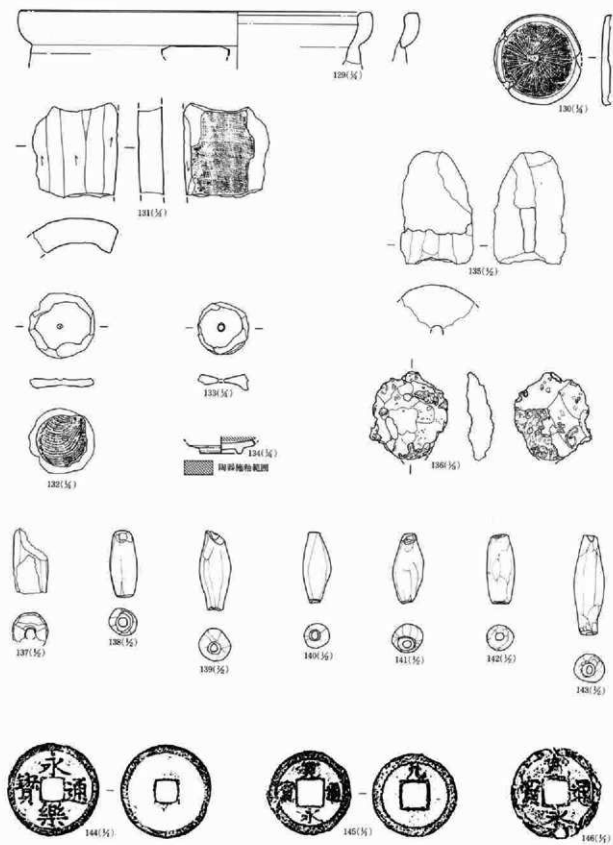
319図 遺構外出土の遺物(7)

第2章 調査された遺構と遺物



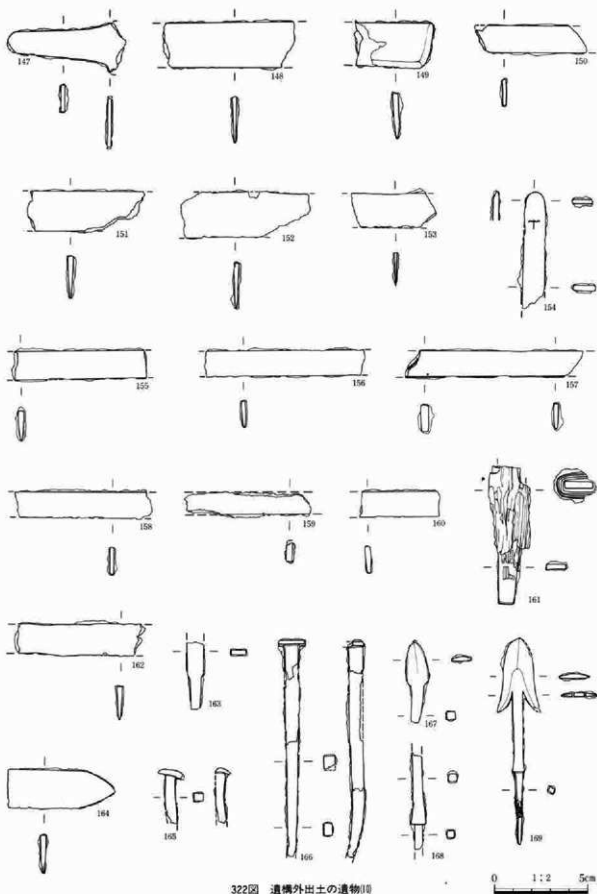
320図 遺構外出土の遺物(6)

第9節 遺構外出土の遺物



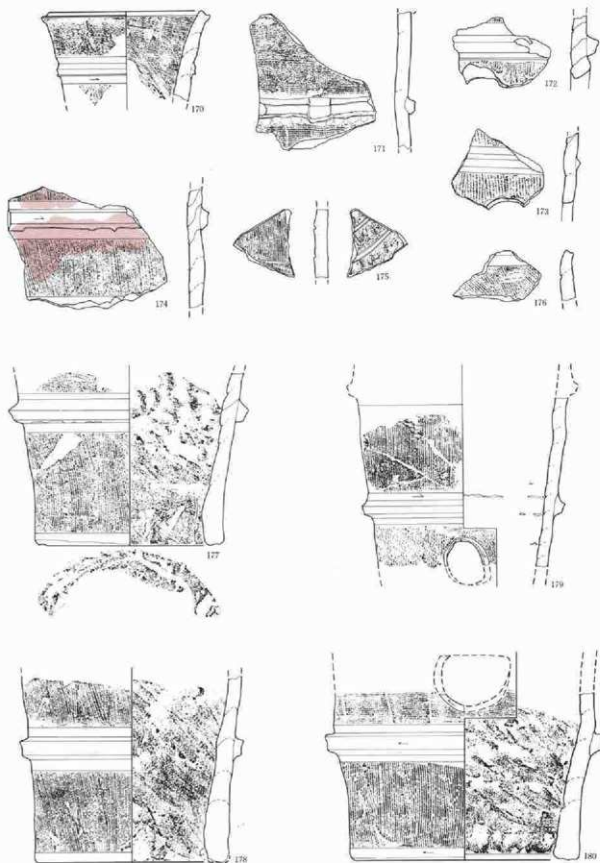
32(圖) 遺構外出土の遺物(9)

第2章 調査された遺構と遺物



322図 遺構外出土の遺物(1)

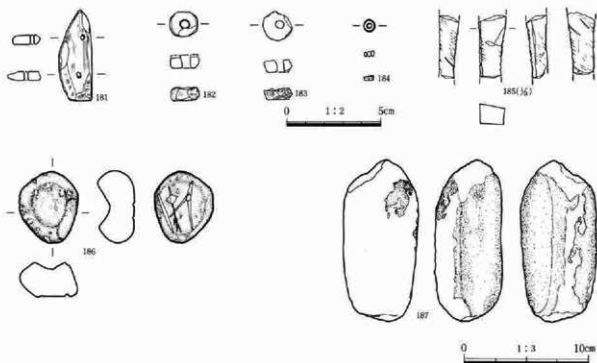
第9節 遺構外出土の遺物



323図 遺構外出土の遺物(1)

0 1:4 10cm

第2章 調査された遺構と遺物



324図 遺構外出土の遺物(7)

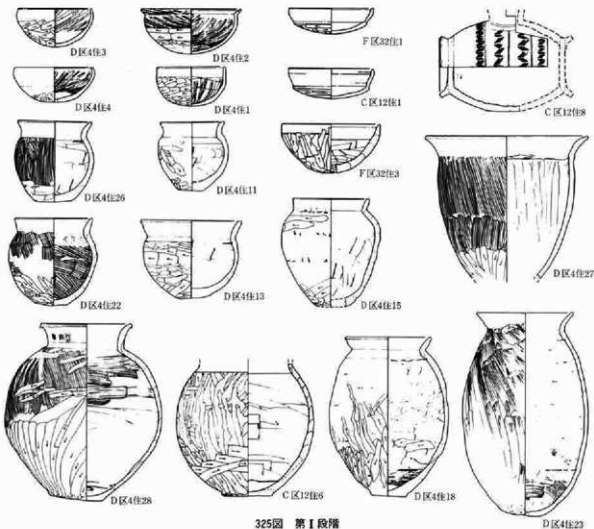
第3章 成果と問題点

第1節 出土土器の検討

荒砥天之宮遺跡からは、207軒の住居が検出された。これらの住居は、その出土土器から概ね、古墳時代から平安時代のものと思われる。以下、本遺跡における土器の変遷について検討を加え、その分類を試みるものであるが、その基準となるものは一住居出土の一括遺物である。但し、大部分の住居は、部分的な調査にとどまり、遺構全体の様相を把握できたものは少数であった。また、竪穴住居の性格上、一括遺物の認定は困難である。事実、一住居出土の土器が他時期にわたる例は多く知られており、今後は他遺跡の状況との比較も当然必要となってくる。なお、分類にあたっては量的に多く出土している杯・甕の変化が中心となった。

1、各段階の特徴

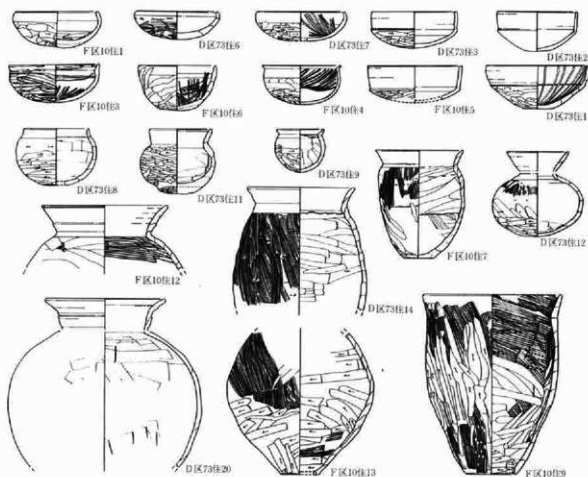
第1段階 D区4住、C区12住の出土遺物に代表される。C区13住、D区21住、D区70住、D区76住、F区23住、F区32住などが当該時期に属すると思われる。器種は、杯、碗、甕(大型・小型)、甗(大型・小型)、



325図 第1段階

D区4住23

第3章 成果と問題点



326図 第Ⅱ段階

罎（あるいは壺）が認められる。

杯 三つに大別できる。①半球形を呈し、口縁部の先端が内彎する。②口縁部は、内面に明瞭な稜をなし外反する。いわゆる内斜口縁と呼ばれるものである。③須恵器の模倣形態をとっている。底部は浅く、外傾して立ち上がる口縁部は、先端に至り弱く内彎する。①②とも内面を中心に棒状工具による文様状の磨が多用されていることが特徴の一つである。

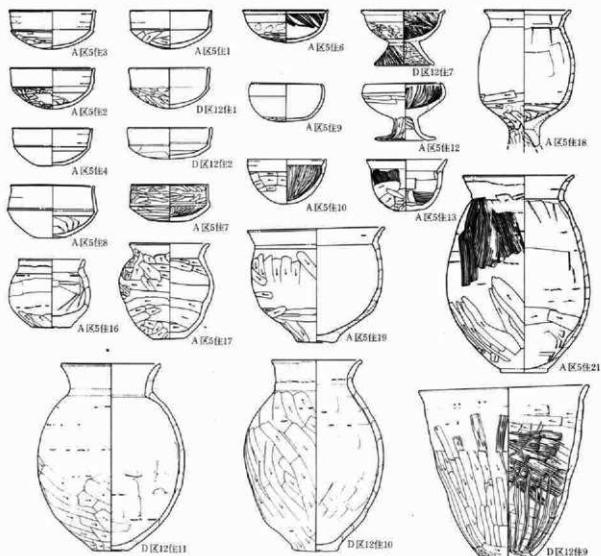
甕 大型と小型のものがある。①大型で胴部が球形を呈し大きく張り出すもの。②大型で胴部中位に最大径を有するもの。③小型で胴上位が張り出すものがある。この段階では、調整で節状の工具が使用される例が顕著である。

甗 ①大型で口縁部に最大径を有し、底部が底抜けの形状のもの。②小型で鉢状を呈し、底部に小孔が穿つてあるもの。

須恵器樽型壺 胴部の最大径と最小径の差が大きい。器内は全体に厚く繊細さに欠ける。

第Ⅱ段階 D区73住、F区10住の出土遺物に代表される。器種は、杯、あるいは椀、甕（大型・小型）、甗、罎が認められる。杯は、第Ⅰ段階の①②が主体である。須恵器模倣杯は第Ⅰ段階の模倣杯と異なり、口縁部が直立ぎみに立ち上がる形態のもので従来いわれてきた、いわゆる模倣杯である。

杯 ①半球形を呈する。第Ⅰ段階と同様の形状のものと器高の浅いものがある。②いわゆる内斜口縁のもの。第Ⅰ段階に比してやや偏平になる。③口縁部は底部との間に稜を有し直立ぎみに立ち上がるもので、器



327図 第III段階

高は深い。底部が丸底のものほかに狭小な平底の底部を有するものがある。

壺 ①第I段階の①同様大型で胴部が球形を呈するものである。口縁部が二重口縁を呈する。②大型で胴部の中位あるいはそのやや上に最大径を有する。③中型から小型で胴上位が張り。④小型で胴中位に最大径を有する。

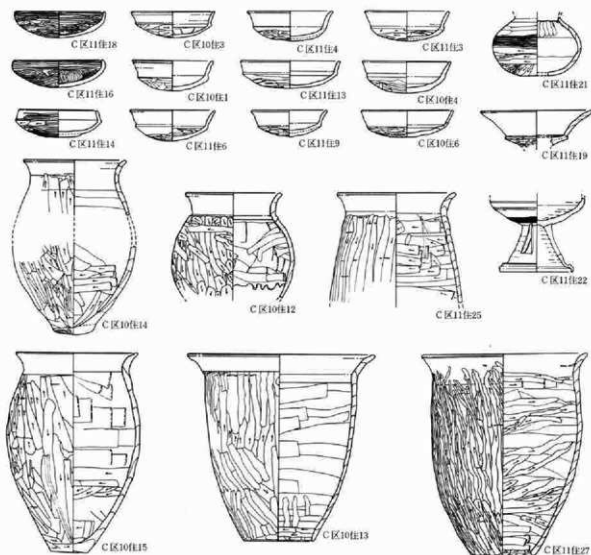
瓶 全体形状を把握できるものは少ないが大型品の存在が確認できる。

第III段階 A区5住、D区12住の出土遺物に代表される。E区3住は、やや後出の様相が有り、第IV段階との中間に位置付けられようか。器種には、杯、碗、壺（大型・小型・台付）、高杯、鉢がある。

杯 ①半球形のもの。②内斜口縁のもの。③いわゆる須恵器模倣杯の三種があるが③がその主体となる。

壺 ①大型で胴部がやや張り、中位あるいはやや下位に最大径を有するものがあるが前段階と比較すると胴部の丸みは薄れる。②小型で、胴部の上位あるいは中位に最大径を有する。③脚台部が付される。胴部はやや張るが器高を有する。

瓶 大型と小型のものがある。①大型品は、胴部の張りをやや残している。底部は、底抜けである。②小型品はF区18住出土例がこの段階と思われる。鉢状を呈し、底部に小孔が穿たれている。



328図 第IV段階

高杯 脚部は低く、裾が大きく広がる。杯部は、①半球形を呈するもの。②内斜口縁を呈するもの。③須恵器模倣杯と同様の形状を呈するものがある。

第IV段階 C区10住、C区11住に代表される。器種は、杯、甕（大型・小型）、甔、高杯、鉢、埴、須恵器高杯がある。

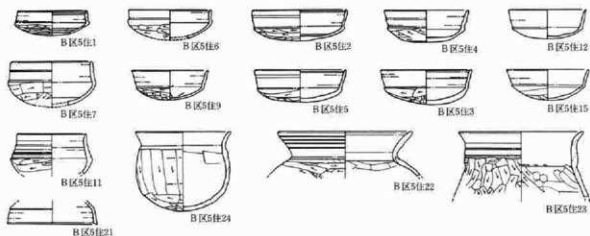
杯 ①口縁部は、底部との間に襷をなし外傾あるいは外反著しく立ち上がる。②口縁部は内湾して立ち上がる。内外面に棒状工具による磨が施されている。その内のひとつは口縁の直下に沈線がめぐる。③須恵器杯身の模倣形態をとっている。口縁部は内傾して立ち上がる。

甕 ①大型のものは前段階と同様、胴部がやや張り出す形状である。②小型のものが認められるがバラエティー豊かである。

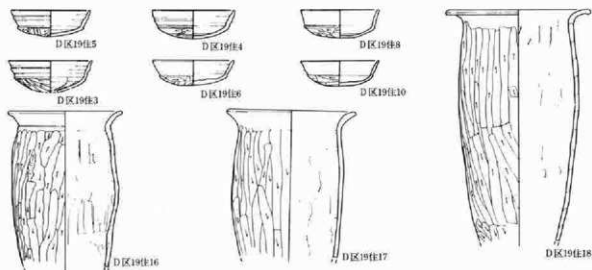
甔 大型品がある。形状は、口縁部の張りが弱くなり胴部径との差が小さくなっている。器面の調整には篋が多用されているが丁寧な仕上げである。

須恵器高杯 短脚一段で三角形の透かしが入る。

第V段階 B区5住に代表される。杯、碗、甕（大型・小型）がある。



329図 第V段階



330図 第VI段階

杯 ①前段階と同様、口縁部は外反して立ち上がるもの。②外反して立ち上がる口縁部の中位に弱い稜を有するもの。③須臾器杯身の模倣形態をとるものがある。

椀 杯③の器高を深くした形状を呈する。前段階にも存在すると思われる。

甕 ①大型で球胴を呈するもの。②大型で胴がやや張ると思われるもの。③小型で口縁部に最大径を有するものがある。

第VI段階 D区19住に代表される。器種は杯、甕が認められる。

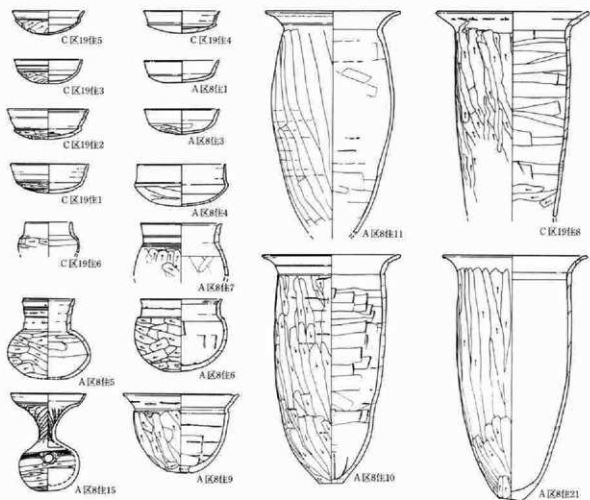
杯 ①前段階の①に続くものであるが口径がやや小さくなる。②口縁部は浅い底部から外反して立ち上がるが中位に明瞭な稜を有する。

甕 長胴である。口縁部は①短く弧状に外反するもの。②弱く屈曲して立ち上がるものがある。

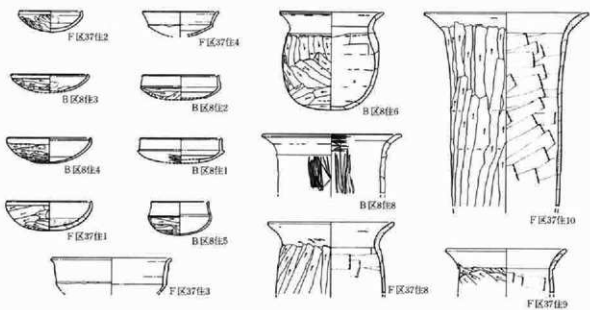
第VII段階 A区8住、C区19住がこの段階であろう。器種は杯、甕（大型・小型）、壺、甗、須臾器甗がみられる。

杯 ①前段階の①は口径がやや小さくなり、底部が浅くなる。口縁部と底部を画する稜は弱くなる。②①

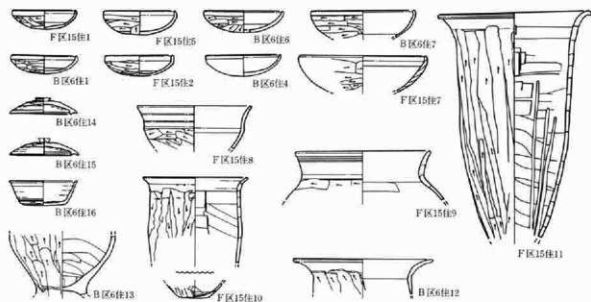
第3章 成果と問題点



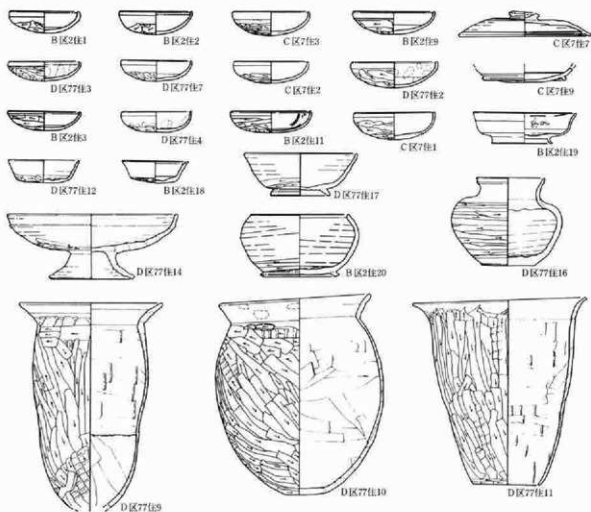
331図 第Ⅶ段階



332図 第Ⅷ段階



333図 第IX・X段階



334図 第XI段階

よりも小径でやや深みのある底部から口縁部が短く外反するもの。③前段階の②同様、口縁部の中位に稜をもつものがある。

壺 ①大型で長胴である。口縁部は屈曲することなく外反して開く。②大型長胴である。口縁部は屈曲して外反する。胴部は中位やや上に最大径をもつ。③小型。口縁部は直立ぎみに弱く外反する。④広口の口縁部に球形の胴部が付く。

甌 ①口縁部は、やや偏平な球形を呈する胴部から直立ぎみに立ち上がる。②小型で短い口縁部が立ち上がる。胴部はやや横に張り出すか。

甗 小型で胴部は鉢状を呈する。口縁部は屈曲して外反する。

須恵器甕 球形の胴部にラッパ状を呈する口縁部が付く。頸部は細く絞られている。

第VIII段階 F区37住がこの段階である。B区8住もここに含まれるか。器種は杯、壺などがある。

杯 ①前段階の①である。口径に大きな相違がある。②半球形を呈し丸底である。口縁部は内彎ぎみに立ち上がるものと弱く屈曲して直立ぎみに立ち上がるものがある。

壺 前段階同様の①②がある。

第IX・X段階 B区6住、F区15住に代表される。この段階の特徴としては杯がその主体を半球形の形状のものにすることである。器種としては、杯、壺（大型・小型・台付）、甗、須恵器蓋、杯、壺などがある。

杯 半球形の底部に続く口縁部は、①内彎ぎみに立ち上がるもの。②外面に稜をなして内折するもの。③短く直立するものに分けられる。法量分化が認められるが、口縁部の径は総じて小型で底部が浅い。底部の調整は、口縁部の横撫でのところまで施されているものが多い。

壺 良好な資料が認められないが、①長胴で前段階にもみられた口縁部に最大径を有するものがこの段階にも引き続いている。②台付壺は胴部下半の残存である。外面は寛による荒い削りが施されている。

甗 D区83住出土例がこの段階のものであろう。狭小な底部に小孔が穿ってある。

須恵器蓋 小径で内面の端部にかえりがつく。つまみは偏平なものが付く。

須恵器杯 底部は回転を伴う寛削り調整である。

第XI段階 B区2住、C区7住、D区77住がこの段階に属する。杯は前段階のものが引き続き主体となっている。器種には、杯、壺、甗がある。須恵器の器種は豊富になり、蓋、杯、高台付杯、高台付甗、脚付蓋、蓋、高台付鉢が出土している。

杯 口縁部は前段階と同様の形状が認められる。全体の形状は、前段階に比して底部の丸味が増し、平底傾向にある。底部の調整は下半が中心となってくる。また、良好な資料の図示ができないが口縁部の径が大きく皿状を呈するものもこの段階で多く認められる。この器種は、口縁部の立ち上がりの形状、口縁部と底部の比率などにバラエティーがある。

壺 ①口縁部が屈曲し強く立ち上がり、胴部の上位が張り出すもの。②球胴を呈するもの二種がある。

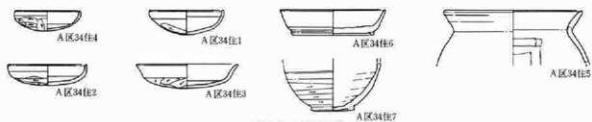
甗 大型品である。胴部の張りは弱い。外面は寛削り調整である。

須恵器蓋 口縁部の径は前段階に比較して大きくなる。内面の端部には小さなかえりがつく。C区7住出土のものつまみはボタン状を呈している。

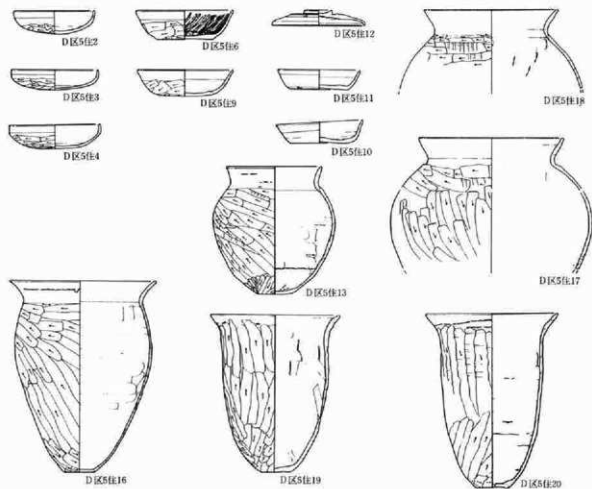
須恵器高台付杯 口径に比して器高が低い。高台部は底部の端部に付される。C区7住のそれは丸味のある底部が接地しており高台が機能していない。

須恵器杯 小径。口縁部は外傾して立ち上がる。底部は平底で手持ちの寛削りが施される。

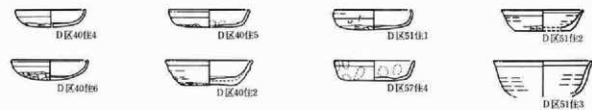
高台付甗 口縁部は、下位にやや張りをもち外傾して立ち上がる。



335図 第XII段階



336図 第XIII段階



337図 第XIV段階



338図 第XV段階

脚付盤 盤は深みがある。脚部は、ハの字状に外反する。

第XII段階 D区34住に代表される。器種は、杯、甕、須恵器高台付杯、高台付皿がある。

杯 半球形のものでは口縁部が内傾して立ち上がるものと直立ぎみに立ち上がるものがある。そのほかに大径で皿状を呈するものがある。

須恵器高台付碗 口縁部は外傾して弱く立ち上がる。高台は底部の端に付く。

第XIII段階 D区5住が好例である。器種は杯、甕、須恵器蓋、杯がある。

杯 ①半球形のものでは口縁部の形状が直立あるいはやや外傾ぎみに立ち上がる。②口縁部が外傾して立ち上がり平底を呈する。内面に暗文が施されるものも認められる。

甕 大型のものには三種類の形状がある。①口縁部が屈曲して立ち上がるもの。胴上位に最大径をもつ。

②口縁部に最大径をもち、緩やかに胴部に移行するもの。①②は、短胴化の傾向にある。③胴部が丸みを有するもの。これにはやや小型のものがある。

須恵器蓋 天井部には張りがなく、口縁部の端が小さく折れる。リング状のつまみが付く。

須恵器杯 器高は低く、口縁部は直線的に外傾する。底部は回転を伴う寛調整である。

第XIV段階 D区40住がこの段階に属すると思われる。杯、須恵器杯、高台付皿がある。

杯 ①底部が丸味をおびているもの。②底部が平底化したものがある。いずれも口縁部は外傾している。底部外面の調整は下位の一部に限られている。

須恵器杯 第XIII段階のものと比較すると底部の径が小さくなる。底部は回転糸切り離し後周縁を寛調整している。

第XV・XVI段階 D区51住、D区57住の遺物である。器種は杯、須恵器杯、碗を確認した。

杯 口縁部は、平底の底部からやや丸みを持って外傾する。底部のみが寛削りされる。

須恵器杯 口縁部は、下半にやや丸みもち立ち上がる。底部は、回転糸切り離し後周縁を撫で調整する。

第XIX・XX段階 D区20住の遺物である。器種は甕、須恵器杯、高台付碗、灰釉陶器高台付皿が出土している。須恵器はいずれも酸化焰焼成である。

須恵器高台付碗 口縁部はあまり脛が張らずに斜め外方に立ち上がる。高台は断面長方形で低い。

甕 口縁部はいわゆるコの字状口縁を呈し、胴部から直立ぎみに立ち上がったものが先端で短く外反する。

灰釉陶器高台付皿 口縁部は水平に延び、中位からやや立ち上がって外傾する。

第XXI・XXII段階 F区24住がこの段階と思われる。甕(？)、須恵器杯、高台付碗がある。

須恵器は酸化焰焼成である。

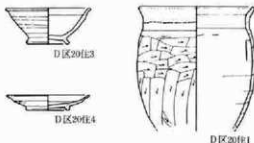
須恵器杯 口縁部は外傾著しく立ち上がる。

須恵器高台付碗 ①口縁部は外反著しく立ち上がる。②①に比して口径と高台径の比率が小さい。口縁部は外傾の度合いが弱くやや内湾ぎみに立ち上がる。①②ともに高台は高くハの字状に開く。

第XXIII・XXIV段階 A区14住、A区28住に代表される。

A区4住、A区30住もこの段階と思われる。器種は羽釜、土釜、鉢、須恵器杯、高台付碗、内黒の高台付碗、内黒の碗、灰釉陶器高台付碗、高台付皿がある。須恵器は酸化焰焼成である。

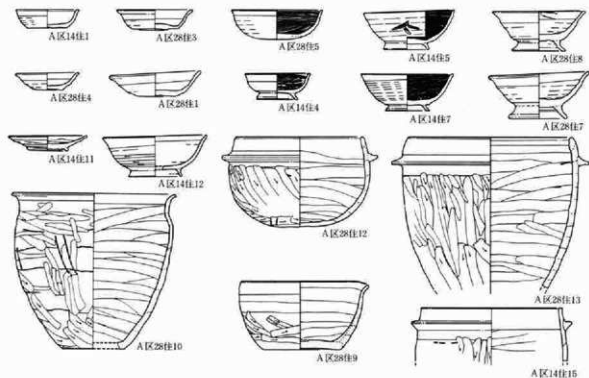
須恵器杯 大型と小型の二種がある。①小型で、底径



339回 第XIX・XX段階



340図 第XXI・XXII段階



341図 第XXIII・XXIV段階

が小さく、口縁部は斜め外方に立ち上がる。②①に比して底径がある。口縁部は外傾弱く立ち上がり先端が外反する。③大型。口縁部は外傾強く立ち上がる。

須惠器高台付碗 ①大型品である。口縁部は下位にあまり張りが無く斜め上方に立ち上がる。高台部はハの字状に外反する。②小型品である。口縁部の深みや傾きにはバラエティーがあるか。

内黒の高台付碗 ①大型品である。口縁部は腰がやや張り、先端は弱く外反する。細部の形状にはバラエティーがある。②小型品である。腰の張り、口縁部先端の形状にバラエティーがある。①②とも内面には丁寧な磨が施されている。

内黒の碗 半球形を呈する。口縁部は、斜め上方に立ち上がる。

灰釉陶器高台付碗 口縁部は下位の腰がやや張る。高台部は高く、外傾する。

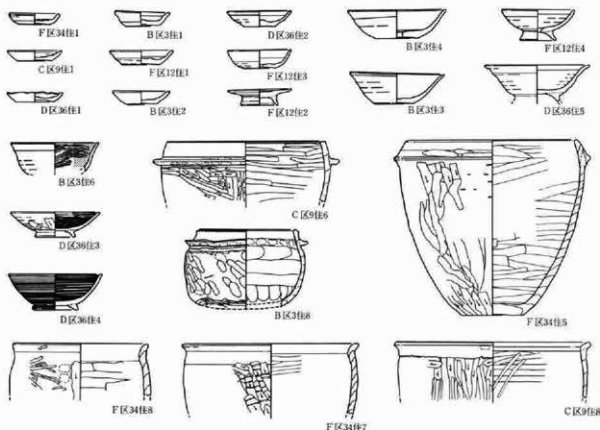
灰釉陶器高台付皿 口縁部は外傾著しく立ち上がる。高台部は退化している。

羽釜 ①鈔は形骸化している。胴部外面は、撫で縦方向に撫でに近い寛削りが施される。②丸底を呈する。胴部、底部は弱い寛削りが施されている。

土釜 口縁部は短く、外反して立ち上がる。

鉢 平底を呈し安定している。口縁部には片口が付いている。

第3章 成果と問題点



342図 第XXV・XXVI段階

第XXV・XXVI段階 B区3住、C区9住、D区36住、F区12住、F区34住などがこの段階と思われる。器種は須恵器杯、須恵器高台付椀、須恵器高台付皿、内黒の高台付椀、羽釜、土釜がある。灰釉陶器は好例が無いが伴出はしている。

須恵器杯 ①前段階に見られた小型の杯は器高が低くなるとともに口径と底径の差が小さくなり皿状を呈する。②大型で口縁部は下位が弱い張りを持って外傾、先端に至り弱く外反する。

須恵器高台付椀 ①大型で前段階の①と同様のものである。②①よりも口径がやや小さい。口縁部は丸みを持って立ち上がる。

須恵器高台付皿 口縁部（受け部）はほぼ水平に開く。

内黒の高台付椀 形状にはバラエティーがある。D区36住-4は内外面ともロクロを使用した磨が施されている。

羽釜 ①口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がる。鋳は形骸化している。②胴部は丸みをもち丸底の底部に続くと思われる。鋳の形骸化は著しく、張り付けも粗雑である。外面の調整は粗雑な撫である。

土釜 口縁部は短く弱く外反する。

2、まとめ

第1段階は、口縁部が内彎ぎみに立ち上がる半球形の杯と内斜口縁の杯が主体になっている。従来、須恵器模倣形態の杯の出現は次の段階と考えられてきていたが、最近、5世紀段階の土器の様相が検討される中でC区12住-1、F区32住-1の杯がこの段階に属することが提起されつつある。これらの杯は、口縁部の

先端が弱く内彎すること、比較的浅い底部の形状がその特徴とされている。

第II段階に至ると従来、いわゆる模倣杯と呼ばれていた口縁部が直立ぎみに立ち上がり、底部が丸みをもつ杯が出現する。ただし、第I段階同様、杯の主体は半球形、内斜口縁の杯が主体である。第III段階になるとこの主客の関係が逆転し、模倣杯が主体となる。

壺は第I段階に球形、あるいは長胴ながらも中位に張りのあるものがその主体となる。この傾向は、胴の張りがやや弱くなるが第IV段階まで続いている。

第IV段階の杯は、第III段階の模倣杯の形態が崩れ、口縁部の外傾が始まる。以後、この傾向は、バラエティーを持ちながら第VII段階まで継続する。ただし、C区10・11住の杯は口縁部の外傾が著しく、前段階の模倣杯が漸次変化したものと理解できるのであろうか。二つの段階の間に時間的な断絶があるか、または、模倣杯のなかに細かな系譜の相違を考える必要があると思われる。また、この段階から、須恵器杯身模倣の杯も認められ、以後、客体的であるが継続して存在する。C区11住-16・18の杯は、第VIII段階以降に見られる杯とはその系譜が異なると思われる。第IV段階の杯の中でも客体的な存在であり、他地域の様相を検討する必要がある。

第V段階では、口縁部の中位に弱い稜を有する杯が出現する。前段階から継続する杯は、底部が浅くなり、第VI段階では口径が絶して小さくなる。壺は、この段階位から胴部の張りが薄れ、以後、長胴化の傾向になる。

第VIII段階になると口縁部が内彎ぎみに立ち上がる杯が出現する。この段階では口縁部の形態に三種類のバラエティーがあるが、以後口縁部は直立、外傾の傾向にある。また、底部の寛削りは口縁部の横撫での部分までなされていたものが徐々に下位に限られてくる。

第IX段階は前段階と同様の杯がある。B区6住には須恵器杯の蓋身のセットが認められる。

第XI段階では杯の口縁部が強く内彎したり屈曲する形状のものは少なくなり、寛削りも下半に集中する。内面に弱いかえりをもつ須恵器蓋、高台付杯が伴う。

第XIII段階になると前段階から続く杯は口縁部が直立ぎみになる。また、これとは別に口縁部が直線的に外傾し底部が平底の杯が見られる。壺はいずれの形状も短胴化の傾向にあり、外面の調整には寛削りが顕著である。これらの土器とともにかえりの消失した須恵器蓋が出土している。

第XIV段階では杯の口縁部は外傾して立ち上がり、底部は平底である。第XV段階では直立の度合いを更に増し、外面の寛削りは底部だけに限られてくる。この二段階には底部回転糸切り離しの須恵器が共存する。

第XIX・XX段階では須恵器高台付椀にコの字口縁の崩れた壺が共存している。

第XXI・XXII段階の高台付椀②は口縁部の外傾の度合いも弱く、口径に比して器高も深いが、高台はすでに高くなっている。以後、高台付椀は、バラエティーがあるが口縁部の外傾の度合いが増し、高台の外反も著しくなる傾向がみられる。

本遺跡では第XXIII・XXIV段階で内属の高台付椀がみられる。この段階では口縁部下位に張りをもち深みのある形状であるが、次の段階では腰の張りが弱くなり、器高も浅くなる傾向にあるか。また、この段階で丸底の羽釜（鈔釜）や片口の鉢が見られる。次の第XXV・XXVI段階でも丸底の羽釜や鈔付きの羽釜がある。これらの土器は客体的な存在であるがこの段階で煮沸形態に変化が始まったことを想起させる。

第XXV・XXVI段階でみられる皿状の杯は、口径と底径の差が小さく、器高の低いものが後出傾向にある。

これらの段階についての実年代であるが、本遺跡からは直接年代を決定するにたりの資料の出土は無く、従来の土器、須恵器の編年観を援用して推定せざるを得ない。第I段階では、須恵器樽型壺が共存してい

第3章 成果と問題点

る。陶色編年では樽型甕はTK208型式の段階で消滅するとされている。第IV段階ではMT15型式に類する高杯がある。第XIX・XX段階の灰釉陶器高台付皿は美濃の大原2号窯式に、第XXIII・XXIV段階の灰釉陶器高台付椀は虎浜山1号窯式に比定できるとと思われる。以上のことから、第I段階を5世紀の第III四半期に、第IV段階を6世紀第II四半期に位置付けたい。また、第VI段階の須恵器甕は7世紀前半の形態と思われる。第IX・X段階の須恵器杯の蓋身のセットは7世紀の第III四半期から第IV四半期と考えられる。第XIX・XX段階は灰釉陶器の年代観から10世紀の後半段階、第XXIII・XXIV段階は11世紀の前半段階に比定できようか。

以上のように、荒砥天之宮遺跡の住居出土遺物についての若干の検討を加えてきたが設定した段階の年代の比定はもちろんのこと、段階の連続性の追及についても多くの点で不十分なままである。今後は各段階の土器群に再吟味を加え、その整備に努めたい。

注

- 1 須恵器模倣の土師器杯については、坂口 一氏の考察がある。坂口氏はこの中で南田之口遺跡H-2号住居、三ツ木遺跡8号住居出土の杯について取りあげ、これらの土器が従来模倣杯とされてきた以前に存在する模倣杯であることを指摘している。坂口氏には整理作業中にC区12住の土器についてのご教示を受けた。坂口 一「群馬県における出現期の須恵器模倣土師器」『勝保沢中ノ山遺跡I』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 2 県内調査資料のなかに幾つかの類別が散見できる。このほかに、群馬県埋蔵文化財調査事業団が整理中の遺跡のなかに数例があるようである。平安時代から中世に至る間の遺跡形態の変遷を考えるうえでの好資料と思われる。
①本宿・郷土遺跡MT24号住居から平底の類例が出土している。本宿・郷土遺跡発掘調査報告書 富岡市教育委員会 1981
②本宿・郷土遺跡GD37号住居からは把手状の跡が付いたものが出土している。
③天神遺跡2号住居から平底の類例が出土している。「天神遺跡発掘調査報告書」前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1987

第2節 荒砥天之宮遺跡の耕地と集落

荒砥天之宮遺跡は、昭和55年度の荒砥南部地区圃場整備事業に伴って発掘調査された「宮川下流域遺跡群」の一つである。この時の発掘調査は同時に行われた宮川河川改修工事に伴う調査もあり、赤城山麓の小河川である宮川およびその支流沿いに数箇所におよんだ。そこで、集中している各遺跡における居住域の推移を農耕地拡大のプロセスでとらえて、農業発達の視点によって各遺跡相互の関連性を追究する調査を実施した。この調査方針によって宮川下流域遺跡群の動態を明らかにし、『信濃』誌上や『荒砥島原遺跡発掘調査報告書』⁽¹⁾に逐次発表してきたところである。しかし、その後の本書編集や上武道路建設の事前調査で発掘された二之宮町の諸遺跡の成果を加えることができ、より詳細な地域のプロセスを考える資料が充実したので、ここで補述しておきたい。さらに、これらの整理作業を通して今後検討すべき課題にも触れておきたい。

荒砥天之宮遺跡が隣接する沖積地③は小河川がなく、少量の自然湧水が流下するのみであったと考えられ、谷全城を水田化するまでには至らない水量である。同年調査した荒砥島原遺跡も同じ沖積地③の下流の遺跡である。ここでは弥生時代中期の住居が検出された。この地域で今のところ最も古い農耕集落である。低地では浅間Bテフラに埋没した水田しか検出されなかったが、その下層に水田遺土を確認しており、周辺には弥生時代中期段階には水田が開かれたと考えられる。

昭和61年の上武道路二之宮千足遺跡の調査では同じ沖積地③の上流部に浅間C層下水田が検出された。この水田は傾斜のある低地面に効率良く水田を開くために等高線に沿って細長い区画をつくり、その中を小さく区切っている。この水田形態は開田型小区画として分類されるもので、5～6世紀の新聞に伴って多様されるものである。千足遺跡では4世紀代のものであり、その初瀬に近づいている。千足遺跡の発掘調査では4世紀代の住居は未確認であり、この遺跡の水田を耕作していた人々の居住域は今のところ不明であるが、周辺にはこの沖積地を開田した人々の集落があると考えられる。しかし、4世紀にはこの沖積地③の開田は全体には及んでいなかったと思われる。千足遺跡は谷頭湧水の集中する部分に当たり、この時期耕作されていた水田は、谷頭付近のみの少量の自然湧水で対応できる面積であったであろう。沖積地③の下流部、荒砥天之宮遺跡西側では浅間C層下水田は検出されなかった。

5世紀半ば、荒砥天之宮遺跡には住居がつくれ、人々が住むようになる。荒砥天之宮遺跡で検出された水田は浅間Bテフラに埋没しているが、この水田が開かれたのはこれらの最初の住居がつくられた時期と考えられる。なぜなら居住域の新聞は耕地の拡大を背景にしていると思われるからである。それまで少量の自然湧水で耕作されていた部分的な水田は溜井の掘削によって用水補給を回り、広げられていった。荒砥天之宮遺跡の調査で検出された溜井は4基であり、浅間Bテフラの堆積状況に差があるものの出土遺物から7世紀代と考えられる。溜井は、この沖積地の他地点でも検出でき、最近まで湧水のあったものもある。これらの中には住居の存在から5世紀までさかのぼるものがあると考えられる。

溜井は、本遺跡の他に群馬県内では榛名山麓や赤城山麓の欠水性の沖積地に臨む台地縁辺に三遺跡の検出例がある。高崎市熊野堂遺跡第一地区で「特殊井戸」と報告されたもの⁽⁴⁾、新里村峯岸遺跡の冷え堀が施設された溜井、前橋市二之宮谷地遺跡の溜井である。今のところ群馬県内では熊野堂遺跡のF A（榛名山二ツ岳降下火山灰）に埋没した6世紀代のものが最も古い。導水路を施設して井戸の湧水を農業用水化する溜井灌溉の出現期については、なお考究の余地を残しているが、群馬県内では、第一次新聞集落の開田には盛んに用いられるようになったものと考えられる。荒砥天之宮遺跡の浅間Bテフラに埋没した水田も千足遺跡の水田が下流に拡大されたものであろう。荒砥天之宮遺跡は住居のありかたからも溜井灌溉による耕地拡大を

第3章 成果と問題点

背景にした第一次新聞集落であると考えられる。

荒砥天之宮遺跡では浅間B層下水田が検出され、千足遺跡の浅間C層下水田の上層には、FA（榛名山二ツ岳降下火山灰）層下水田、二枚の氈蓋層下水田、浅間B層下水田と継続して水田が営まれている。重層して検出されたこれらの生産基盤を背景に、荒砥天之宮遺跡では古墳時代中期から、二之宮宮下西遺跡では古墳時代後期から、二之宮千足遺跡では奈良時代から居住域が継続し、沖積地③を共有する数集落からなる農耕村落を形成していくと考えられる。このような発展過程はそれぞれの沖積地＝生産域ごとにとどまることができると考えられる。

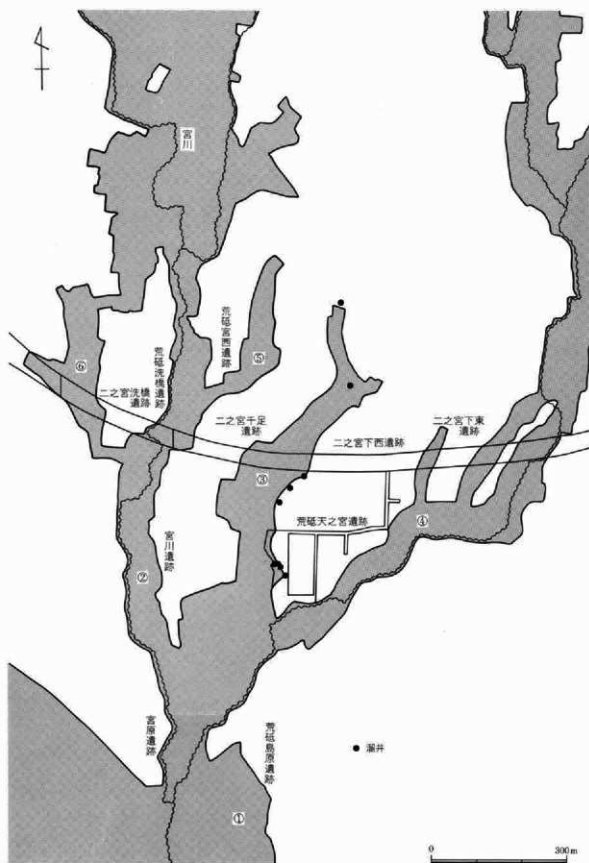
水田耕作は連作障害がないので、突発的な外的要因を除いて耕地を放棄することは基本的には考えられない。人々は、水田を開いた段階でその耕地周辺に定着することになる。確かに、住居の建て替えや畠の連作障害によって台地上の土地利用は変化していたと思われる。しかし、主たる生産の場である水田は継続している。住居の「移転」はあり得ても、生産域の「移動」はない。限定された発掘区の中では集落の全体的な動態を把握しきめることは困難であるが、遺跡群研究の視点は生産域を包括した新しい集落論には有効かつ不可欠なものである。

註

- 1 能登 健・石坂 茂・徳江秀夫・小島敦子「赤城山南麓における遺跡群研究」〔信濃〕37巻4号 1983
- 2 石坂 茂・小島敦子「荒砥島原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 3 「開田型小区画」については能登 健氏の御教授を得た。
- 4 飯塚卓二ほか「熊野堂遺跡第1地区」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 5 内田憲治・能登 健「家原遺跡」新里村教育委員会 1985
- 6 原 雅徳ほか「二之宮谷地」〔年報6〕群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 7 「農耕村落」の考え方については能登 健氏の御教授を得た。
- 8 平野 峻「作物の連作障害—原因・機構・対策の研究—」 1978

第4表 宮川下流域遺跡群の集落と耕地の変遷

沖積地	遺 跡	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		古墳時代後期		奈良時代		平安時代	
		集落	耕地	集落	耕地	集落	耕地	集落	耕地	集落	耕地	集落	耕地
①・②	宮川遺跡			○	石仮丁	○	畠	○		○		○	B水田
	島原遺跡	○				○		○		○		○	B水田
	宮原遺跡					○		(古墳群)					
③	千足遺跡						C水田		FA水田	○	(水田)	○	B水田
	宮下西遺跡						C水田	○	FA水田	○	(水田)	○	B水田
	天之宮遺跡							○	(掘井)	○	掘井	○	B水田
④	宮下東遺跡							○		○		○	B水田
⑤	宮西遺跡							○		○		○	
⑥	洗橋遺跡							○		○		○	B水田
	谷地遺跡							○		○	掘井	○	B水田



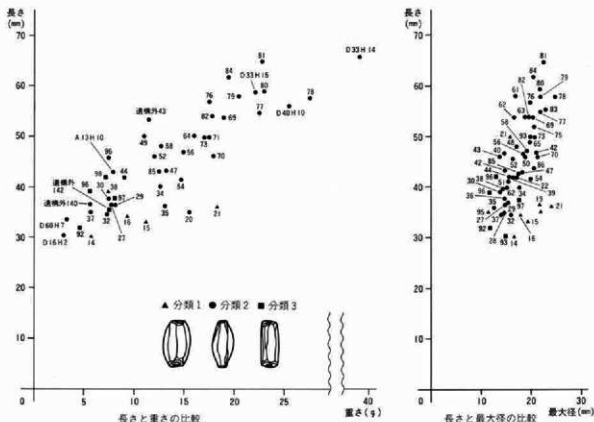
343図 宮川下流域の遺跡群

第3節 その他の遺物について

本遺跡の調査で得られた資料の中でその主体をなすものは土器であるが、他にも量的には少量ながら荒砥地域の遺跡の動向、他地域との関係を考えるうえで検討に値すると思われる遺物が出土している。それらのうち土鍾・墨書土器・瓦・埴輪については簡単なまとめをして今後の検討の基礎にしたいと考えた。また、鉄製品は89点の出土があったが住居総数207軒中26軒からの出土である。鉄滓も22軒の住居からその出土があり、遺跡全体での出土総量は3705gとなった。粗製土器、いわゆる手捏ね土器が23個出土しているがそのうちの12個は古墳時代の住居から出土している。量的には特筆するに値しないがこの時代に住居内祭祀が特定の住居に限定されることなく行われていたことを想定させる。

土鍾 本遺跡からは、土鍾が106点出土した。D区38号住居からの出土が大多数で85点を数えている。その他、D区33号住居から4点、D区36号住居、D区60号住居から2点、A区13号住居、A区23号住居、D区16号住居、D区40号住居、F区7号住居、F区17号住居から各1点ずつである。

これらの土鍾は、形態から3つに分類が可能である⁽¹⁾。1類は、長軸に比して外径があり、全体に丸みを帯びている。2類は、菱形を呈するものである。3類は、棒状を呈している。4表は個々の長軸長と重量の相関関係を示したものである。1類と3類は長さ、重量とも小さな数値にまとまっているようである。2類は、長さ10mmに対する重量10gを1:1とすればその値が2:1から3:1のところ集中してはいるものの長さ、重量とも大きなばらつきが有ることがわかる。長軸長と最大径の関係は4表に明らかなように長軸長10mmと最大径10mmの比を1:1とすれば2:1から3:1のところ集中している。D区38号住居からは1



5表 土鍾統計

～3類が出土しておりそれらの数値をみると長軸長は30mmから65mm、重量は5.7gから27.4gとなっている。これらの土鍾は床面の0.8×0.6mという狭い範囲から集中して検出された。土鍾が現在使用されている投網の鍾と同様の機能を有しているとすれば形態の異なるものが混在して出土する状況は、投網が機能する上で鍾の形状に厳重な規制が必要なかったか、長期にわたり投網を使用し破損品を補った結果と考えられよう。

その他、観察によって得られた点をいくつか記しておく。焼成は酸化焰であるが多くは器面に炭灰が吸着し煙状または黒斑状の黒色味をおびていた。調整は、細い棒状の軸に粘土を巻き付けたものに指頭により成形されている。2類は両端が指頭により強く押さえられている。また、小口面が篋による切り落とされているものが多い。器面は2類に限らず指または篋により丁寧に磨かれている。

2類の多くには端部の欠損している例が認められる。旧事の欠損で使用時に生じたものと思われる。

墨書土器 本遺跡から墨書の記された土器は13点出土した。その詳細は下記の表のとおりである。

6表 墨書土器一覧

遺構	器種	資料
A区3号住1	杯	十
13号住3	高柄	平
14号住5	高柄	全
30号住3	高柄	平
C区8号住1	杯	太
D区15号住4	杯?	へ?
25号住1	杯	爪
25号住2	杯	全?
25号住7	羽釜	不明
59号住13	杯?	全
E区1号住7	杯?	不明
F区7号住1	杯?	不明
D区22号住6	杯?	不明

A区3号住居、A区13号住居、F区7号住居の3点の杯は器形に共通性が認められ7世紀の終わりから8世紀の前半に位置づけられると考えられる。他の杯、碗は墨書が口縁部の外面に記されているのに対し底部外面に記されるという共通性がある。上記の3点以外は平安時代の土器である。高台付碗が2点、杯が3点、碗、杯のいずれかの破片が4点、羽釜1点である。10点のうち3点に「全」が記され、D区15号住居とE区1号住居もその可能性がある。D区25号住居の羽釜のそれは部分的な残存である。合わせ字であろうか判読できなかった。

荒砥地域における遺物に記された文字資料は、上西原遺跡⁽²⁾、荒砥上川久保遺跡⁽³⁾、柳久保遺跡⁽⁴⁾、久保皆戸遺跡⁽⁵⁾、堤東遺跡⁽⁶⁾、鶴谷遺跡⁽⁷⁾、北山遺跡⁽⁸⁾、梅木遺跡⁽⁹⁾、二之宮洗橋遺跡などでその出土が確認できる。これから整理作業に入る遺跡も多く、その数量も増加すると思われる。しかし、遺跡、遺構の量からすれば境町周辺などと比較して多くは思われぬその殆どが一文字の墨書である。

瓦 本遺跡からは、9片の瓦が出土した。出土状況は、9軒の住居、1基の土壇、1基の溜井と遺構外から、A区22号住居で電の構築材に使用されていたのとD区7号住居出土のものがその可能性があるほかは埋没土中からの出土であった。いずれの遺構も平安時代以降の構築と思われ、これらの瓦は他の瓦葺建物や窯跡から搬入されたものと考えられる。本遺跡出土の瓦は破片で種別の判定が困難であるが、男瓦、女瓦、製斗瓦が認められた。A区22号住居、D区7号住居、D区45号住居は剥取痕が認められず、たたらの上で粘土塊をつなぎ合わせた一枚作りと思われる。また、胎土は夾雑物が多く粗悪な部類に入るのであろう。これらの瓦の特徴が製作技法の年代を反映したもののなかか工人集団のもつ性格が反映されたもののなかについては検討課題として今後に期したい。

また、それにはこれらの瓦の生産地、及び、第一次的に供給された遺跡を追及する必要もある。本遺跡周辺の瓦を伴う建物の検出としては本遺跡の北3kmに位置する上西原遺跡と東3.7kmにある川上遺跡がある。上西原遺跡では方形区画のなかに基壇建物跡、掘立建物跡が検出され8世紀の終末から9世紀の終末まで機能していたと考えられている。現在のところ本遺跡から最も近接する遺跡は上西原遺跡であるが出土瓦は本遺跡のものとその特徴がこととなっている。近接する二之宮赤城神社の前庭についても検討する必要があるようである。

第3章 成果と問題点

埴輪 本遺跡からは古墳の検出は無いものの円筒埴輪、形象埴輪が少量出土している。遺構からの出土は31軒の住居、2基の土壇、2基の溜井からである。住居からの出土は電の構築材などの二次利用の例はなく数例を除いたほかは埋没土からの出土である。

A区19号住居はその構造の詳細を把握することが困難であったが電手前の床面から多量の円筒埴輪片が出土した。D区28号住居では電周辺から出土した円筒埴輪、形象埴輪片が二次火熱をうけている。F区35号住居では朝顔形埴輪の胴部が床面に横倒していたがこれも二次火熱を受けていた。

普通円筒埴輪は3分類程に大別することが可能と思われる。1類は外面に2次調整の横刷毛目を施しているものである。2類は外面に2次縦刷毛目を施しているものである。3類は外面に1次縦刷毛目が施されている。また、これらの中には線刻、赤色塗彩が施されているものも少量認められる。

朝顔形円筒埴輪はF区35号住居、A区19号住居、F区39号住居から出土している。F区35号住居のそれは、頸部を含め四段の突帯が回り、胴部第二段に半円形の透孔が一对ある。

形象埴輪としてはD区28号住居から盾の破片が出土した。A区6号住居、D区52号住居からは基部の破片が出土している。

本遺跡の南側、無名河川を挟んで立地する荒砥島原遺跡¹¹⁾でも数軒の住居から埴輪片が出土している。本遺跡周辺の古墳の立地は次のよう概観できよう。本遺跡の西北西、1.3kmの荒砥川左岸には今井神社古墳に代表される古墳群があり、「上毛古墳総覧」(以下「総覧」)によれば27基が記載¹²⁾されている。今井神社古墳は、全長71mの前方後円墳で、外面2次調整のB種横刷毛と外面縦刷毛調整の埴輪の存在が知られている。これらの埴輪と本遺跡出土の1類と2類のものは共通する点が多い。

また、本遺跡の南南東1.5~1.8kmの二之宮町字八王子には12基の、字新土塚、字前原には4基の古墳が存¹³⁾在した。南西0.6kmの宮原遺跡では4基の円墳が検出されるとともに周辺に古墳が残存している。本遺跡の3類はこれに今井神社古墳周辺の古墳群を合わせたいずれかの古墳から搬入されたものと思われる。

註

- 1 文献(1)を参照した。報告者は出土資料を6分類している。
- 2 文献(2)「秦」「経」「大」「見」「臣」「中」などが認められる。
- 3 文献(3)「若」「宗(典)」「二」「上家」などがある。
- 4 文献(4)「秦」
- 5 文献(5)「中」
- 6 文献(6)「平」「山」「命」
- 7 文献(7)「空」「太」
- 8 文献(8)「雨」「若」「秦」
- 9 文献(9)「安良(?)」
- 10 文献(10)
- 11 文献(11)
- 12 文献(12)にこのうちの3基についての報告がおこなわれている。
- 13 文献(13)にも記載されている。6世紀から7世紀にかけての横穴式石室を主体部に有した小古墳からなっていたと考えられる。

引用及び参考文献

- 1 奥平一比古ほか「B4 株木遺跡」藤岡市教育委員会 1984
- 2 松田 猛ほか「上西原・向原・谷津」群馬県教育委員会 1986
- 3 飯田陽一ほか「寛政上川久保遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 4 前原照子ほか「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 5 松田 猛ほか「昭和58年度寛政北部遺跡群発掘調査概報」群馬県教育委員会 1984
- 6 江部和彦ほか「西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1983
- 7 松田 猛ほか「堤東遺跡」群馬県教育委員会 1985
- 8 木部日出雄ほか「鶴谷遺跡群II」前橋市教育委員会 1982
- 9 千田幸生ほか「梅木遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- 10 松村一昭「川上遺跡・女掘遺構発掘調査概報」赤堀村教育委員会 1980
- 11 石坂 茂ほか「寛政島原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 12 石坂 茂ほか「寛政北原遺跡・今井神社古墳群・寛政青柳遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 13 「群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）」群馬県教育委員会 1972
- 14 坂口 一「古墳時代後期の土器の編年……三ツ寺遺跡を中心とした土師器と須恵器の平行関係……」『群馬文化』208号 1986
- 15 坂口 一「三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年……住居の重複と共存関係による土器型式組別の検討……」『群馬県史研究』第24号 1986
- 16 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓地域における遺跡群研究……員集落の衰退と福井灌漑の出現……」『信濃』第35巻4号 1983
- 17 能登 健・小島敦子「弥生～平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会 1984
- 18 小島敦子・岩崎泰一ほか「下触牛伏遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 19 徳江秀夫ほか「寛政二之塚遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 20 山崎 一「群馬県古城屋敷の研究」上 1971
- 21 「上毛古墳総覧」群馬県 1938
- 22 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編3 1981
- 23 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編2 1986
- 24 井川達雄「三ツ寺山遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 25 田辺昭三『須恵器大成』1981
- 26 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211 1982
- 27 井上 太ほか「本習・郷土遺跡発掘調査報告書」富岡市教育委員会 1981
- 28 中沢 悟ほか「清里・陣馬遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 29 飯塚 誠「西大室遺跡群II」前橋市教育委員会 1981
- 30 林部 均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 1986
- 31 西 弘海ほか「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所 1978
- 32 窪田蔵郎「製鉄遺跡」1983
- 33 茂木由行「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信』9号 1984
- 34 橋本博文・加部二生ほか「古墳時代土器の研究」古墳時代土器研究会 1984

荒砥天之宮遺跡

昭和55年度県営護国寺遺跡整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年 3月26日 印刷

昭和63年 3月31日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

©1988